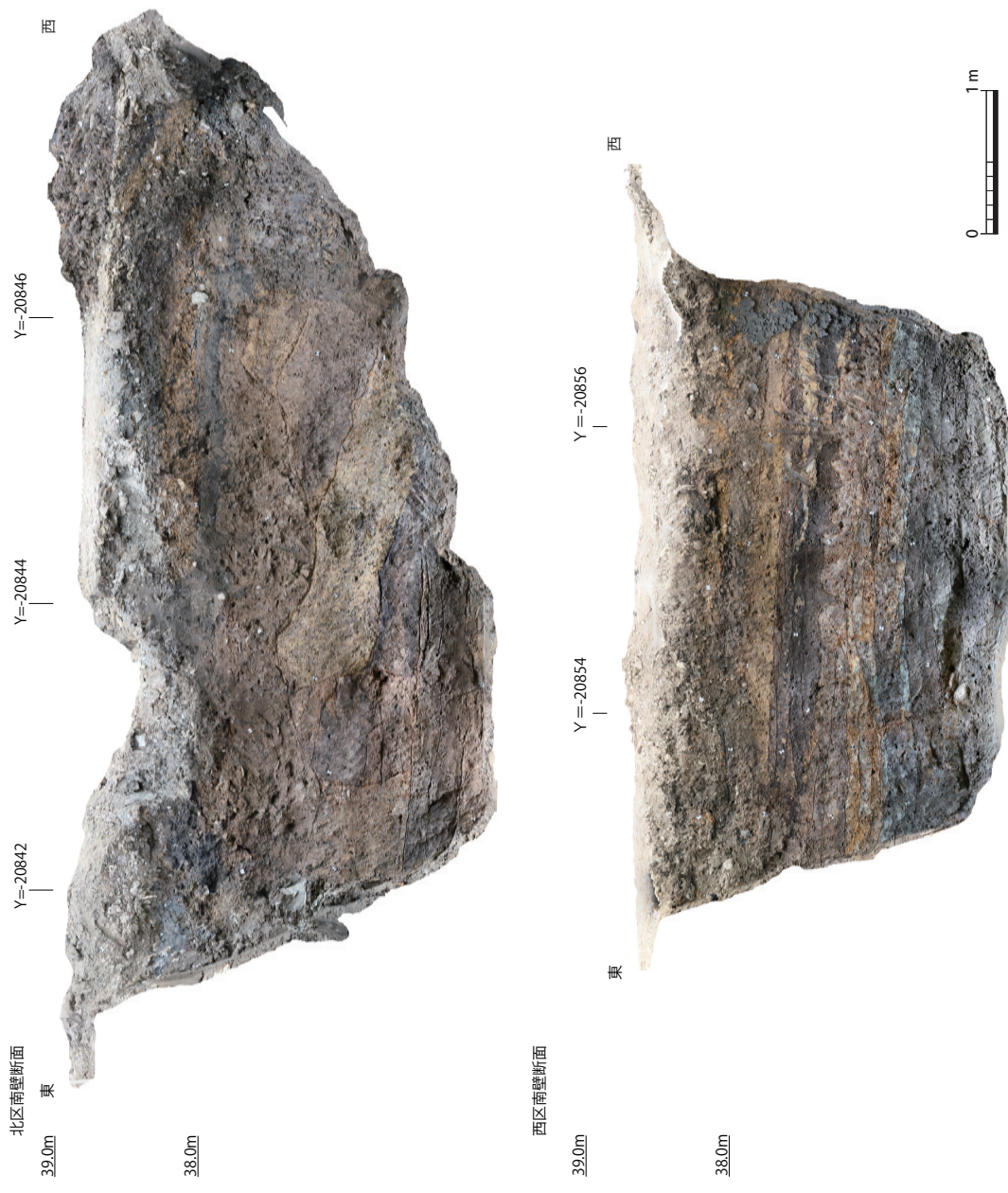


京都市内遺跡試掘調査報告

平成28年度

2017年3月

京 都 市 文 化 市 民 局



巻頭図版1 法住寺殿 北区・西区南壁断面図オルソ画像 (1:50) 第IV章-6)

例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した平成 28 年度の京都市内遺跡試掘調査報告書である。平成 28 年 1 月から 12 月まで実施した試掘調査のうち、重要な成果のあったものについて本文で報告している。ただし、試掘調査の結果、発掘調査を指導したものについては、発掘調査報告書の刊行を待つこととし、一覧表にのみ掲載している。

試掘調査を実施したすべての地区・所在地・調査日・調査概要については、試掘調査一覧表に掲載している（78～86 頁）。なお、各章表題末尾の番号と調査一覧表の番号並びに図版の番号は対応している。

- 2 本文の執筆分担は、本文の末尾に記している。
- 3 本書報告の調査のうち、基準点測量を実施した調査の方位及び座標は、世界測地系平面直角座標系 VI による。標高は T.P.（東京湾平均海面高度）による。また、これ以外の場合は、既存公共物などを仮基準点（KBM）として用いている。
- 4 本書に使用した地図は、本市の都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺 1/2,500）を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。

図版 1～13 1/8,000 図版 14～20 1/10,000

- 5 本書で使用した遺物の名称及び形式・型式は、一部を除き、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年に準拠する。

- 6 本書に使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。

- 7 調査及び整理にあたっては、上茶谷美保・上別府亜紀・神所尚暉・熊代信吾・中村春美・美馬順二・義井良作・吉本健吾の協力を得た。

- 8 調査及び本書作成は、京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課が担当し、（公財）京都市埋蔵文化財研究所の協力を得た。

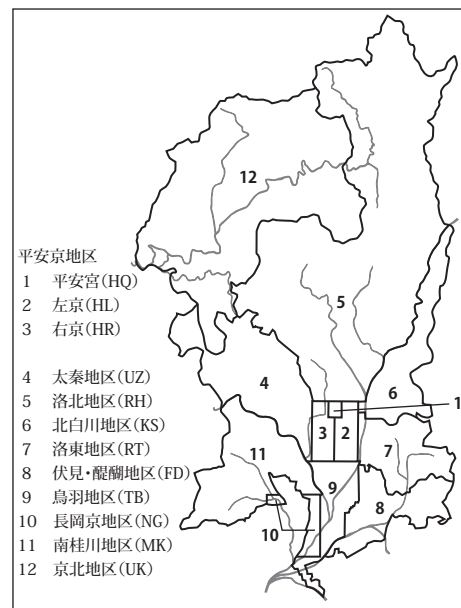


図 1 調査地区割図

本文目次

I	試掘調査の概要	1
II	平安京左京	3
1	北辺二坊八町跡（上京区小川町中立売下る小川町 204）	3
2	三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡（中京区両替町通姉小路下る柿本町 392,394,396）	5
3	五条二坊十四町跡・烏丸綾小路遺跡（下京区西洞院通仏光寺下る本柳水町 784 他）	22
4	五条三坊五町跡・烏丸綾小路遺跡（下京区松原通新町東入中之町 173-1 他 5 筆）	25
5	五条四坊四町跡・烏丸綾小路遺跡（下京区高倉通高辻下る葛籠屋町 517-2 他）	27
6	五条四坊十町跡（下京区麩屋町通綾小路下る俵屋町 299）	31
III	平安京右京	34
1	六条三坊十五町跡（右京区西院久保田町 13,14）	34
2	史跡西寺跡・九条一坊十一町跡・唐橋遺跡（南区唐橋西寺町 59）	39
IV	そのほか市内遺跡	44
1	草木町遺跡（右京区太秦京ノ道町 27-1,2）	44
2	史跡及び名勝嵐山・嵯峨遺跡（右京区嵯峨柳田町 35-1）	47
3	本山古墳群（左京区岩倉幡枝町 350 の一部,351 の一部,352-2 の一部）	52
4	上京遺跡 1（上京区大宮通今出川下る薬師町 226-2）	55
5	上京遺跡 2（上京区今出川通室町西入掘出シ町 302,307-6 / 室町新町の間今出川下る今図子町 370-2・3）	58
6	法住寺殿跡（東山区三十三間堂廻町 642,657）	65
7	鳥羽離宮跡（伏見区竹田中内畑町 115）	69
8	史跡及び名勝嵐山（西京区嵐山上海道町 74-15,16）	71
9	大藪遺跡・大藪城跡（南区久世大藪町 331-1,331-3,332-1,333-1,602）	73
V	試掘調査一覧表	78
	報告書抄録	87

図 版 目 次

巻頭図版 1 全景

図版 1 平安宮

図版 2 平安京左京北辺～三条 一・二坊

図版 3 平安京左京北辺～三条 三・四坊

図版 4 平安京左京 四～六条 一・二坊

図版 5 平安京左京 四～六条 三・四坊

図版 6 平安京左京 七～九条 一・二坊

図版 7 平安京左京 七～九条 三・四坊

図版 8 平安京右京北辺～三条 三・四坊

図版 9 平安京右京北辺～三条 一・二坊

図版 10 平安京右京 四～六条 三・四坊

図版 11 平安京右京 四～六条 一・二坊

図版 12 平安京右京 七～九条 三・四坊

図版 13 平安京右京 七～九条 一・二坊

図版 14 嵯峨遺跡・嵯峨北堀遺跡・史跡・名勝嵐山・嵐山谷ヶ辻子町遺跡・仁和寺院家跡・
大藪町遺跡・広隆寺旧境内・和泉式部町遺跡・上賀茂中山町遺跡・醍醐ノ森瓦窯跡・
大深町須恵器窯跡

図版 15 半木町塚跡・史跡賀茂別雷神社境内・北野遺跡・北野廃寺・上京遺跡・室町殿跡・公家
町遺跡・本山古墳群・植物園北遺跡・大徳寺旧境内

図版 16 法成寺跡・吉田二本松町遺跡・白河街区跡・白河北殿跡・得長寿院跡・史跡随心院境内・
小倉町別当町遺跡・方広寺跡・法住寺殿跡・山科本願寺南殿跡

図版 17 中臣遺跡・鳥羽離宮跡・伏見城跡・桃陵遺跡

図版 18 中久世遺跡・大藪遺跡・大藪城跡・長岡京跡・東土川遺跡

図版 19 吉祥院天満宮境内・草嶋遺跡・下津林遺跡・上久世遺跡・上久世城跡・長岡京跡・周山
古墳群・周山廃寺・高梨遺跡・高梨経塚

図版 20 平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡 遺構

1 第 1 遺構面検出（北から）

2 第 2 遺構面検出（北から）

3 第 3 遺構面検出（北から）

- 4 第4遺構面検出（北から）
- 5 第5遺構面検出（北から）
- 6 第5遺構面調査区北側検出（南東から）
- 7 第7遺構面検出（北から）
- 8 第7遺構面調査区北側検出（南東から）

図版 21 平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡 遺構

- 9 第7遺構面完掘（北から）
- 10 第6遺構面調査区北側完掘（南西から）
- 11 第5遺構面 SK27（南から）
- 12 第5遺構面 SK27（西から）
- 13 第5遺構面 SK27 石組み状況（南西から）
- 14 第5遺構面 SK27 石組み北面（南から）
- 15 第5遺構面 SK27 石組み除去後（西から）
- 16 第5遺構面 SK27 石組み除去後（西から）

図版 22 平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡 遺構

- 17 第6遺構面 SE50 検出状況（西から）
- 18 第6遺構面 SE50 枠内断面（西から）
- 19 第6遺構面 SE50 石組み状況（南東から）
- 20 第6遺構面 SE50 断面（西から）
- 21 北壁土層断面（南から）
- 22 東壁土層断面（北西から）
- 23 南壁土層断面（北から）
- 24 西壁土層断面（南東から）

図版 23 平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡 遺物

SE50 枠内出土石材及び出土遺物 1（SK27・41）

図版 24 平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡 遺物

出土遺物 2（SK41・42・SE50）

図版 25 平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡 遺物

出土遺物 3（SE50, SK55・52）

図版 26 上京遺跡 遺構

- 1 第1面検出状況（北から）
- 2 第2面検出状況（北西から）
- 3 第3面検出状況（北西から）
- 4 第3面完掘状況（北西から）
- 5 東壁土層断面（西から）

- 6 南壁土層断面（北から）
- 7 東壁北端深掘り状況（南西から）
- 8 第3面 SP14 土層断面（北西から）

挿 図 目 次

例 言

図 1	調査地区割図	i
	試掘調査の概要	
図 2	年次別・地区別試掘調査実施件数	1
	平安京左京北辺二坊八町跡	
図 3	調査位置図	3
図 4	調査区配置図	3
図 5	4 区平断面図	4
	平安京左京三条三坊十二町・烏丸御池遺跡	
図 6	調査区配置図	5
図 7	調査前風景（南から）	6
図 8	調査風景 1（西から）	6
図 9	調査風景 2（南東から）	6
図 10	埋め戻し風景（南から）	6
図 11	今回の調査地及び周辺調査位置図	7
図 12	調査区周壁断面図	11
図 13	遺構平面図 1	12
図 14	遺構平面図 2	13
図 15	遺構平面図 3	14
図 16	SK27 平面図・断面図・立面図	15
図 17	SE50 平面図・立面図	16
図 18	SK27 出土遺物	17
図 19	SX40 出土遺物	17
図 20	SK41・42 出土遺物	18
図 21	SE50 出土遺物	18
図 22	SK55 出土遺物	19
図 23	SK52 出土遺物	19

図 24	第 5 遺構面・第 6 遺構面形成時整地土出土遺物	20
平安京左京五条二坊十四町跡・烏丸綾小路遺跡		
図 25	調査位置図	22
図 26	調査区配置図	22
図 27	平面図・断面図	23
図 28	出土遺物	23
平安京左京五条三坊五町跡・烏丸綾小路遺跡		
図 29	調査位置図	25
図 30	調査区配置図	25
図 31	1 区南端および拡張部 平断面図	26
図 32	遺物実測図	26
平安京左京五条四坊四町跡・烏丸綾小路遺跡		
図 33	調査位置図	27
図 34	調査区配置図	27
図 35	試掘調査状況	28
図 36	詳細分布調査状況	28
図 37	調査区平面断面図	29
平安京左京五条四坊十町跡		
図 38	調査位置図	31
図 39	調査区配置図	31
図 40	調査区平断面図	32
図 41	遺物実測図	33
平安京右京六条三坊十五町跡		
図 42	調査位置図	34
図 43	調査前風景（南東から）	34
図 44	調査区配置図	34
図 45	調査区北壁断面図	35
図 46	出土土器実測図	36
図 47	旧天神川（溝 1）（南東から）	36
図 48	調査地付近の旧天神川	37
史跡西寺跡・平安京右京九条一坊十一町跡・唐橋遺跡		
図 49	調査位置図	39
図 50	調査区配置図	39
図 51	東小子房基壇西縁と講堂跡（コンド山）（東から）	40
図 52	調査区平・断面図	40

図 53	出土土器実測図	41
図 54	西寺跡試掘調査位置図	42
草木町遺跡		
図 55	調査位置図	44
図 56	調査区配置図	44
図 57	1・2区北壁断面図・3区平断面図	45
図 58	土坑4出土遺物実測図	45
史跡及び名勝嵐山・嵯峨遺跡		
図 59	調査位置図	47
図 60	調査区配置図	48
図 61	断面図	49
図 62	石組遺構 SX02 平面・断面図	50
図 63	石組遺構 SX02(南から)	50
図 64	出土遺物実測図	51
本山古墳群		
図 65	調査位置図	52
図 66	調査区配置図	52
図 67	遺構平面図・断面図	53
図 68	遺構面検出状況(南東から)	54
上京遺跡1		
図 69	調査位置図	55
図 70	調査区配置図	55
図 71	調査区平面・断面図	56
図 72	出土遺物実測図	57
上京遺跡2		
図 73	調査位置図	58
図 74	調査区配置図	58
図 75	試掘調査 各調査区平面図・断面図	60
図 76	補足調査区平面図・遺構断面図	61
図 77	補足調査区平面図・断面図・遺構断面図	62
図 78	出土遺物実測図	64
法住寺殿跡		
図 79	調査位置図	65
図 80	調査区配置図	65

図 81 北区南壁断面図	66
図 82 西区平断面図	67
図 83 遺物実測図	68
鳥羽離宮跡	
図 84 調査位置図	69
図 85 調査区配置図	69
図 86 調査区中央部 平断面図	70
図 87 遺物実測図	70
史跡及び名勝嵐山	
図 88 調査位置図	71
図 89 調査区配置図	71
図 90 北壁断面柱状図	72
図 91 出土遺物実測図	72
大藪遺跡・大藪城跡	
図 92 調査位置図	73
図 93 調査区配置図	73
図 94 第 1 調査区遺構面検出状況	74
図 95 遺構断面図・平面図	75
図 96 大藪城跡遺構面接合図	76

表 目 次

平安京左京三条三坊十二町・烏丸御池遺跡

表 1 周辺発掘調査一覧	8
表 2 周辺試掘・立会調査一覧	9

史跡西寺跡・平安京右京九条一坊十一町跡・唐橋遺跡

表 3 試掘調査一覧	43
表 4 遺物概要表	77

I 試掘調査の概要

1 京都市内の埋蔵文化財行政

京都市で所管する周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、遺跡という。）は、京北町との合併に伴う遺跡地図の改訂を経て、805件を数える。その範囲内でおこなわれる土木工事に対しては、遺跡の重要度と工事規模に応じて「慎重工事」・「詳細分布調査」・「試掘調査」・「発掘調査」の4種の行政指導をおこなっている。この指導業務は、当初、文化財保護課がおこない、昭和55年の京都市埋蔵文化財調査センター設立以後はセンターが担当してきた。しかし、センターが平成18年4月1日付けで文化財保護課と統合され、現在は文化財保護課埋蔵文化財係が担当している。

行政指導に基づいて実施される調査には、国庫補助による調査と原因者負担による調査があるが、詳細分布調査と試掘調査、発掘調査の一部については国庫補助事業として実施している。このうち、詳細分布調査と発掘調査は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所（以下、「埋文研」という。）へと委託してきたが、平成26年4月1日から、文化財保護課埋蔵文化財係が担当しており、その成果は、別冊の報告書により報告される。

本報告書は、平成28年1月～12月に文化財保護課が実施した、国庫補助事業による試掘調査をとりまとめたものである。文化財保護課で実施する試掘調査は、届出や通知を受けた工事予定地内における遺跡の有無、あるいは遺跡の残存状況やその範囲を把握し、遺跡が良好に存在し、工事がその遺跡を破壊する場合には発掘調査を指導し、設計変更などにより遺跡の保護が可能であれば開発者に対して遺跡保護の措置を指示するなど、文化財保護行政上、非常に重要な業務であり、現在は8名の技師が常時、従事している。

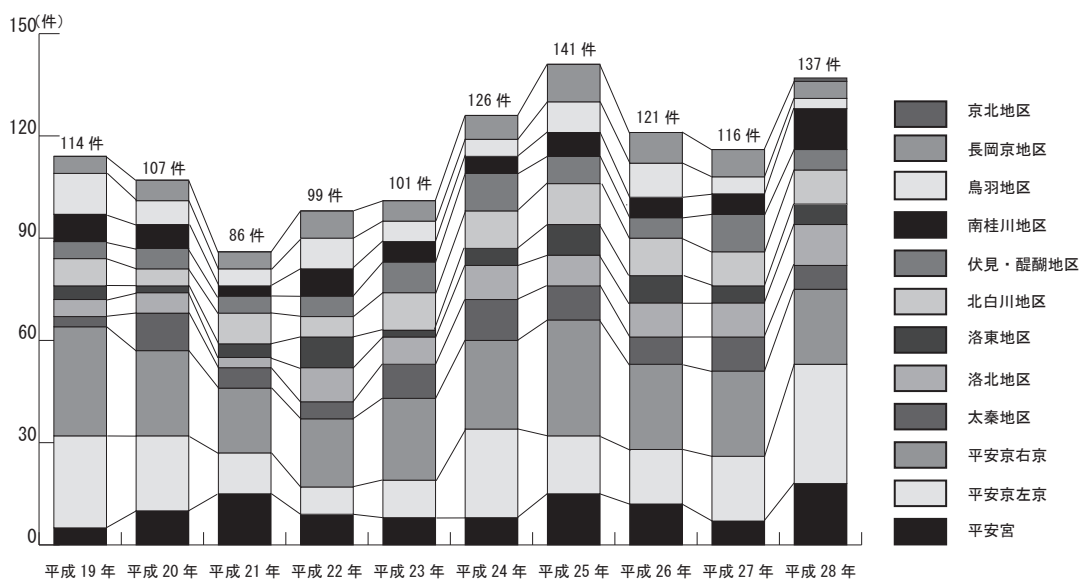


図2 年次別・地区別試掘調査実施件数

平成 28 年 1 月～ 12 月に文化財保護法に基づいて提出された届出（文化財保護法第 93 条）・通知（同法第 94 条）件数は、総数で 1,863 件になる。これは前年比で 488 件（35.4%）の増加である。全国的に見て資産価値が高いとされる京都市内では、外国人旅行客の増加の影響もあり不動産市場が活況で届出件数は増加傾向にある。これらの届出・通知に対して、文化財保護課は詳細分布調査 760 件（前年 541 件，40.4%増），試掘調査 189 件（同 124 件，52.4%増），発掘調査 25 件（同 17 件，47%増），慎重工事 808 件（同 663 件，21.8%増）の指導をおこなった。

こうした指導に基づき、平成 28 年に文化財保護課が実施した試掘調査件数は 137 件である。届出内容は、郊外における宅地造成のほか、市街地では共同住宅、ホテルの建設が目立つ。地区別では、左京地区および南桂地区が増加していることから、昨年度から引き続いて市街地と鉄道沿線付近の開発が活発になっていることがわかる。

2 平成 28 年の試掘調査概要

文化財保護課及び埋文研では京都市域を 12 のエリアに区分している（図 1）。平成 28 年の試掘調査の地域別件数は、平安宮地区 18 件，平安京左京地区 35 件，平安京右京地区 22 件，太秦地区 7 件，洛北地域 12 件，北白川地区 6 件，洛東地区 10 件，伏見・醍醐地区 6 件，南・桂地区 12 件，鳥羽地区 3 件，長岡京地区 5 件，京北地区 1 件である。このうち 32 件（V 章・試掘調査一覧表参照）については発掘調査を指示し，うち埋文研が 7 件（No.14・29・56・93・101・106・133），株式会社イビソク（代表 野澤直人）が 1 件（No.57），公益財団法人元興寺文化財研究所（理事長 辻村泰善）が 1 件（H27 試掘調査報告 No.45）古代文化調査会（代表 家崎孝治）が 5 件（No.12・53・64・117），関西文化財調査会（代表 吉川義彦）が 2 件（No.104・119），国際文化財株式会社（支店長 森下賢司）が 2 件（No.60・79），京都平安文化財（代表 栗田尚典）が 1 件（No.16），一般社団法人歴史文化研究所（代表 小林大太）が 1 件（No.132），学校法人龍谷大学（専務理事 赤松徹真）が 1 件（No.69）京都市文化財保護課が 2 件（No.33・109）の計 23 件の調査を年内に実施した。

発掘調査をおこなったことで顕著な成果が挙げられた事案としては、白河街区跡で鎌倉時代の墓群と建物跡を確認した No.106，後白河天皇が造営した法住寺殿跡で三十三間堂の地業跡を確認した No.110，伏見城跡内の指月城推定地で、指月城期に遡る可能性がある石垣を検出した No.119 などがある。

ほかに工事の掘削深度が試掘調査で確認した遺構面より十分に浅いため、または設計や工法の変更により当面の保存が図られたなどの理由から、発掘調査に至らなかった例が 8 件（No.51・66・67・68・94・99・111・135）ある。また、保存措置が講じられなかったものの報告すべき成果のあった調査 16 件（No.4・13・17・22・25・31・55・62・63・65・67・94・99・110・122・135），前年に試掘調査を実施したが協議が今年度まで及んだものの中で報告すべき成果のあったもの 1 件（H27 試掘報告 No.75）について、詳細を報告する。

（鈴木 久史）

Ⅱ - 1 平安京左京北辺二坊八町跡 No. 4

1 はじめに (図3・4)

本件は、共同住宅建設に伴う試掘調査である。調査地は、一条通と中立売通に挟まれた場所で、小川通に東面する敷地である。当該地は、平安京左京北辺二坊八町跡にあたり、文献資料によると刑部卿源長政の所領であったとされる¹⁾。

周辺では、今調査地の南北の隣接地で発掘調査が実施されており、発掘調査はすべて小川通に東面した場所で行われている²⁾。これらの調査では、平安時代から江戸時代までの溝や土坑、井戸などが検出されており、当町域における平安時代以降の土地利用の一端が明らかになりつつある。なかでも、両調査で確認されている、上京構え跡に関連すると考えられる濠の存在は特筆される。

今回、南北隣接地で検出された濠が計画範囲を通ると推定されたため、それを含む遺構の遺存状況の確認を主目的に調査を実施した。調査は1月26・27日に実施し、その面積は56㎡である。

2 層序と遺構 (図5)

調査区の層序は場所によって異なる。最も残りの良い4区では、盛土直下に近世遺物包含層が存在し、GL-1.3mで地山の明黄褐色砂礫となる。検出は地山直上で実施した。

調査の結果、1～3区では解体建物等の影響を受け、明確な遺構は確認できなかった。しかし、4区では部分的にではあるが、南北の隣地で確認されている濠のほか、土坑や溝などを検出した。これら遺構のうち遺物が確認出来たものの大半は近世に属するものであった。

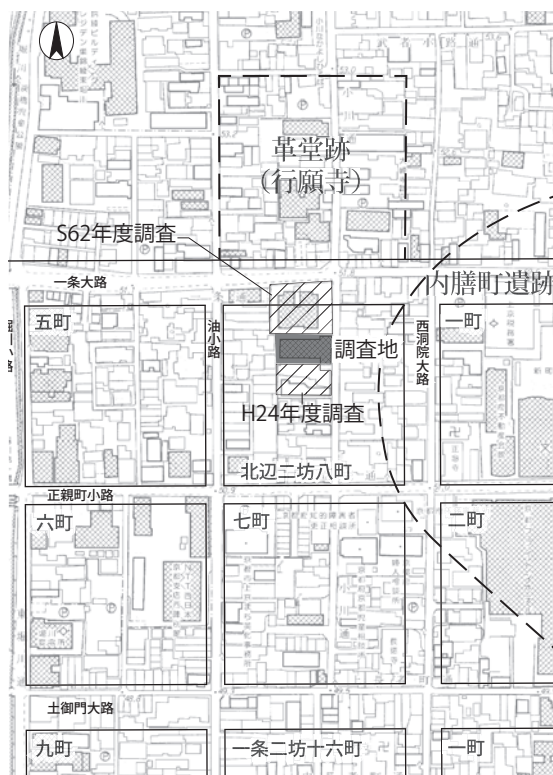


図3 調査位置図 (1 : 5,000)

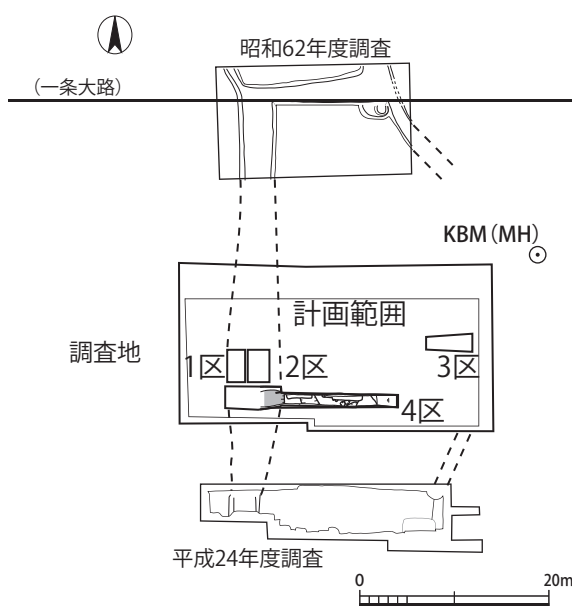


図4 調査区配置図 (1 : 800)

濠 1 4区の西側で東肩口のみ検出した。掘削深度が深く、調査区壁面が崩落する危険性が高かったため、土層や遺物の確認は出来ていない。特に、調査区西端は壁面が脆弱であり、解体予定の貯水タンクが近接していたことから、地山の高さのみを確認したのち早急に埋め戻した。地山はGL-2.8mで確認できたが、濠の西肩口は検出できなかった。不明な点も多いが、南北隣接地で確認されている濠の検出深度や位置関係から濠と判断した。深さは約1mで、幅は4.5m以上となり、肩口から底までほぼ垂直に下がる。南北隣接地で確認されたものと比べると幅が広いが、これが当初からそのような形態であったのか否かについては現時点で判断できない。

3 まとめ

今調査では、南北隣接地で確認された濠の中間地点を検出した。しかしながら、規模や時期など不明な点も多く残されている。

今回、確認した濠は上京構え跡の一部と考えられ、その中でも構えの内部を区画するための濠と推定されている³⁾。しかし、これまで濠に対応する建物跡などは確認されていない。また、今回は確実に平安時代に遡る遺構は確認できていないものの、当該期の遺物が出土している。遺構が周辺に展開している可能性もあり、併せて今後の周辺域の調査の進展が期待される。

(熊井 亮介)

註

- 1) (財)古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店、1994年。
- 2) (財)京都市埋蔵文化財研究所「平安京左京北辺二坊」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1991年。
株式会社イビソク『平安京左京北辺二坊八町跡』株式会社イビソク、2013年。
- 3) 註2に同じ。

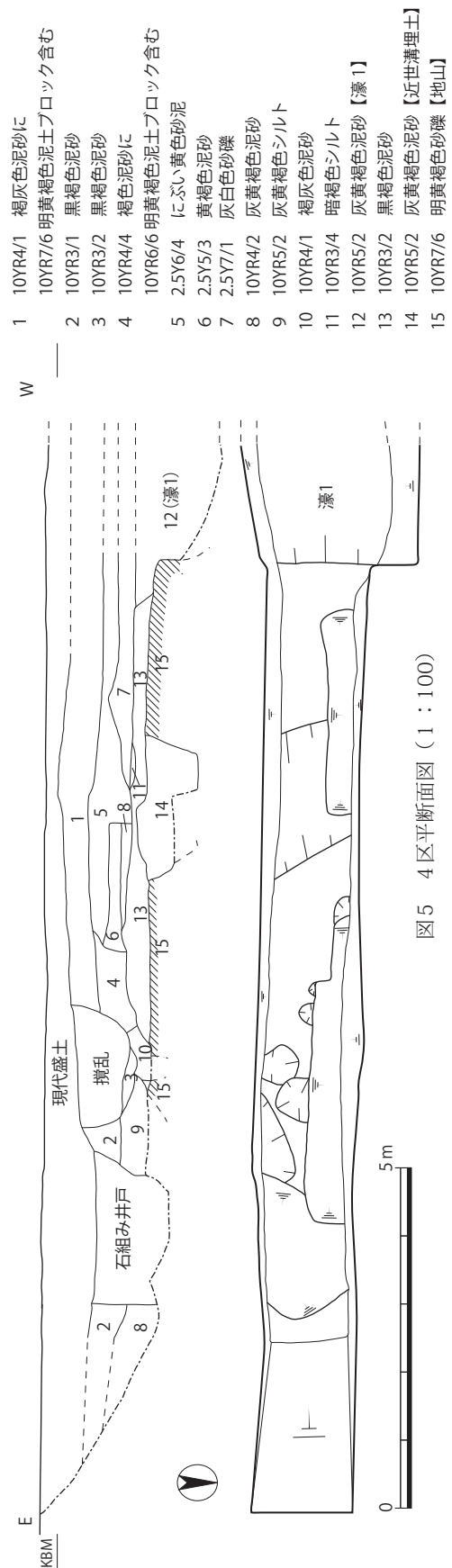


図5 4区平面断面図 (1:100)

Ⅱ - 2 平安京左京三条三坊十二町跡・ 烏丸御池遺跡 No.55

1 調査の経緯と経過（図6・7）

調査地は中京区両替町通姉小路下る柿本町392, 394, 396に所在し、平安京左京三条三坊十二町跡及び烏丸御池遺跡に該当する。当該地でホテル新築が計画され、平成28年5月30日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財の届出がおこなわれた。これを受け、試掘調査をおこなうこととなり、事前協議の結果、計画範囲内である敷地南東部に東西4m、南北12mの調査区を設定することとなった。調査期間は平成28年7月4日から7月26日までの間で実働11日、調査面積は48㎡である。

なお、調査区西側に存在していた既存家屋は築100年近い古民家の建築物であったため、一部保存を目的として現位置より西側に曳屋を行ない再利用されることとなった。新規移転範囲については、工事掘削が浅く、遺跡に影響を及ぼさないため施工時に立会を行い、遺跡は地中保存が図られた。このため将来、この部分については、再度協議が必要となる。

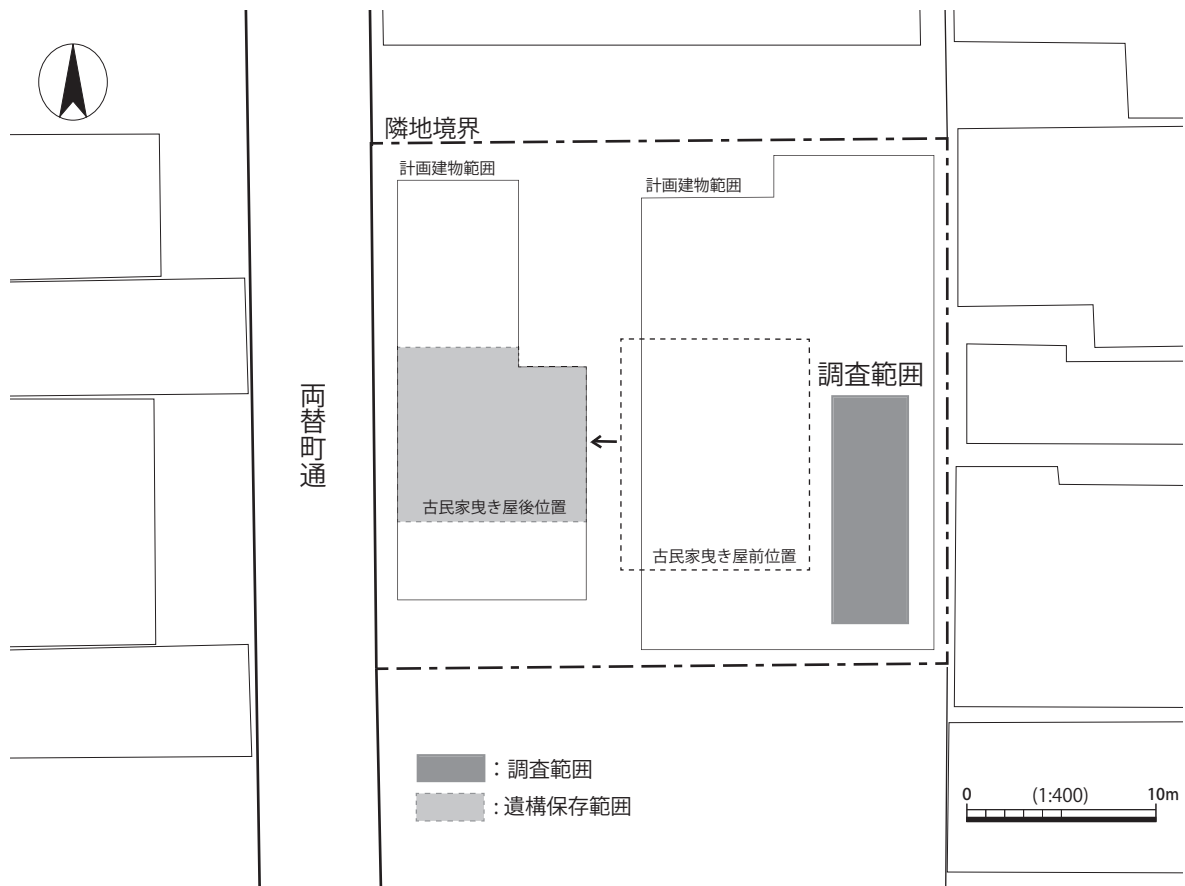


図6 調査区配置図（1：400）



図7 調査前風景（南から）



図8 調査風景1（西から）



図9 調査風景2（南東から）



図10 埋め戻し風景（南から）

2 位置と環境

調査地は、鴨川によって形成された北東から南西方向の扇状地上に位置する。この扇状地上には弥生時代から古墳時代の遺跡がいくつか確認されており、今回該当する烏丸御池遺跡では、弥生時代の土坑や溝、古墳時代の包含層などが確認されている。

平安京左京三条三坊十二町に該当し、平安時代後期には白河法皇の御所や鳥羽上皇の邸宅である三条西殿が所在したと推定される。三条三坊は摂関家伝領の東三条殿や高松殿、三条西洞院第、鴨井殿、押小路殿、三条東殿などの邸宅が多く所在していた場所であり、三条西殿もその一角を占める。三条西殿の成立については明確な記録はないが、『中右記』の元永元年（1118）正月二十日条によると、院の近臣である藤原基隆から白河法皇に進上された邸宅を院御所とし、その邸宅に藤原璋子が中宮に冊立された日に入ったこと、またこの日のために烏丸小路に面した東門に四足門の造作が命じられたことの記載がみられる。その後、中宮は養父白河法皇とともに、この邸宅を「御所」としたことで、知られるようになる。これらの記載以前の十二町の様相については、天喜二年（1054）五月二十三日条に藤原頼道の妾妻藤原祇子が住み、子息の師実が伝領した地が同町に推測されており、11世紀半ばにはすでに宅地として利用されていたことが示されている。しかし、これがいわゆる三条西殿であるとは断定できないとの意見もある¹⁾。大治四年（1129）七月七日に白河法皇が西の対屋で崩御したため、その殿社は鳥羽殿に運ばれた。翌年、十二月二十六日、西の対屋跡には新たな殿社が建造され、女院御所として使用されることとなる。しかし、長承元年（1132）七月の火事で焼失し、康治二年（1143）六月に再建されるも3か月後に再度焼失し

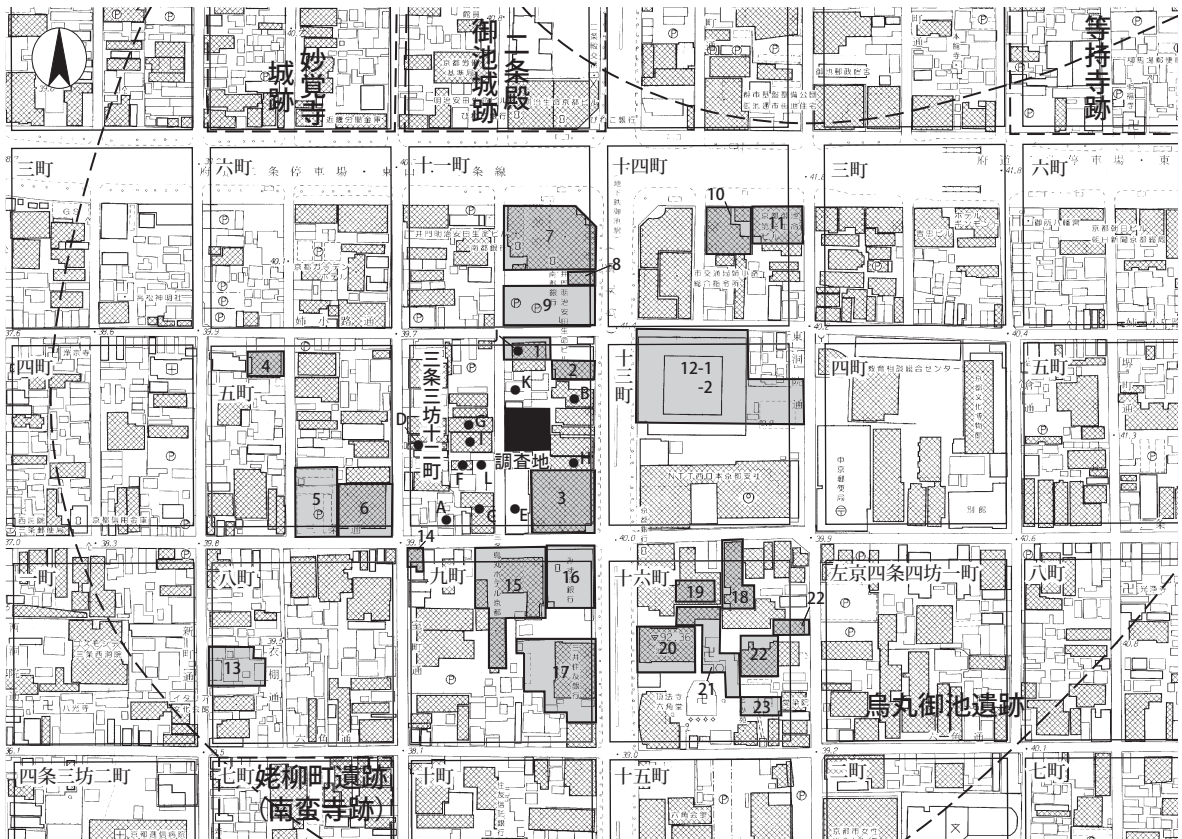


図11 今回の調査地及び周辺調査位置図（1：2,500）

てしまう。『山槐記』の治承二年（1178）閏六月条に高倉天皇が行幸した記載が残り、12世紀後半には後白河法皇の御所であったことはわかるものの、伝領の経緯などは不明である。その後の様子は明らかでない。また鎌倉時代の様子を知ることができる文献や史料なども不詳である。

室町時代以降は商業地区に属し、『祇園社記』の応永四年（1397）九月十七日条では、綿売本座神人の居所の一つとして『三条室町北東類 二人』とあり、綿商人の存在が知られる。15世紀前半には裕慶・裕阿弥という酒屋があり、近隣に材木屋もあったとされ、商業地区として栄えていたことがうかがえる。『康富記』の享徳三年（1454）九月十三日条に「今夜三条烏丸与姉小路間西類酒屋土蔵焼亡」とあり、烏丸小路に面して酒屋が存在し、その土蔵が焼失した記事が残っている。また東隣接町には応仁の乱（1497）後、祇園会の山が配置されるなど、中世以降繁栄した下京の一角に属している。

柿本町の町名起源は明白ではないが、天正年間に豊臣秀吉が行った京都改造の中で、烏丸通と室町通の間に新設された両替町通に面しており、天正年間以降に成立した可能性が高い。両替町通は『銀座由緒書』によると慶長十三年（1608）に伏見から京都室町通と烏丸通の間、二条から三条の間に、銀座の役所及び座人の住居（後藤家）などを移転したことが由来とされる。また『京都御役所向大概覚書』に「両替町三条上ル町 京朱座会所」とあり、銀座に次いで朱座も設けられ、商業地区として大いににぎわっていたことがわかる。しかし元禄期になると室町筋の豪商の没落が相次ぎ、『古久保家文書』の寛政十二年（1800）には銀座の地が貸地にされ、一般町人の住居域になったとの記載がある。商業を主体とした地域から居住と主体とした地域へと変貌していったことがうかがえる。

表1 周辺発掘調査一覧

調査No.	調査年度	遺跡名	主な遺構	文献
1	1973	左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡	鎌倉時代の井戸・土坑、室町時代の井戸・土坑・柱穴など	『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告第7輯 1983 (財)古代学協会(3次)
2	1973	左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡	平安時代末～鎌倉時代の井戸・土坑、室町時代の井戸・土坑・柱穴など	『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告第7輯 1983 (財)古代学協会(2次)
3	1次:1969 4次:1973	左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡	1次:平安時代の三条大路北側溝・烏丸小路西側溝・井戸・土坑、鎌倉時代から室町時代の井戸や溝・井戸・土坑など 4次:三条大路北側溝・烏丸小路西側溝・井戸・土坑など	『平安京三条西殿跡発掘調査報告』『平安博物館研究紀要』第3輯 平安文化の研究 2 1971、『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告第7輯 1983 (財)古代学協会
4	1980	左京三条三坊五町跡・烏丸御池遺跡	平安時代前期の建物・溝、平安時代後期～鎌倉時代の土坑、室町時代の石組井戸・土坑・集石遺構、江戸時代の井戸・土坑・鑄造関連遺構など	『昭和55年度京都市埋蔵文化財調査概要』2011 (財)京都市埋蔵文化財研究所
5	2011	左京三条三坊五町跡・烏丸御池遺跡	平安時代後期以前の溝・土坑、平安時代後期～鎌倉時代の土坑・井戸、鎌倉時代～室町時代の土坑など	『平安京左京三条五町・烏丸御池遺跡』古代文化調査会 2011
6	1979	左京三条三坊五町跡・烏丸御池遺跡	平安時代後期の柱穴、鎌倉時代～室町時代の土坑・溝・室町小路西側溝、江戸時代の井戸・暗渠など	『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』2012 (財)京都市埋蔵文化財研究所
7	1984	左京三条三坊十一町跡・烏丸御池遺跡	平安時代中期の烏丸小路西側溝・井戸、鎌倉時代の土坑、室町時代の井戸・土坑墓・火葬墓、江戸時代前期の溝・井戸	『平安京左京三条三坊十一町』平安京跡研究調査報告第14輯 (財)古代学協会 1984
8	1984	左京三条三坊十一町跡・烏丸御池遺跡	平安時代中期の烏丸小路西側溝・井戸、鎌倉時代の烏丸小路西側溝・土坑、室町時代の井戸・石積土坑、江戸時代の井戸	『押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町』平安京跡研究調査報告第12輯 (財)古代学協会 1984
9	2006	左京三条三坊十一町跡・烏丸御池遺跡	未報告	古代文化調査会
10	1992	左京三条三坊十四町跡・烏丸御池遺跡	平安時代中期の溝、鎌倉時代の溝・濠・土坑・柱穴、室町時代の井戸・濠・土坑、江戸時代の井戸・土坑・建物など	『平成4年度京都市埋蔵文化財調査概要』1995 (財)京都市埋蔵文化財研究所
11	1982	左京三条三坊十四町跡・烏丸御池遺跡	鎌倉時代～室町時代の溝・井戸、室町時代後期の東洞院大路西側溝・路面・濠など	『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』1984 (財)京都市埋蔵文化財研究所
12	1991	左京三条三坊十三町跡・烏丸御池遺跡	平安時代～鎌倉時代の井戸・土坑、室町時代の東洞院大路、堀、溝、池・石室・土坑・柱穴、江戸時代の建物・土間・竈・路・塀・池・井戸・土坑・土取穴など	『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』1995 (財)京都市埋蔵文化財研究所
	2016	左京三条三坊十三町跡・烏丸御池遺跡	1991年度調査時に保存された庭園遺構の記録保存調査。	2017.1 現在、整理中。
13	2013	左京四条四坊八町跡・烏丸御池遺跡	弥生時代の土坑・溝、平安時代前期の土坑、平安時代後期～鎌倉時代前半の土坑、溝、鎌倉時代後半～室町時代の地下室・土坑・溝・井戸・繒銭土坑、江戸時代の土坑など	『平安京左京四条三坊八町跡・烏丸御池遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-2 (財)京都市埋蔵文化財研究所
14	1988	左京四条四坊九町跡・烏丸御池遺跡	室町時代の井戸、江戸時代の井戸・土坑	『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』1993 (財)京都市埋蔵文化財研究所
15	1987	左京四条四坊九町跡・烏丸御池遺跡	平安時代中期～後期の鑄水を伴う庭園遺構・建物・三条大路南側溝など	『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』1991 (財)京都市埋蔵文化財研究所
16	1996	左京四条四坊九町跡・烏丸御池遺跡	平安時代後期～末の鑄水・建物・井戸・土坑、鎌倉時代～室町時代の池・溝・石敷遺構・井戸・柱穴など	『平安京左京四条三坊九町-第一勧業銀行京都支店改築に伴う調査-』2001古代文化調査会
17	2005	左京四条四坊九町跡・烏丸御池遺跡	未報告	関西文化財調査会
18	1987	左京四条四坊十六町跡・烏丸御池遺跡	未報告	平安京左京三条四坊跡発掘調査団
19	1987	左京四条四坊十六町跡・烏丸御池遺跡	未報告	平安京左京三条四坊跡発掘調査団
20	1974	左京四条四坊十六町跡・烏丸御池遺跡	平安時代中期の溝、平安時代後期～鎌倉時代の溝、室町時代の溝、室町時代の土坑、江戸時代の六角堂関連遺構など	『平安京六角堂の発掘調査』平安京跡研究調査報告第2輯 昭和52年 (財)古代学協会
21	1994	左京四条四坊十六町跡・烏丸御池遺跡	平安時代後期の溝・井戸・土坑、鎌倉時代～室町時代の溝・井戸、江戸時代の土坑・井戸・塀、太子堂関連遺構など	『六角堂第3次・第4次調査』平安京跡研究調査報告第21輯 2006 (財)古代学協会(3次)
22	1986	左京四条四坊十六町跡・烏丸御池遺跡	平安時代後期の柱穴・井戸、鎌倉時代～室町時代の柱穴、室町時代後期の建物・土坑・土取穴など	『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』1989 (財)京都市埋蔵文化財研究所
23	1996	左京四条四坊十六町跡・烏丸御池遺跡	平安時代後期の溝・井戸・土坑、鎌倉時代～室町時代の溝・井戸、江戸時代の土坑・井戸・塀、太子堂関連遺構など	『六角堂第3次・第4次調査』平安京跡研究調査報告第21輯 2006 (財)古代学協会(4次)

参考文献

「柿本町」『京都市の地名』平凡社、1979年。

瀧谷寿「3.文献学的考察」『三條西殿跡 平安京跡研究調査報告 第7輯』財団法人古代学協会、1983年。

「中京区概説」『史料 京都の歴史 第9巻 中京区』平凡社、1985年。

『平安京提要』総監修角田文衛 角川書店、1984年。

表2 周辺試掘・立会調査一覧

調査No.	調査年度	所在地	調査内容	文献	調査区分
A	1979	三条通室町東入御倉町70-1	遺構・遺物なし。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和54年度 京都市文化市民局	立会
B	1983	烏丸通三条上ル場之町596	GL-0.6m以下平安時代後期の整地層、室町時代～江戸時代の井戸3基、土坑3基検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和58年度 京都市文化市民局	試掘
C	1984	両替町通姉小路下ル柿本町387-1	GL-0.2m以下、江戸時代2面、室町後期1面、鎌倉時代1面、平安時代後期1面の遺構面を確認。顕著な遺構・遺物なし。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度 京都市文化市民局	立会
D	1986	室町通姉小路下ル役行者町372	GL-1.01m以下で時期不明の包含層を確認。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化市民局	立会
E	1988	三条通烏丸西入御倉町79	GL-0.51mで室町時代の包含層を確認。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度 京都市文化市民局	立会
F	1989	両替町通姉小路下ル柿本町389	GL-1.7mにて時期不明の包含層を確認。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度 京都市文化市民局	立会
G	1992	両替町通姉小路下ル柿本町395	GL-2.23mにて平安時代後期の土坑を確認。	『京都市内遺跡立会調査概報』平成4年度 京都市文化市民局	立会
H	2001	烏丸通三条上ル場之町905他	近世の地下蔵2基を確認。	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成13年度 京都市文化市民局	試掘
I	2003	両替町通姉小路下ル柿本町393	No.1: GL-0.53mで江戸初期の包含層、-1.72m以下灰黄褐色砂礫の地山、No.2: GL-1.7mで江戸時代初期の落込みを確認。-1.9m以下で褐色微砂の地山、No.3: GL-1.16mで室町時代後期の包含層、-1.7mで室町時代中期の包含層を確認。	『京都市内遺跡立会調査概報』平成15年度 京都市文化市民局	立会
J	2004	姉小路通烏丸西入柿本町417他2筆	GL-1.3mまで現代盛土。	『京都市内遺跡立会調査概報』平成16年度 京都市文化市民局	立会
K	2008	両替町通姉小路下ル柿本町398-2	GL-0.9mまで時期不明の包含層(土師器、焼締陶器、常滑壺、白磁)。-1.1mまで江戸時代の包含層、-1.28～-1.55mまで鎌倉時代～室町の包含層(土師器皿)	『京都市内遺跡立会調査概報』平成20年度 京都市文化市民局	立会
L	2015	両替町通姉小路下ル柿本町389	GL-1.0mまで盛土	『京都市内遺跡立会調査概報』平成27年度 京都市文化市民局	立会

3 周辺の調査

当該地周辺では、多くの調査が行なわれている。隣接町で行なわれた発掘調査は23例(図11・表1)、同町内で行われた試掘調査は2例、立会調査10例である(図11・表2)。

同町内で行われた発掘調査は3例(調査No.1～3)であり、調査1では、鎌倉時代、室町時代の井戸や土坑、柱穴が多数確認され、中世の生活様相が確認されている。しかし、三条西殿に関連する遺構や対象地の北に想定できた姉小路南側溝は確認されなかった。

調査2では、調査1と同様に、平安時代末から鎌倉時代、室町時代の井戸や土坑、柱穴が多数確認されたが、三条西殿に関連する明確な遺構は確認されていない。

調査3では、三条大路北側溝、烏丸小路西側溝のほか、平安時代から室町時代の井戸や石組遺構、土坑や建物などが多数確認されている。特に室町時代の井戸や石組遺構は、前述した『康富記』の酒屋の存在とこれに伴う土蔵の記載を考古資料から追認できる資料と考えられる。しかし、平安時代の遺構は三条大路北側溝と井戸1基、土坑3基と遺構密度は希薄である。確認されている井戸は10世紀後葉と考えられ、この井戸以外はいずれも平安時代後期に属するものと報告されており、三条西殿に関連すると思われる遺構・遺物は確認されるもののその数は少ない。

この他、同町内で行われた試掘・立会調査でも、平安時代後期、鎌倉時代から室町時代、江戸時代の整地層や遺構が確認されている。これら調査のうち、対象地の西側で行われた調査Gでは平安時代後期の土坑、調査Bや調査Cでは平安時代後期の整地土が確認されるなど、周辺調査同様に、平安時代の遺構・遺物は確認しているものの、少なく、三条西殿の様相は明らかではない。

4 遺 構

今回の調査では、三条西殿に関する遺構の遺存状況、鎌倉時代から江戸時代の都市の生活状況の把握、また烏丸御池遺跡の遺構確認を目的として調査をおこなった。

4-1. 基本層序

現代盛土の下、近代盛土や焼け瓦を含む灰黄褐色粘質土を挟み、GL -0.3～0.5 m (標高 39.9～40.0 m) で焼土を含む黒色粘質土 (8層：第1遺構面)、-0.5～0.7 m (39.7～39.8 m) で焼土を含む灰黄褐色粘質土 (9・10層：第2遺構面)、-0.6～0.7 m (39.7 m) で灰黄褐色粘質土や暗灰黄色粘質土 (11～13層：第3遺構面)、-0.6～0.8 m (39.5～39.6 m) で炭化物や焼土を多く含むにぶい黄褐色粘質土 (21層：第4遺構面)、-0.7～1.3 m (39.1～39.5 m) で黒褐色粘質土や暗褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土 (28～32層：第5遺構面)、-1.4～1.5 m (39.9～40.0 m) 焼土片や地山ブロックが混じる黒褐色粘質土 (46層：第6遺構面)、-1.5 m (38.8～38.9 m) で灰オリ-ブ色粘質土 (52層：第7遺構面)、-1.3～1.7 m (38.6～39.0 m) でにぶい黄橙色粘質土の地山 (53層以下：第8遺構面) に至る。

第4面は調査区中央部にある近代井戸を挟んで (西壁断面の X = -10.989 m 付近)、北側は GL -0.7～1.0 m (標高 39.3～39.5 m)、南側は -1.1～1.3 m (39.0～39.1 m) と約 0.2～0.4 m の段差が認められ、南側が一段低くなっている。この段差の位置は、当該坊町南北の中心ラインに近いことから、敷地境を示していると考えられる。第3遺構面、第4遺構面が形成されていく中で南側の敷地のかさ上げが行われ、この段差が解消されて、明確な区画は認められなくなったと思われる。また、第7遺構面とした53層 (図15 トーンの範囲) 上面の標高は、38.59～38.68 m と概ね水平堆積をしていることから、この境は、第6遺構面形成以降に成立されたと推測できる。

4-2. 遺構の概要

調査は各整地層または地山上面で行い、第1遺構面 (江戸時代中期～後期)、第2遺構面 (江戸時代中期)、第3遺構面 (江戸時代中期)、第4遺構面 (江戸時代中期)、第5遺構面 (安土・桃山時代～江戸時代前期)、第6遺構面 (室町時代前半)、第7遺構面 (鎌倉時代から室町時代前半)、第8遺構面 (室町時代前半以前) として調査を行なった。

以下に各時代の主要な遺構について概説する。

第1遺構面 (江戸時代中期から後期)

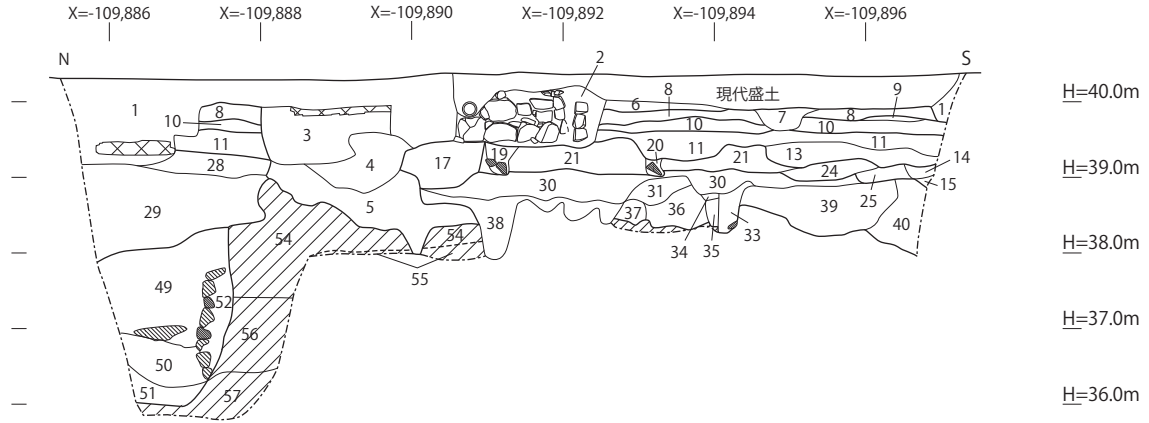
江戸時代中期の遺物や焼土を含む整地層 (図12-8層) 上面で検出した遺構である。埋甕土坑1基 (SK5)、土坑2基 (SK3・8)、柱穴5基 (SP1・2・4・6・7) などを確認した。

SK3・8は一辺0.3mの方形で、埋土は焼土片や焼け瓦を含む灰黄褐色粘質土である。またSK8には貝殻が多く含まれている。ともに廃棄土坑と考えられる。SK5は直径0.6mの円形の土坑で、深さ0.2m。焼締陶器の底部が据えられているのを確認した。

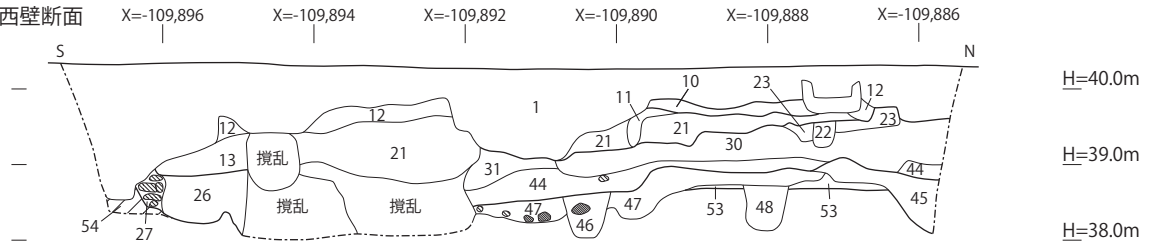
第2遺構面 (江戸時代中期)

江戸時代中期の遺物や少量の焼土を含む整地層 (9・10層) 上面で検出した遺構である。検出面

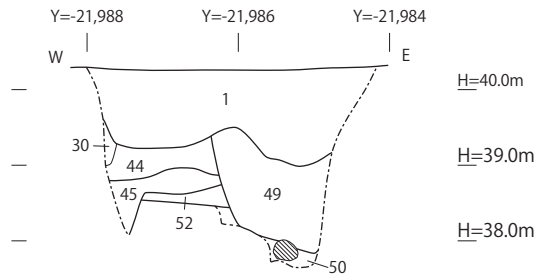
東壁断面



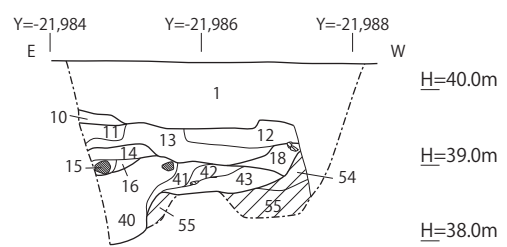
西壁断面



北壁断面



南壁断面

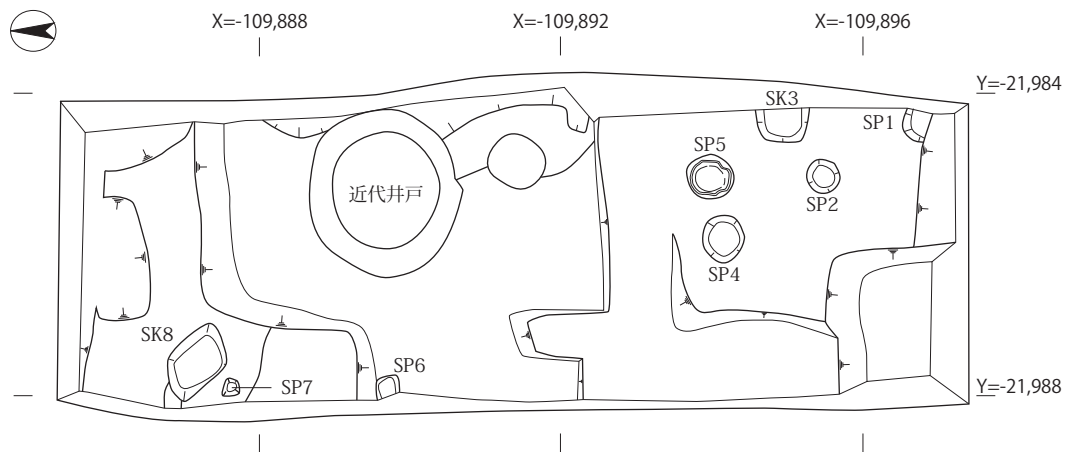


- | | |
|---|--|
| <p>1 近代盛土</p> <p>2 近代石室 うらごめは10YR4/1褐色粘質土</p> <p>3 レンガ床の基礎(拳大の礫つまる)【近代攪乱】</p> <p>4 10YR5/1 褐色土(拳大礫や、瓦、漆喰片含む)【近代攪乱】</p> <p>5 10YR3/1 黒褐色粘質土【近代攪乱】</p> <p>6 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 粘性弱い 焼土瓦含む</p> <p>7 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 粘性弱い 焼土瓦含む【SK3】</p> <p>8 10YR2/1 黒色粘質土 粘性弱い(焼土含む)</p> <p>9 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土【SX10】</p> <p>10 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 粘性弱い(焼土含む)</p> <p>11 10YR5/2 灰黄褐色粘質土</p> <p>12 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土</p> <p>13 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土</p> <p>14 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土【SK17】</p> <p>15 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 締まりない【SK17】</p> <p>16 10YR5/2 灰黄褐色粘質土【SK17】</p> <p>17 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 地山ブロック少し入る</p> <p>18 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土</p> <p>19 10YR3/2 黒褐色粘質土</p> <p>20 10YR3/2 黒褐色粘質土</p> <p>21 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 締まりあり
炭化物・焼土片多量に入る</p> <p>22 10YR4/2 灰黄褐色粘質土【SP20】</p> <p>23 10YR4/1 褐色粘質土</p> <p>24 10YR3/2 黒褐色粘質土</p> <p>25 10YR3/2 黒褐色粘質土 黄褐色粘質土ブロック入る</p> <p>26 10YR4/2 灰黄褐色粘質土【SK27】</p> <p>27 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 締まりややあり【SK27】</p> <p>28 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 締まりない</p> <p>29 10YR3/2 黒褐色粘質土</p> | <p>30 10YR3/3 黒褐色粘質土 地山ブロック入る</p> <p>31 10YR3/2 暗褐色粘質土</p> <p>32 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土</p> <p>33 10YR3/1 黒褐色粘質土 地山ブロック入る</p> <p>34 10YR3/1 黒褐色粘質土</p> <p>35 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土 地山が崩れた土</p> <p>36 10YR3/2 黒褐色粘質土に地山ブロック入る 焼土片少し入る</p> <p>37 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土 10YR3/2黒褐色粘質ブロック入る</p> <p>38 10YR3/3 暗褐色粘質土</p> <p>39 10YR3/2 黒褐色粘質土</p> <p>40 10YR3/2 黒褐色粘質土 炭化物多く含む</p> <p>41 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 砂粒多く混じる</p> <p>42 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 砂粒多く混じるやや締まりあり</p> <p>43 10YR3/2 黒褐色粘質土(地山ブロック入る)砂粒多く含む土</p> <p>44 2.5YR4/2 暗灰黄色 砂粒多く混じる粘質土</p> <p>45 10YR3/2 黒褐色粘質土 地山ブロック・焼土片少し入る</p> <p>46 10YR3/2 黒褐色粘質土 地山ブロック・焼土片少し入る</p> <p>47 10YR3/2 黒褐色粘質土 地山ブロック・焼土片少し入る</p> <p>48 10YR4/1 褐色粘質土 地山ブロック含む【SK52】</p> <p>49 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 砂礫多く混じる【SE50】</p> <p>50 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 砂礫多く混じる【SE50】</p> <p>51 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土 砂礫混じり【SE50】</p> <p>52 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土 砂礫混じり【SE50掘方】</p> <p>53 7.5YR6/2 灰オリブ色粘質土(いわゆるうぐいす土か)</p> <p>54 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土 固く締まる【地山】</p> <p>55 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土 砂礫多く含む【地山】</p> <p>56 5BG5/1 青灰色粘土 砂礫混じる【地山】</p> <p>57 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土【地山】</p> |
|---|--|

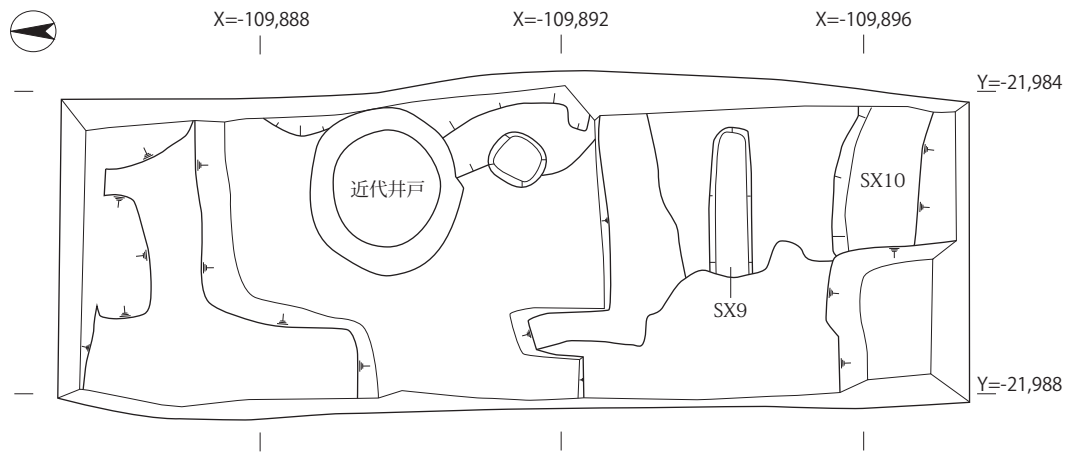


図12 調査区周壁断面図(1:100)

第1遺構面（江戸時代中期～後期）



第2遺構面（江戸時代中期）



第3遺構面（江戸時代前期）

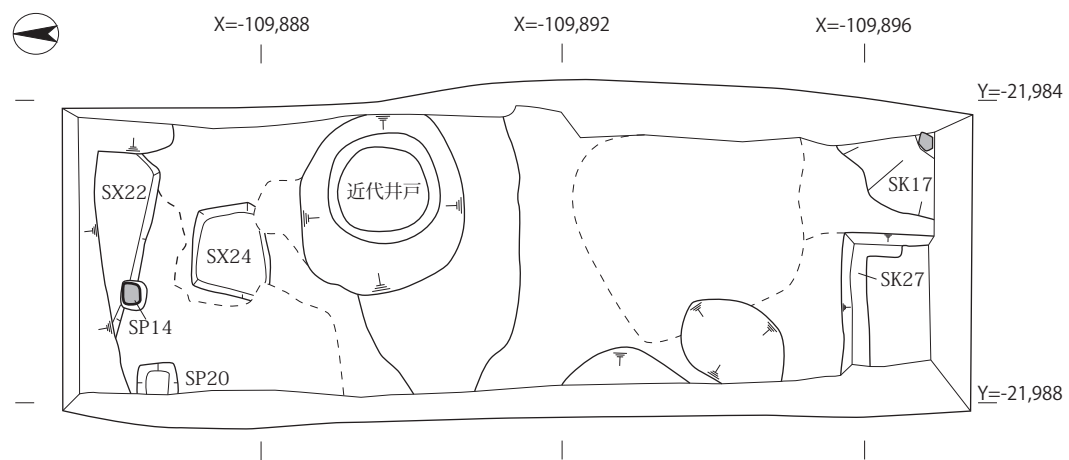
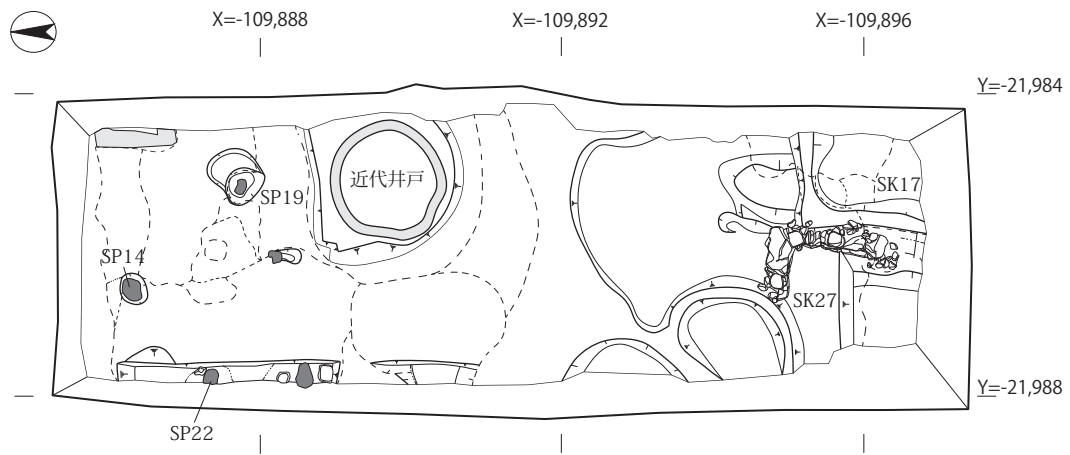
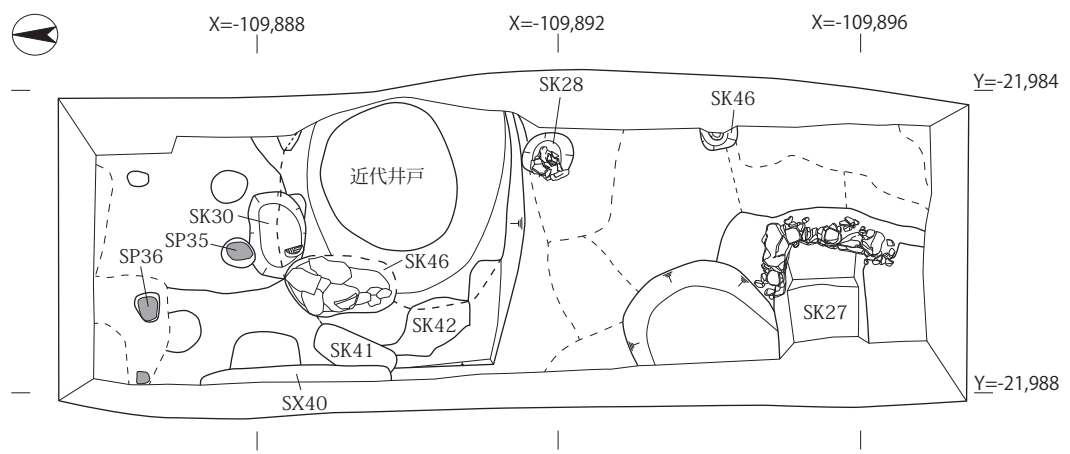


図13 遺構平面図1（1：100）

第4遺構面（江戸時代中期）



第5遺構面（安土桃山～江戸時代前期）



第6遺構面（室町時代前半）

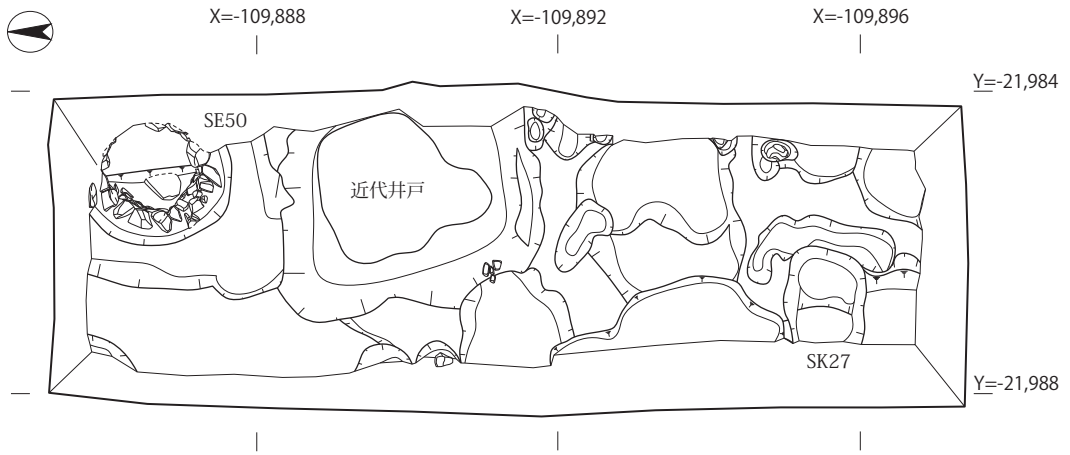


図14 遺構平面図2（1：100）

第7遺構面（鎌倉時代～室町時代前半）

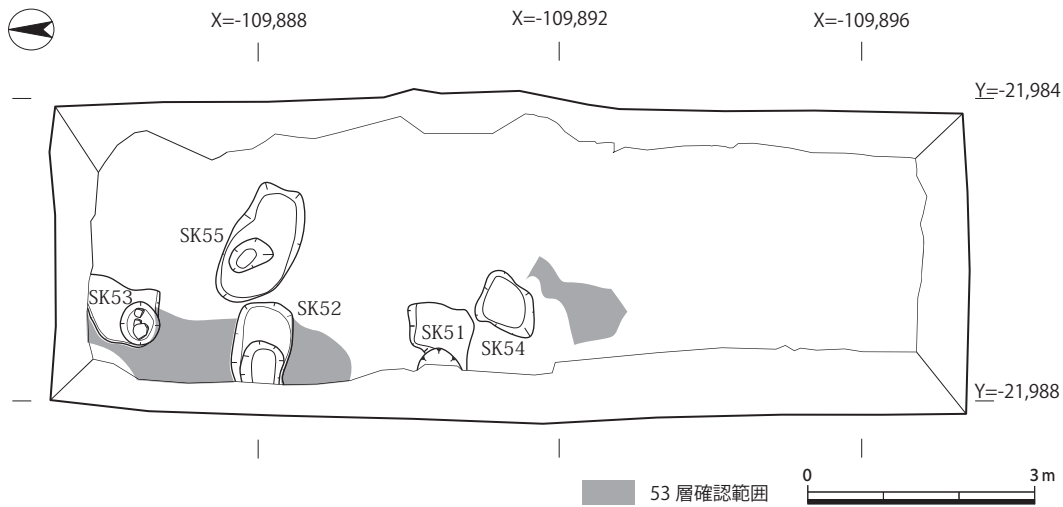


図15 遺構平面図3 (1:100)

の一部が赤色化していることから、被熱した可能性が高い。柱穴などの目立った遺構は確認出来なかったが、幅0.5m程の東西方向の硬化面（SX9）と、調査区南東隅に広がる硬化面（SX10）を確認した。SX9・10はともに厚さ5cmほどのにぶい黄褐色粘質土が堆積しており、上面は非常に固く締まる。町家の間で見受けられる小径やたたきである可能性が高い。

第3遺構面（江戸時代中期）

灰黄褐色粘質土や暗灰黄色粘質土（11～13層）の上面で検出した遺構である。

調査区北側で30cm大の根石をもつ柱穴（SP14）を1基確認した。配置から建物などの明確なプランは見つけることはできなかった。掘方を明確に検出できたが、深度は浅かった。宅地内の裏手にあたることや根石の規模から類推すると、簡易な建物であったと想定できる。また小径と想定できる東西方向の硬化面（SX22）上面で成立していることから、2時期以上の変遷があったと考えられる。

第4遺構面（江戸時代中期：宝永の大火後）

調査区北側では暗灰黄色粘質土（28層）、調査区南側では、安土桃山から江戸時代の遺物や炭化物、焼土を多く含むにぶい黄褐色粘質土（21層）の上面で検出した遺構である。この焼土を含む整地層（21層）は対象地南側のみで確認している。宝永の大火（1708）後の火災処理に伴うものと考えられる。調査区北側で20cm大の根石をもつ柱穴を4基（図14-第4遺構面のSP14以外）確認した。配置から建物などの明確なプランは見つけることはできなかった。掘方を明確に検出できたものもあったが、深度は浅い。宅地内の裏手にあたることや根石の規模から類推すると簡易な建物であったと想定できる。

第5遺構面（安土桃山時代～江戸時代前期）

調査区北側では第4遺構面（28層）と面を共有し、南側では一段下がって、黒褐色粘質土や暗褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土（30～32層）の上面で検出した遺構である。石組土坑（SK27）

平面図

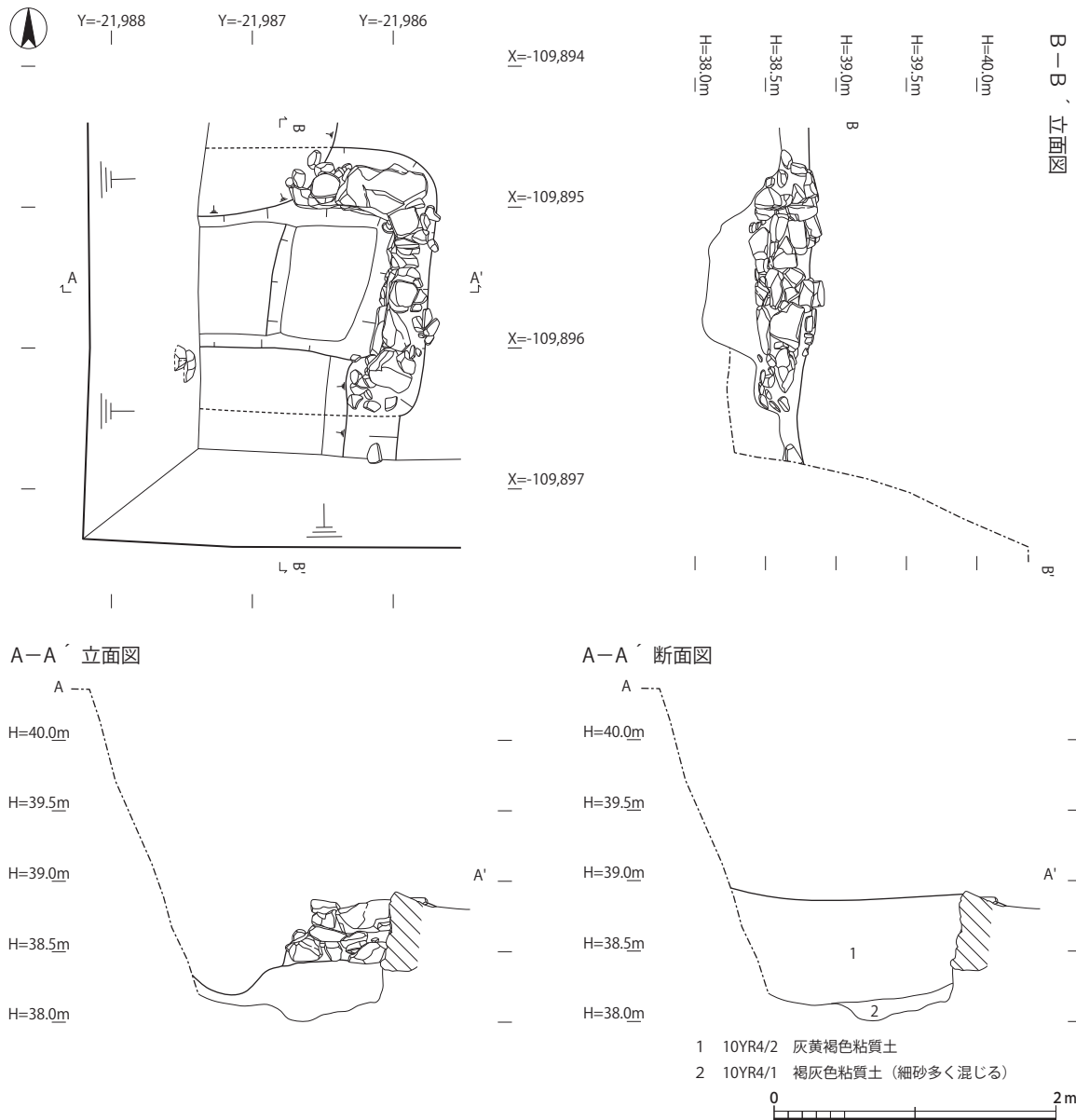


図16 SK27平面図・断面図・立面図（1：50）

や埋甕土坑（SK28），遺物集積遺構（SX40），土坑（SK41・42），柱穴（SP35・36）などを確認した。

SK27は調査区南西隅で確認した方形の石組土坑である。西側部分は後世に削平を受けており、北辺・南辺の一部、及び東辺を確認した。土坑の内法は南北1m、東西1.3m以上である。石を据えるための掘方は一回り大きい南北1.9m、東西1.6m以上である。拳大から人頭大の自然石が組み上げられ、土坑の内側は北・東・南側ともに内側に面が揃う。石の天端にも平坦面が意識されており、石積みは2段であったと考えられる。土坑底部は、石積みの底から地山を0.2～0.3mほど掘り込んで形成され、東側が西側よりも一段低くなっている。側面の下部や底面には石や板などの痕跡は確認できなかった。埋土は上下2層に分かれ、上層は灰黄褐色粘質土、下層は褐灰色粘質土である。上層では土師器細片が少量確認できたのみで、出土遺物の大半は下層から出土している。

SK28は調査区東壁中央部で確認した埋甕土坑である。直径0.7mの円形で、深さは0.1～0.2m

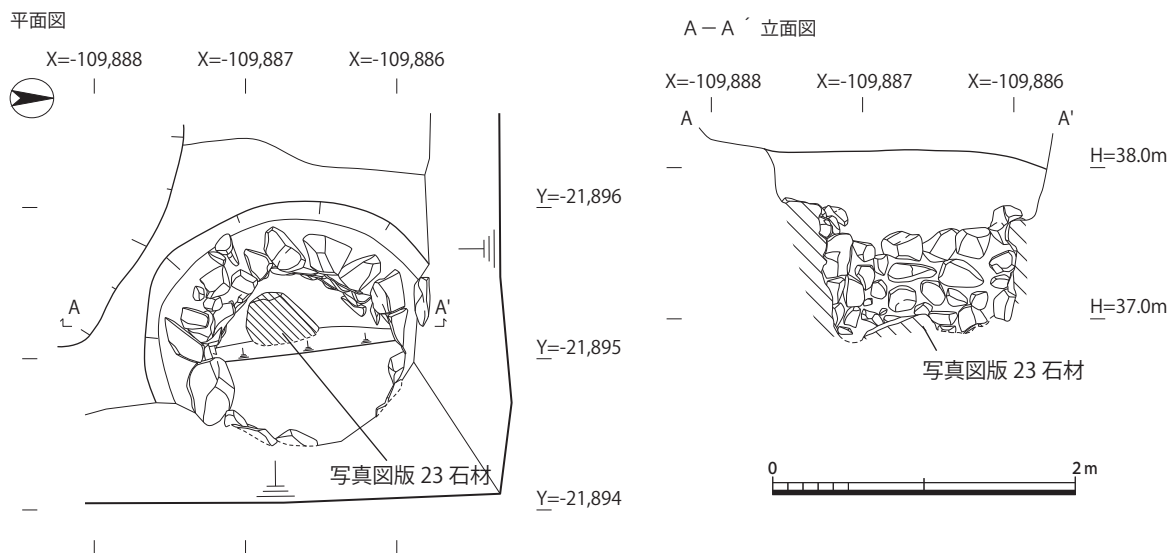


図17 SE50平面図・立面図（1：50）

である。埋甕は大半が破損しているが底部が据えられた状況を確認した。

SX40は西壁沿いで確認した遺物集積遺構である。概ね南北2.5m，東西0.25mの範囲で確認できる。埋土は黄灰褐色粘質土である。第5遺構面形成時の整地土と類似した埋土であるため整地の一単位である可能性もあるが，土師器皿などが重なり合っただけで出土していたため，遺構として報告する。

SK41・SK42は調査区中央部西側で検出した土坑である。SK41は長辺1.1m，短辺0.4mの長方形である。SK42は周辺の遺構との重複関係から形状は不明瞭だが1m以上の方形であったと推測できる。ともに埋土は黄褐色粘質土である。

この他，調査区北側で整地層（28層）を一部下げたところ，30cm大の根石をもつ柱穴（SP35・36）を2基確認した。配置から建物などの明確なプランは見つけることはできなかった。掘方を明確に検出できたものの，深度は浅く，簡易な建物であった可能性が高い。

第6遺構面（室町時代前半）

焼土片や地山ブロックが混じる黒褐色粘質土（46層）上面で検出した遺構である。井戸（SE50）などを確認した。

SE50は調査区北東隅に位置し，一部調査区外に広がる。円形の石組み井戸で，掘方は直径1.8m，井戸の内法は直径1.1mである。石組み材には，概ね人頭大の自然石，一部花崗岩が使用される。井戸内を深さ1mほど掘削したところで，一辺0.5mほどの礎石（写真図版23-SE50枠内出土石材）が掘り込まれているのを確認した。安全上の理由から掘削を一時中断し，現状の記録を作成したのち，井戸の断面を確認する目的で東壁沿いを重機にて断ち割り，井戸底を確認した。井戸の深さは2.3mである。井戸底は湧水層と考えられるにぶい黄橙色砂礫（56層）に達したところで掘削が終わっている。底部に曲物などを据えている形跡は確認できなかった。埋土は，大きく上下2層に区分でき，上層は埋め戻しである地山ブロックを含む褐灰色粘質土（49層），下層は砂礫混じりにぶい黄褐色粘質土や砂質土（50・51層）となる。遺物は上層からのみ出土した。また掘方

(52層)は、にぶい黄橙色粘質土(54層)や青灰色粘土(56層)と安定した層のみを掘り込んでつくられている。湧水層であるにぶい黄橙色砂礫(57層)を避けたものと推測できる。

同町内で行われた調査(図11-調査3)の際には、井戸が50基ほど確認されており、10形態に分類されている²⁾。今回確認した井戸は石組み部分のみで、最下部の様相は不明であり、分類されている形態に合致するものはなかった。

第7遺構面(鎌倉時代から室町時代前半)

灰オリーブ色粘質土(53層)上面で検出した遺構である。後世の遺構による削平を受け、面として認識できたのは調査区北西部分の一部である。土坑を5基(SK51~55)確認した。

SK52は西壁沿いで東西1m、南北0.8mの長方形の土坑で、底部西側が一段下がる。深さは0.5mである。埋土は地山ブロックや焼土片を含む黒褐色粘質土である。SK55はSE51の南西部に一部重複する。長辺0.8m、短辺4mの長方形の土坑である。埋土は灰オリーブ粘質土ブロックを含む褐色砂混じり粘質土である。

第8遺構面(鎌倉時代以前)

にぶい黄橙色粘質土の地山(54層以下)上面で明確に成立する遺構は確認できなかった。

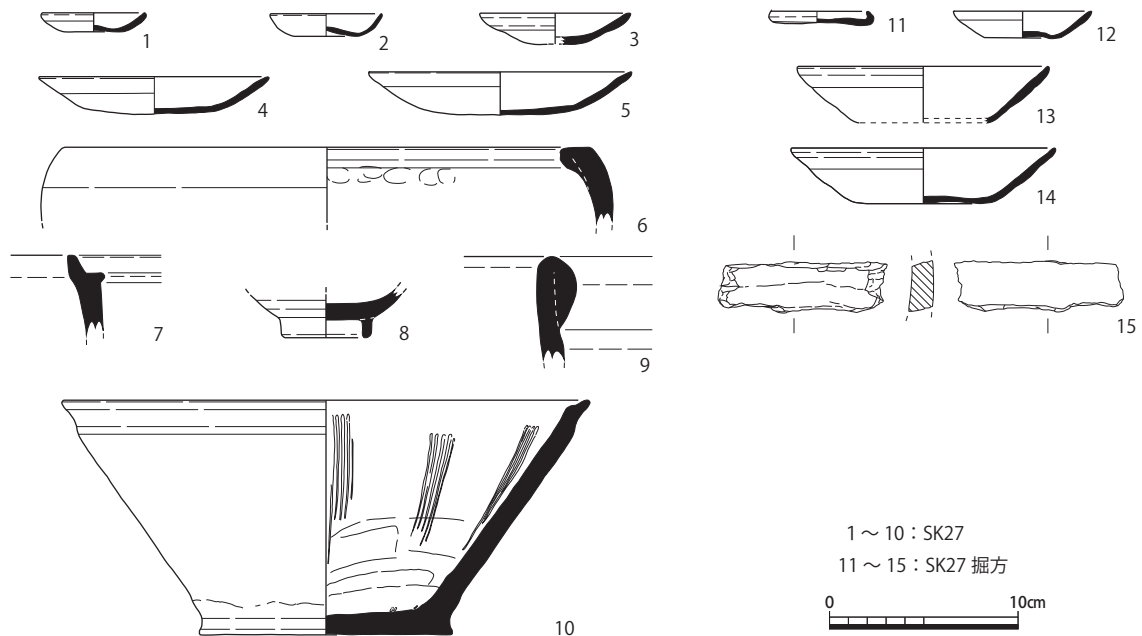


図18 SK27出土遺物(1:4)

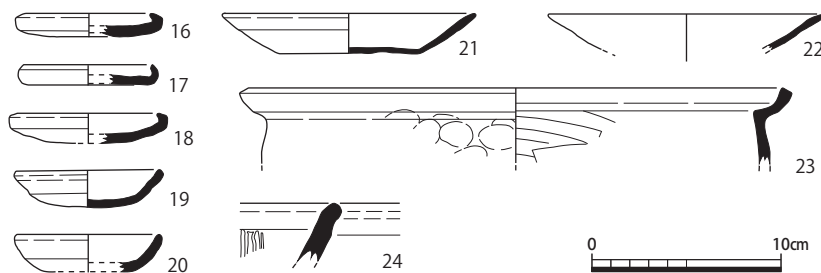


図19 SX40出土遺物(1:4)

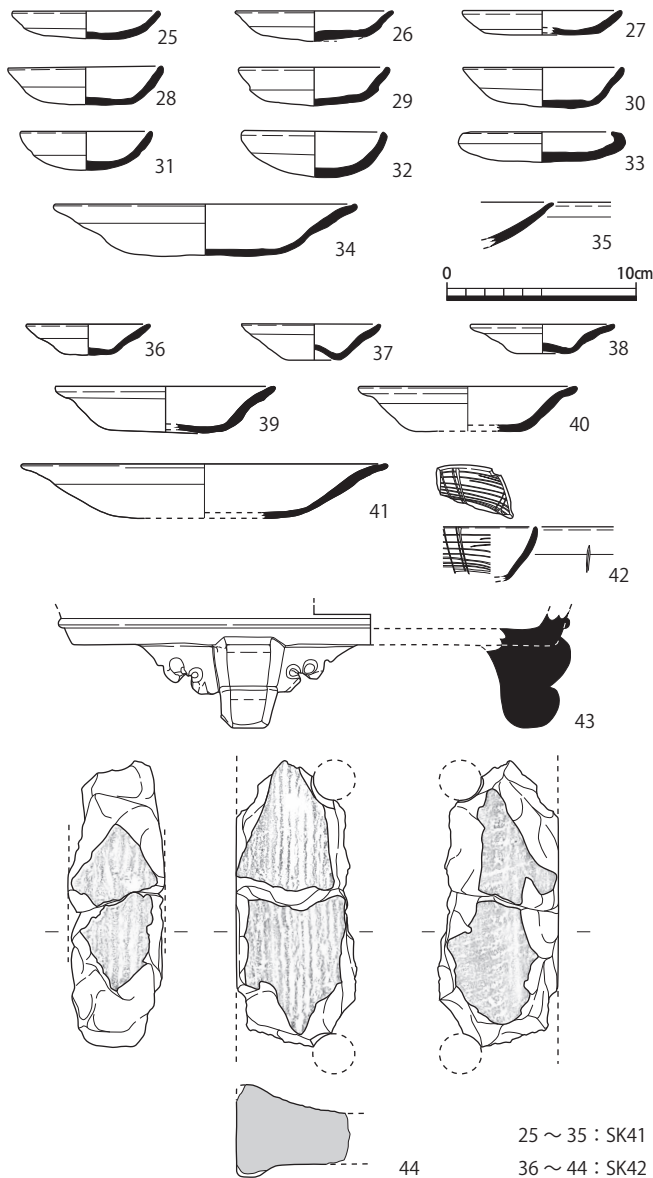


図20 SK41・42出土遺物（1：4）

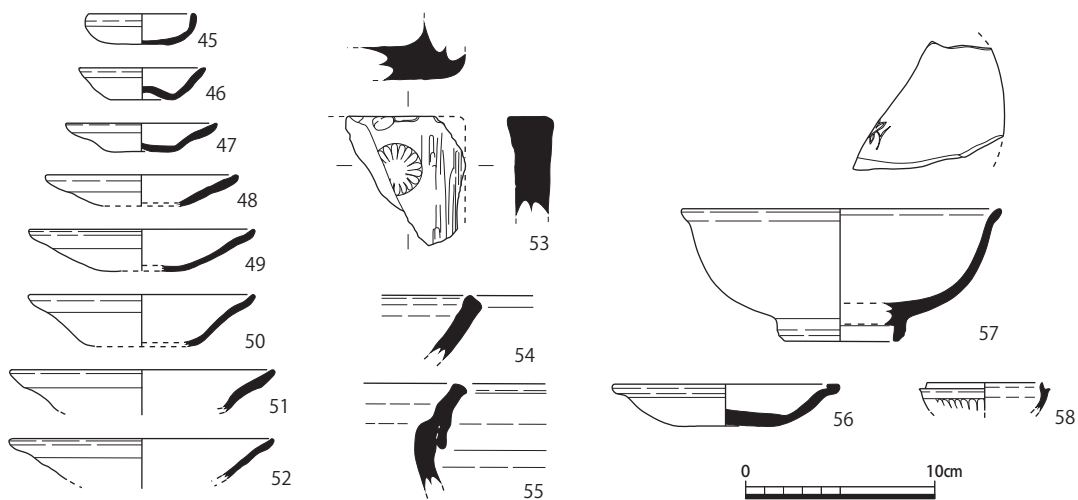


図21 SE50出土遺物（1：4）

5 出土遺物

SK27出土遺物（図18-1～15）

1～5は土師器皿である。1～3は小皿，4・5は大皿である。6は瓦質土器の火鉢である。7は瓦質土器の手あぶりである。外面下部には被熱痕跡が残る。8は瀬戸美濃の椀の高台部分。9は備前焼の甕の口縁部である。10は信楽焼の播鉢である。5条一単位の摺目が施され，内面下部には摺目がなくなる程の使用痕が残る。これらは16世紀前半と考えられる。

11～15は掘方から出土している。11～14は土師器皿で，11はいわゆる「コースター」型である。15は石鍋の体部片である。長方形に成形されていることから，転用して使用された可能性がある。これらは14世紀後半の様相を示しているが，これは下層の遺構を掘りこんで石組を形成したため，古い時期の遺物が主体になっていると考えられる。

SX40出土遺物（図19-16～24）

16～22は土師器皿である。16～18はいわゆる「コースター」型である。19・

20は小皿，21・22は大皿である。23は瓦質土器の鍋，口縁部は受け口状である。24は信楽焼の播鉢口縁部である。4条以上が一単位のすり目が残る。

SK41 出土遺物 (図20-25～35)

25～34は土師器皿である。25～33は小皿で，25～30は一段ナデを施し，口縁部は外反する。25～27は浅く，28～30は深手である。31・32は丸底で口縁部はやや内傾する。33はいわゆる「コースター」型である。概ね13世紀前半から半ばと考えられる。34は大皿である。口縁形態などからやや新しい様相を示す。35は緑釉陶器の皿の口縁部である。猿投産。口縁端部のナデ幅がやや短く，時期は9世紀半ばから後半のものと考えられる。やや古い様相を示しているが，下層からの混入品であると考えられる。これらのほか図化に至らなかったが，遺構42と同様の土師器細片も出土していることから，これらの土器は下層遺構の遺物がまぎって混入したものと考えられる。

SK42 出土遺物 (図20-36～44)

36～41は土師器皿である。36～38は小皿，39・40は中皿，41は大皿である。42は輪花型瓦器椀。43は瓦質土器火鉢の脚部。44は有孔埴である。側面には縄目叩きが施され，片面はナデ消した痕が確認できる。これらは15世紀半ばから後半と考えられる。

SE50 出土遺物 (図21-45～58)

45～52は土師器皿である。45・46は小皿，47・48は中皿，49～52は大皿である。53は瓦質土器の火鉢である。外面に縦方向のミガキの後，菊文のスタンプが施される。破片ではあるが角が確認できることから，方形の火鉢と考えられる。54は東播系須恵器鉢口縁部である。55は常滑焼の甕の口縁部である。56は古瀬戸の折縁皿である。見込みは非常に磨滅している。57は青磁椀である。見込みには一輪花の印刻が施される。58は青磁合子である。これらは15世紀半ばから後半と考えられる。

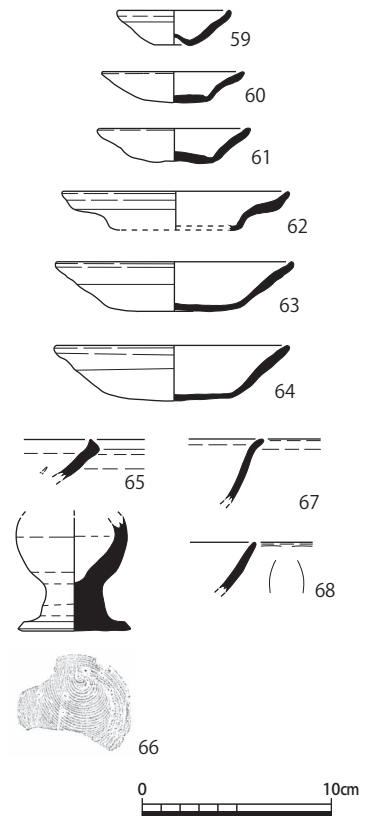


図22 SK55出土遺物 (1 : 4)

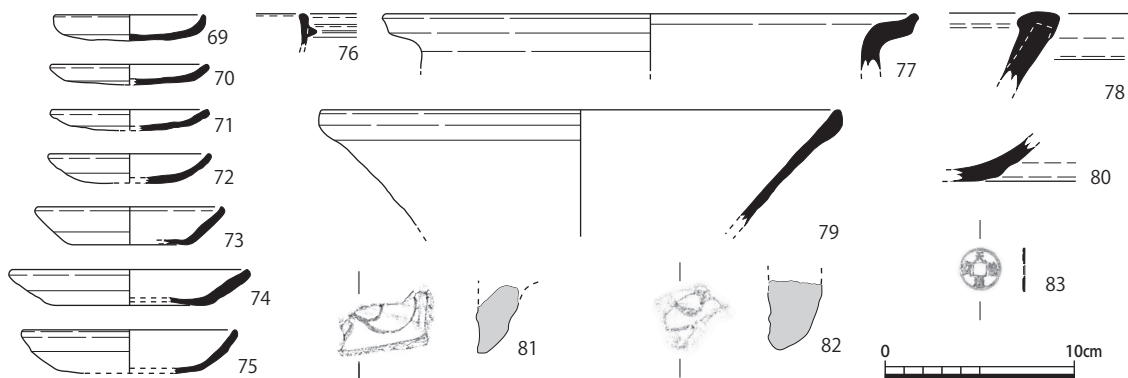


図23 SK52出土遺物 (1 : 4)

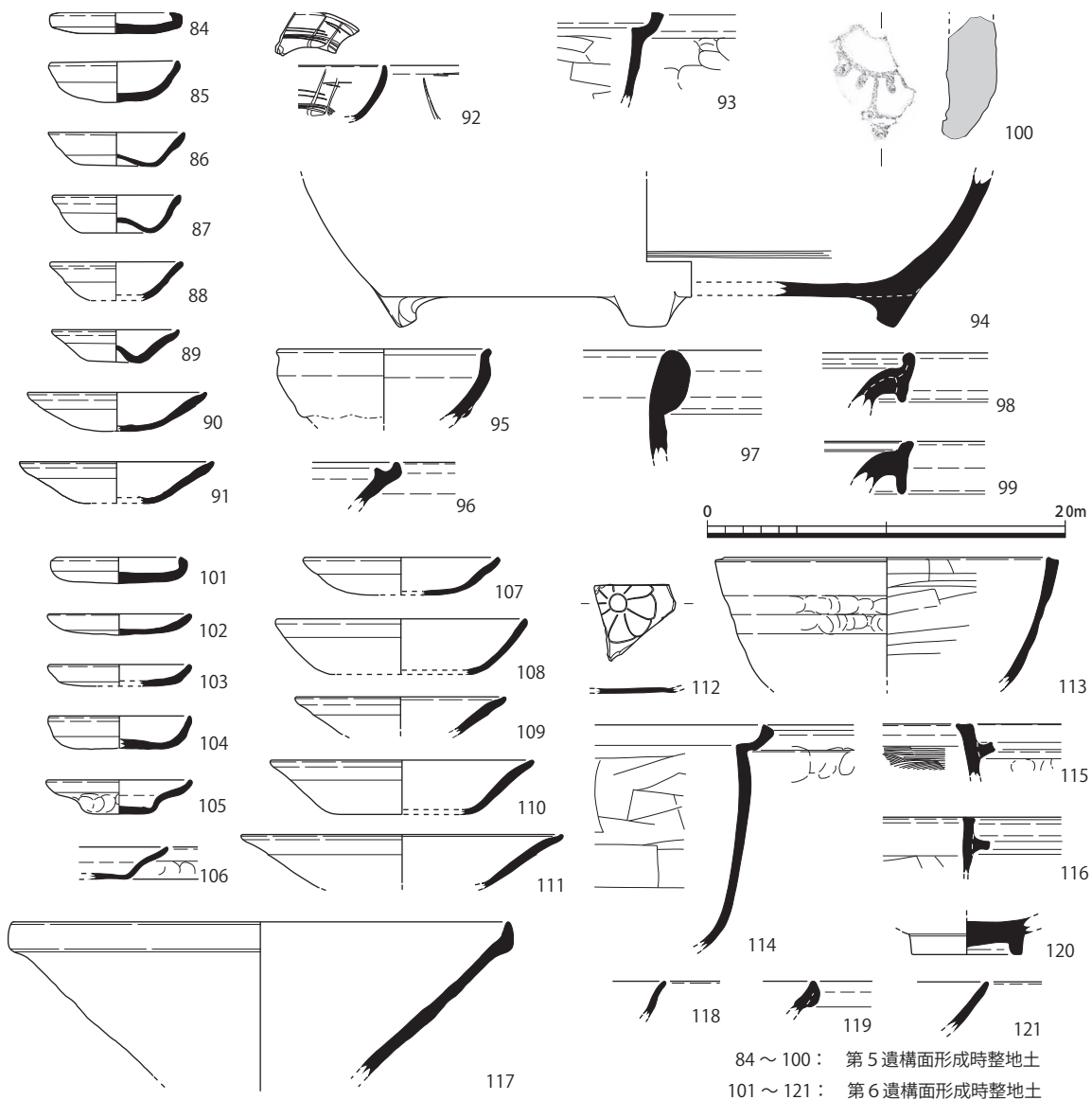


図24 第5遺構面・第6遺構面形成時整地土出土遺物（1：4）

SK55出土遺物（図22-59～68）

59～64は土師器皿である。59～61は小皿，62～64は中皿である。65は古瀬戸の卸皿の口縁部である。わずかに卸目が残る。66は古瀬戸の花瓶である。67・68は青磁碗の口縁部である。68の外面には不明瞭であるがわずかに凹凸が確認でき，連弁が施されていたと推定できる。これらは14世紀後半から15世紀初頭と考えられる。

SK52出土遺物（図23-69～83）

69～75は土師器皿である。76はミニチュアの土師器羽釜である。77は瓦質土器の鍋，78は瓦質土器の火鉢である。やや胎土が粗い。79・80は東播系須恵器鉢である。81・82は軒平瓦で，ともに唐草文が施され，全体に凹凸が浅い。平安時代後期と考えられる。83は「天□通宝」とよめる。□部分は不明瞭であるが，「禧」と推測でき，天禧通宝（鑄年：1017-1021）と考えられ，北宋銭である。これらは13世紀代と考えられる。

第5 遺構面形成時整地土出土遺物 (図24-84～100)

84～91は土師器皿である。84～89は小皿で、84はいわゆる「コースター型」、86～89は「へそ皿」である。90・91は大皿である。92は輪花型瓦器椀である。93は瓦質土器の鍋、94は瓦質土器の火鉢である。95は瀬戸の天目椀である。96は古瀬戸の折縁皿である。97は備前焼の甕の口縁部である。98・99は常滑焼の甕の口縁部である。100は軒丸瓦である。複弁八弁蓮花文で、連弁は凸線互いに接する。播磨産である。平安時代後期と考えられる。84や92, 98, 99, 100などやや古い様相を示すものもあるが、これらは概ね15世紀半ばから後半ごろと考えられる。

第6 遺構面形成時整地土出土遺物 (図24-101～121)

101～111は土師器皿である。101はいわゆる「コースター型」である。102～104は小皿で、やや短い口縁部に一段ナデが施される。105の口縁部は大きく外反し、口縁部外面下部には指おさえの痕跡が確認できる。109～111は大皿で、口縁部は外反し、端部は丸く収める。112は輪花型瓦器椀である。113は瓦質土器の鉢である。114は瓦質土器の鍋である。115・116は瓦質土器の羽釜である。117は東播系須恵器の鉢である。118・119は白磁椀の口縁部、120は白磁椀の高台である。121は青磁椀の口縁部である。101や112, 貿易陶磁器(118～121)などは古い様相を示すが、これらは概ね15世紀前半と考えられる。

6 まとめ

今回の調査では、宝永の大火(1708)後の火災処理と考えられる整地土を挟み、大火前で2時期、大火後で4時期の計6時期の遺構面を確認し、室町時代から江戸時代の町屋の変遷を追うことができた。洛中洛外図屏風歴博甲本³⁾では当該地は雲の中にあたり、また洛中洛外図屏風上杉本でも直接確認することはできない。ただ、上杉本には三条通りから当該地の南隣接地部分に、「竹田ずいちく(瑞竹)」との書き込みが確認でき、入母屋造の建物や三条通に診察を待つ人々の姿が描かれている⁴⁾。当該地が、竹田法印と共に牛黄丸という薬の製造で有名な医師である竹田瑞竹邸の裏手にあたることがわかる。また寛政十四年(1802)の洛中絵図でも、当該地は道路に面した敷地の裏手にあたることを確認できる。今回確認した遺構も井戸や石組み土坑や土坑など、いずれも町家の裏手に多い遺構であり、絵図等とも整合性がとれる成果となった。

この他、主目的とした三条西殿に関わる明確な遺構は確認できず、遺物はわずかし確認できなかったが、中世以降の整地土中に平安時代後期の土師器細片や軒瓦小片が含まれることから、当該地の土地利用が平安時代後期にまでさかのぼることが確認できた。(奥井 智子)

註

- 1) 角田文衛「関白師実の母」『王朝の映像 平安時代史の研究』東京堂出版、1970年。
- 2) 「4. 井戸と出土遺物」『三条西殿跡』平安京跡研究調査報告第7輯 財団法人古代学協会、1983年。
- 3) 『洛中洛外図屏風歴博甲本』財団法人歴史民俗博物館振興会、2012年。
- 4) 鋤柄俊夫「洛中洛外図の中の京都 都市図としての視点から」『国立歴史民俗博物館研究報告』第180集、2014年。『三条西殿跡』平安京跡研究調査報告第7輯 財団法人古代学協会、1983年。

II -3 平安京左京五条二坊十四町跡・ 烏丸綾小路遺跡 No.62

1 調査の経緯（図25・26）

本件は、宿泊施設建設に伴う試掘調査である。平安京左京五条二坊十四町跡および弥生時代から古墳時代の集落跡である烏丸綾小路遺跡に該当する。同町は文献史料では、居住者や伝領関係を確認できないが、角田文衛氏の考証では『源氏物語』中の夕顔の住まいがこの町とされる¹⁾。ここに物語上の登場人物である夕顔がいたかどうかは大きな問題ではないが、この比定を是とすれば、『源氏物語』の執筆者が、この付近を粗末な板屋が並ぶ一角であると認識していたことになる。

周囲では元格致小学校内で、今年度発掘調査を実施し、平安時代から近世までの遺跡を確認している²⁾。また、調査地南北でそれぞれ2件ずつの試掘調査を実施しているが、北側では現代攪乱および西洞院川による氾濫堆積を確認したにとどまり、南側でも現代攪乱等の影響もあり、明確な遺構は確認されていない。

調査は、平成28年9月14日に実施し、調査面積は32㎡である。遺構・遺物を検出したものの、遺存状況が悪かったことから、基礎掘削時の立会を指導した。

2 層序と遺構（図27）

層厚0.45～0.7mの盛土および攪乱の直下で灰白色から灰色で微砂ないし砂礫の地山となる。一部で氾濫堆積が確認でき、既往の調査で検出されている西洞院川によるものと考えられる。攪乱等による削平の影響か、遺物包含層は確認できなかった。遺構検出は地山上面で行った。

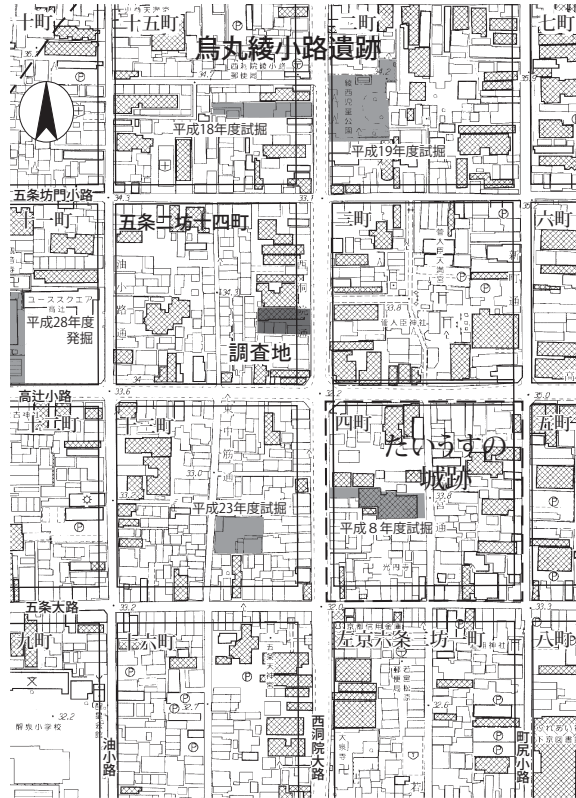


図25 調査位置図（1：5,000）

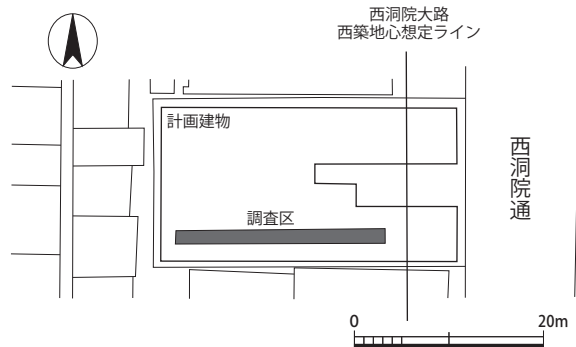
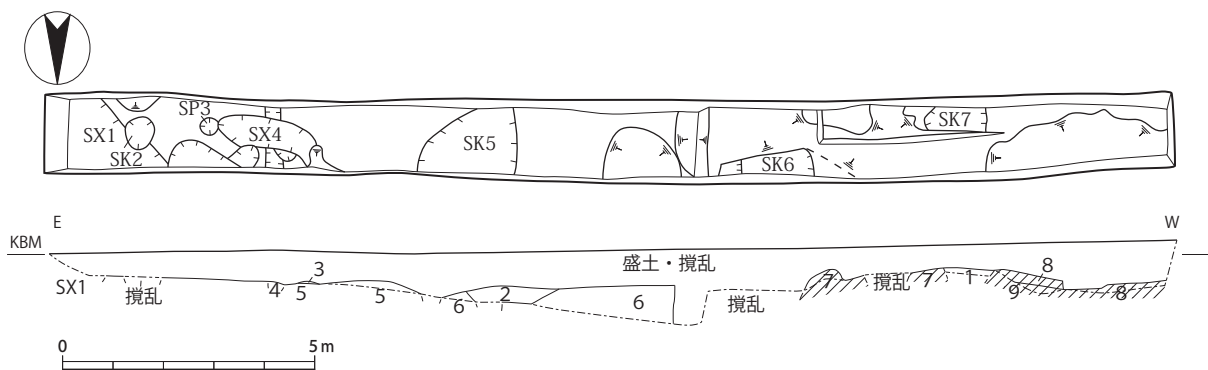


図26 調査区配置図（1：800）



1. 2.5Y4/1 黄灰色細砂（8層をブロック状に含む，土師器含む）【SK7】
2. 5Y5/1 灰色泥砂（炭，土師器片含む）【SK5】
3. 10YR5/1 褐灰色シルト
4. 10YR5/1 褐灰色泥砂（炭・土師器片含む）【溝埋土】
5. N7/ 灰白色微砂（上面に鉄分多く沈着）
6. N6/ 灰色砂礫【氾濫堆積】
7. 5Y6/1 灰白色微砂～砂礫（φ～3cmの礫からなる）【地山】
8. 5Y6/1 灰白色シルト～微砂（固く締まる，上半に鉄分多く沈着）【地山】
9. 5Y5/1 灰色砂礫【地山】

図27 平面図・断面図（1：150）

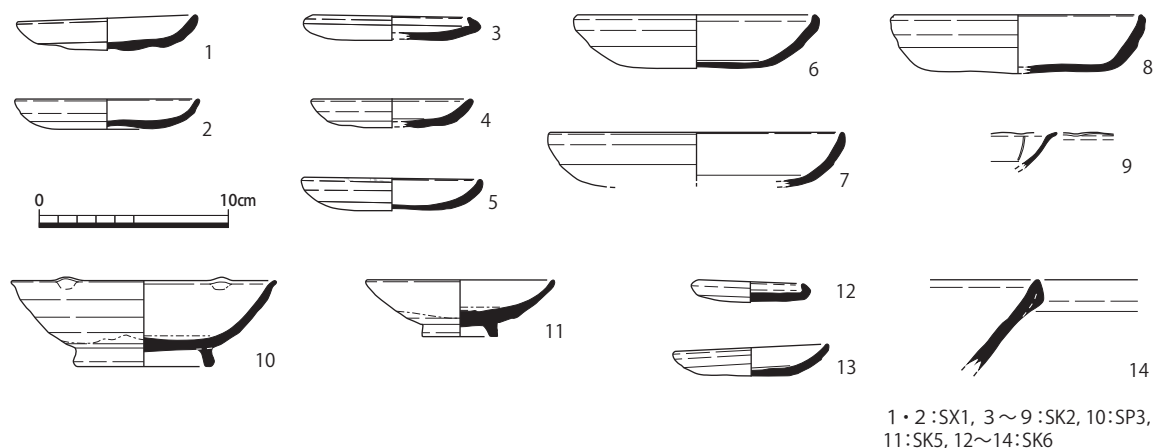


図28 出土遺物（1：4）

遺構は攪乱の影響により，遺存状況は悪かったものの，土坑，ピット，溝などを検出した。

SX1は調査区東端で検出した性格不明遺構で，西肩を検出したにとどまっており，全形や大きさなどは不明である。12世紀の遺構である。SK2は12世紀の土師器が集中的に出土した，南北1.3m，東西1.2mの小規模な土坑である。SP3は径0.7mのピットで，灰釉陶器の輪花椀が出土した。SK5は幅2.0m程度の調査区内では大型の土坑で，井戸の可能性もある。SK6は調査区中央西寄りで検出した土坑で，南辺は攪乱の影響で遺存していなかった。鎌倉時代の遺物が出土した。

3 遺物（図28）

1・2はSX1から出土した土師器皿Nである。小皿のみで出土数が少ないため，時期比定の確度は落ちるがおよそV期新段階～VI期古段階（12世紀後半）と考えられる。3～9はSK2出土遺物で，3は土師器皿Ac，4～8は土師器皿N，8はやや深手である。9は白磁皿で輪花型に成形する。土師器皿はV期中～新段階（12世紀半ば）に帰属する。10はSP3出土の灰釉陶器輪花椀である。見込みには別の個体の高台部が付着しており，焼成時に重ねられていたことが分かる。11はSK5

出土の白磁皿で、見込みを円形に釉剥ぎする。細片のため、図化できていないが、共伴する土師器は15世紀のものである。12～14はSK6出土遺物である。12, 13は土師器で、12は皿Ac, 13は皿Nである。14は東播系須恵器のこね鉢で、口縁部が外方に肥厚する。土師器はVI期新段階（13世紀半ば）頃のものであり、須恵器の年代観と矛盾しない。

4 まとめ

今回の調査では、12世紀代の遺構・遺物を中心に、前後の時期の遺構を複数確認した。これまでの付近の試掘調査では、当該時期の遺構・遺物はほとんど確認できておらず、重要な成果となる。地山の検出レベルがGL-0.7mと、平安京左京域としては浅いことは、かつて西洞院通部分に流れていた西洞院川の両岸部分が高くなっていたことに由来すると考えられる。今回の調査地では、12～13世紀の複数の遺構を検出しているが、12世紀末ないし13世紀に成立したと考えられる九条家本『延喜式』の平安京左右京図には西洞院川の川筋が描き込まれており、同時期に西洞院川が存在した可能性は高い。今回検出した複数の遺構・遺物から、西洞院川に隣接した地において、活発な消費活動があったことが分かる。遺構面が浅く、また攪乱の影響が大きいことから、土地利用の変遷を明らかにするにはデータが不足していることは否めない。今後、周囲の調査成果の積み重ねが必要となる。

(新田 和央)

註

- 1) 角田文衛「夕顔の宿」『古代文化』第18巻第5号, (財)古代学協会, 1967年。
- 2) 平成29年2月時点, 報告書作成中。

II -4 平安京左京五条三坊五町跡・ 烏丸綾小路遺跡 No.63

1 調査の経緯 (図29・30)

本件は、福祉施設建設に伴う試掘調査である。調査地は、平安京左京五条三坊五町跡および烏丸綾小路遺跡に該当し、中でも調査地の南端に五条大路北築地が想定される。

同町の居住者や伝領関係に関する記録はなく不明である。平成5年に本調査地の東側隣接地で実施した立会調査では、北東から南西に向かって流れる弥生時代後期の流路を確認しており、本調査地付近に集落が存在する可能性が推定された。

調査は、平成28年10月11日に実施した。調査区は2カ所設けたが、1区の南端部で遺構・遺物を検出したのみであり、それ以外の場所では解体建物などの影響により遺構を確認することが出来なかった。そのため、比較的遺存状況の良かった1区南端部を拡張した。調査面積は59㎡である。

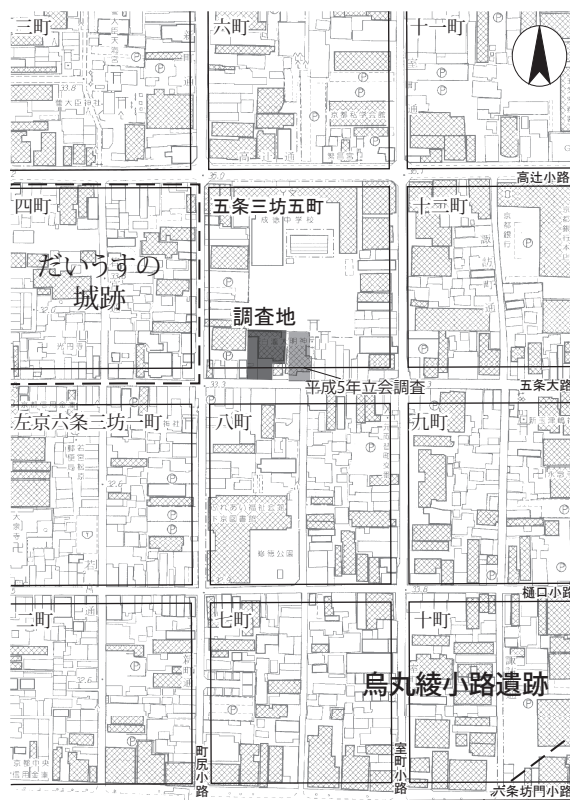


図29 調査位置図 (1 : 5,000)

2 層序と遺構・遺物 (図31・32)

盛土直下に近世遺物包含層 (図31-1～3層) が存在しており、GL-1.2mで地山の黄褐色シルトとなる。遺構検出は、地山直上で実施した。

調査の結果、土坑や柱穴を検出した。柱穴1は直径0.3mほどで、中央には平坦面を上に向けた拳大の礫が据えられている。西側の調査区外に向かって展開する可能性が高い。遺物等はなく時期は不明だが、掘方の形状から中世以降のものと考えられる。土坑1は、直径0.2mほどの小さな土坑である。この土坑からは正位置に据えられた完形の灰釉陶器の短頸壺が出土した (図32-4)。この灰釉陶器は東濃産と考えられ、10世紀に位置づけられる。また、埋土からは延喜通宝が出土しており、出土状況から地鎮遺構と考え

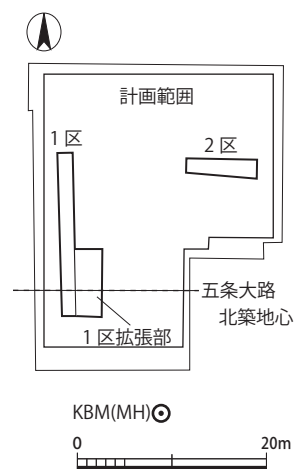


図30 調査区配置図 (1 : 800)

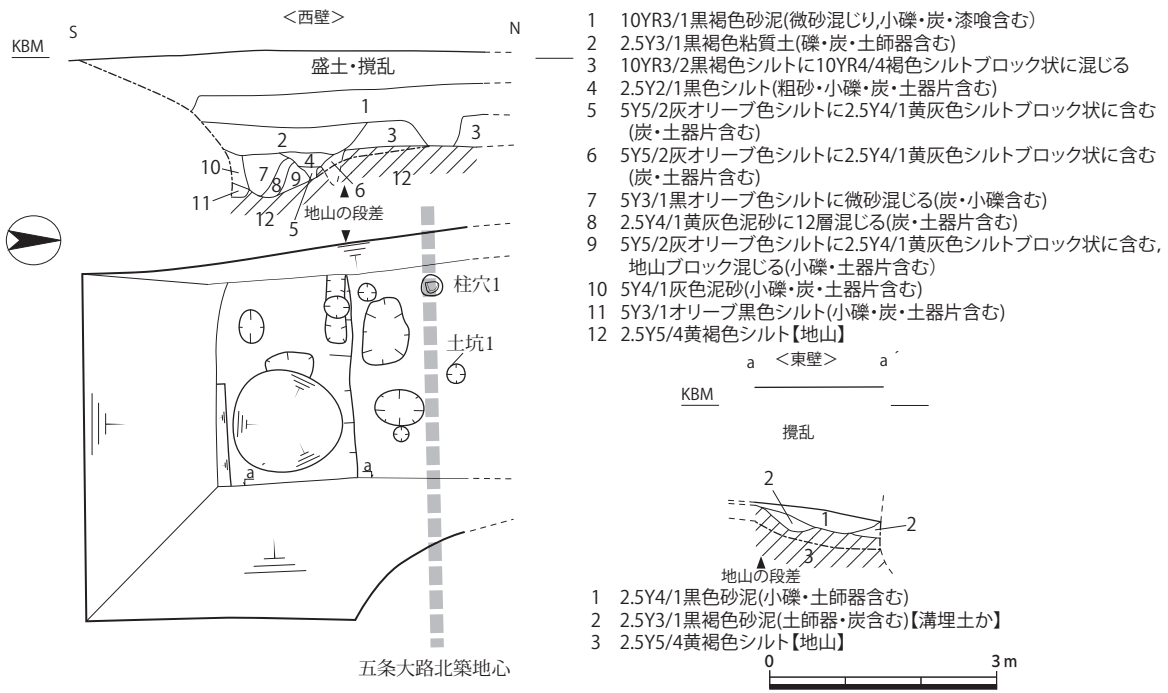


図31 1区南端および拡張部 平断面図 (1:100)

られる (図32-5)。五条大路北築地心との位置関係から、門などに伴う地鎮と推定される。これ以外にも、東西方向の地山の段差は注目される。この段差は五条大路北築地心から南に1.2mの距離にあり、それと平行して調査区外へと続く。幅は1.6m以上、深さ0.6mの規模を有する。西壁の7層から図32-2・3が、西壁の2層からは図32-1が出土した。これらの土師器は京都Ⅷ～Ⅸ期に位置づけられる。この段差は、位置関係から五条大路北側溝である可能性が推定出来る。しかし、北肩口のみしか確認できておらず、側溝と重複した別の大型遺構である可能性もあるため、現時点では断定はできない。

3 まとめ

今調査では、柱穴や地鎮遺構と考えられる土坑などを確認した。中でも、五条大路北側溝の可能性のある地山の段差は注目される。五条大路は、豊臣秀吉が方広寺大仏殿造営の際に、橋を六条坊門小路に付け替えたことで衰退したものと考えられる。しかし、北側溝については調査事例が少なく不明な点が多い。今後の調査に期待したい。

(熊井 亮介)

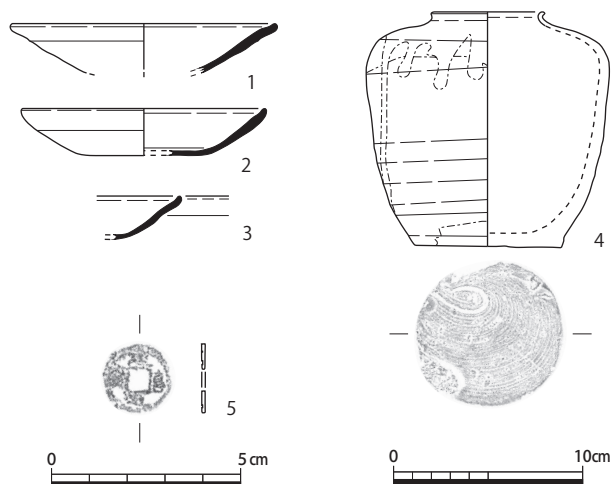


図32 遺物実測図 (5のみ1/2, それ以外は1/4)

Ⅱ - 5 平安京左京五条四坊四町跡・ 烏丸綾小路遺跡 No.65

1 調査の経緯 (図33・34)

調査地は、松原通と高辻通の交差点より南に位置する。敷地の東辺が高倉通に接しており、一部が高倉小路の道路敷にかかる。この区画に寄宿舍（サービス付き高齢者向け住宅）の建設が計画されたため、平成28年6月14日に試掘調査を実施した。その結果、中世及び平安時代の遺構面の残存を確認したが、その範囲が狭小と判断されたため本調査は実施せず、施工時に詳細分布調査を行うことにより補足とするよう指導した。本文は、この試掘調査と詳細分布調査をあわせて報告するものである。

当該区画は、平安京左京五条四坊四町の東半部に位置し、四門八行制では北五・六門、西三・四行に相当する。この町内には、平安時代後期に正三位権中納言であった藤原顕隆（1072-1129）

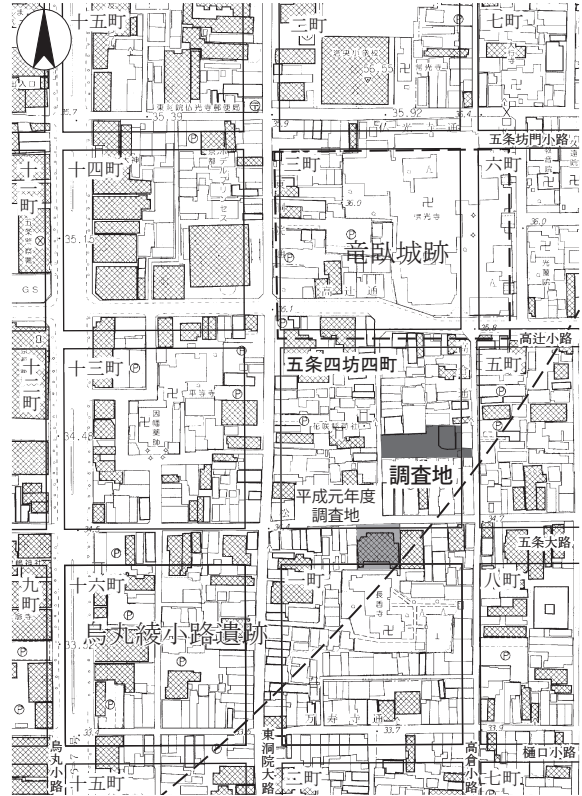


図33 調査位置図 (1 : 5,000)

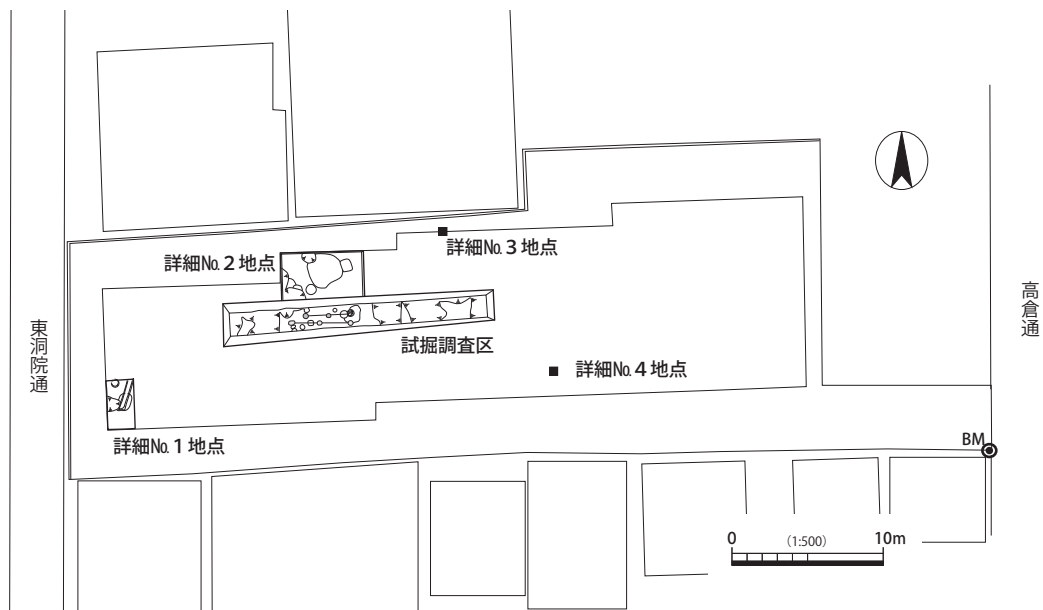


図34 調査区配置図 (1 : 500)

の「五条高倉邸」が、また平安時代末期には正二位中宮大夫であった藤原（三条）実長の「五条殿」（六条天皇の里内裏「五条内裏」）が所在したとされている。さらに中近世を通じて町屋が栄えた地域にあたることから、豊富な遺構の残存が予見される。しかし、この町内での発掘調査事例は乏しく、明確な遺構の発見に至っていない。

既往の調査のうち至近の例は、松原通（五条大路）を隔てた南の町域（左京六条四坊一町）にある。平成元年度に調査地より50m程度南西の区画において発掘調査が行われ、平安時代、桃山時代、江戸時代の遺構面が複数確認された¹⁾。以上のことから、今回の調査でも同じく複数時期にわたる遺構面の残存が予測された。

2 層序と遺構（図37）

試掘調査区 調査地の西半部において東西方向の調査区を設定した。掘削の結果、BM-0.80mで黒褐色泥砂（近世堆積層）、-0.45mで鈍い黄褐色粘質土～黄褐色シルト（平安時代後期整地層）、-2.05mで黄褐色粗砂を主体とする地山を確認した。整地層上面において遺構検出を行ったところ、調査区中央付近においてピット、礎石を有する柱穴、土坑等の遺構が集積する状況を確認した。ただし、調査区の東半部及び西端部には大規模な攪乱があり、遺構面の残存範囲は限られる。

検出した遺構には切り合いがあり、少なくとも3時期が存在する。最も早く成立したのは最大径1.3mを測る土坑1で、埋土から土師器杯（8C中）、甕、須恵器杯蓋（8C後）、製塩土器の破片等が出土した。このほか、平面隅丸方形を呈するピット9からもほぼ同時期の遺物が出土しており、ともに奈良時代に遡る遺構であると推測される。

これら奈良時代の遺構を切って成立するのが平面円形を呈するピット群（ピット2・3・7・10・11）である。概ね径0.35～0.40mを測り、平安時代後期～鎌倉時代の遺物を多量に含む。このうち、ピット2・10・11は東西方向に並ぶ柱列となる可能性が高い。

さらにその上位において鎌倉時代～室町時代前期の遺構（ピット1・6・8）が成立している。ピット1は底面に一辺30cmを測る礎石を備える柱穴であり、ピット6・8とともに東西方向に並ぶ柱列となる可能性が考えられる。



図35 試掘調査状況

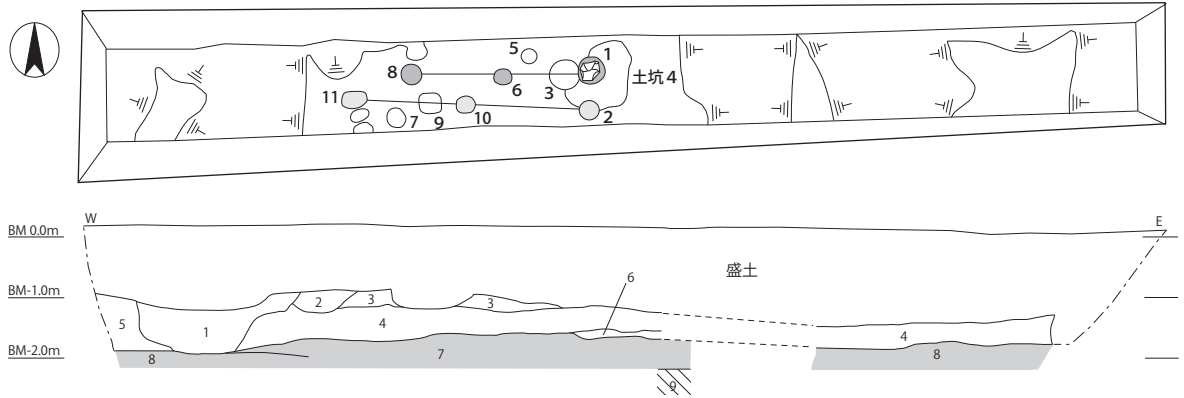


図36 詳細分布調査状況

詳細No.1 地点 近現代盛土以下，BM-1.58 mで黒褐色粘土質シルト（中世包含層），-1.80 mでオリブ褐色粘土質シルト（平安時代後期整地層）を確認した。この整地層の上面と下面において，柱穴と溝，土坑等の遺構を検出した。

整地層上面において成立する柱穴1-1は，直径0.5 m，最大深度0.41 mを測る。底面中央には拳

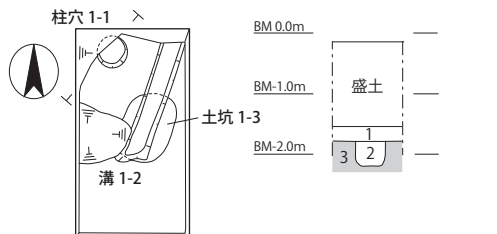
【試掘調査区】



【試掘調査区 北壁断面】

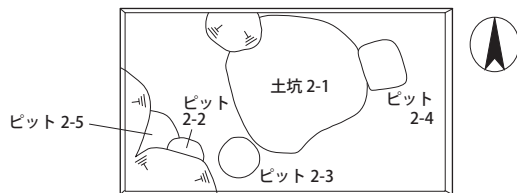
- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1) 7.5Y4/2 灰オリーブ色泥砂（江戸時代土坑） | 5) 10YR3/2 黒褐色泥砂（江戸時代土坑） |
| 2) 10YR3/3 暗褐色粘質土（江戸時代土坑） | 6) 10YR4/4 褐色粘質土（江戸時代包含層） |
| 3) 2.5Y3/2 黒褐色泥砂（江戸時代遺物包含層） | 7) 10YR4/3 鈍い黄褐色粘質土 遺物多量入る（整地層） |
| 4) 10YR2/2 黒褐色粘質土 径5cm未満の礫疎らに含む | 8) 2.5Y5/3 黄褐色シルト（平安時代後期整地層） |
| | 9) 2.5Y5/3 黄褐色粗砂（地山） |

【詳細No.1 地点】



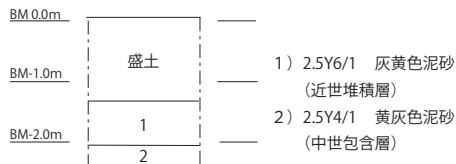
- | |
|--------------------------------------|
| 1) 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 土器片多量入る |
| 2) 5Y3/2 オリーブ黒色粘土質シルト |
| 3) 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト 土器片入る |
| 溝 1-2) 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト 炭化物・土器片多量入る |
| 土坑 1-3) 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト |

【詳細No.2 地点】



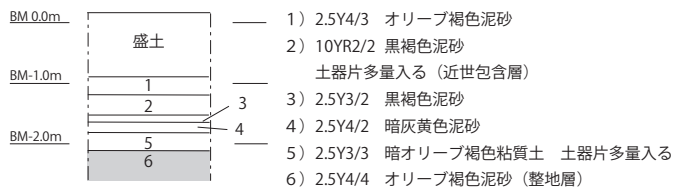
- | |
|---|
| 土坑 2-2) 5Y3/2 オリーブ黒色細砂混じり粘質土 炭化物多量入る |
| ピット 2-2) 5Y3/2 オリーブ黒色細砂混じり粘質土に |
| 5Y5/2 灰オリーブ色シルトブロック入る |
| 炭化物・土器片入る |
| ピット 2-3) 5Y4/2 灰オリーブ色細砂混じり粘質土 |
| ピット 2-4) 2.5Y3/1 オリーブ黒色細砂混じり粘質土 炭化物多量入る |
| ピット 2-5) 5Y4/2 灰オリーブ色細砂混じり粘質土 土器片入る |

【詳細No.3 地点】



- | |
|-------------------------|
| 1) 2.5Y6/1 灰黄色泥砂（近世堆積層） |
| 2) 2.5Y4/1 黄灰色泥砂（中世包含層） |

【詳細No.4 地点】



- | |
|---------------------------------|
| 1) 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂 |
| 2) 10YR2/2 黒褐色泥砂 土器片多量入る（近世包含層） |
| 3) 2.5Y3/2 黒褐色泥砂 |
| 4) 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 |
| 5) 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 土器片多量入る |
| 6) 2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂（整地層） |

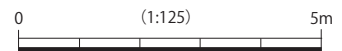


図37 調査区平面断面図（1：125）

大の石を備える。埋土からは土師器皿（12～13C）、須恵器甕、瓦器椀（12C）、平瓦の破片が出土した。溝1-2は北東－南西方向にのびる遺構で、検出長2.2m、最大幅0.4mを測る。底面は北から南へ緩やかに傾斜する。埋土には多量の炭化物と土器片を含む。埋土からは、土師器皿（11C）、（12C）、滑石製石製品（石鍋？）が出土した。土坑1-3は溝1-2に切られる位置にあり、長径1.05m、短径0.8mを測る楕円形を呈する。整地層の下面において成立することから、平安時代後期以前に遡る遺構であると推測される。埋土からは須恵器壺Aもしくは平瓶の破片（8C）、甕、土師器甕、平瓦、製塩土器の破片等が出土した。

このほか、中世包含層からは青磁碗（14C）、土師器皿（11～12C）が出土した。

詳細No.2 地点 整地層上面においてピット4基と土坑1基を検出した。遺構の重複から新旧2時期が想定される。土坑2-1は、不定形な平面形状を呈するものの最大幅2.3mを測る大型遺構である。埋土には多量の炭化物と土器片が含まれている。埋土からは白磁碗（12C）、土師器皿（12C）が出土した。ピット2-2、2-3は平面円形を呈する遺構で、ともに直径0.65mを測る。ピット2-3からは、須恵器皿（9C）、甕、土師器皿（12C）が出土した。柱穴2-4は一辺0.75mを測る隅丸方形の平面形状をもつ。埋土からは施釉陶器（天目茶碗）（14C）、土師器皿（11～14C）が出土した。

詳細No.3 地点 BM-1.35mまで盛土、-2.10mまで黄灰色泥砂（近世堆積層）、以下、掘削底である-2.20mまで黄灰色泥砂（中世包含層）を確認した。この地点は他と比べて大きく落ち込み、地山を確認できていない。中世包含層からは土師器皿（灯明皿・14C）が出土した。

詳細No.4 地点 BM-0.91mまで盛土、-1.21mまでオリーブ褐色泥砂（①層）、-1.53mまで黒褐色泥砂（②層・近世堆積層）、-1.66mまで黒褐色泥砂（③層）、-1.83mまで暗灰黄色泥砂（④層）、-2.13mまで暗オリーブ褐色粘質土（⑤層・平安時代末期～鎌倉時代初頭）、以下、掘削底である-2.27mまでオリーブ褐色泥砂（⑥層・平安時代後期整地層）を確認した。このうち、②層中からは土師器甕（14C）が、⑤層からは土師器皿（11C）が、⑥層からは土師器皿（時期不明）が出土した。

3 まとめ

以上の調査成果より、この区画には少なくとも3時期の遺構群が残存することを確認した。これらは概ね、奈良時代後期（8C）、平安時代後期～鎌倉時代初頭（11～12C）、鎌倉時代末～室町時代初頭（14C）の3期に分けることができる。遺構数は特に平安時代後期～鎌倉時代初頭が顕著であるが、このことは冒頭に掲げた文献史料内容とも合致する。従って今後もこの町域においては、より綿密な調査が必要であると認識される。（黒須 亜希子）

註

- 1) 平尾政幸「平安京左京六条四坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1994年。

Ⅱ-6 平安京左京五条四坊十町跡 No.67

1 はじめに (図38)

本件は、下京区麩屋町通綾小路下の俵屋町地内における店舗新築に伴う試掘調査である。調査地は、平安京左京五条四坊十町跡に該当する。土地利用の状況については明らかでないものの、調査地の中央東寄りに富小路が通ることが想定されている。

富小路に関しては、既往の調査で、路面及び側溝が複数箇所で見出されている。左京三条四坊跡で実施された発掘調査では、推定ラインとほぼ重なる位置で重複する路面と東西側溝群が見出された。平安時代中期の側溝に上部を削平された状態で、前期の側溝も確認されていることから、前期にも機能しており、中期に同位置で造り直され、その後、ほぼ同位置で改修が加えられ後期まで機能を維持したとみられる¹⁾。

本調査では、富小路の路面および西側溝の検出を主目的として、平成28年7月12日に試掘調査を実施した。調査区は東西方向に1箇所設定し、調査面積は約33㎡である。

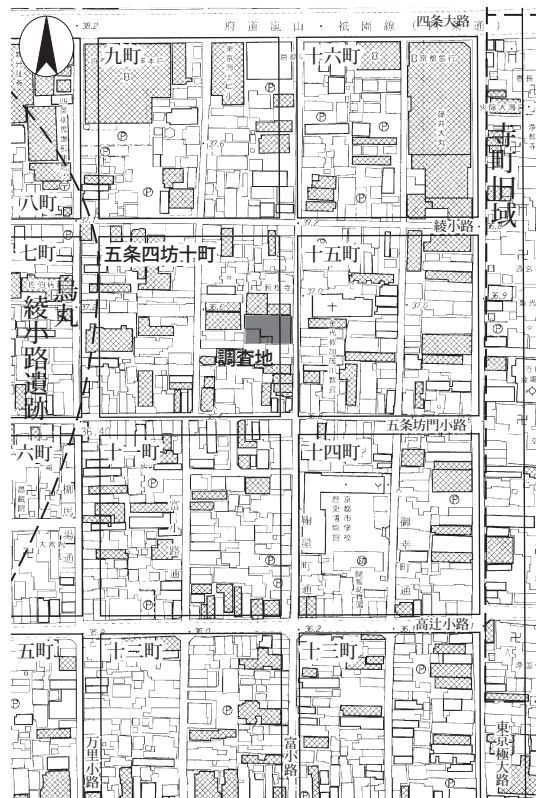


図38 調査位置図 (1 : 5,000)

2 層序と遺構 (図40)

調査区の東側と西側では遺構面の高さが異なり、遺構面は西側がやや深くなる。基本層序は、盛土以下、GL-1.7mでオリーブ褐色微砂混じり泥砂～黒褐色泥砂(整地層1)、-1.9mで黄褐色泥砂(整地層2)、GL-2.2mで黄褐色砂礫の地山である。遺物から、整地層1は平安時代後期～中世、整地層2は平安時代中～後期と考えられる。遺構検出は整地層1上面で行い、土師器皿を多量に含む土坑や南北溝を検出した。

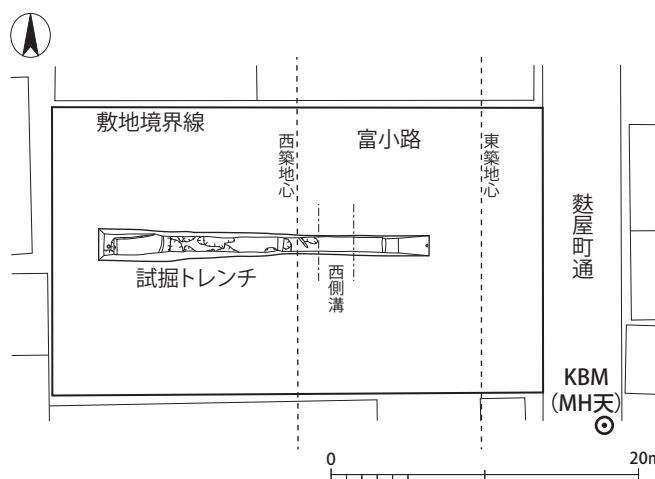


図39 調査区配置図 (1 : 500)

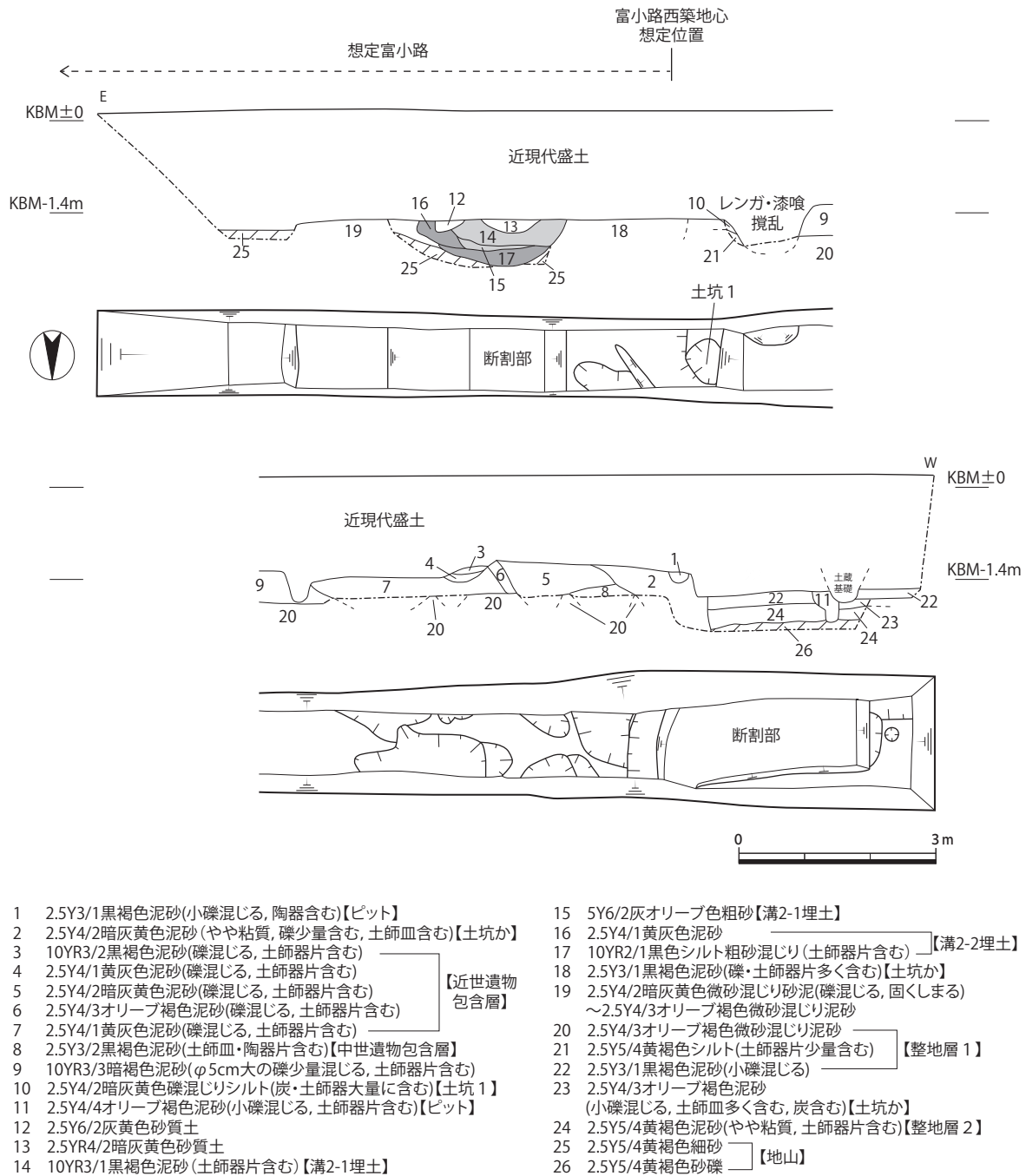


図40 調査区平断面図(1:100)

土坑1 径0.65m, 深さ0.15mの隅丸方形の土坑である。埋土から13世紀前半頃の土師器皿が多量に出土した。

溝2 富小路西側溝の推定ラインにほぼ重なる南北溝である。1面目で平面的に確認できなかったため, 部分的に断割り調査を行い下層の状況を確認した。埋土と遺物の差から, 重複関係が想定できたため, 上層を溝2-1, 下層を溝2-2とする。溝2-1は幅1.75m, 深さ0.45mである。遺物から11世紀前半頃に位置付けられる。溝2-2は残存幅1.95m, 深さ0.7mである。遺物から11世紀中葉頃に位置付けられる。19層は礫混じりで強く締まっており, 路面に関連する可能性がある。

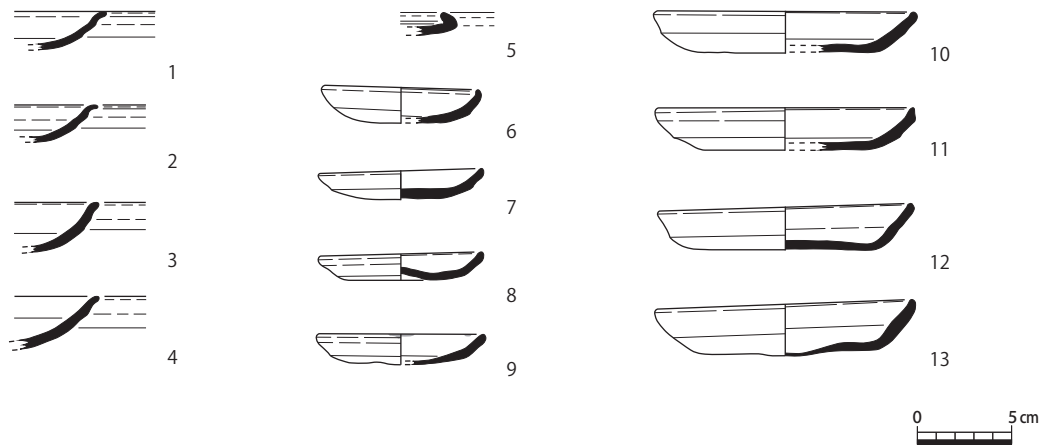


図41 遺物実測図（1：4）

3 遺物（図41）

遺物がまとまって出土した溝2および土坑1について報告する。

1～4は溝2から出土した土師器皿Nである。1・2は溝2-2から出土した。口縁部は外反し、外面のナデによる二段の凹みが明瞭である。京都IV期古段階と考えられる。3～4は溝2-1から出土した。口縁部は外反し、器壁が厚手化する。京都IV期中段階と考えられる。

5～13は土坑1から出土した土師器皿である。多量に出土した土師器皿のほとんどは皿Nである。5は皿Acで、器高は1.2cmである。6～13は皿Nで、6～9が口径8.2～8.75cm、器高1.5～2.0cmの小皿、10～13が口径13.4～13.6cm、器高2.2～3.0cmの大皿である。口縁端部の断面が三角形を呈する。京都VI期古～中段階と考えられる。

4 まとめ

今回の調査では平安時代中期の南北溝を検出した。検出位置から富小路西側溝であると考えられる。部分的な断割りのため詳細は不明だが、既往の調査で確認されているように、富小路の側溝は数回の改修が行われていると考えられる。

なお、今回検出した遺構は設計変更の結果、地中保存されている。（熊谷 舞子）

註

- 1) 小森俊寛他「平安京左京三条四坊」『平成56年度京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所，1994年。

左京二条四坊十一町跡などでも、推定位置で路面と側溝を検出している（丸川義広他「左京二条四坊」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，1983年）。

Ⅲ - 1 平安京右京六条三坊十五町跡 No.13

1 はじめに

本件は、右京区西院久保田町地内における共同住宅建設工事に伴う試掘調査である。調査地は、平安京右京六条三坊十五町跡に該当する。『拾芥抄』「右京図」における同町は、周辺も含めて「小泉荘」と記載されており、平安時代中期以降の右京域衰退後は耕作地化が進んだものと想定される。同町内では、複数の試掘調査を実施しており(図42)、町内西半では古墳時代の南北溝を確認するもの(調査2)、東半では中世に湿地状堆積が広がっていたとされる(調査1・3)¹⁾。

したがって今回の調査では、調査地の土地利用状況を把握することを目的とした。また調査地西半は、東側の道路面よりも約1m高くなっており(図43)、調査ではこの高まりの性格を把握することも目的とした。

調査は平成28年3月2日に実施、面積は90㎡である。調査の結果、現況の高まりは昭和19年に付け替えられるまでの天井川化した天神川の旧流路及び堤防が残ることが明らかとなった(以下、「旧天神川」と記す)。

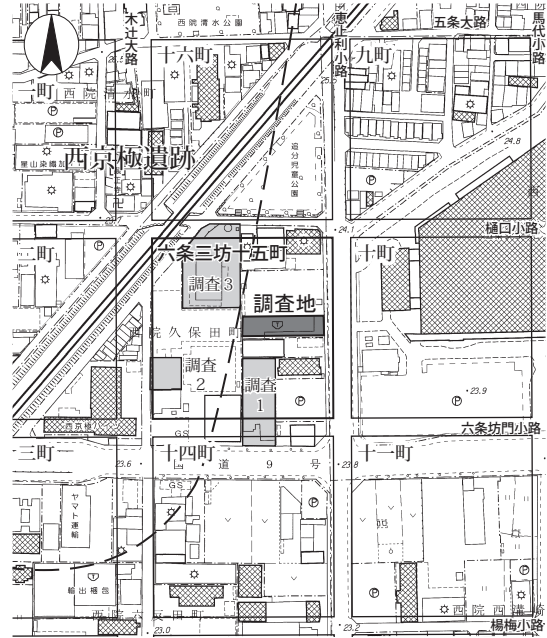


図42 調査位置図 (1 : 5,000)



図43 調査前風景 (南東から)

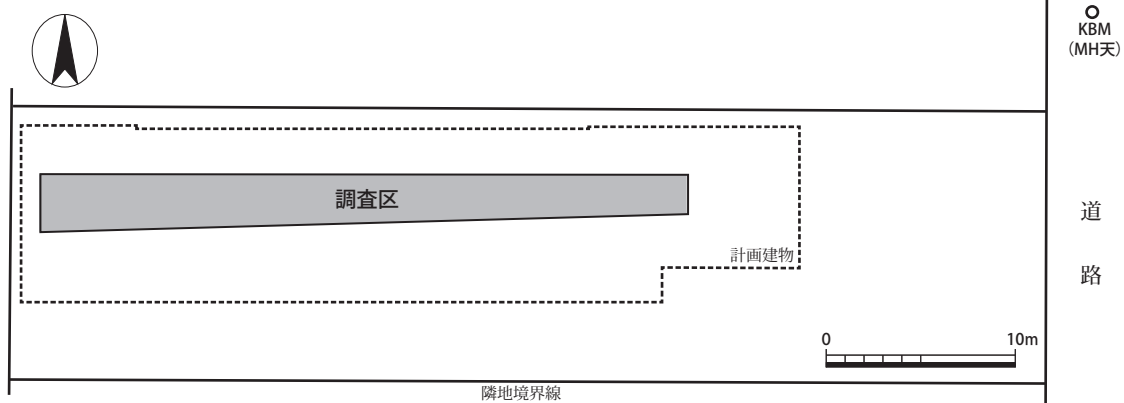


図44 調査区配置図 (1 : 400)

2 層序と遺構 (図45)

調査地の層序は、現代盛土以下、GL-1.4mで旧耕土、床土と続き、-1.85mでオリーブ黒色泥土の室町時代後期包含層(耕作土か)、-2.3m以下は灰色極細砂の無遺物層となる。一方、旧河川の部分では、現代盛土直下のGL-0.75mで旧天神川の流路(溝1A)及び堤防跡となる。旧天神川は新旧2時期認められ、下層の流路(溝1B)は-1.5mで検出できる。旧河川の下層には、極細砂から砂礫を主体とする洪水堆積が認められる。

溝1A 旧天神川の新段階の流路である。南北方向に流れの向きを持っており、幅4.2m、深さ1.1mを測る。溝の両岸には高さ約1mの堤防を伴い、西岸で約8m、東岸で10m以上の幅を持つ。最大径15cmまでの砂礫で一気に埋没している。埋土からは大正末年頃から昭和初期に製造された製品が出土しており、昭和10年の京都大水害で埋没したものと想定され、旧天神川の最終段階の流路と判断できる。

溝1B 旧天神川の旧段階の流路である。幅4.8m、深さ1.5mを測る。溝の両岸には高さ0.5~1mの堤防を伴い、西岸で幅約5m、東岸で8.5m以上の幅を持つ。埋土は砂礫及び粗砂の互層となっている。遺物の出土が認められなかったため、埋没時期は不明であるが、層序から室町時代後半以降に属するものである。

洪水堆積 溝1B下層に堆積する洪水堆積層である。極細砂から砂礫を主体とするもので、遺物は認められなかった。溝1Bが洪水堆積を覆うことから、旧天神川の初期段階の堆積と考えられる。

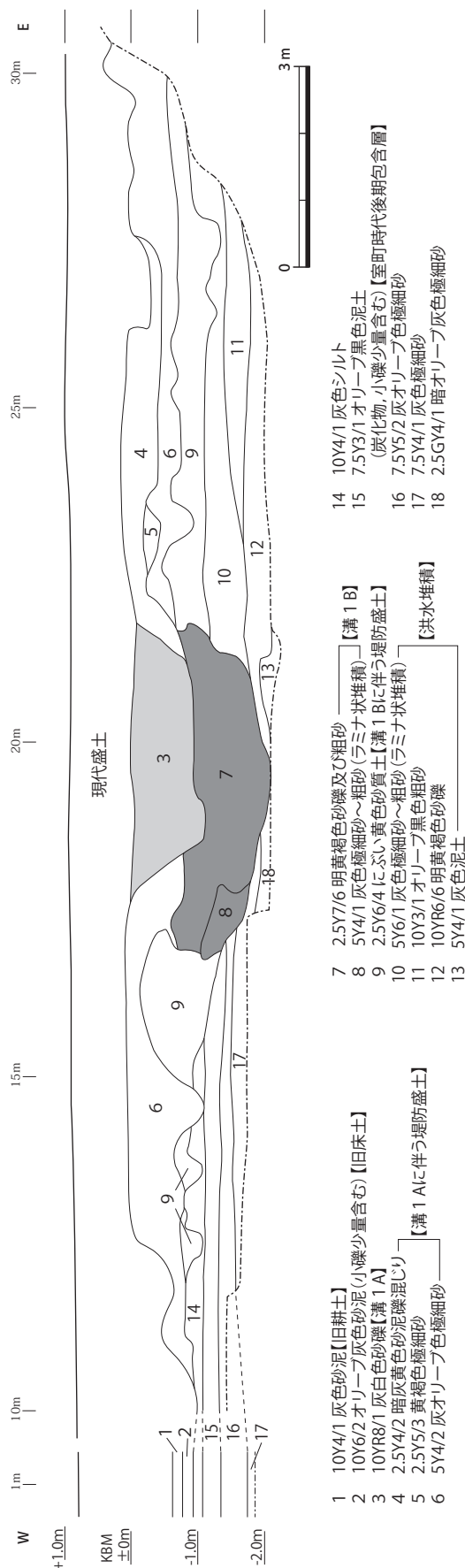


図45 調査区北壁断面図 (1:100)

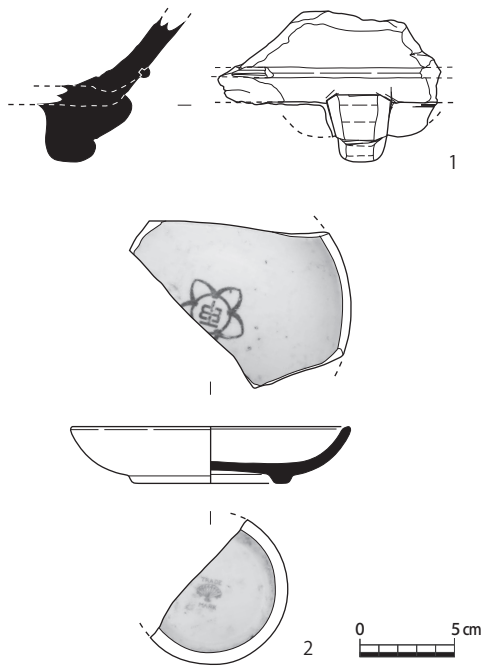


図46 出土土器実測図（1：4）

3 遺物（図46）

出土した遺物は、室町時代包含層から土師器，瓦質土器，焼締陶器，輸入陶磁器が，溝1Aから国産の陶磁器類が出土したが少数である。

1は，瓦質土器の火鉢脚部である。室町時代後半に属するものである。2は，銅版印写の染付皿である。口径14.4cm，底径8.1cm，器高3.0cmを測る。内面見込みには発注元の社印と思われる文様があり，高台内側には美濃窯業製陶株式会社を示す「扇」と「TRADE MARK」印が施される。印が施された製品は，大正末年頃から太平洋戦争が激化した昭和18年まで製造されている²⁾。

4 まとめ

今回の調査では，天井川化した旧天神川を確認した。上層の埋土からは，大正末年頃から昭和18年まで製造されていた製品が出土しており，昭和10年の京都大水害で決壊し，大洪水を引き起こした旧天神川の最終段階の流れであることが明らかとなった。

平安京の成立後，右京域の排水については，紙屋川を京内に取り込んだ西堀川が基幹排水路として位置付けられた。しかし，左右対称を強く意識した平安京では，西堀川は左京の堀川と対となるように設定されたため，地形条件を無視したものになっており³⁾，右京域が衰退したとされる10世



図47 旧天神川（溝1）（南東から）

紀中頃には埋没する。西堀川は中御門大路以南は傾斜が緩やかになるため、土砂の堆積を加速させ、排水能力の低下を招いていたことが、西堀川小路の発掘調査で明らかにされている⁴⁾。しかし、西堀川埋没後も道祖川、野寺川といった条坊道路上に掘削された河川が順に整備され、基幹排水路としての役割を担い続け、最終的に旧天神川に集約されていく⁵⁾。旧天神川は大半が条坊に規制されるものの、蛇行や斜行する部分も多い。特に調査地周辺にその傾向が顕著に見て取れる(図⑦)。これは、旧天神川が地形の最も低い場所を流れていたことに起因するものと考えられ⁶⁾、調査地周辺に湿地が広がっていたことに符号する。したがって、中世に入り当地に旧天神川の流路が固定され、室町時代後半に至り天井川化(溝1B)していく可能性が高い。平安京右京三条三坊内(現：島津製作所)での発掘調査で、旧天神川埋土から15世紀に属する遺物が出土していることも、旧天神川の成立時期を示している⁷⁾。

昭和10年6月29日に起こった大水害は、梅雨前線が急激に発達、市内に局地的な雨をもたらす、各所で堤防の決壊が相次ぎ、広範囲に洪水の被害を発生させた。前年の室戸台風による暴風によって、山林の保水力が大きく低下していたことも被害を拡大させたとされる⁸⁾。当時の旧天神川は、JR山陰線円町駅東側付近から南西方向に流れの向きを変え天井川化が始まり、調査地付近でも高さ約2.5mを越える堤防が築かれていたことがわかる(図48)。天井川化は、河床の上昇により他所からの流れ込みを阻害、排水能力の低下を招く。したがって普段の水流は少なく、農業用水に用いることも困難になる。一方で、その構造から出水が発生すれば、大きな被害を生み出しやすい。

大水害後の改修工事によって昭和19年に付け替えられた現在の天神川は、川底も深く水流も乏しいため、一見穏やかな河川に見受けられる。しかし、今回の調査で確認した天井川化した旧天神川は大量の砂礫で埋没し、大水害をもたらした痕跡を如実に示している。今回の調査成果は、治水工事が進んだ現在では忘れがちな貴重な教訓を我々に示してくれている。

(西森 正晃)

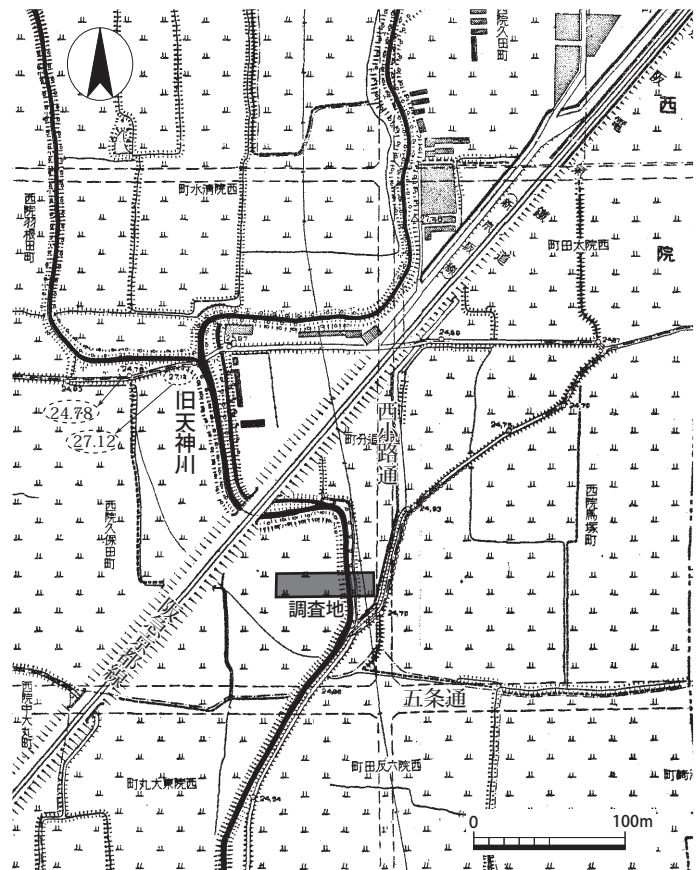


図48 調査地付近の旧天神川(1:5,000)
大正11年測量 都市計画地図を一部改変

註

- 1) 調査1 「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成5年度』京都市文化観光局，1993年。
調査2 「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度』京都市文化市民局，2001年。
調査3 「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局，2007年。
- 2) 『美濃窯業製陶株式会社社史』美濃窯業製陶株式会社，2006年。
- 3) 南孝雄「衰退後の右京」『平安京の地域形成』京都大学学術出版界，2016年。
- 4) 高橋潔ほか『平安京右京二条二坊十一町・西堀川小路跡，御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-25，(財)京都市埋蔵文化財研究所，2014年。
布川豊治ほか『平安京右京四条二坊十一町・西堀川小路跡，御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-1，(公財)京都市埋蔵文化財研究所，2015年。
- 5) 南孝雄ほか『平安京右京三条三坊三町跡・西ノ京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-1，(公財)京都市埋蔵文化財研究所，2013年。
- 6) 3)に同じ。
- 7) 平尾政幸『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊，(財)京都市埋蔵文化財研究所，1990年。
- 8) 上村善博『昭和10年京都大水害の復元的研究』平成20年度京都市防災危機管理対策調査研究助成報告書，2009年。
横田冬彦「昭和10年鴨川大洪水と「千年の治水」」『京の鴨川と橋—その歴史と生活—』思文閣出版，2001年。

Ⅲ-2 史跡西寺跡・平安京右京九条一坊十一町跡・ 唐橋遺跡 No.94

1 調査の経緯

西寺は、平安京の造営とともに、東寺と朱雀大路を挟み左右対称となるように造営された官寺で、南は九条大路に面し、北は八条大路、東は皇嘉門大路、西は西大宮大路に限られる右京九条一坊九町から十六町の東西二町、南北四町を占める広大な寺域を有していた。主要な堂塔は、南半の四町域に所在し、九条大路に面して南大門を設け、中軸線上に南から中門、金堂、講堂、僧坊、食堂が並び、南東隅には塔が配されていた(図54)¹⁾。

造営については、遷都間もない延暦15年(796)に藤原伊勢人が東西両寺の造寺長官に任ぜられたのが初見²⁾で、翌年には笠江人が造西寺次官に任ぜられ³⁾、両造寺司が廃された弘仁14年(823)頃には、寺観がほぼ整っていたと考えられる⁴⁾。

西寺は、東寺が弘仁14年に空海に下賜された後も、怨霊会や国忌が執り行われ、僧綱所が置かれるなど、官寺として引き続き国家が管理を行い隆盛していた。しかし正暦元年(990)、塔を除いて焼亡し、その後は律令国家の衰退と共に衰亡したようで、天福元年(1233)に塔が焼亡した際には、「本ヨリ荒廃ノ寺」と記されている⁵⁾。塔焼亡後の西寺についての資料はなく、廃絶したと考えられる。

その後は田畑の中に講堂跡(コンド山)のみが高まりとして残され(図51)、大正10年(1921)には京都府下第一号となる史跡に指定された。また、昭和34年以降、西寺跡の発掘調査が進み、南大門、中門、金堂、僧坊、食堂が

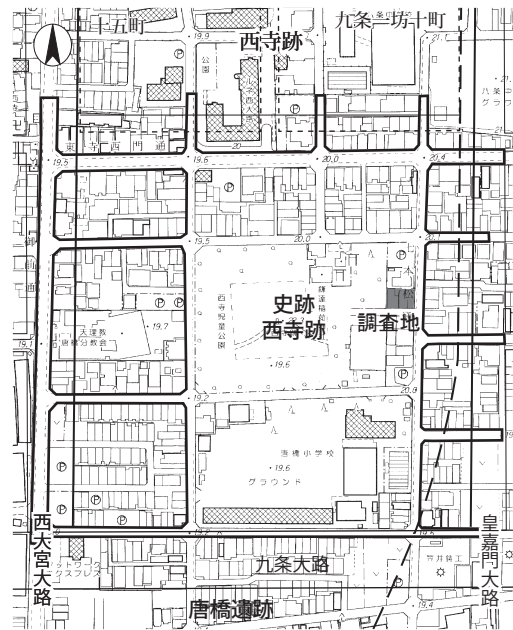


図49 調査位置図(1:5,000)

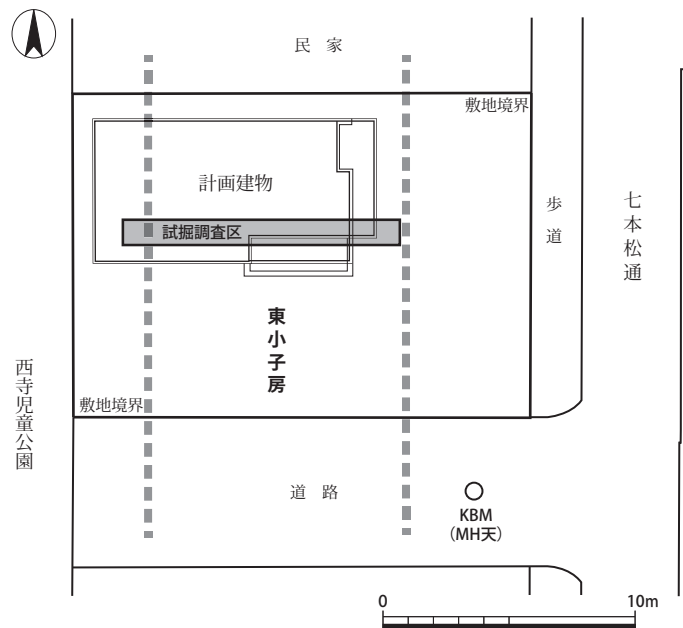


図50 調査区配置図(1:300)

確認され、東寺とほぼ左右対称の伽藍配置であったことが裏付けられたため、昭和41年には追加指定が行われた(図54)。

今回の調査地は南区唐橋西寺町59で、伽藍復元図では僧の従者を住ませる東小子房跡に該当する。これまでに東小子房跡では、基壇盛土及び礎石根固め等が確認され(図54・表3 5・13, 調査1), 柱間が桁行10尺(2.9m), 梁行10.5尺(3.1m), 基壇の出を7尺(約2m)とする南北に長大な建物として復元されている⁶⁾。

ここに個人住宅建設が計画され、遺構面の保護と建物計画の両立を図るため、事前に文化庁の許可を経て、試掘調査を実施することとなった。調査は平成28年5月26日に実施、面積は11㎡である。調査の結果、東小子房基壇西縁及び盛土、西寺期の整地層等を確認した。そのため、住宅建設にあたっては遺構面の保護が図られており、遺構は地中保存されている。



図51 東小子房基壇西縁と講堂跡(コンド山)(東から)

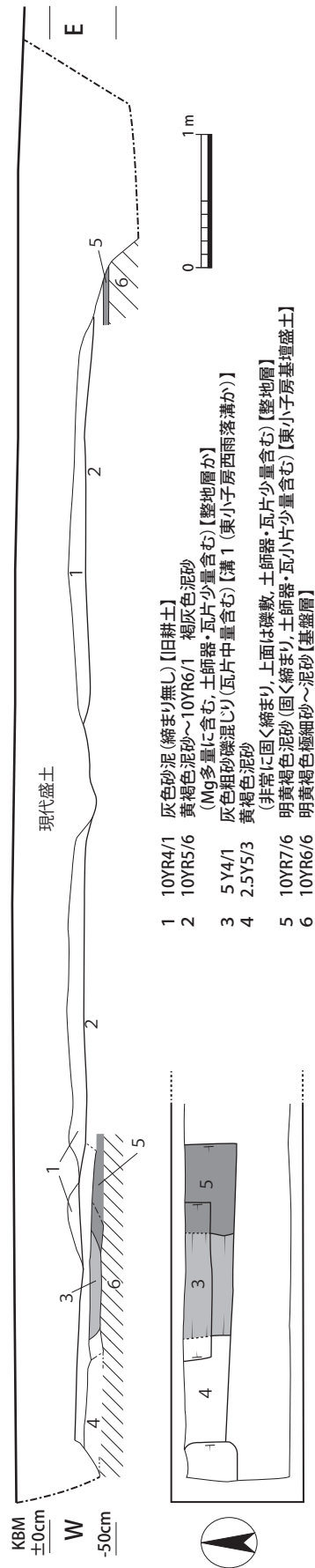


図52 調査区平・断面図(1:50)

2 層序と遺構

調査地内に、南北方向の東小子房基壇が想定されることから、調査区は東西方向に設定した。層序は盛土、旧耕土以下、GL-0.5mで調査区全域を覆う固く締まった黄褐色泥砂～褐灰色泥砂の時期不明整地層、-0.6mで明黄褐色泥砂の基壇盛土、-0.68mで明黄褐色極細砂～泥砂の基盤層となる。時期不明整地層は西寺期の可能性があることから、掘削は整地層上面で留め、基壇西縁が想定される西端のみ断割を行い、下層の確認を行った。断割部分では、基壇盛土及び盛土を切り込む南北溝、溝西側に整地層を確認した。

基壇盛土 基盤層直上に厚さ0.1mの盛土を確認した。埋土には土師器と瓦の細片を含んでおり、固く締まる。溝1に切られており、調査区東端でも確認していることから、東小子房基壇盛土と判断した。

溝1 南北溝で幅0.75m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色粗砂礫混じりで平安時代の瓦、緑釉陶器が出土した。基壇西縁に比定できることから、凝灰岩抜取溝又は雨落ち溝と考えられるが、凝灰岩屑が全く含まれていないことから、雨落溝の可能性が高い。

整地層 溝1西側で確認した厚さ0.1mの整地層である。上面は礫が敲き締められており、非常に固く締まっていた。東小子房と東僧部屋の整地層である。

3 遺物

今回の調査では、各遺構から平安時代の瓦、土師器、緑釉陶器等が出土したが少量かつ細片である。1は溝1から出土した緑釉陶器皿底部である。高台は削り出しの平高台である。京都産か。9世紀後半に属するものか。

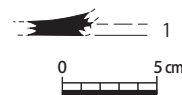


図53 出土土器
実測図(1:4)

4 まとめ

今回の調査では、想定通り東小子房基壇及び基壇西縁に伴う遺構を確認した。基壇西縁については、溝1に凝灰岩屑が全く含まれていなかったため、抜取溝ではなく雨落溝として捉えた。これまでの東小子房跡の調査成果でも、基壇盛土は伴うものの、明確な外装の痕跡はなく、基壇に外装が施されていなかった可能性も考えられる。しかし、建物や基壇形状等の詳細を明確にするためには情報が不足しており、さらなる調査成果の蓄積が必要である。(西森 正晃)

註

- 1) 杉山信三『史跡西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所、1979年。
- 2) 『帝王編年紀』卷十二「延暦十五年丙子以大納言藤原伊勢人為造寺長官建立東西兩寺以為東西兩京鎮護」。
- 3) 『日本紀略』延暦十六年四月四日条「從五位上守民部大輔兼行造西寺次官信濃守笠朝臣江人於右京職」。
- 4) 『類從三大格』卷二 弘仁十四年十月十日付「太政官符」。
- 5) 『明月記』天福元年十二月二十五日条。
- 6) 1) に同じ。

No.	推定地	住所	調査期間	調査組織	成果	文献資料
1	境内 (十三町)	唐橋西寺町7	1987/1/12	埋文研	平安時代前期整地層	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局, 1988年
2	境内 (十四町)	唐橋西寺町	1989/8/9	埋文研	平安時代整地層	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成元年度』京都市文化観光局, 1990年
3	花園院 (十六町)	唐橋門脇町28	1992/10/5	埋文セ	時期不明の土坑1基, ピット2基	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成4年度』京都市文化観光局, 1993年
4	境内 (十二町)	唐橋花園町4- 13	1994/10/24	埋文セ	顕著な遺構無し。	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成6年度』京都市文化観光局, 1995年
5	東小子 房(十二 町)	唐橋西寺町63	1995/11/17	埋文セ	東小子房基壇盛土, 東西縁, 礎石根固め1基。基壇東西幅8.8m。	「史跡西寺跡」『京都市内遺跡試掘調査 概報 平成7年度』京都市文化市民局, 1996年
6	西限築 地(十四 町)	唐橋西寺町36	1997/6/12 ・13	埋文セ	西大宮大路東側溝, 西限築地犬行	「史跡西寺跡」『京都市内遺跡試掘調査 概報 平成9年度』京都市文化市民局, 1998年
7	西僧坊 (十四町)	唐橋西寺町28- 2	1997/7/16	埋文セ	西僧坊基壇盛土, 小ピット2基	「史跡西寺跡」『京都市内遺跡試掘調査 概報 平成9年度』京都市文化市民局, 1998年
8	食堂 (十一町)	唐橋西寺町44	1999/6/14	保護課・ 埋文セ	食堂礎石抜き取り穴1基	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成11年度』京都市文化市民局, 2000年
9	北僧坊 (十一町)	唐橋西寺町 57(西寺児童公 園)	2001/2/9	保護課・ 埋文セ	西寺整地層	「一覧表」『京都市内遺跡調査概報 平成 13年度』京都市文化市民局, 2002年
10	境内 (十二町)	唐橋西寺町65	2001/5/11	保護課・ 埋文セ	西寺期整地層, 平安時代以前の流路	「一覧表」『京都市内遺跡調査概報 平成 13年度』京都市文化市民局, 2002年
11	食堂院 (十四町)	唐橋西寺町56- 3	2001/7/30	保護課・ 埋文セ	西寺期整地層	「一覧表」『京都市内遺跡調査概報 平成 13年度』京都市文化市民局, 2002年
12	食堂院 (十一町)	唐橋西寺町 52,53	2004/9/8	保護課・ 埋文セ	食堂院南門の礎石抜き取り穴2基, 南門北縁, 東回廊の抜き取り穴2基	「史跡西寺跡・唐橋遺跡」『京都市内遺 跡試掘調査概報 平成16年度』京都市文化 市民局, 2005年
13	東小子 房(十二 町)	唐橋西寺町62	2008/1/23	保護課	東小子房基壇及び土坑, 溝	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』京都市文化市民局, 2009年
14	食堂院 (十四町)	唐橋西寺町35- 6	2008/3/26	保護課	食堂院西回廊の礎石抜き取り穴3基	「史跡西寺跡・唐橋遺跡」『京都市内遺 跡試掘調査報告 平成20年度』京都市文化 市民局, 2009年
15	大衆院 (九町)	唐橋門脇町23	2012/3/2	保護課	掘立柱建物1棟, 柱穴多数, 弥生時代の溝	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局, 2013年
16	境内 (十一町)	唐橋門脇町58- 1	2014/1/21	保護課	西寺期整地層	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成26年度』京都市文化市民局, 2015年
17	境内 (十二町)	唐橋西寺町67	2015/3/30	保護課	西寺期整地層, ピット1基	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成27年度』京都市文化市民局, 2016年
18	東小子 房(十一 町)	唐橋西寺町59	2016/5/26	保護課	東小子房基壇盛土, 西縁雨落ち溝	本報告

埋文研:(公財)京都市埋蔵文化財研究所 埋文セ:京都市埋蔵文化財センター(2006年に保護課と合併) 保護課:京都市文化市民局文化財保護課

表3 試掘調査一覧表

参考文献

- 1 李銀眞『平安京右京九条一坊九町跡・唐橋遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-4,
(公財)京都市埋蔵文化財研究所, 2016年。
- 2 杉山信三「東西と西寺」『平安京提要』角川書店, 1994年。
- 3 追塩千尋「西寺の沿革とその特質」『北海学園大学人文論集』第23・24号, 北海学園大学人文学会,
2003年。

IV-1 草木町遺跡 平成27年度No.75

1 はじめに (図55・56)

本件は、右京区太秦京ノ道町地内における宅地造成に伴う試掘調査である。調査地は、平安時代の集落跡である草木町遺跡に該当する。

近隣では、常磐野小学校内で平成13年度に発掘調査が実施され、鎌倉～室町時代を中心に建物や溝などを確認している(調査1)¹⁾。また、調査地南面道路上の立会調査で平安時代の遺物包含層を確認している。

本調査では、草木町遺跡に関わる遺構の検出を目的として、平成27年8月10日に試掘調査を実施した。調査は、東西方向の調査区を3箇所設定して実施し、調査面積は約48㎡である。なお、本来であれば昨年度に報告すべきであったが、協議が翌年まで繰り越したため、今年度に報告する。

2 層序と遺構 (図57)

調査当時、敷地内は樹木が生い茂った状態であったため、計画道路南側の敷地内通路部分に調査区を設定した。層序は、1・2区において、盛土以下GL-0.1mで褐色砂泥の時期不明の遺物包含層、-0.4mで明黄褐色砂泥の中世遺物包含層、-0.6mで黒褐色砂泥の土壌化層、-0.75mで明黄褐色砂泥～シルトの地山となる。一方、3区においては盛土以下GL-0.3mで地山を確認した。

1区西端で土坑1基と、3区で土坑・ピット各3基を検出した。

土坑1 1区西端北壁で検出した。中世包含層上で成立する。東西幅1.9m以上で、深さ0.5mである。埋土に中世後半の丸・平瓦を多く含む。



図55 調査位置図 (1:5,000)

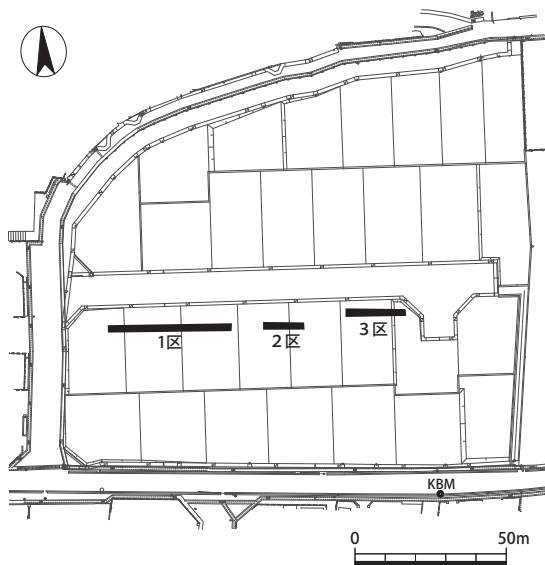


図56 調査区配置図 (1:2,500)

1・2区

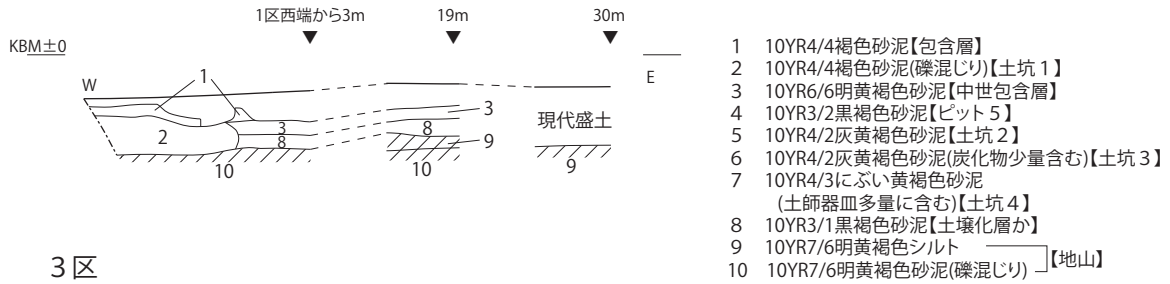
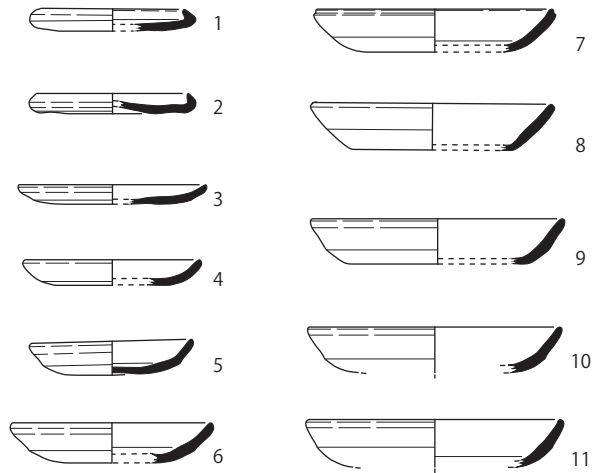


図57 1・2区北壁断面図・3区平面断面図（1：100）

土坑2・3 3区中央および西端で検出した。地山上面で成立する。土坑2は北壁で確認し、東西幅3.2m、深さ0.2mである。土坑3は東西幅1.7m以上、深さ0.2m以上の不定形の土坑である。遺物は確認していないものの、埋土が共通していることから同時期の遺構と考えられる。

土坑4 3区東端で検出した。地山上面で成立する。東西幅2.1m以上で、深さ1.1mで調査区外に続く不定形の土坑である。上部は一部削平されているものの、底部で12世紀後半～13世紀初頭の土師器皿が出土した。

ピット 直径0.2m前後の円形のピットを3基確認した。いずれも遺物を確認しておらず、時期は明らかでない。ピット5は深さ0.2mで、土坑2を切って成立する。



3 遺物 (図58)

遺物がまとめて出土したのは、土坑1および土坑4である。土坑1からは中世後期の丸・平瓦が、土坑4からは土師器皿がまと

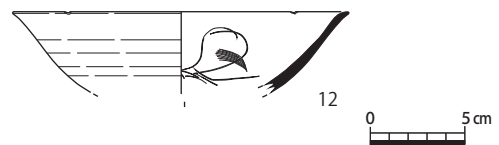


図58 土坑4出土遺物実測図（1：4）

まって出土した。なお、土坑4直上の現代盛土内から、平安時代の瓦や須恵器高杯が出土した。ここでは土坑4出土遺物を報告する。

1～11は土師器皿である。1・2は、土師器皿Acで、口径7.5～8.0cm、器高1.1～1.2cmである。3～6は土師器皿Nの小型品で口径8.5～10.6cm、器高1.1～2.1cmである。7～11は大型品で口径12.4～13.4cm、器高2.3～2.4cmである。口縁部外面のナデによる凹みが一段化したものが中心で、京都V期新～VI期古段階と考えられる。

12は白磁椀である。口径は17.8cmで、口縁端部がやや外方に広がる。体部外面にはケズリを施し、内面に櫛描による花文を施す。12世紀後半～13世紀初頭のものと考えられる。

4 まとめ

今回の調査では、部分的ではあるものの中世の遺構を確認した。3区の土坑4から平安時代末期～鎌倉時代初頭の土師器皿や輸入陶磁器などが出土し、1区の土坑1からは中世後期の瓦がまって出土した。建物跡などの明確な遺構は検出していないものの、当該地において土地利用が顕著になるのは鎌倉時代以降である、という調査1の成果を補強することとなった。

草木町遺跡では、これまで平安時代の明確な遺構は確認されていないものの、広域立会調査で平安時代の遺物包含層が検出されており、立地条件や遺構の時期から山荘跡が存在した可能性も示唆されている²⁾。今回の調査でも、遺構には伴わないものの平安時代の瓦や須恵器などを確認しており、今後近隣において平安時代の遺構が確認される可能性も残るため、注視が必要である。

なお、今年度宅地造成工事に伴う詳細分布調査を実施した。この調査の結果、地点によって地山深度が異なること、および樹木による根の影響を受けていることなど、試掘調査の成果を追認した。今回の工事では、一部遺構面は削平を受けるものの盛土施工部分も多く、一定程度の遺構が遺存しているものと考えられる。

(熊谷 舞子)

註

- 1) 津々池惣一「草木町遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-13』、(財)京都市埋蔵文化財研究所、2003年。
- 2) (財)京都市埋蔵文化財研究所『京都嵯峨野の遺跡—広域立会調査による遺跡調査報告—』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊、1997年。

IV-2 史跡及び名勝 嵐山・嵯峨遺跡 No.16

1 はじめに (図59)

調査地は、右京区嵯峨柳田町35-1で、京都市立嵐山小学校の運動場であり、史跡及び名勝嵐山の東端及び嵯峨遺跡の南端に該当する。応永33年(1426)の『山城国嵯峨諸寺応永欽命図』によると、当該地周辺には真浄院や慈濟院が所在したことがわかる。ともに天龍寺の塔頭である。真浄院は詳細不明であるが、慈濟院は貞治2年(1363)に無極志玄を開基とする寺院で、江戸時代の寛永年間(1624～1645)に焼失し、寺地を現在の天龍寺境内に移している。

当該地は桂川の左岸で、西高瀬川との間に位置する。西高瀬川は江戸時代初期に角倉了以により開削された運河であるが、桂川からの分岐地点付近はもともと同川の氾濫域であったことから自然の支流があった可能性がある。

調査地の周辺では、東隣地で平成15年に試掘調査をおこなっており、桂川に近い南半では洪水堆積を、敷地の北半では、中世から近世の整地層が3層以上みつまっている。また、中世とみられる幅4mの東西溝を検出している¹⁾。

今回、嵐山小学校で、運動場施設の老朽化及び排水不良に伴う再整備が計画されたことから、試掘調査をおこなった。調査区は、桂川の氾濫堆積の範囲と、慈濟院・真浄院にかかわる遺構の残存状況を確認するため、調査区を東西方向に1～3区、南北方向に4・5区を設定した(図60)。調査は平成28年1月19日から21日までの3日間おこなった。調査面積は82㎡である。

なお、検出した遺構は設計変更により地中保存されている。

2 層序と検出遺構 (図61)

層序

基本層序は1・2区と3～5区で大きく異なる。

1・2区の基本層序は、現代盛土(GL-0.5～0.8m)、旧耕作土(-0.9m)、洪水堆積である(図61)。洪水堆積層は最大で5層に分けることができる。最上層から土師器小片が出土したが、小片であるため時期を確定できない。その他の層からは遺物の出土がない。

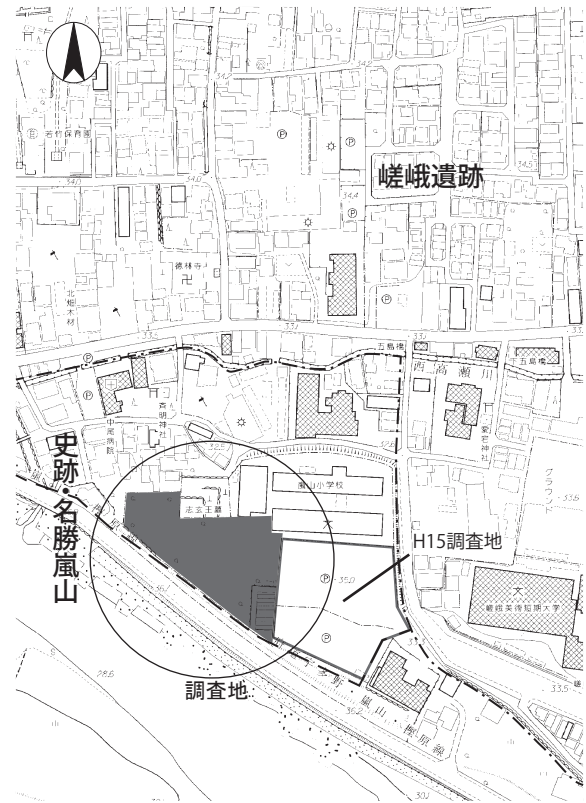


図59 調査位置図(1:2,500)

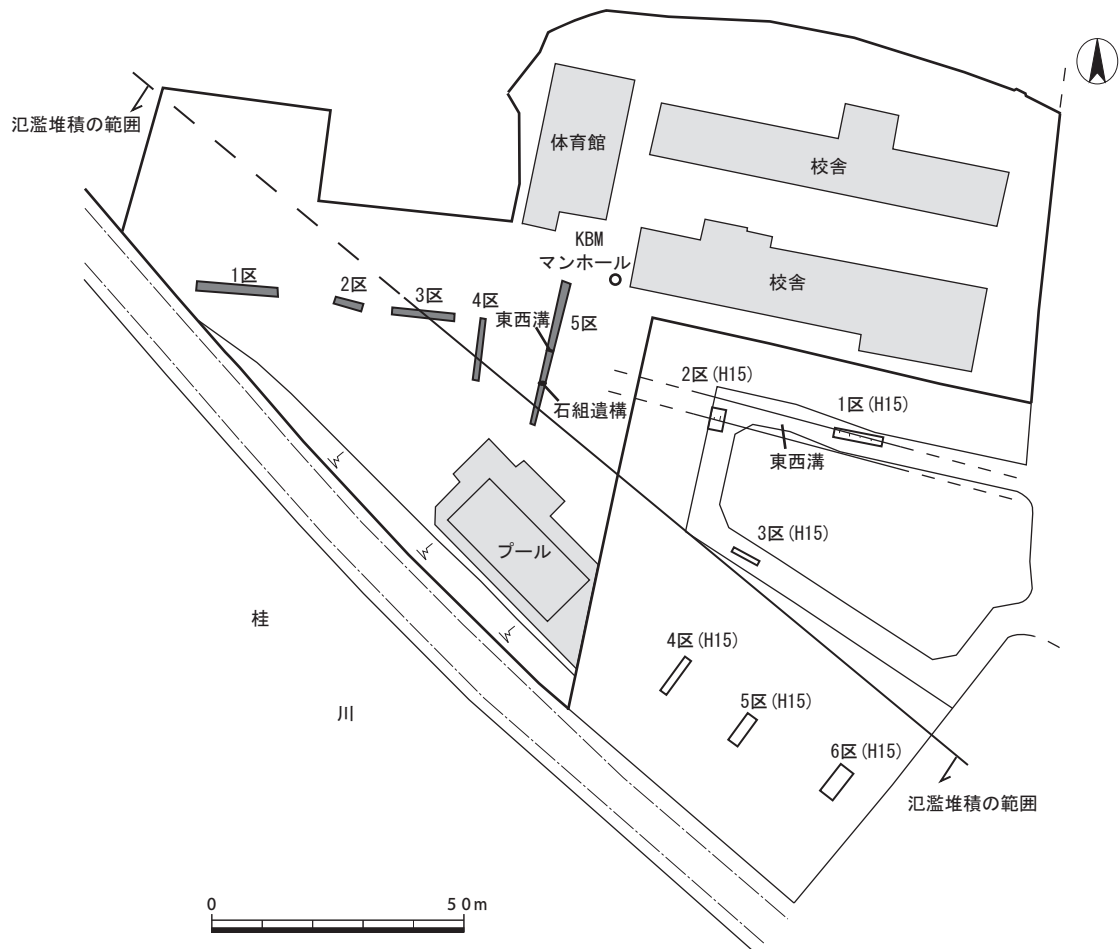


図60 調査区配置図（1：1,500）

3～5区では桂川に近い敷地南西部で1・2区同様の氾濫堆積がみられる。北東部では、現代盛土の下に旧耕作土があり、その下層（GL-1.0m）に時期不明の整地層が2層みられ、さらにその下には洪水堆積がみられる。

以上のことから、敷地の西～南半は近世以降に桂川の洪水により遺構面が流失していることがわかった。この洪水の及んでいない部分には整地層が2層みられる。また、整地層の下層には洪水堆積があり、寺院が営まれる前にも桂川の氾濫が頻繁にあった可能性が高い。

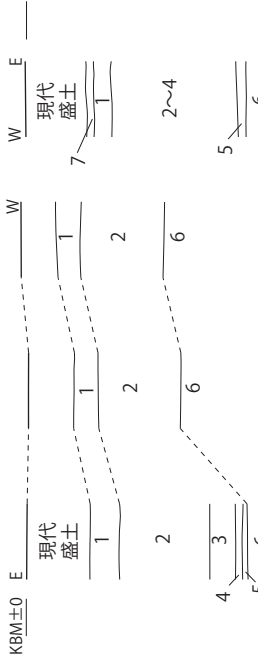
検出遺構

SD01 5区で検出した東西方向の溝である。A・B期の2時期あり、古いSD01Aは北肩のみを検出し、幅は1m前後とみられる。残存する深さは約0.5mで埋土には拳大の礫と瓦片を含む。新しいSD01Bは幅1.2mで、残存する深さは0.5mである。A・B期ともに瓦が出土するが、特にSD01Bからは瓦と拳大から人頭大の石、焼けた磚が多量に出土した。SD01の用途については埋土に礫と瓦を充填していることから、排水用の溝というよりは、築地もしくは土塀の基礎地業の可能性が高い。

SD01のすぐ北に50cm程度の石が出土した。石の平坦面を上に向けており、礎石の可能性はある。ただし、掘方はみられない。

SX02 5区南半で石組み遺構を検出した。出土状況から自然に流れてきた石とは考え難く、桂川

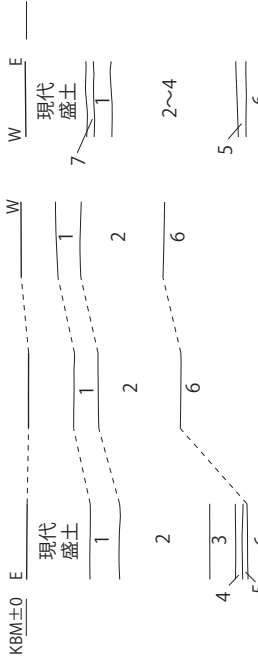
1区南壁



- 1 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂(砂が主体・遺物含む)【近世以降】
- 2 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂
- 3 10YR6/4にぶい黄褐色細砂(シルトをブロック状に含む)
- 4 10YR6/4にぶい黄褐色砂礫
- 5 10YR6/3にぶい黄褐色シルト含む
- 6 10YR6/1褐色砂礫
- 7 2.5Y6/1黄灰色泥砂【旧耕土】

【氾濫堆積】

2区北壁



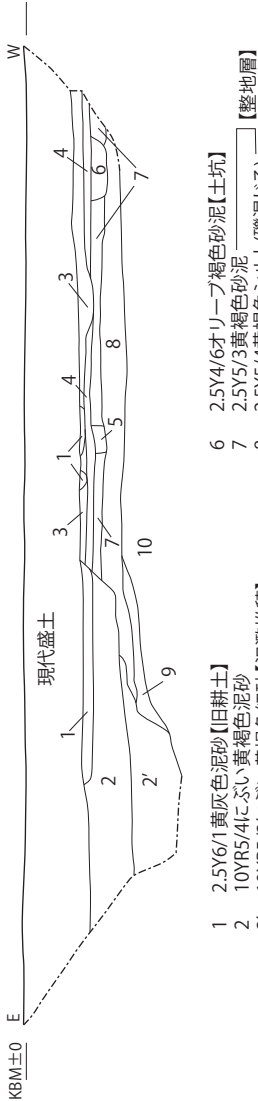
- 1 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂【旧耕土】
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂
- 2' 10YR5/3にぶい黄褐色シルト(隣混じり)
- 3 2.5Y6/6明黄褐色微砂(シルト混じり)
- 4 2.5Y5/6黄褐色砂泥(クライ化)
- 5 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥【土坑】
- 6 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥【土坑】
- 7 2.5Y5/3黄褐色砂泥
- 8 2.5Y5/4黄褐色シルト(隣混じり)
- 9 2.5Y4/4オリーブ褐色砂礫
- 10 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫

【整地層】

【氾濫堆積】

【氾濫堆積】

3区南壁



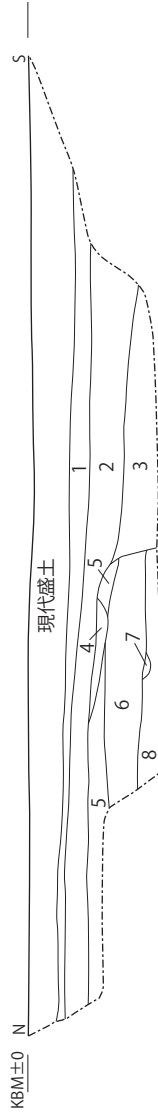
- 1 2.5Y6/1黄灰色泥砂【旧耕土】
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂
- 2' 10YR5/3にぶい黄褐色シルト(隣混じり)
- 3 2.5Y6/6明黄褐色微砂(シルト混じり)
- 4 2.5Y5/6黄褐色砂泥(クライ化)
- 5 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥【土坑】
- 6 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥【土坑】
- 7 2.5Y5/3黄褐色砂泥
- 8 2.5Y5/4黄褐色シルト(隣混じり)
- 9 2.5Y4/4オリーブ褐色砂礫
- 10 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫

【整地層】

【氾濫堆積】

【氾濫堆積】

4区東壁

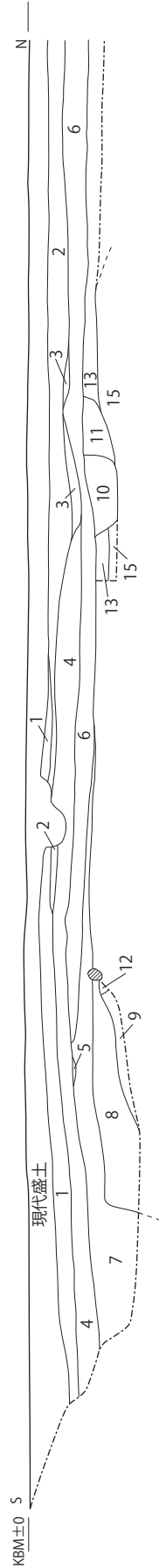


- 1 10YR5/2灰黄褐色泥砂【旧耕土】
- 2 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
- 3 10YR6/3にぶい黄褐色砂泥
- 4 7.5YR3/2黒褐色砂礫
- 5 7.5YR3/3暗褐色泥砂
- 6 7.5YR4/3褐色泥砂
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂
- 8 7.5YR5/4にぶい褐色砂【氾濫堆積】

【氾濫堆積】

【氾濫堆積】

5区西壁



- 1 10YR4/1褐色細砂【氾濫堆積】
- 2 10YR5/1褐色泥砂【旧耕作土】
- 3 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂【旧耕作土】
- 4 7.5Y4/2灰褐色細砂【氾濫堆積】
- 5 7.5Y4/4褐色砂泥
- 6 10YR4/4褐色砂泥【整地層】
- 7 10YR5/3にぶい黄褐色細砂【氾濫堆積】
- 8 10YR4/4褐色砂泥(隣含む)
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂(小礫含む)
- 10 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(拳大の礫、瓦片多量に含む)【SD01B】
- 11 7.5YR4/3褐色砂泥(拳大の礫、瓦片含む)【SD01A】
- 12 7.5Y4/2灰褐色泥砂(右抜)
- 13 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥(上面少し持ちける)【整地層】
- 14 7.5YR3/3暗褐色細砂(土師器小片含む)【氾濫堆積】
- 15 7.5YR4/6褐色砂泥(上面焼けている部分有り)
- 16 10YR5/4にぶい黄褐色細砂(遺物含まない)【氾濫堆積】
- 17 10YR4/61褐色細砂(遺物含まない)【氾濫堆積】

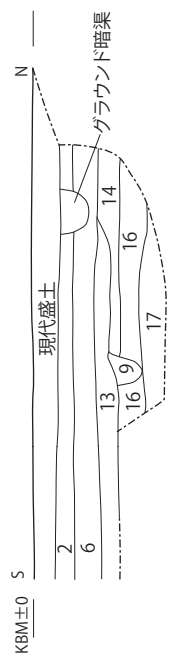


図61 断面図 (1 : 100)

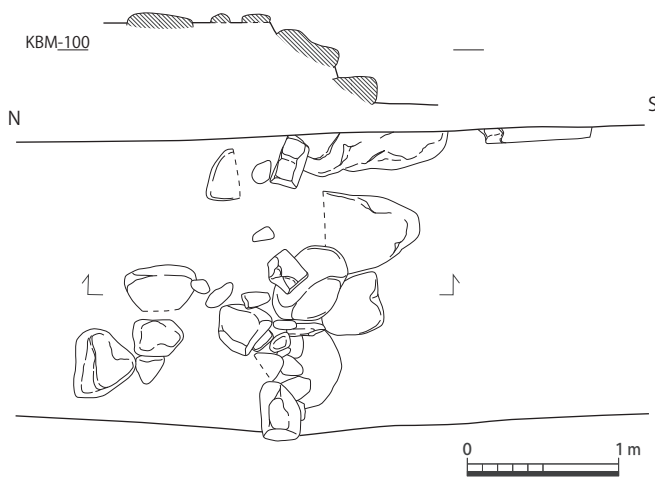


図62 石組遺構SX02平面・断面図（1：50）



図63 石組遺構SX02（南から）

の護岸の可能性がある。ただし、数種類の石材が利用されており、中には庭園の景石として見えそうなものがあることから、南からの見え方を意識した石組み遺構ともいえる。

3 遺物

須恵器（図64-1） 5区12層から須恵器の台付壺が出土した。口径9.7cm、底径11.6cm、器高18.5cmで胴部に櫛描列点文を施す。脚部に2箇所スカシが入る。6世紀末から7世紀頃とみられる。

瓦（図64-2・3） 5区7層から出土した丸瓦である。内面には布目と紐の痕跡が残る。中世後半とみられる。完形のものや軒瓦は含まれていなかった。

埴（図64-4～7） 5区7層から出土した埴である。完形のものはなく、厚さは5が約2.5cmと薄い、その他は約3.5～4.2cmと厚い。

4 まとめ

今回の調査では、嵐山小学校の北西から南西部分は現在の桂川に沿うように、洪水によって遺構面が流されていることがわかった。3区の東半と4区の北半は整地層が残っていたが、顕著な遺構や遺物はみられなかった。5区では、南端で洪水堆積があったが、それより北で良好に遺構面が残存していた。検出した遺構は、東西溝（SD01）と石組遺構（SX02）である。石組遺構は、洪水堆積と整地層の境で検出しており、護岸の可能性がある。東西溝SD01は瓦や埴が多量に出土しており、当地に寺院があったことを示すものである。寺院の南を限る施設の痕跡の可能性はあるが、調査面積が狭小であるため、明らかにできなかった。

遺構検出レベルはKBM-0.83m（GL-0.8m）であることから、設計変更により保護層を設けて施工され遺構は地中保存されている。 （家原 圭太）

註

1) 京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局、2004年。

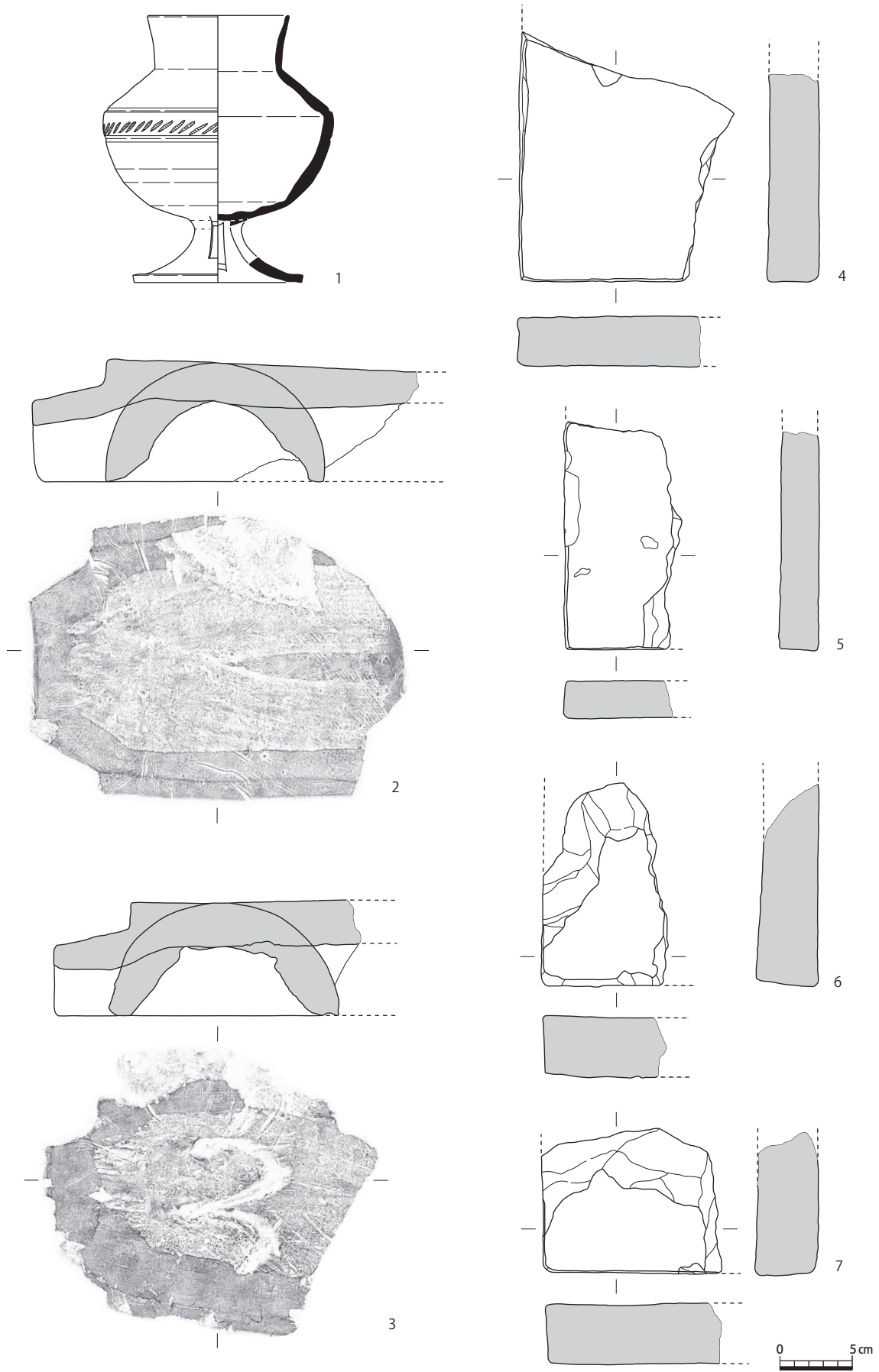


图64 出土遺物実測図 (1 : 4)

IV-3 本山古墳群 No.99

1 調査経過 (図65・66)

調査地は、北区と左京区にまたがる上賀茂本山地区の東側丘陵斜面にあたる。付近は古墳時代後期の群集墳である「本山古墳群」の所在地として周知されており、今回の調査地はその東限付近に相当する。また、京都市街地から鞍馬へ抜ける府道40号線(下鴨静原大原線)に隣接し、街道沿いに形成された旧集落の一角にも含まれている。今回、この区画に共同住宅の建設が計画されたため、試掘調査を実施した。

近隣では、平成24年度に調査地より北へ100m隔てた地点で発掘調査が行われており、片袖式の横穴式石室をもつ円墳1基が検出されている。また調査地より東へ50m隔てた地点には名勝庭園を有する圓通寺があり、その南側斜面(上賀茂ケシ山斜面)には、瓦窯の存在が想定されている。以上のことから、今回の調査でも、古墳及び窯跡



図65 調査位置図 (1 : 5,000)

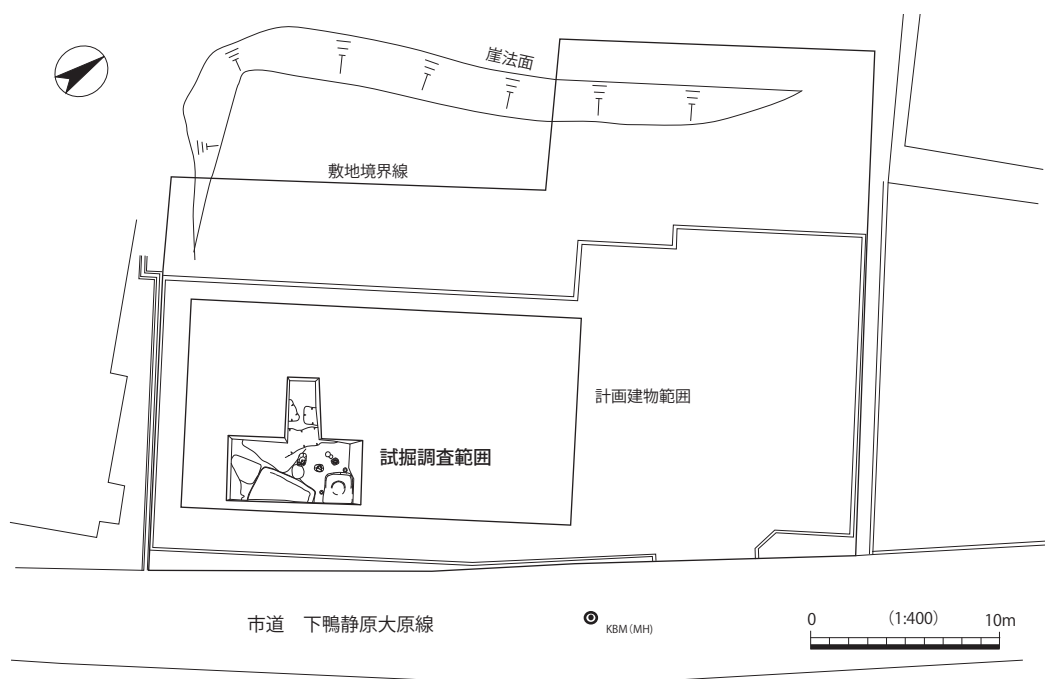
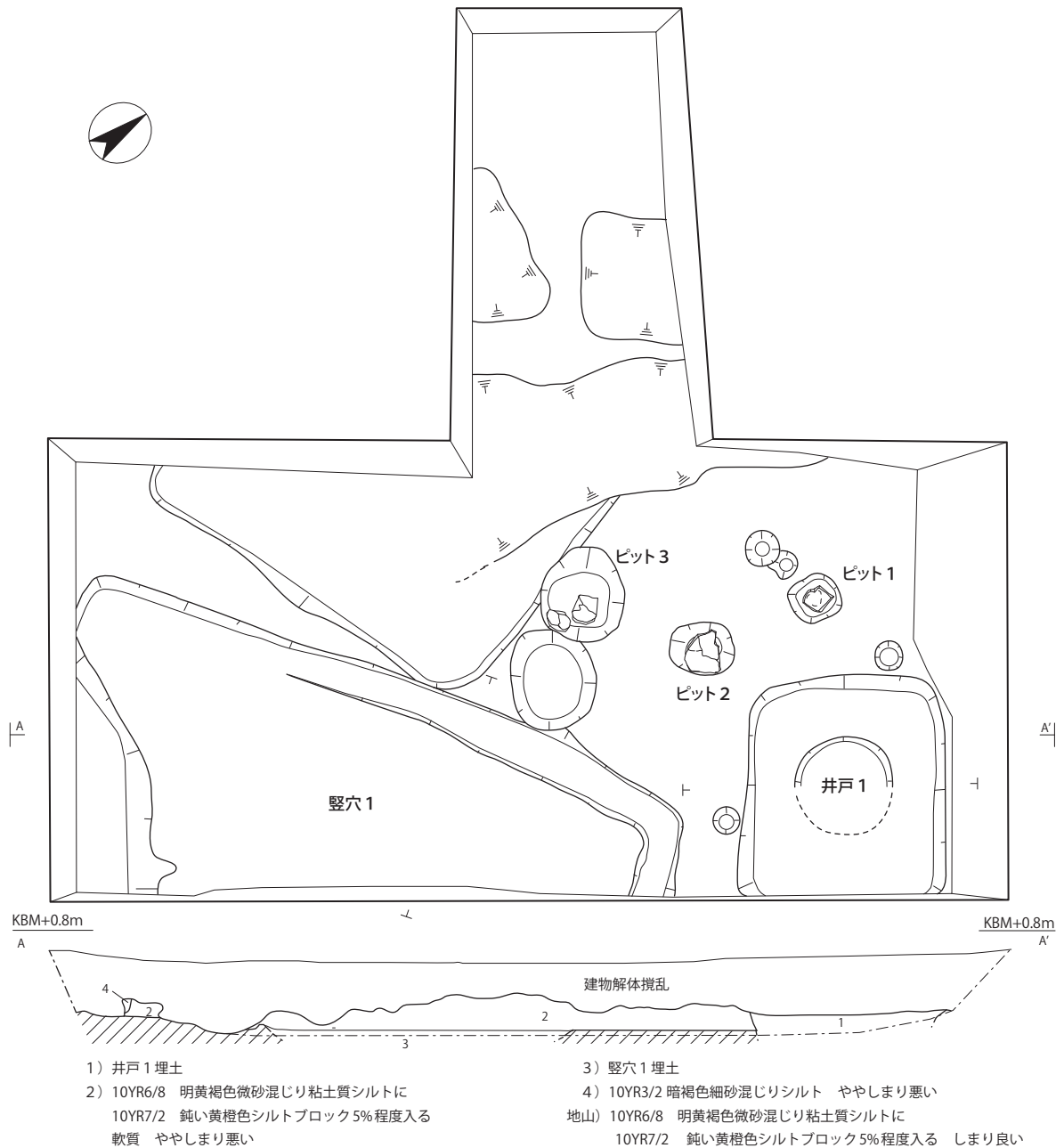
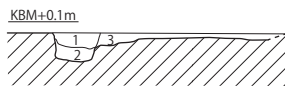


図66 調査区配置図 (1 : 400)



【竪穴1】



【竪穴1】

- 1) 10YR6/6 明黄褐色微砂混じりシルト 鉄分沈着 炭化物・植物遺体入る しまり悪い
- 2) 10YR6/6 明黄褐色微砂混じりシルトに 10YR6/1 褐灰色細砂混じりシルトブロック20%程度入る しまり悪い
- 3) 2.5Y6/6 明黄褐色シルト～粘土質シルトに 2.5Y6/1 黄灰色シルトブロック10%程度入る しまり悪い

【ピット2】



【ピット2】

- 1) 10YR4/2 灰黄褐色細砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐色微砂混じり粘土質シルトブロック40%程度入る やや軟質 しまり悪い
- 2) 10YR3/2 暗褐色細砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐色微砂混じり粘土質シルトブロック5%程度入る 炭化物・土師器片入る

【ピット3】



【ピット3】

- 1) 10YR3/2 暗褐色細砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐色微砂混じり粘土質シルトブロック5%程度入る 炭化物・土師器片少量入る

【井戸1】



【井戸1】

- 1) 10YR3/2 黒褐色細砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐色微砂混じり粘土質シルトブロック10%程度入る 土器片・炭化物少量入る やや軟質 しまり悪い
- 2) 2.5Y7/2 灰黄色礫混じりシルトに 2.5Y5/6 黄褐色シルトブロック30%程度入る 径2cm未満の礫多量入る

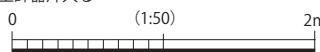


図67 遺構平面図・断面図 (1:50)

に関連する遺構の検出が予見された。

調査区は、計画建物範囲の長軸に沿って設定し、続いて丘陵斜面に向かってT字形に小トレンチをのぼす形で掘削を行った。その結果、西半部（山側）については大きく削平を受けていることが判明した。一方、府道に近い東半部には遺構面が良好に残存しており、室町時代と古墳時代に遡る可能性がある遺構群を検出することができた。

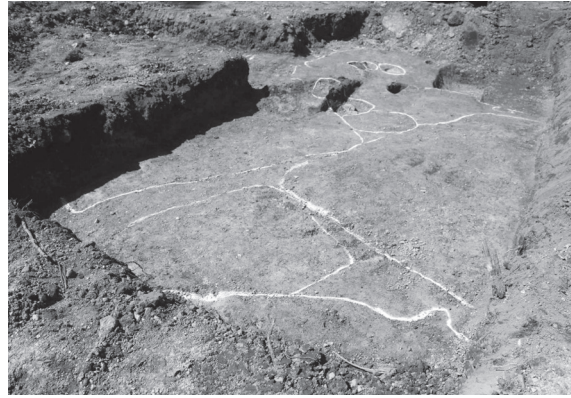


図68 遺構面検出状況（南東から）

2 層序と遺構（図67・68）

調査区東半部では、建物攪乱の直下に層厚0.2～0.3mを測るしまりの悪い明黄褐色シルト層があり、その下に固く締まる砂礫層（地山）が存在する。室町時代の遺構群はシルト層の上面で、古墳時代の遺構群は地山上面で検出した。

井戸1 一辺1.2～1.3mを測る隅丸方形の掘方をもつ井戸である。中央に直径0.5m程度の円形の掘り込みがあることから、曲物が据えられていた可能性が高い。埋土は黒褐色細砂混じりシルトを主体とする。遺構内からは、土師器皿の細片（14世紀）が出土した。

ピット1・ピット2・ピット3 井戸1の東側で検出した。すべて拳大以上の礎石を備える。ピット1は隅丸方形を呈するが、ピット2・3の平面形状は不定形である。遺構内からは、炭化物と土師器皿（14世紀）が出土した。

竪穴1 一辺3.9～4.0mを測る隅丸方形を呈する遺構である。削平が著しく、埋土はほとんど残っていない。一部を断割ったところ、壁溝状の掘り込みを確認した。埋土には僅かに炭化物と土師器片が含まれていた。

4 まとめ

今回の調査では、調査区の東半部において、ピットと井戸を有する室町時代の遺構群を確認した。調査地は鞍馬街道沿いにあることから、家屋が道に面して営まれたと考えられる。周辺では当該時代の遺構が確認されていないことから、今後の調査が期待される。

また、時期が特定できる遺物は出土していないものの、その形状から古墳時代に遡る可能性がある竪穴遺構を1基検出した。丘陵斜面に形成された本山古墳群は、その形成母体である集落がいまだ確認されておらず、詳細は不明である。集落が丘陵斜面の裾部に展開した可能性は大いに考えられるため、今回の発見はその端緒となろう。

（黒須 亜希子）

IV-4 上京遺跡 No.25

1 調査の経緯 (図69・70)

本件は、店舗新築に伴う試掘調査である。調査地は、今出川通と大宮通の南西交差点付近である上京区大宮通今出川下る薬師町に所在し、上京遺跡の南西部に該当する。

上京遺跡は、平安宮の禁裏に重複する場所で、室町時代に入って、将軍家や公家の屋敷、寺院などが集中して形成され始めたことに始まる。もともと平安宮北郊は御料地としての役割を果たしていたが、9世紀前半に天皇や有力貴族の別荘や邸宅、寺社用地として開発が進み、特に平安京から洛北への主要道路である大宮大路から北に延長した対象地周辺では、雲林院や紫野齋院、世尊寺がつくられていることが記録に残っている。これらを裏付けるように対象地より南東120mの地点で行われた発掘調査(図69:調査1)では、上京遺跡に関わる時期の遺構だけでなく、平安時代前期や鎌倉時代の遺構も確認されており¹⁾、大宮大路末周辺での土地利用の様子を知ることができる。しかしこれまでの調査で、史料に記載されている雲林院跡や紫野齋院跡、世尊寺跡などに関わる明確な遺構は確認されておらず、その詳細は明らかではない。このため、上京遺跡及び上京遺跡以前の大宮大路末の土地利用の様相を確認することを主目的に調査をおこなった。調査期間は平成28年2月12日、調査対象面積は48㎡である。

2 層序と遺構

建物範囲の東側に南北方向の調査区を設定し、調査を行った(図70)。調査区南側の一部では既

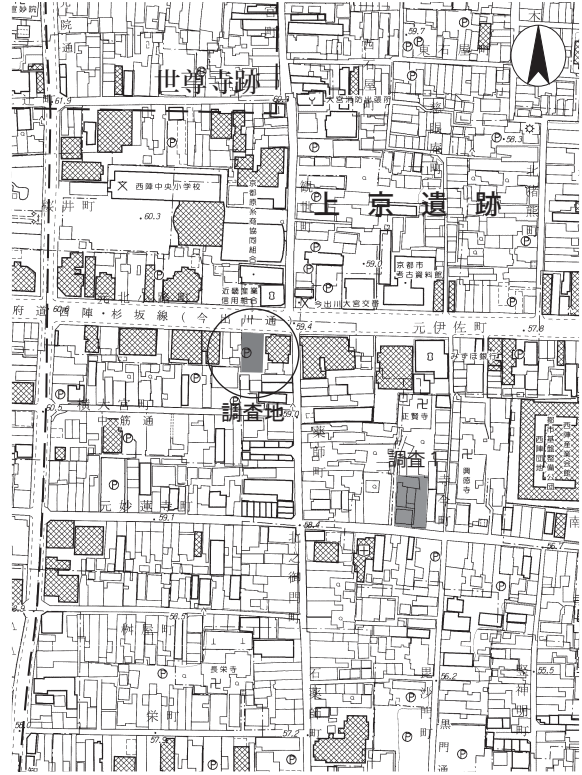


図69 調査位置図 (1:2,500)

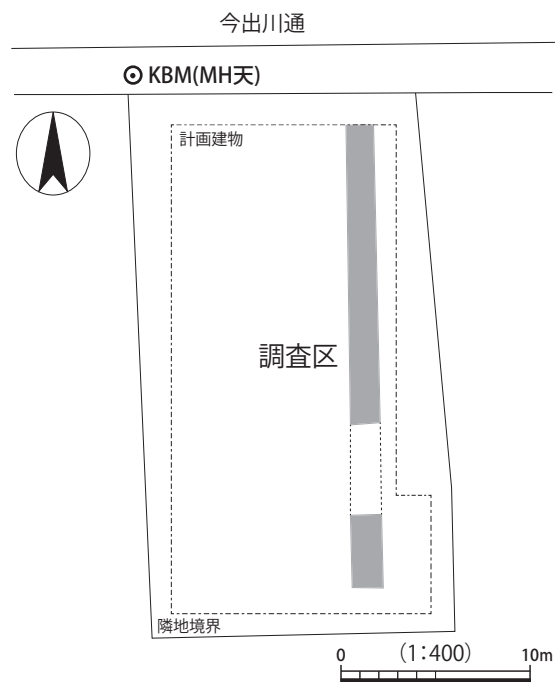


図70 調査区配置図 (1:400)

存建物の基礎が残存しており調査を断念したが今回確認した遺構面よりも下に基礎が及んでいることを確認したため、この部分については、遺構は残存していないと判断した。

基本層序は、約0.5mの現代盛土の下、近代建物の基礎やこの建物に伴う床土などを挟み、GL-0.8~0.9mで近世包含層である黄褐色泥砂（図71-14・15）、GL-1.2~1.7mで地山である黄褐色シルト（図71-19・20）に至る。近世包含層である黄褐色泥砂より上面で成立する炭化物や焼土ブロックを含む近代土坑群や江戸時代後期の大型土坑が重複して形成されているため、江戸時代中期以前の遺構の遺存状況は良くない。このため、遺構検出は地山上面で行い、土坑（土坑1・2）、柱穴（柱穴4）と溝（溝3）を検出した。

土坑1・2は、ともに方形をなす。土坑1は一辺1.2m以上、土坑2は一辺2.2m以上である。出土遺物から、ともに江戸時代中期と考えられる。溝3は、調査区中央部で検出した。東西方向に伸び、幅0.4~0.5m、深さ0.3m、検出長0.7mである。出土遺物は少ないものの、室町時代と考えられる。

この他、重機掘削時に鎌倉時

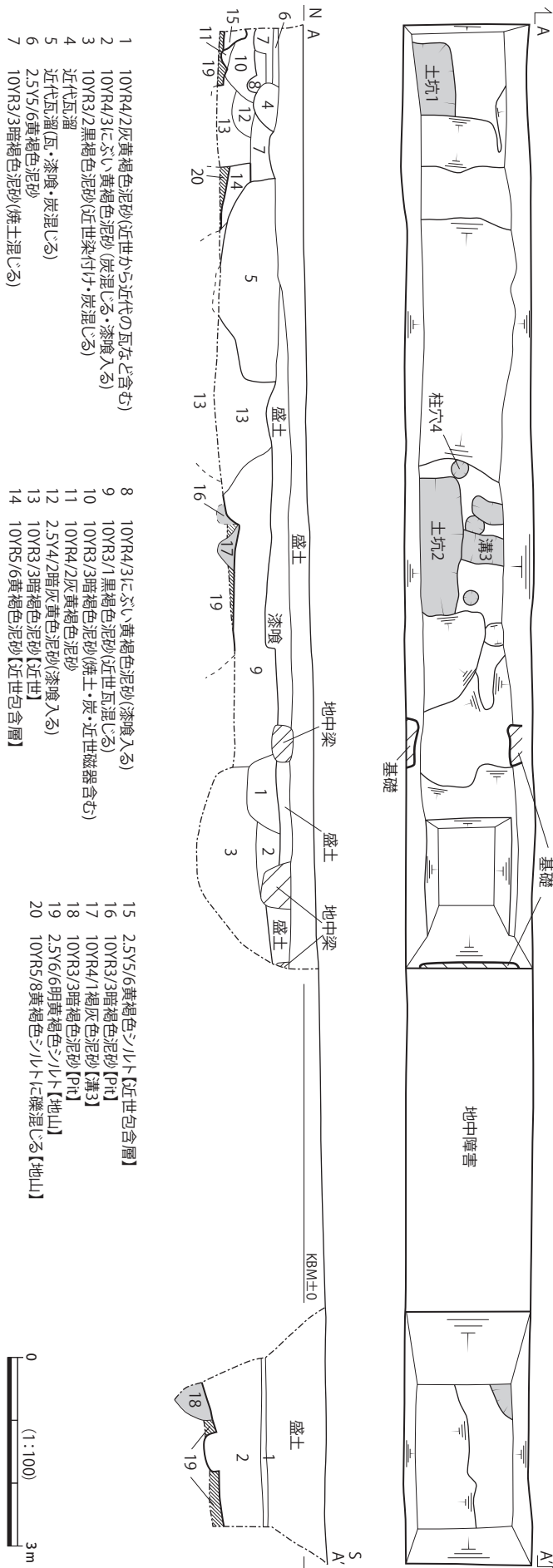


図71 調査区平面・断面図 (1:100)

- | | | | |
|---|-----------------------------|----|---------------------------|
| 1 | 10YR4/2灰黄褐色泥砂(近世から近代の瓦など含む) | 8 | 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂(漆喰入る) |
| 2 | 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂(炭混じる・漆喰入る) | 9 | 10YR3/1黒褐色泥砂(近世瓦混じる) |
| 3 | 10YR3/2黒褐色泥砂(近世染付け・炭混じる) | 10 | 10YR3/3暗褐色泥砂(焼土・炭・近世磁器含む) |
| 4 | 近代瓦溜 | 11 | 10YR4/2灰黄褐色泥砂 |
| 5 | 近代瓦溜(面・漆喰・炭混じる) | 12 | 2.5Y/4暗灰黄色泥砂(漆喰入る) |
| 6 | 2.5Y/6黄褐色泥砂 | 13 | 10YR3/3暗褐色泥砂(近世) |
| 7 | 10YR3/3暗褐色泥砂(焼土混じる) | 14 | 10YR5/6黄褐色泥砂(近世包含層) |
| | | 15 | 2.5Y/6黄褐色シルト【近世包含層】 |
| | | 16 | 10YR3/3暗褐色泥砂【Pt】 |
| | | 17 | 10YR4/1褐灰色泥砂【溝3】 |
| | | 18 | 10YR3/3暗褐色泥砂【Pt】 |
| | | 19 | 2.5Y/6明黄褐色シルト【地山】 |
| | | 20 | 10YR5/8黄褐色シルトに礫混じる【地山】 |

代の土師器皿片を1点のみ確認したが、同時期の遺構は確認できなかった。

3 出土遺物

検出した遺構からは遺物が出土しているものの、いずれも細片で、図化できるものは少ない。一部図化できたものを報告する。

1は重機掘削時、2は溝3、3・4は土坑1から出土した。

1・2は土師器皿である。1は口縁端部外面に面を持つ。胎土は浅黄色橙色である。鎌倉時代に属する。2は口径12.0cm、器高3.5cm。底部はやや丸みを帯び、口縁部は直線的に外反する。端部は丸く仕上げる。胎土は白色である。室町時代に属する。3は焼塩壺である。体部上半部の1か所に「御壺塩師堺湊伊織」のスタンプが施される。このタイプは、17世紀末から18世紀第一四半期の間に製作されていたと考えられている²⁾。4は土師器鍋である。口径は28.8cm、器高は6.0cm。口縁部は外反し、端部は上方につまみ上げる。口縁部のナデは確認できるが、体部の調整は被熱のため不明瞭である。3・4ともに江戸時代中期に属する。

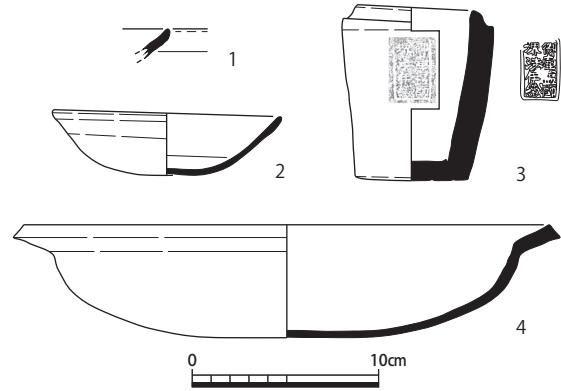


図72 出土遺物実測図(1:4)

4 まとめ

今回の調査では、室町時代から江戸時代中期の遺構と鎌倉時代の遺物を確認し、室町時代~江戸時代にかけて利用されていたことがわかった。鎌倉時代以前の明確な遺構は確認できなかったが、遺物が出土したことから、鎌倉時代以前より土地利用はおこなわれていたと考えられる。室町時代以降の土地利用の際に、以前の遺構が削平されている可能性は高いが、上京遺跡成立以前の様相を把握するためにも、特に大宮通り沿いについては、今後も注視していく必要がある。

(奥井 智子)

註

- 1) (財)京都市埋蔵文化財研究所『上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-2, 2011年。
- 2) 田中一廣「泉州名産『焼塩壺』- 京都・護王神社境内及び妙心寺塔頭出土資料の紹介をかねて -」『関西近世考古学研究Ⅱ』関西近世考古学研究会, 1992年。

IV-5 上京遺跡2 No.22

1 調査の経緯（図73・74）

調査地は上京区役所南東側の上京区堀出町・今図子町に位置し、上京遺跡に該当する。上京遺跡は平安時代後期以降、大宮大路以東に人々が集まり市街化し、やがて公家や武家の屋敷、寺院なども集住し、発展した都市遺跡である。

対象地は、花の御所のすぐ南に位置し、周辺では上京区役所（図73-調査地1）及び上京福祉事務所（図73-調査地2）で発掘調査が実施されている¹⁾。上京区役所の発掘調査では、鎌倉時代から江戸時代までの土地利用状況が明らかになり、当該地周辺が室町時代以前の平安時代後期から土地活用されていたことが明らかになっている。また福祉事務所では、室町時代の遺構はほとんど検出されなかったものの、近世の町屋の様相が明らかになっている。

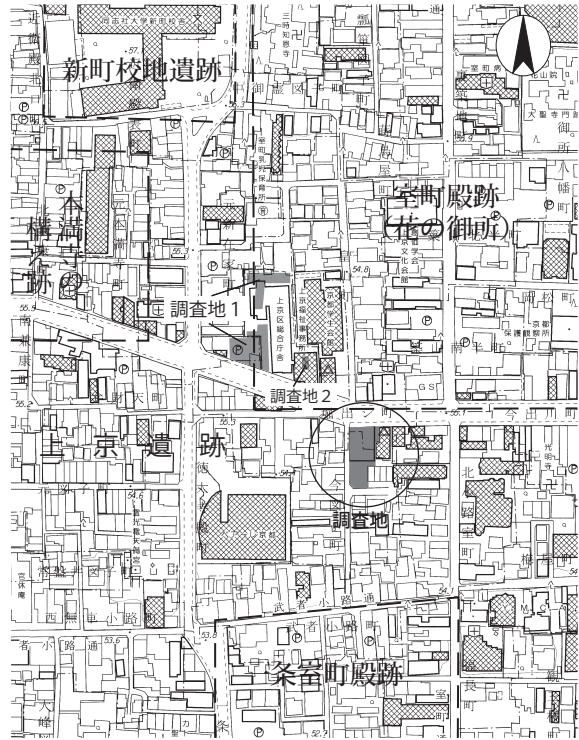


図73 調査位置図（1：2,500）

今回、当該地で共同住宅新築が計画されたことに伴い、平成27年10月13日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく届出が提出された。これを受け、本市文化財保護課で平成28年1月12日に試掘調査を行った。調査区は3か所（1～3区）設定し、調査面積は31㎡である。平安時代後期～近世までの各時期の遺構・遺物を確認した。対象地内は既存建物解体攪乱が著しく、特に対象地北側の遺跡残存状況は悪かった。しかし対象地南側においては部分的に遺跡が遺存していることが明らかになったため、南側の遺存部分の補足調査が必要であると判断した。このため本市文化財保護課は事業者と協議を行い、補足調査を行うこととした。調査期間は平成28年3月14日～19日の6日間、補足調査対象面積は50㎡である。

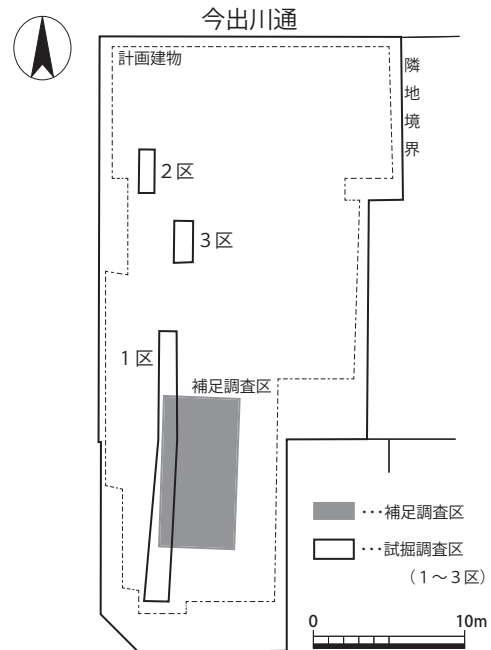


図74 調査区配置図（1：400）

2 層序と遺構

(1) 基本層序

現代盛土の下、近代整地土である暗褐色粘質土（図77-11層）を挟み、GL-0.5～0.7 m（標高：53.6～53.8 m）で江戸時代後期の整地土である黒褐色粘質土や暗褐色粘質土（12～16層）、-1.1～-1.3 m（53.1～53.3 m）で江戸時代中期の整地土である黒褐色粘質土や褐色灰色細砂混じり粘質土（17～20層：第1遺構面）、-1.2 m（53.1 m）で室町時代後期の整地土である黒褐色粘質土（21～23層：第2遺構面）、-1.5～-1.6 m（52.8～52.9 m）地山である灰色砂礫（28～33層：第3遺構面）に至る。

今回の調査では、江戸時代後期の整地層上面で遺構検出を試みたが、近代以降の攪乱により遺構面はほとんど残っていなかったため、江戸時代中期の遺構面より調査を行った。なお補足調査対象外となった試掘調査2・3区は、近現代盛土以下、近世整地土である黄灰色泥砂を挟み、灰黄色砂礫の地山となる（図75）。

(2) 遺構

第1遺構面（江戸時代中期）（図76）

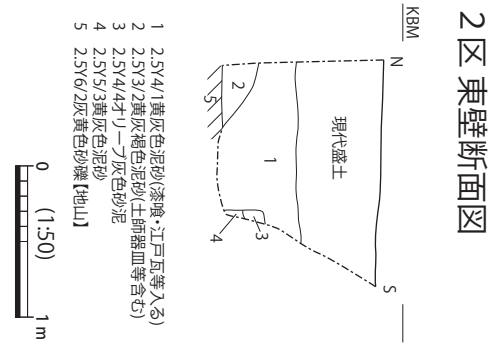
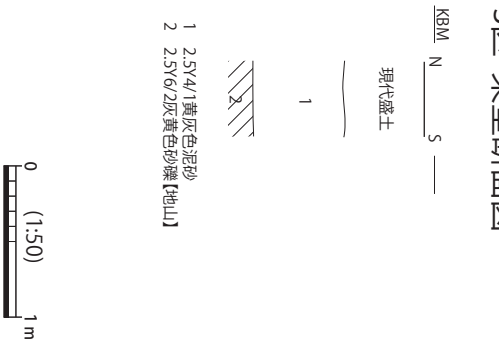
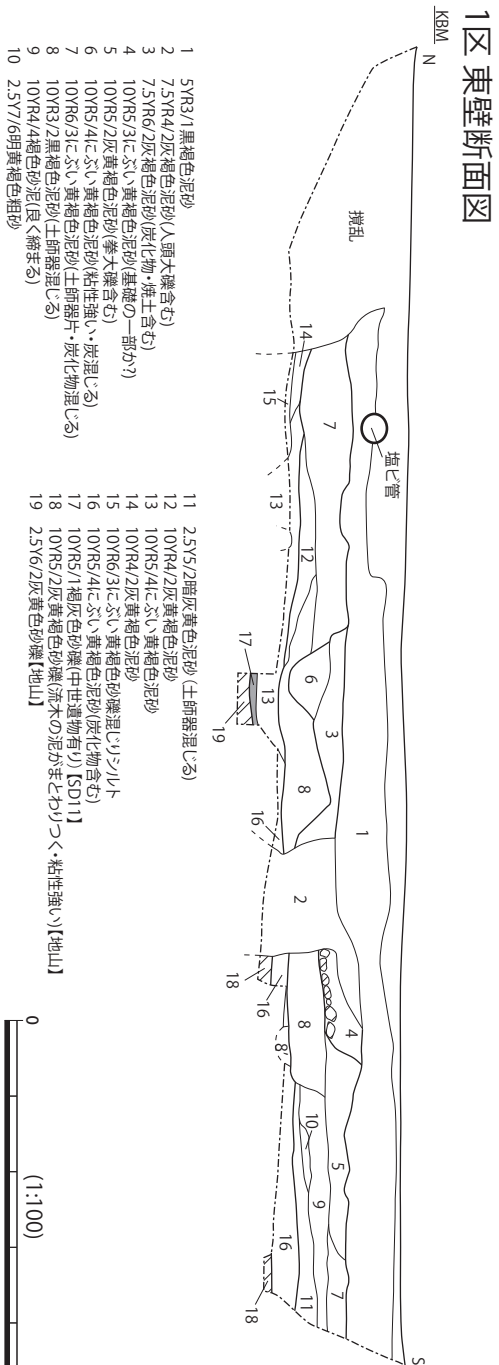
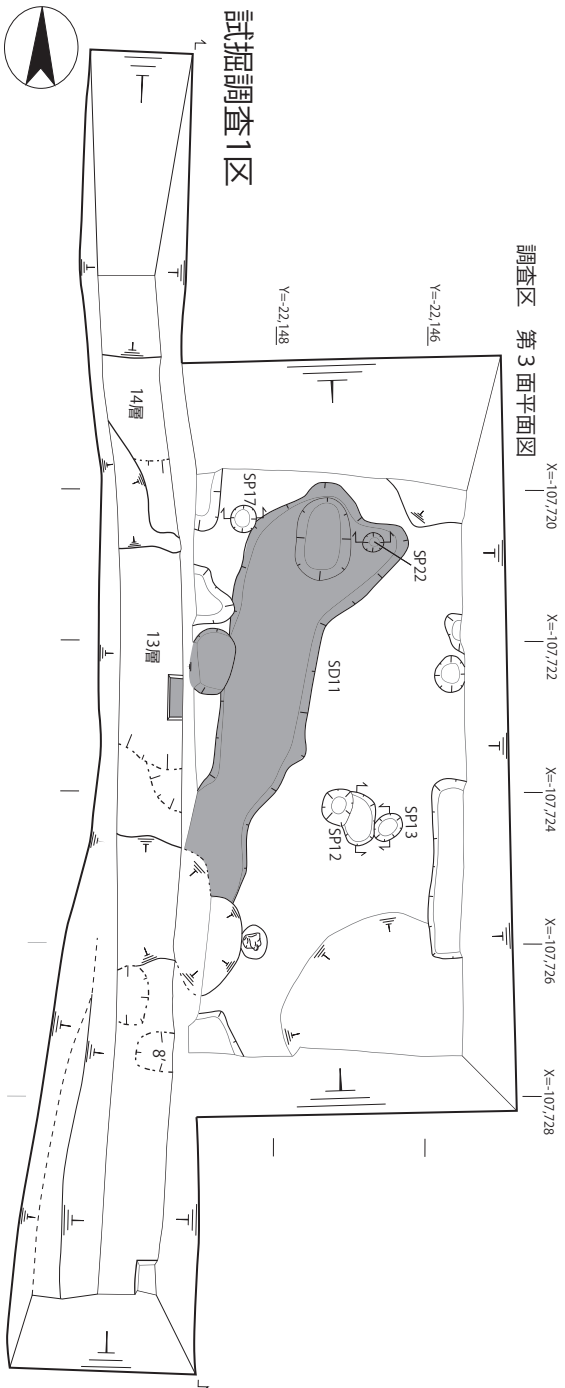
検出した遺構は、柱穴5基（SP1～5）、焼土層（図77-17層）である。柱穴は概ね直径0.3～0.7 mの円形で、深さ0.1～0.15 m、埋土は黒褐色粘質土の単層である。埋土からは遺物はほとんど出土していない。また調査区南壁で根石と考えられる礎石を確認しており、SP1・2・5を含めると、南北2.5 m、東西2.3 mの柱間を持つ建物（建物A）が調査区南東部に想定できる。

第2遺構面（室町時代後期）（図76）

検出した遺構は、柱穴5基（SP6～10）である。概ね直径0.5～0.7 mの円形で、深さ0.05～0.2 m、埋土は黒褐色粘質土の単層である。いずれの柱穴も遺構深度が浅いこと、SP7では根石の平坦面が検出時に確認できることから、上面は削平を受けている可能性が高い。検出したいずれの柱穴からも土師器皿などが少量出土している。

第3遺構面（鎌倉時代～室町時代前期）（図77）

検出した遺構は、柱穴8基（SP12～17・22）、溝1条（SD11）、土坑4基（SK18～21）である。柱穴は概ね直径0.3～0.4 mの円形で、深さ0.05～0.2 mである。埋土は黒褐色粘質土で、根石を持つもの（SP16）もある。またSP16を含むSP12・15は同一ライン上に並ぶ（柵B）ものの、調査区内では対応する柱穴の展開を確認することができなかったため、建物を復元するまでには至らなかった。埋土からは、土師器皿が出土している。また柵Aと近い主軸である溝（SD11）は、幅0.8～1.2 m、深さ0.1～0.2 mで、埋土は黒褐色粘質土である。埋土からは、土師器皿小片のほか、瓦器碗、瓦質土器鍋や白磁碗などが出土している。

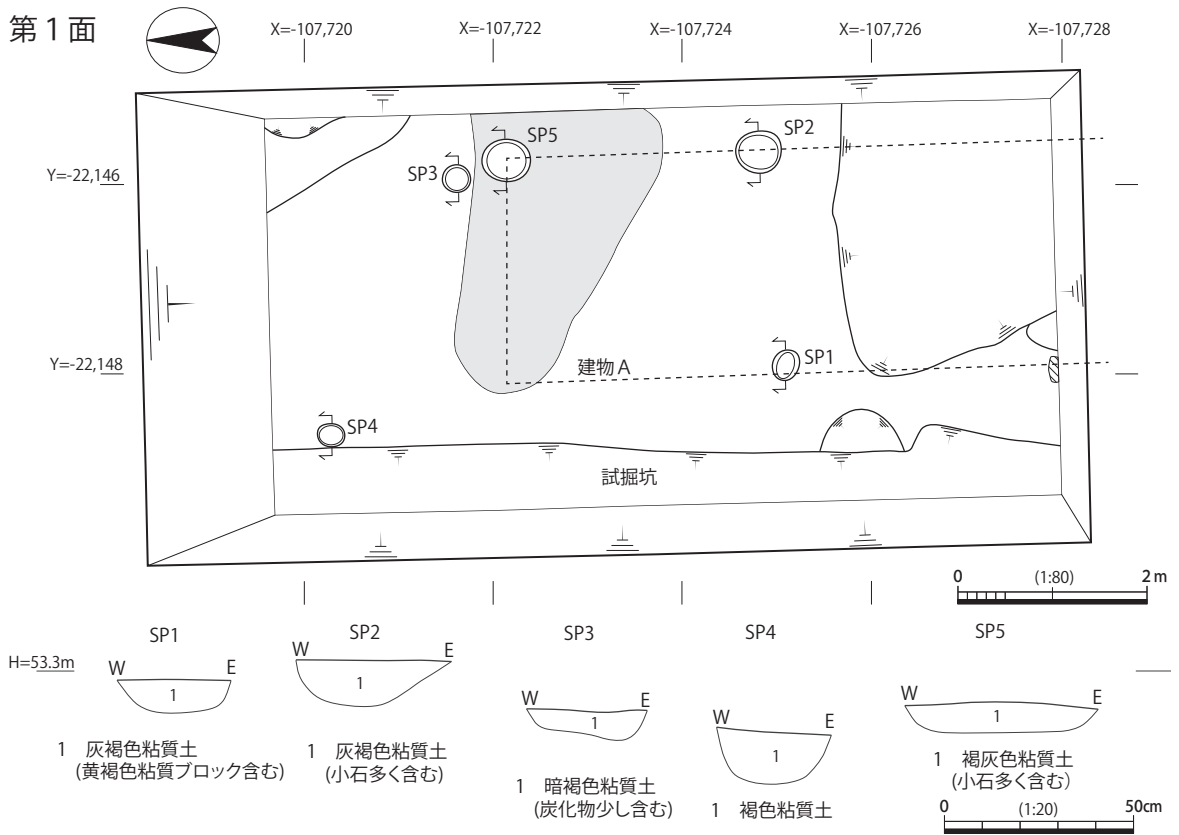


- 1 5YR3/1 黒褐色泥砂
- 2 7.5YR4/2 灰褐色泥砂(人頭大礫含む)
- 3 7.5YR6/2 灰褐色泥砂(炭化物・堆土含む)
- 4 10YR5/3 に近い黄褐色泥砂(基礎の一部か?)
- 5 10YR5/2 灰黄褐色泥砂(礫を含む)
- 6 10YR5/4 に近い黄褐色泥砂(粘性強い・炭湿する)
- 7 10YR6/3 に近い黄褐色泥砂(土師器片・炭化物混じる)
- 8 10YR3/2 黒褐色泥砂(土師器混じる)
- 9 10YR4/4 褐色砂泥(良<縮まる)
- 10 2.5Y7/6 明黄褐色粗砂
- 11 2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂(土師器混じる)
- 12 10YR4/2 灰黄褐色泥砂
- 13 10YR5/4 に近い黄褐色泥砂
- 14 10YR4/2 灰黄褐色泥砂
- 15 10YR6/3 に近い黄褐色泥砂(炭化物混じり)
- 16 10YR5/4 に近い黄褐色泥砂(炭化物混じり)
- 17 10YR5/1 暗灰黄色砂礫(中世遺物有り)【SD11】
- 18 10YR3/2 灰黄褐色砂礫(流木の泥がまどわりつく・粘性強い)【地山】
- 19 2.5Y6/2 灰黄色砂礫【地山】

- 1 2.5Y4/1 黄灰色泥砂(漆喰・江戸瓦等入る)
- 2 2.5Y3/2 黄灰色泥砂(土師器皿等含む)
- 3 2.5Y4/4 才一ノ灰色砂泥
- 4 2.5Y5/3 黄灰色泥砂
- 5 2.5Y6/2 灰黄色砂礫【地山】

図75 試掘調査 各調査区平面・断面図 (1:100)

第1面



第2面

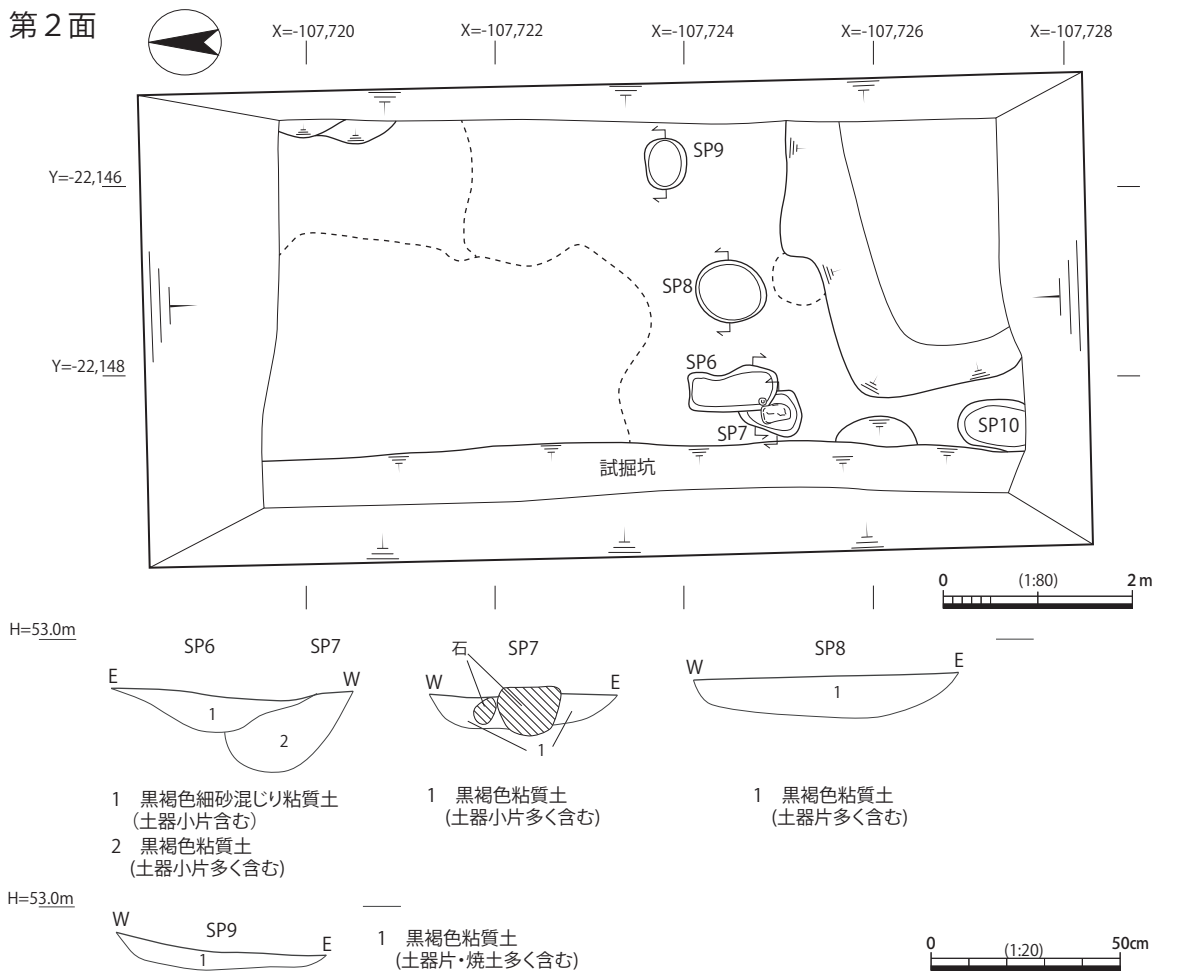


図76 補足調査区平面図 (1:80)・遺構断面図 (1:20)

第3面

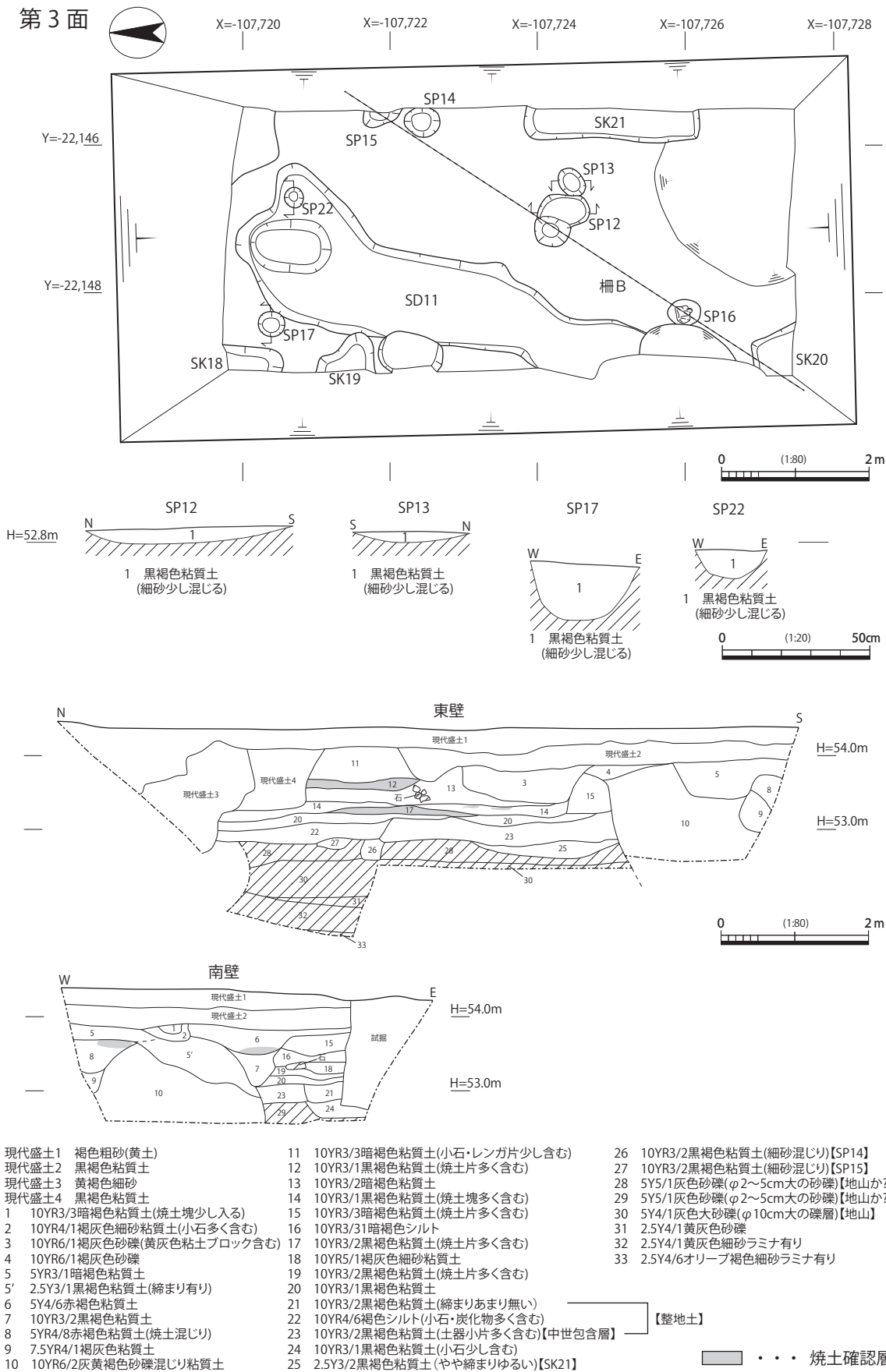


図77 補足調査区平面図・断面図(1:80)・遺構断面図(1:20)

3 遺物

検出した遺構からは遺物が出土しているが、いずれも細片である。これらのうち、図化できるもののみを抽出し、以下に掲載する。

1～4はSP6から出土した。いずれも土師器皿である。口径は1～3が8.4～10.0cm、4は12.0cm。いずれも口縁部が外反する。

5～10はSD11から出土した。5は瓦器碗である。口縁部は内傾し、端部は上方にむかう。端部内側に沈線が施される。ミガキは摩滅により認めにくいだが、内面に細かい刷毛目が確認できる。6は瓦質土器鍋である。受け口状の口縁部をし、体部内面には刷毛目が施される。7は瓦質土器羽釜の脚である。8は緑釉陶器碗の高台部分である。胎土は浅黄橙色で、オリーブ灰色でやや暗めの釉調であることから京都産と考えられる。9は白磁碗である。内面には8条一単位の櫛描文が施される。10は石鍋の一部である。口縁部が残存していると思われ、端部は丸く仕上げられる。ただケズリ出しの調整痕跡が著しく残ることから、石鍋を温石などに再利用した際の調整痕跡であると考えられる。やや古い遺物も混じるが、概ね鎌倉時代前半と考えられる。

11～14はSP14から出土した。いずれも土師器皿である。11はいわゆる「へそ皿」である。口径5.8cm、器高1.4cm。口縁部は外反し、端部を上方につまみ上げる。12～14の口径は10.0～12.0cm、器高は1.4～2.0cm。口縁部は外反し、端部を丸く仕上げられる。14はやや肥大気味になる。概ね室町時代と考えられる。

15～19はSP16から出土した。15～18は土師器皿である。口径は8.0～8.1cm、器高は1.1～1.9cmである。19は瓦質土器皿である。口径は12.6cm、器高は3.4cm。口縁部は内傾しながら上方に立ち上がる。口縁部外面の上1/2に炭素の吸着が認められる。内外面に磨きは施されず、ナデと指オサエの痕跡が確認できる。概ね鎌倉時代前半と考えられる。

20～26は1～2面間整地土(図77-5層)から出土した。20は土師器皿である。内面見込みには圈線が認められる。21は京焼の碗である。22は焼塩壺である。体部上半部の1か所に「泉湊伊織」の前2文字「泉湊」のスタンプが確認できる²⁾。23は石臼の一部である。芯棒孔が確認でき下臼と考えられる。回転時の使用痕も確認できる。

24～26は1～2面間整地土(図77-19層)から出土した。いずれも土師器皿である。24・25は小皿で口径7.0～8.0cm、器高は1.4～1.8cm。26は大皿で口径16.0cm、器高は2.5cm。

27～30は2～3面間整地土(図77-21～23層)から出土した。27～29は土師器皿である。口径は8.2～9.0cm、器高は1.0～2.2cm。30は政和通宝(1111年初鑄)である。

31は攪乱から出土した。青磁皿である。口径9.2cm、器高2.4cm。体部中位で屈曲し、口縁部を上方に引き出す。全体的に肉厚で全面を施釉後、底部をカキトリにて露胎とする。龍泉窯産か。

4 まとめ

今回の調査では、江戸時代、室町時代後期、鎌倉時代から室町時代の3面を確認した。いずれの

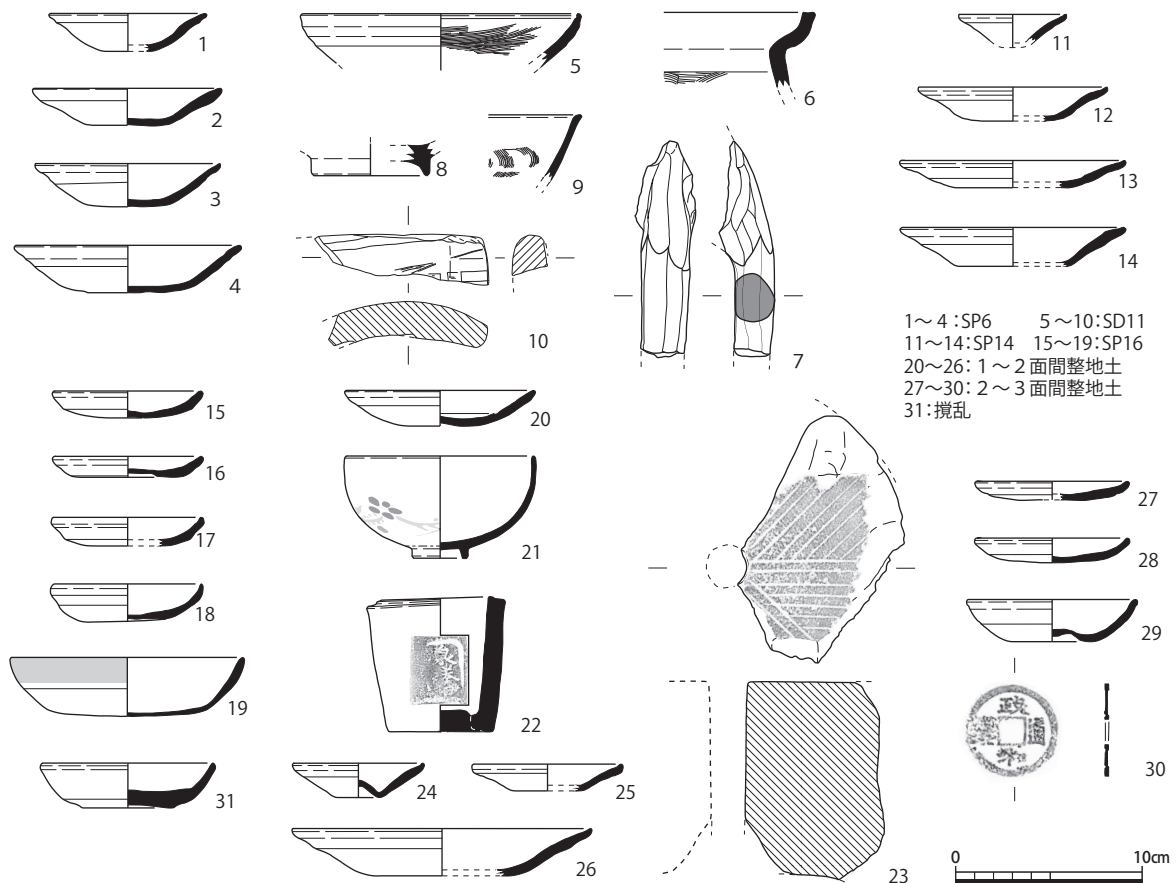


図78 出土遺物実測図 (1:4)

面でも柱穴や土坑を確認したが、明らかに建物だと判断できる遺構は確認できなかった。しかし第1面では焼土面、第2面では整地層などの遺構面が認められる。

周辺調査事例でも烏丸今出川交差点から今出川通から本調査地までの間、今出川通沿いで行われている立会調査では室町時代の包含層を確認しているのみで目立った遺構は確認されていない。しかし上京区役所での調査では廃棄土坑など町家の裏手を示す遺構が多数確認されていることから、現在の今出川通（中世：北小路）から両側20mほどの間に建物、これより奥では町家の裏手の様相が広がると想定できる。今回の調査地は今出川通より南に24~34mに位置していたことから、町家の裏手の様相が想定できた。しかし当該地では、周辺調査事例のように廃棄土坑が乱立している状況ではなく、町屋の建物部分にあたると思われる。

また当該地は、足利義視の「今出川殿」や細川勝元の「北小路第」など屋敷が想定されており、広い区画での土地利用が行われていたと仮定するならば、当該地に上記の屋敷が想定できる可能性もある。しかし現状では、その所在地を明確にできるほどの資料は確認できず、今後、周辺調査事例の増加をまって、当該地周辺の土地利用を再考したい。(奥井 智子)

註

- 1) (財)京都市埋蔵文化財研究所『上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-2, 2011年。
- 2) 田中一廣「泉州名産『焼塩壺』- 京都・護王神社境内及び妙心寺塔頭出土資料の紹介をかねて -」『関西近世考古学研究Ⅱ』関西近世考古学研究会, 1992年。

IV-6 法住寺殿跡 No.110

1 調査の経緯（図79・80）

本件は、参進閣の建て替えに伴う試掘調査である。調査地は法住寺殿跡に該当し、蓮華王院本堂（三十三間堂）の隣接地である。

蓮華王院は、後白河天皇によって院御所の西側に造営された堂塔群であり、三十三間堂はその本堂にあたる。造営時期は明らかではないが、『醍醐雑事記』によれば長寛2年（1164）に落慶供養が執り行われたことが分かる。また、建長元年（1249）には焼失・修造の記録がみられる。天正14年（1586）には、方広寺造成に際して山内寺院として編入された。

本計画のうち、新規掘削の部分に関しては先行して試掘調査を実施し、発掘調査が行われた。この調査で、三十三間堂に伴う地業や造成土が確認されている。その中でも、三十三間堂の北側に設けられた1区では、地業の構築単位が南北方向に確認された点は特筆される。しかし、解体建物（旧参進閣）のあった範囲については、基礎で大きく削平を受けてたため、協議の結果、基礎の浅い部分2箇所を対象に試掘調査を実施することとなった。発掘調査は別途、報告書が刊行されるため、ここでは試掘調査の成果について主に報告する¹⁾。ただし、本調査は新規掘削範囲で実施された発掘調査区と近接もしくは一部重複することから、必要な範囲でその成果に触れる。

なお、調査は7月4日に実施し、調査面積は計15㎡である。

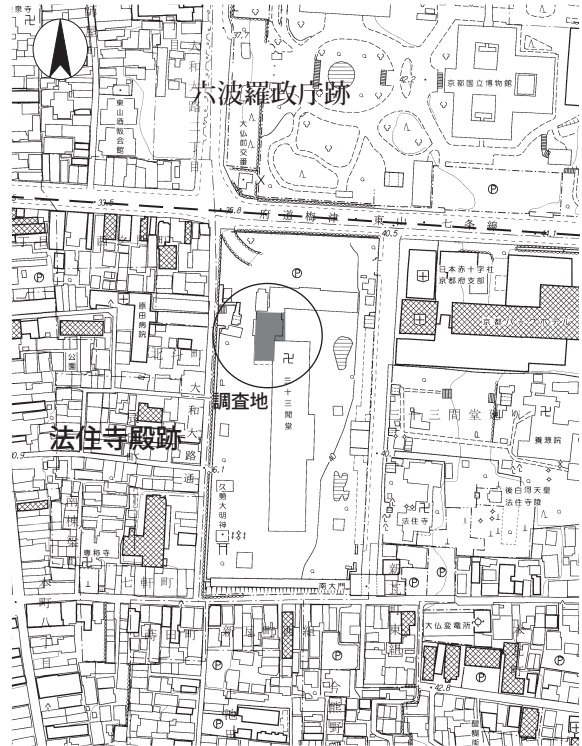


図79 調査位置図（1：5,000）

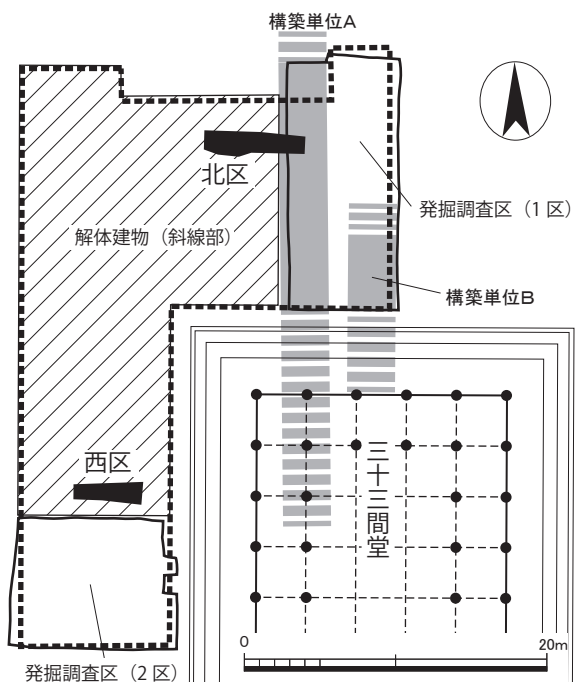


図80 調査区配置図（1：500）

2 層序と遺構

調査区は、三十三間堂の北区と西区に設けた。以下、各調査区ごとに成果を述べる。

北区 この調査区は、発掘調査区(1区)と一部重複する位置関係にある。層序は、現代盛土の直下に近世瓦を含む整地層が存在し、その下のGL-0.95mで三十三間堂の地業となる。この地業の下層で創建時の整地層と考えられる黒褐色泥砂・オリーブ黒色泥砂(17・18層)を確認した。整地層直下の、GL-2.55mでオリーブ黄色砂泥(19層)の地山となる。

地業は、整地層と考えられる黒褐色泥砂層とオリーブ黒色泥砂の上に構築されている。残りの良い箇所では、1.05mほどの厚さで遺存していた。土層の様相や層序から、大きく2つに区分できる。調査区西半で確認できる地業の核となるもの(7~14層)と、その外側に積まれた土層である(3~6層)。地業の核となる部分は、細かい単位で盛土されており、比較的水平に積まれる。それに対して、核の東側では大きな単位の土を斜め方向に積み上げる。このような様相は発掘調査でも確認されている。また、核となる部分と外側の盛土の間には小礫が配されている点は注目される。

本調査で確認した地業の核となる

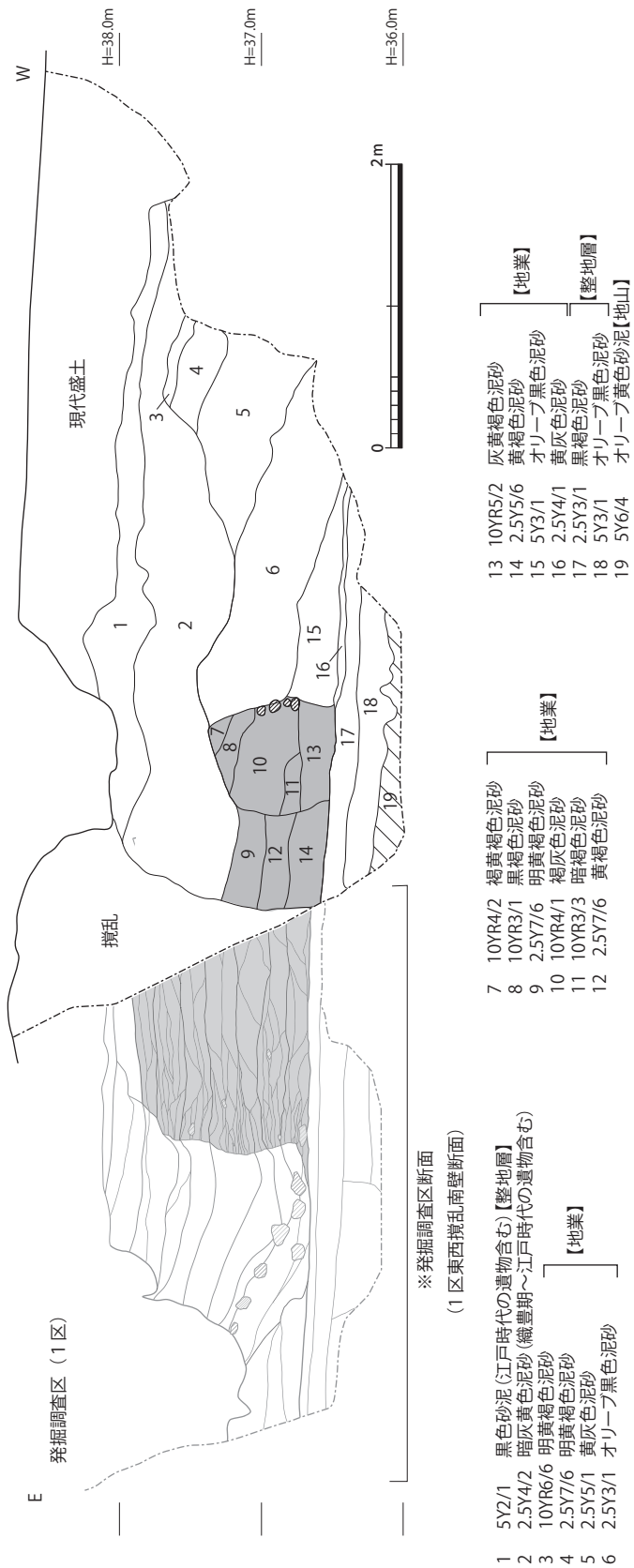


図81 北区南壁断面図(1:50)

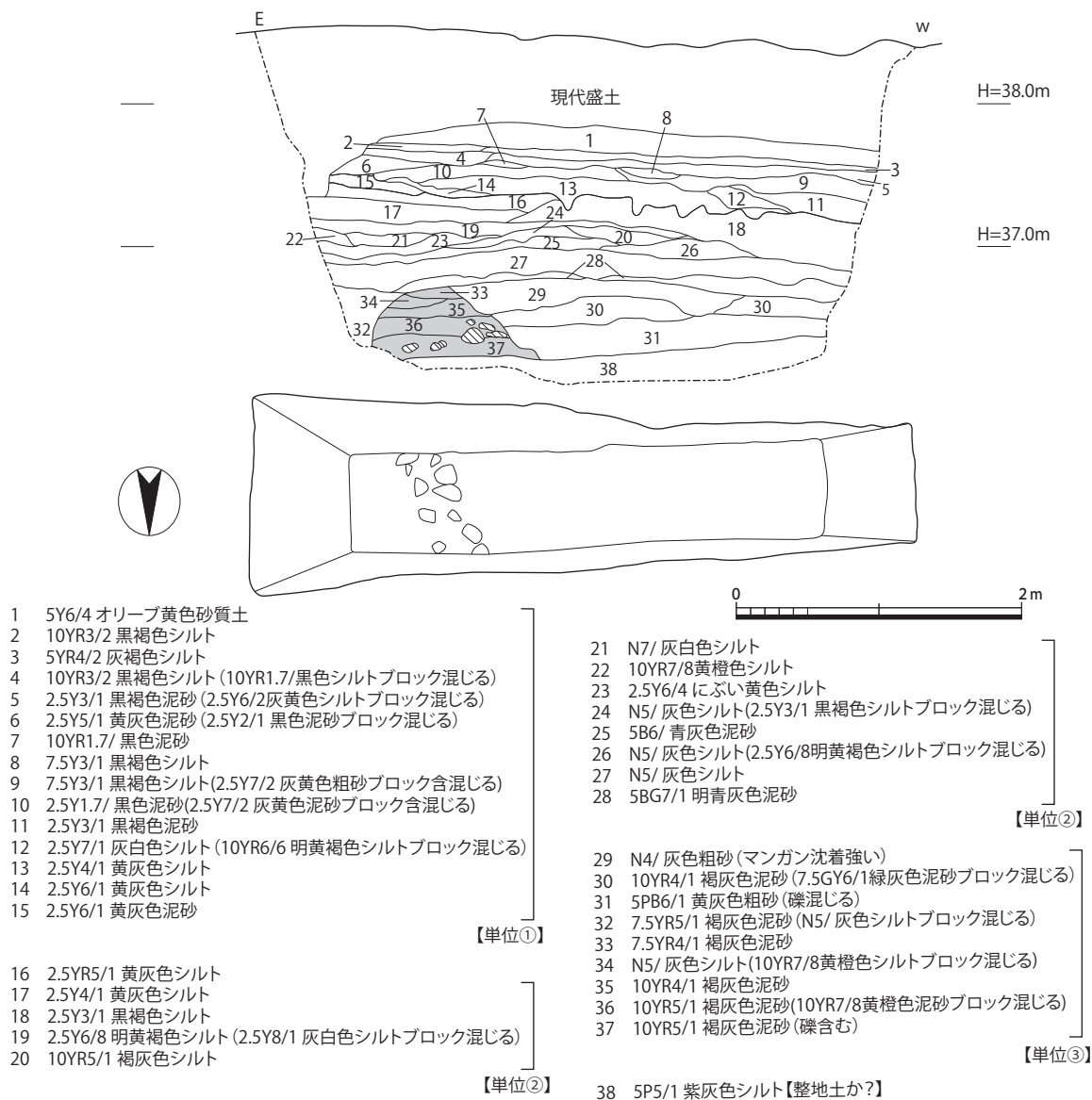


図82 西区平断面図(1:50)

盛土は、発掘調査区(1区)で確認された構築単位Aと同一のものと考えられる。構築単位Aは南北に伸び、その長さが14m以上におよぶことが判明している。ただし、調査範囲の制約により幅については不明であった。しかし、本調査成果から東西幅が2.8m~3.4mほどになることが判明した²⁾。発掘調査では、こうした畝状単位を少なくとも2本以上確認していることから、南北方向に長い畝状単位を複数設けて地業を行ったと考えられる。また、構築単位Aは三十三間堂の西側柱列の延長部にあたることから、地業と建物が連動してた可能性が推定できる。なお、この地業を行うに際して畝状単位を先に構築したのか、あるいは同時に構築したものの結果的に畝状単位として認識できるのかについては確証を得ることはできなかった³⁾。

西区 層序は、盛土直下のGL-0.6mから掘削底のGL-2.35mまで造成土となる。造成土は、土層の様相から、大きく3つの単位に分けられる。ここでは、単位①(1~15層)、単位②(16~28層)、単位③(29~37層)とする。各単位の厚さは0.4~0.5mほどで、水平に積む事を基本とす

る。ただし、単位③のみ異なる土の積み方が確認できる。すなわち、核となる部分を構築する点である。核となる部分は比較的細かい単位で土が盛られており、北区で確認した地業の畝状単位と類似する。しかし、その中に人頭大の礫が認められる点は特徴的である。この礫は、核となる盛土の中に配されており、一列2～3個の石材をほぼ水平に並べる。南東から北西方向へと延び、調査区外へと続く。本調査区では、地山の確認ができておらず不明な点が多いが、造成の最初の段階のみこのような工法がとられた可能性がある。

3 遺物 (図83)

本調査で出土した遺物は、非常に少ない。掲載した遺物は北区の18層から出土したものである。1～4が土師器皿、5～7が緑釉陶器、8が土師器の甕である。京都Ⅲ期を中心とした時期の遺物であるが、一部に平安時代前期に遡る遺物も認められる。

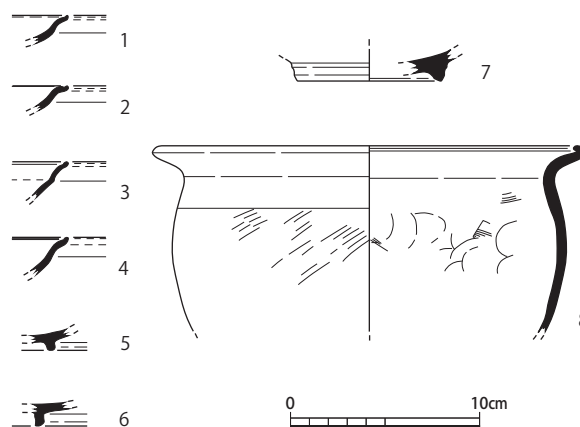


図83 遺物実測図 (1 : 4)

4 まとめ

今回の調査で、三十三間堂に伴う地業や造成土に関する具体的な知見を得ることが出来たのは大きな成果といえる。本調査で確認したものと同様の地業は、鳥羽離宮跡安楽寿院の九体阿弥陀堂、造成の工法に関しては尊勝寺跡などで認められる。これらとあわせて、土木技術史を考える上で当時の水準を知ることが出来る貴重な事例である。しかし、調査が実施されているのは局所的であり、かつ造営前の地形など不明な点も多く残されている。今後の調査・研究の進展に期待したい。

(熊井 亮介)

註

- 1) (公財)京都市埋蔵文化財研究所「法住寺殿跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-3』, (公財)京都市埋蔵文化財研究所, 2016年。
- 2) 断面図作成位置は近接しているが、厳密には一連の断面ではない。また、解釈によっても多少の誤差が生じると考えられることから、ここでは幅をもたせておきたい。
- 3) 各土層の重なり方を観察する限り、畝状単位は先に構築されたのではなく他の単位とある程度、並行して構築されたものと考えておきたい。

IV-7 鳥羽離宮跡 No.122

1 調査の経緯 (図84・85)

本件は、事務所建設に伴う試掘調査である。計画地は鳥羽離宮跡の東辺部にあたり、東殿の北東に位置する。鳥羽離宮の東辺部では、これまでに離宮存続期の遺構は点的に確認されているのみで、その様相について不明な点が多い。また旧鴨川の氾濫原に近いことから、景観復元が困難な場所でもある。

東接地では、平成27年に試掘調査が実施されているものの、中世の耕作土を確認したのみで、鳥羽離宮に伴う遺構は確認されていない。

以上の点を踏まえ、鳥羽離宮に伴う遺構の確認を目的として調査を4月6日に実施した。調査面積は30㎡である。

なお、本件については発掘調査を指導したが、具体的な取扱いは現時点で協議中である。

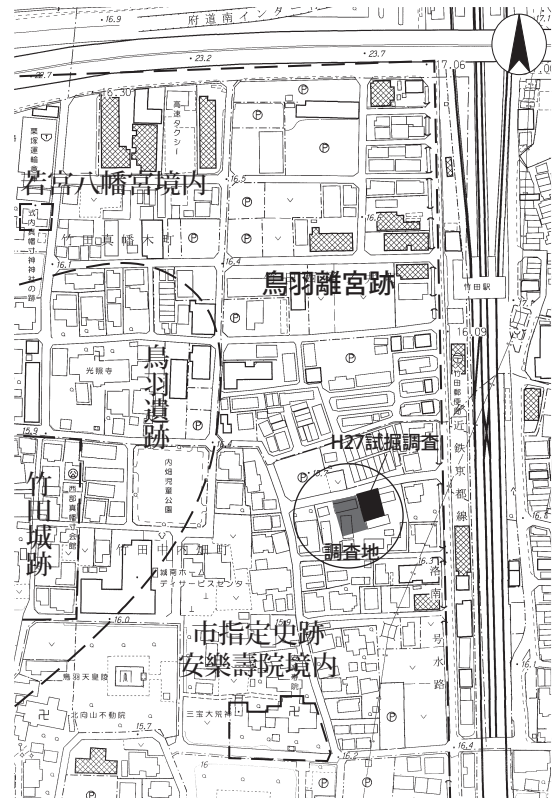


図84 調査位置図 (1 : 5,000)

2 層序と遺構・遺物 (図86・87)

調査区は、計画範囲内にT字形に一箇所設けた。層序は、GL-0.95mまで盛土・旧耕土が存在する。その下に近世～中世の耕作土が数層認められ、GL-1.4mで鳥羽離宮期の遺構面となる。

調査の結果、調査区の中央部で園池の一部とみられる陸部を検出した。陸部の規模は、南北約7.7mで東西は1.5m以上となる。東側は調査区外へと続く。陸部の南北には池の堆積土とみられるオリブ黒色シルトが広がる。地山と考えられる灰色細砂をGL-1.65mで確認しているが、それと陸部の最高所の比高差は0.25mほどとなる。この陸部を構成する黄灰色細砂には土師器片などが認められることから、人為的な盛土と考えられる。陸部の上面には人

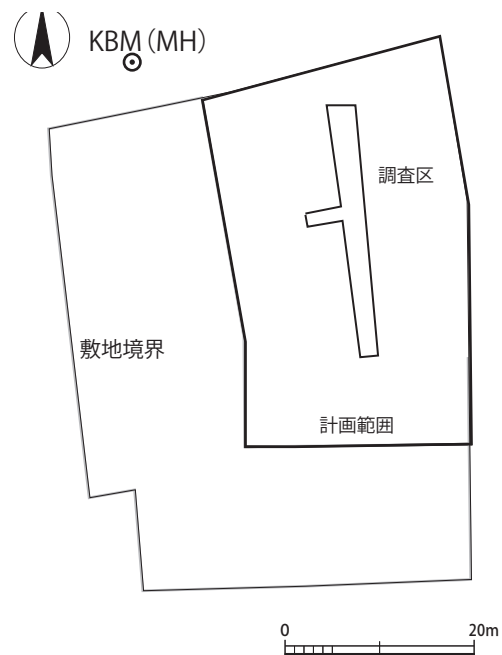


図85 調査区配置図 (1 : 800)

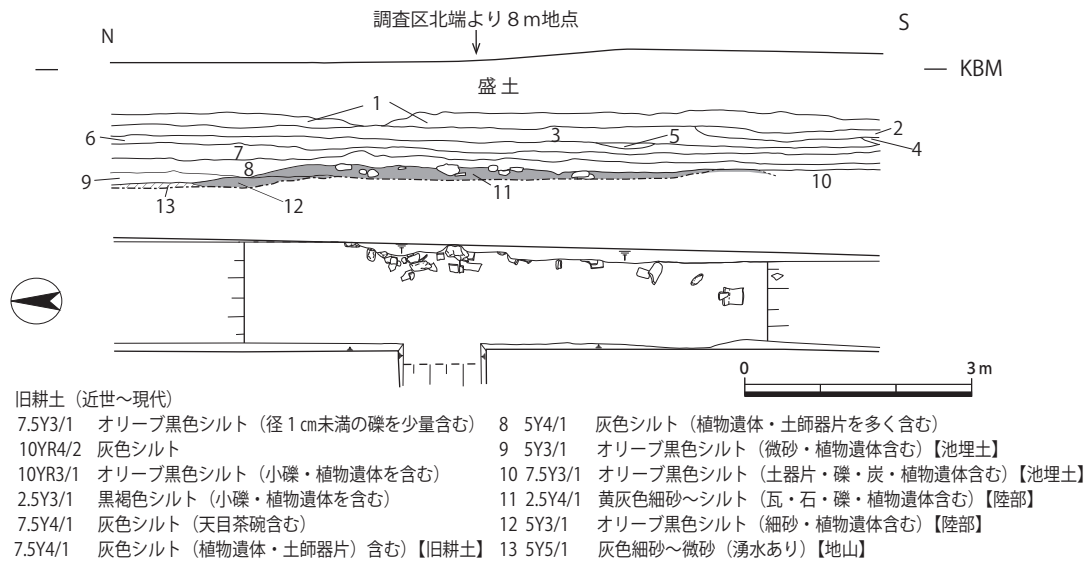


図86 調査区中央部 平断面図 (1:100)

頭大の礫や瓦がまとまっていたが、計画的な配置は認められず、柱穴などの遺構も確認できなかった(図87 - 4~7)。陸部が非常に脆弱な細砂で構成されていることを踏まえるならば、氾濫等の影響を受けたことにより遺構を検出できなかった可能性や、確認した礫や遺物が調査区外の陸部に由来するものである可能性がある。なお、池の堆積土と考えられる9層や陸部を構成する11層からは一定量の土師器が出土しているが、その時期は京都V期におさまるものである(図87 - 1~3)。なお、瓦は9・11層などから出土した。

3 まとめ

今回、鳥羽離宮の東辺部で園池の一部を検出した点は大きな成果といえる。しかし、その汀の形状や陸部における遺構の展開など不明な点も多い。今後の調査に期待したい。

(熊井 亮介)

註

1) 黒須亜希子「IV - 6 鳥羽離宮跡No.109」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成27年度』京都市文化市民局, 2016年。

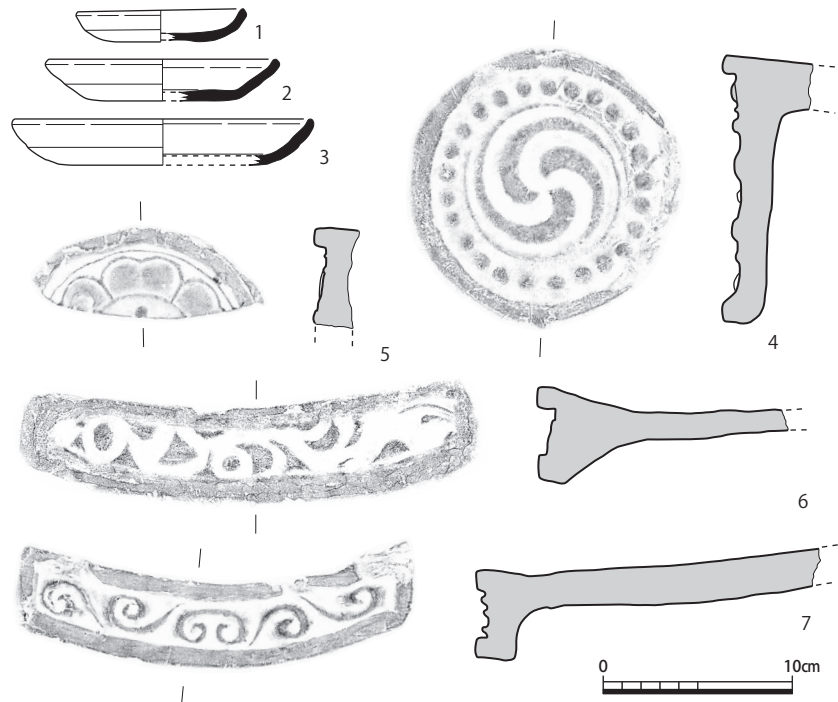


図87 遺物実測図 (1:4)

IV-8 史跡及び名勝 嵐山 No.31

1 はじめに (図88)

調査地は、西京区嵐山上海道町74-15, 74-16で、史跡及び名勝嵐山に該当する。

この場所で建物の建設が計画されたため、試掘調査をおこなった。

周辺では、嵯峨街道沿いで平成18年度に試掘調査をおこなっており、江戸時代後期以降の石垣を検出している。この石垣は現在の道路西端よりも2.7m西に位置する。古道にかかわるものか屋敷にかかわるものか、その性格は明らかではない¹⁾。

今回の調査区は敷地にあわせて東西方向に約5.0m設定した(図89)。調査面積は5.2㎡である。

2 層序と検出遺構 (図90)

基本層序は、現代盛土(～GL-1.1m)、明黄褐色砂泥(①層, ～-1.3m)、灰黄色細砂(②層, -1.3m～)である。②層は洪水堆積とみられる。顕著な遺構は検出されなかった。



図88 調査位置図 (1 : 2,500)

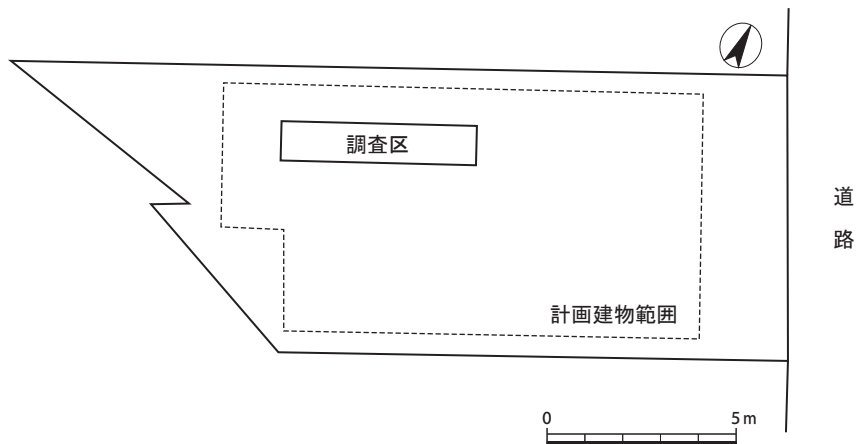


図89 調査区配置図 (1 : 200)

3 遺物 (図91)

②層から石製巡方 (平安時代) が完形で1点出土した。②層は洪水堆積とみられ、巡方は上流である北側から流されてきたものと考えられる。

巡方は幅3.2cm、長さ3.0cm、厚さ0.6cmで中央下寄りに1.5×0.5cmの垂孔を穿つ。色調は淡緑系のものであるが風化が激しい。淡緑系の石帯は京都市内で最も多く出土する色調のものである。垂孔は幅が広い部類に属し、穿孔に際しては四隅に小さな穴をあけ、その間を針金状の工具と研磨剤を用いて長方形に切り抜く方法 (技法A) をとっている²⁾。潜り穴は四隅に縦方向に穿つ。近接した2箇所小さなくぼみをつけ、そこから細い穴をあけて2つの穴をつなぐ方法をとっている。表面と側面は丁寧に研磨するが光沢は弱い (研磨C)、また裏面は研磨が粗く、二次工程での加工痕を残す (研磨E)。厚さが0.6cmと比較的薄いことから、平安時代の中でも新しい時期のものとみられる。

4 まとめ

平成18年度の試掘調査でみつかった石垣の延長は、今回の調査区の西側に想定される。しかし、石垣を検出したのはGL-0.3mと浅く、今回の敷地では-1.1mまで現代盛土が及んでいることから、遺構面は削平されたものと考えられる。ただし、平安時代の石製巡方が出土したことは重要な調査成果である。史跡及び名勝嵐山指定地内では、これまでに桂川左岸の右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町でおこなった発掘調査³⁾で、天龍寺門前町を区画する室町時代の濠から石製巡方が1点出土している。今回出土した石製巡方は史跡及び名勝嵐山では2点目となる。平安時代から別荘地として開発された嵐山地域の一端を窺い知る重要な成果といえる。

(家原 圭太)

註

- 1) 京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』2008年。
- 2) 今回出土した石製巡方については平尾政幸から御教示をいただいた。(平尾政幸「平安京の石製銚具とその生産」『研究紀要 第7号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 2001年。)
- 3) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財調査概要 平成4年度』1995年。



現代盛土

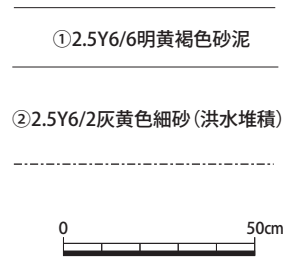


図90 北壁断面柱状図 (1:20)

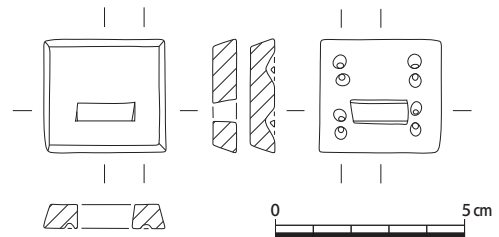


図91 出土遺物実測図 (1:2)

IV-9 大藪城跡・大藪遺跡 No.135

1 調査経過（図92・93）

調査地は、市立久世中学校より南東へ500m程度隔てた地点に位置する。敷地の北辺は大藪街路に面し、東辺は南流する農業用水路に接している。この水路が大藪城の東を限る濠の名残と推測されており、調査地は大藪城跡の東辺部にあたると考えられている。

近隣では、平成22年度に大藪街路建設に先立つ発掘調査において、室町時代後期～江戸時代初頭の遺構面が検出されている¹⁾。このうち特に今回の調査地に北接する範囲では、掘立柱建物や井戸、溝、土坑が稠密に検出されたほか、大藪城の東門と考えられる柱列及び柵列が確認された。このため今回の調査地においても、これらの遺構群が連続することが予測された。また調査地は、弥生時代後期～古墳時代初頭の集落遺跡である大藪遺跡の東辺にあたることから、関連する遺構の検出も期待された。

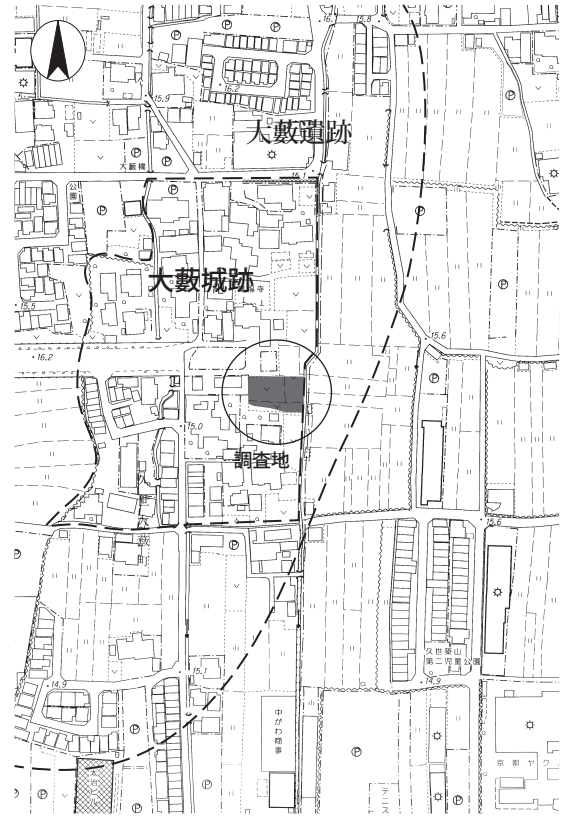


図92 調査位置図（1：5,000）

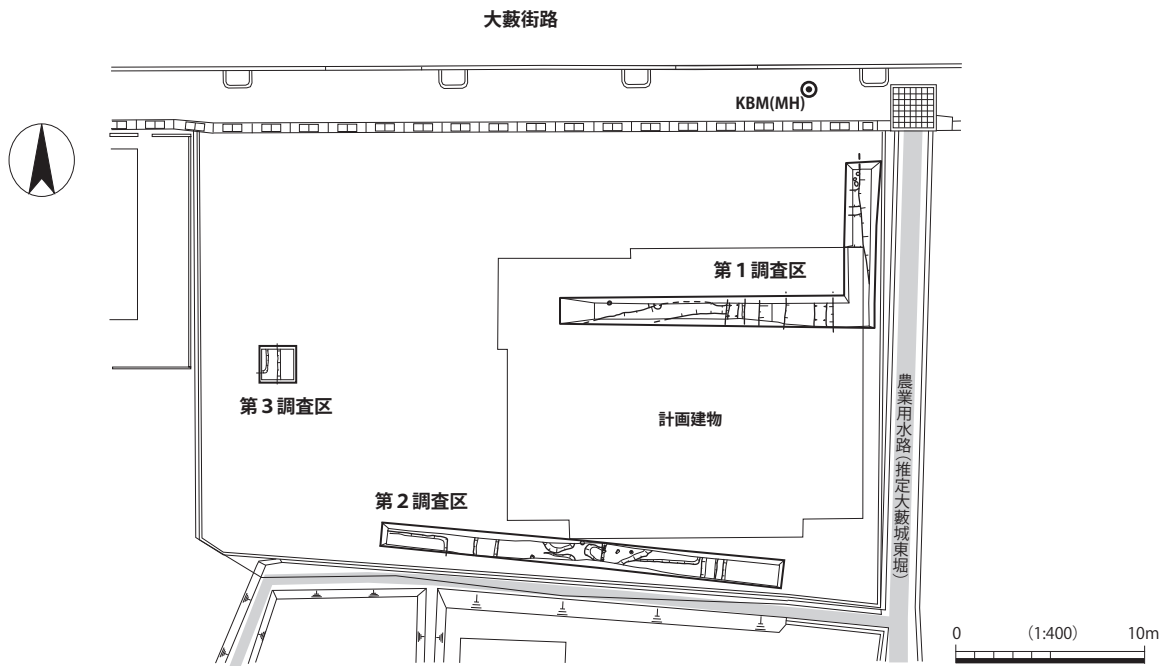


図93 調査区配置図（1：400）

2 層序と遺構（図95）

調査区は、建物計画範囲と擁壁設置予定範囲を中心として3箇所を設定した。掘削の結果、15～20cm程度の表土の下に、約20cmの層厚をもつ近世後期包含層（1層）と約10cmの中世後期包含層（2層）があり、その直下において黄褐色微砂混じり粘土質シルトを主体とする地山を確認した。大藪城期の遺構面は2層除去面（地山上面）において検出した。遺構面に特に大きな起伏はないが、僅かに西が高く、東へ向かって緩やかに下がる。

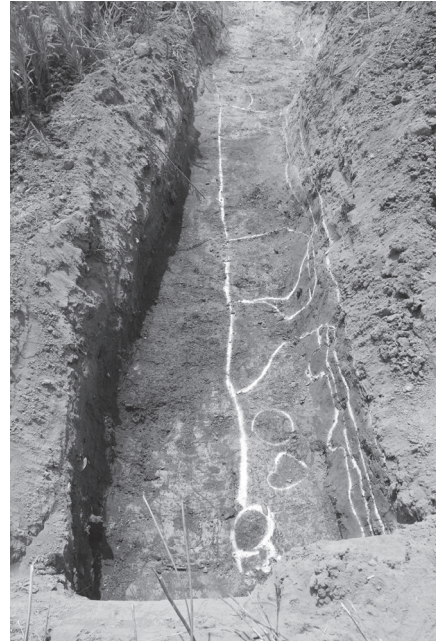


図94 第1調査区遺構面検出状況

第1調査区 敷地の東辺付近に設定した第1調査区では、南北方向にのびる溝とこれに切られる東西方向の小溝、ピットを検出した。このうち、水路に沿って検出した溝1は、既往の調査において確認された大藪城の東堀の一部であると推測

される。また、同じく南北方向にのびる溝2は最大幅2.3mを測る大型遺構であり、城の内堀として認識される。既往の調査報告では、並行する両溝の間に土塁の存在が想定されているが、今回の調査では、その痕跡を確認することはできなかった。

第2調査区 敷地の南辺に設定した第2調査区では遺構の残存状態は悪いものの、わずかに南北方向にのびる溝を2条検出した。また、調査区の中央部では、土坑やピットを複数検出した。

第3調査区 遺構面の深度を確認するため、第3調査区を敷地の西半部に設定した。ここでも近世堆積層の下に中世包含層が良好に残存し、南北方向の溝を1条検出した。また上面では、近世前期の土坑を1基検出した。

以上の成果から、大藪城期の遺構面は敷地全体に残存することが明らかとなった。

3 まとめ（図96）

今回の調査成果を既往の報告に加えたものを図96に示す。

これまでの調査により、大藪城は南北220m、東西160m程度の規模に復原されている。遺跡の中央を東西に貫く形で行われた大藪街路範囲の発掘調査では、西と東に大溝が検出され、これが西堀と東堀に比定された。堀の内側には南北・東西方向にのびる小溝が複数あり、これが直状あるいは鍵状に屈曲して城内を縦横に通る。

今回の調査では限られた面積ながら複数の溝が確認された。このうち調査区の東端で検出された溝1は東堀の一部であると考えられる。西岸に杭列を設けることから、護岸が為された施設であったと考えられる。南北にのびる溝2・溝3・溝4はそれぞれ（2010-13）調査・（2010-9）調査の溝3B・SD41・SD50に連続すると推測される。これらの溝群は建物の区画溝であると同時に、生

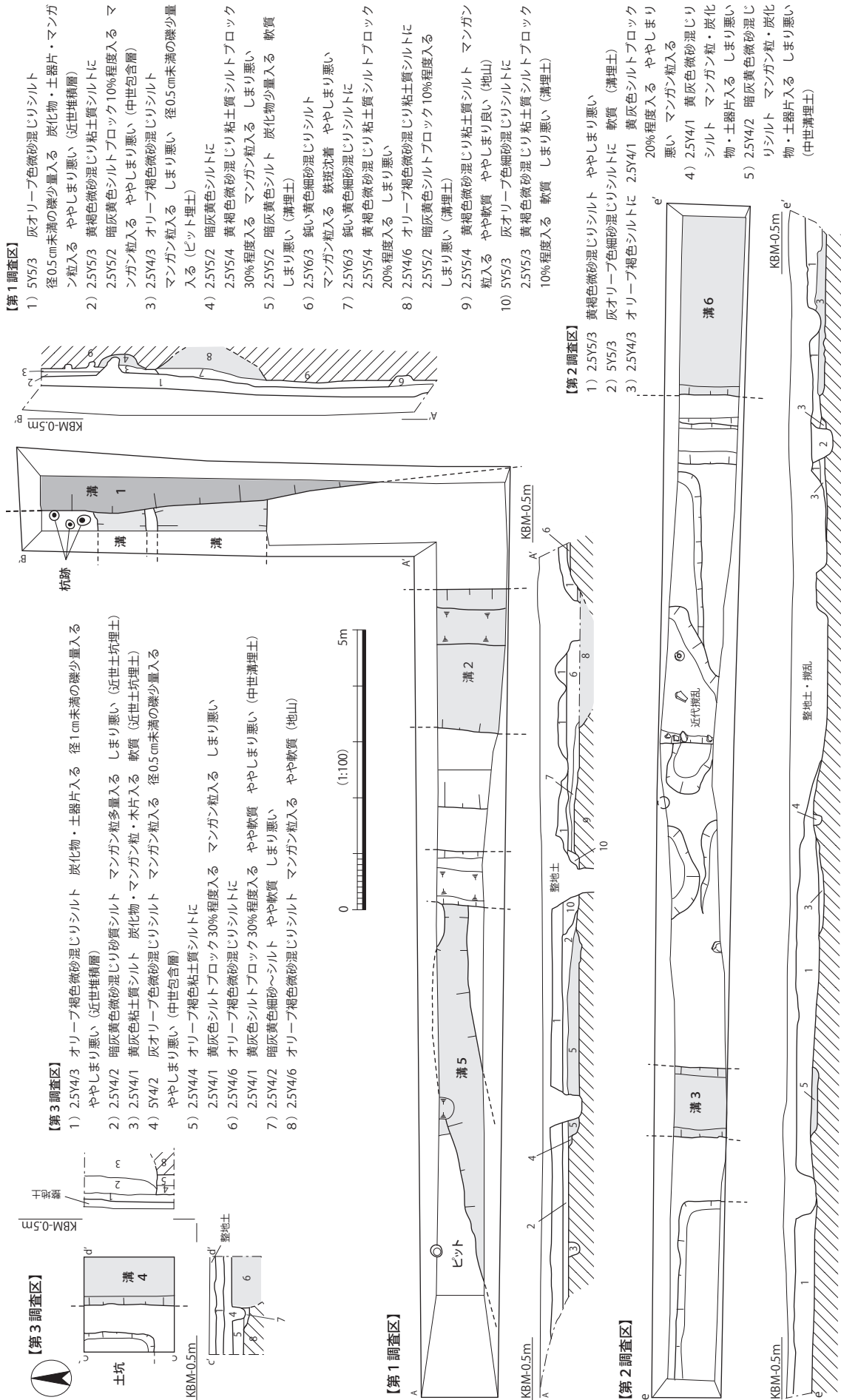


図95 遺構断面図・平面図 (1:100)

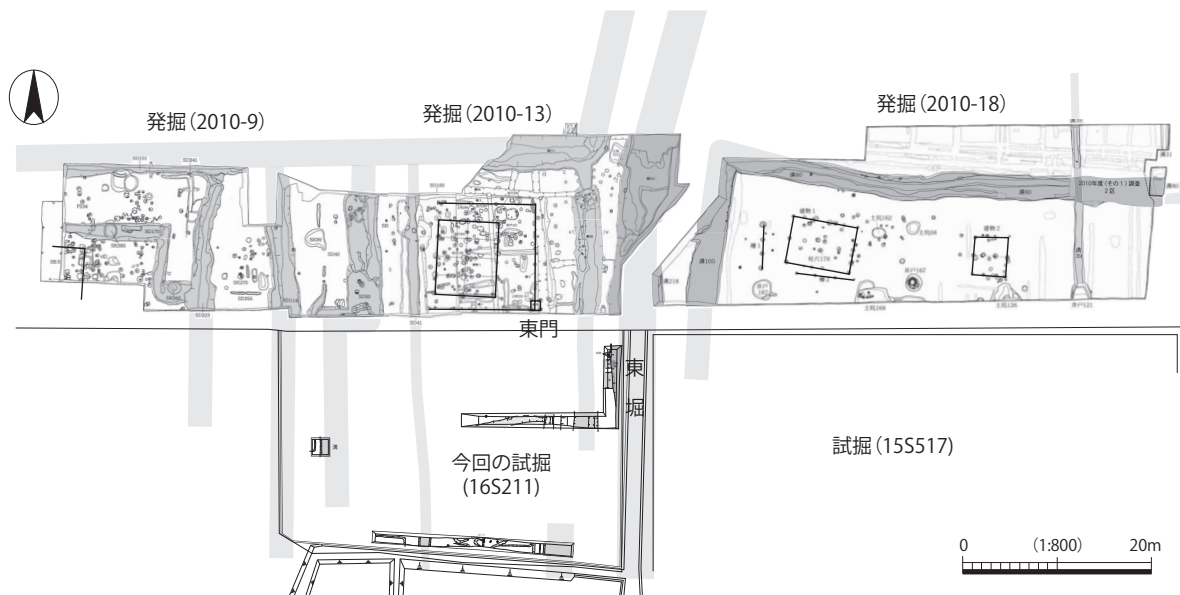


図96 大藪城跡遺構面接合図 (1 : 800)

活排水施設であり、かつ湿潤な環境から住空間を守る排水溝であったと考えられる。より低地である城内の東半部に溝が集中するのはこのためであろう。

城内に立地する掘立柱建物や柵列、井戸等は、これらの溝に囲まれるように存在することが明らかとなっている。今回の調査では明確な建物跡を確認できていないが、溝1と溝4までの範囲において僅かながらピットや土坑を検出した。これにより、城内の居住域がより南側へ広がることを確認できたといえる。大藪城跡の南北限はまだ確認されていないため、今回検出された遺構の存在はその規模を推定する証左となる。

なお大藪城期において特に遺構が稠密となるのは室町時代後期であるが、今回の調査では近世に下がる遺構も複数確認した。住居域は室町時代には東堀の外側(2010-18調査区)へも拡大したが、近世には続かずやがて耕地化する。その南側で行われた試掘調査(15S517)でも近世以後は耕地として利用されたことが報告されている。現在残る旧集落は東堀より西に立地するが、この景観は近世初頭の大藪城終息の後に形成されたとみられる。(黒須 亜希子)

註

1) 大藪街路建設に伴う発掘調査には以下のものがある。

(財)京都市埋蔵文化財研究所『大藪遺跡・大藪城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘報告2010-9, 2010年。

(財)京都市埋蔵文化財研究所『大藪遺跡・大藪城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘報告2010-13, 2011年。

(財)京都市埋蔵文化財研究所『大藪遺跡・大藪城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘報告2010-18, 2011年。

表4 遺物概要表

	Aランク点数 (箱数)	内訳	Bランク点数 (箱数)	Cランク点数 (箱数)	出土箱数 合計
点数 及び 箱数	235点(6箱)	土師器皿142点, 須恵器16点, 瓦器21点, 緑釉陶器6点, 灰釉陶器2点, 焼締陶器7点, 施釉陶器7点, 輸入陶磁器13点, 近代磁器 1点, 軒丸瓦3点, 軒平瓦4点, 丸瓦2点, 飾り瓦1点, 埴5点, 石製品3点, 貨銭3点	5箱	28箱	39箱

V 試掘調査一覧表

平成27年度1～3月

平安宮

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
1	大蔵庁跡	上京区七本松通仁和寺街道上る一番町107の一部	2/18	GL-0.64mまで現代及び近世盛土。以下地山を確認。	63㎡	15K409
2	外記跡・聚楽第跡	上京区出水智恵光院西入田村備前町243-18, 19	1/14	GL-1.7mまで近世攪乱。以下で明黄褐色粘質土の地山を確認。聚楽第の濠は確認できず。	10㎡	15K541
3	右馬寮跡	中京区西ノ京右馬寮町2-6, 2-7, 2-8	3/30	GL-0.4mで近世耕土, -1.2mまで水成礫層が続く。	18㎡	15K687

平安京左京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
4	北辺二坊八町跡	上京区小川通中立売下る小川町204	1/26, 27	GL-1.3mの地山直上で溝・落込み・土坑・堀を確認。 本文3ページ。	56㎡	15H309
5	三条四坊十五町跡	中京区御幸町通御池上る亀屋町395-1他	3/28	GL-1.2m以下で中・近世～平安時代までの遺構・遺物を確認。	11㎡	15H567
6	四条三坊三町跡	中京区新町通錦小路上る百足屋町387	2/1	GL-2.6mまで近現代盛土の下, 中世整地土を挟み, -2.9mで灰オリーブ色シルト, -3.25mでにぶい黄褐色シルトの地山を確認。	50㎡	15H414
7	八条四坊七町跡	下京区小稲荷町61他地内	3/14	GL-1.0mまで現代盛土, 以下江戸時代後期の遺物を含む包含層, -1.3mまで氾濫堆積層で砂礫層。	17㎡	15H560
8	八条四坊十一町	下京区下之町14-2他地内	3/15, 16	GL-0.85mまで現代盛土, -1.0mまで近・現代耕作土, -1.1mまで黄褐色シルト～極細砂, 以下黄褐色砂礫からなる氾濫堆積層を確認。	26㎡	15H558
9	八条四坊十一町	下京区下之町22-4他地内	3/15, 16	GL-1.2mまで現代盛土, 以下現代耕作土, 床土, -1.5m以下は氾濫堆積の砂礫となる。	77㎡	15H559

平安京右京地区

番号	遺跡名	所在地	試掘日	調査概要	面積	受付番号
10	一条四坊七町跡・史跡妙心寺境内	右京区花園妙心寺町62	1/28	1Tr.GL-0.2mで礎石, 3Tr.GL-0.2mで地山を確認。	9㎡	27N029
11	五条四坊十四町跡・西京極遺跡	右京区西院東貝川町90,91	3/9	GL-1.6mで中世耕土, -1.7mで地山を確認。	40㎡	15H555
12	六条三坊二町跡・西院遺跡	右京区西院南寿町19,20	2/29	各調査区とも表土, 旧耕作土直下, GL-0.2～0.3mで地山。地山上面で平安時代前期を中心とする遺構群を確認。 発掘調査を指導。	85㎡	15H537
13	六条三坊十五町跡	右京区西院久保田町13,14	3/2	中世以降に成立し, 昭和に付け替えられた旧天神川流路を確認。 本文34ページ。	90㎡	15H602
14	六条四坊一町跡・西京極遺跡	右京区西院清水町131, 136-1	2/8	GL-1.1mで鉄分沈着の認められる黄褐色シルトの地山に至る。遺構検出は地山上面で行い, 弥生～古墳時代の竪穴建物, 平安～鎌倉時代の溝や土坑, 柱穴, 鎌倉～室町時代の落込みなどを確認。 発掘調査を指導。	67㎡	15H521
15	九条三坊十二町跡	南区吉祥院西ノ庄猪之馬場町1,2	3/1	GL-1.25m以下, 河川に由来する堆積層。	45㎡	15H102

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
16	嵯峨遺跡	右京区嵯峨天龍寺若宮町25-1他5筆	1/21	GL-1.5～2.0mで、明黄褐色シルトの地山上面で土坑を確認。 発掘調査を指導。	78㎡	15S246
17	史跡・名勝 嵐山・嵯峨遺跡	右京区嵯峨柳田町35-1	1/19～21	GL-0.8mで遺構を検出。 本文47ページ。	82㎡	27N062
18	多藪町遺跡	右京区太秦堀ヶ内町13-7他	2/24	敷地大部分が攪乱、遺構・遺物は確認できず。	14㎡	15S441
19	仁和寺院家跡	右京区花園一条田町14他	3/3	GL-0.8mで地山。地山上面で柱穴列、ピット群が展開するが密度は希薄で、遺構面は解体攪乱による削平を大きく受ける。	27㎡	15S674

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
20	大深町須恵器窯跡	北区西賀茂南今原町75	3/22	GL-1.9mで地山の黄褐色シルトを確認。	21㎡	15S570
21	半木町塚跡 (下鴨王塚)	左京区下鴨東半木町65-6	1/7	約1.4mの拳～人頭大の礫盛土の下、一部粘質土を挟むが、GL-2.24mまで洪水堆積と思われる砂礫を確認。	25㎡	15S527
22	上京遺跡	上京区今出川通室町西入掘出シ町302他	1/12, 3/14～19	江戸時代、室町時代、鎌倉時代の3面を確認。いずれの面でも柱穴や土坑を確認したものの、建物配置が明らかになるような状況ではない。しかし、第1面では焼土面、第2面では整地層など一定範囲のベース面が認められ、周辺調査事例のように廃棄土坑が乱立している状況ではないことから、町屋の建物部分に当たると考えられる。 本文58ページ。	81㎡	15S363
23	室町殿跡・上京遺跡	上立売通室町西入上立売町22	1/18	GL-1.2mで中世整地層、-1.5mで室町時代の溝状遺構の南肩を確認。	17㎡	15S343
24	上賀茂中山町遺跡	北区上賀茂中山町1,2,3,4,7,14	2/4	GL-0.15mで地山を確認。	50㎡	15S439
25	上京遺跡	上京区大宮通今出川下る薬師町226-2	2/12	GL-1.2～1.7mで地山である黄褐色シルトに至る。遺構は地山上面で検出し、江戸時代前期の土坑、柱穴、室町時代の溝を検出。 本文55ページ。	48㎡	15S529

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
26	法成寺跡	上京区寺町通荒神口上東入宮垣町96	2/10	GL-0.5mでにぶい黄色の礫まじり粗砂の河川堆積土。近世以降の遺構のみを確認。	16㎡	15S551

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
27	中臣遺跡	山科区西野山中臣町20-1	1/19	GL-0.3mで地山を確認。遺構は確認できず。	19㎡	15N396
28	山科本願寺南殿跡	山科区音羽初田町4-1	1/25	GL-0.5mで黄褐色泥砂～シルトの地山を検出。顕著な遺構・遺物等を確認できず。	35㎡	15S548
29	法住寺殿跡	東山区三十三間堂廻り町642,657	3/11	1Tr.GL-0.4mで中世整地層、2Tr.-0.46mで安土桃山～江戸前期整地層を検出。 発掘調査を指導。	46㎡	15S636

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
30	伏見城跡	伏見区深草大亀谷敦賀町119他1筆	1/15	GL-0.85mで地山を確認。	52㎡	15F272

南桂川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
31	史跡・名勝 嵐山	西京区嵐山上海道町74-15, 74-16	1/25	GL-1.3m以下洪水堆積。洪水堆積から石帯出土。 本文71ページ。	5㎡	27N069
32	大藪遺跡	南区久世築山町107-1他4筆	2/16	GL-0.25mで地山を確認。	79㎡	15S517
33	大藪遺跡	南区久世殿城町497-1他2筆	3/24	GL-1.1m付近において、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構面を確認。 発掘調査を指導。京都市内遺跡発掘調査報告平成28年度を参照。	13㎡	15S647
34	革嶋遺跡	西京区川島玉頭町49,78-2	3/29	顕著な遺構・遺物が確認できず。	4㎡	15S586

平成28年度4～12月
平安宮

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
35	主殿寮跡・聚楽第跡	上京区中立売日暮東入新白水丸町462-31ほか	6/7	GL-0.8mで地山を確認。	9㎡	16K082
36	内教坊跡・聚楽遺跡	上京区和泉町通上長者町上る和水町439-7, 439-11	12/19	GL-2.0mまで近代盛土, 以下, 黄灰色粘土を確認(聚楽第の濠埋土か)。	13㎡	16K395
37	大蔵庁跡	上京区二番町198-2	12/20	GL-1.0mで地山の暗灰黄色砂礫を確認。	13㎡	16K484
38	大蔵省跡・聚楽第跡	上京区上長者町通千本西入五番町168-1,	4/26	GL-0.6～-1.9mで旧河川堆積を確認。	6㎡	16K022
39	大蔵省跡・聚楽第跡	上京区上長者町通浄福寺西入新柳馬場頭町519	4/5	GL-0.6mで地山の明褐色シルトを確認。	14㎡	15K719
40	内蔵寮跡	上京区上長者町通千本西入五番町179	6/8	GL-1.0mで褐色泥砂を確認(土取穴埋め戻し土)。	11㎡	16K093
41	縫殿寮跡・聚楽第跡	上京区上長者町通浄福寺西入新柳馬場頭町532	6/6	GL-0.79mで地山を確認。	15㎡	15K744
42	内蔵寮跡	上京区下長者町通千本西入六番町368, 368-2, 368-4	6/15	GL-0.9～1.0mで黄褐色砂礫まじりシルトの地山を確認。	22㎡	16K096
43	右兵衛府跡・鳳瑞遺跡	上京区下立売通七本松西入西東町339他	9/8	GL-0.86～1.64mで地山を確認。	25㎡	16K281
44	内裏跡・聚楽遺跡	上京区下立売通千本東入田中町449, 452	6/16	GL-0.42mまで現代盛土。	12㎡	16K019
45	左兵衛府跡	上京区下立売通日暮西入中村町549-1他	4/18	GL-0.9mで土取穴, -1.35mで地山を確認。	6㎡	16K008
46	典薬寮跡・鳳瑞遺跡	中京区聚楽廻松下町3-13, -14, -15, -16	5/13	GL-1.4～1.5mでにぶい黄褐色砂礫の地山を確認。	10㎡	16K017
47	朝堂院跡・鳳瑞遺跡	中京区聚楽廻東町6-1他4筆	5/12	GL-1.2mで明黄褐色シルトの地山を確認。	14㎡	16K035
48	大炊寮跡・二条城北遺跡	上京区丸太町通黒門東入薬屋町535-2他	12/2	GL-0.9～1.0mで, 平安時代～近世初頭の遺構面を確認。 発掘調査を指導。	10㎡	16K439
49	西大宮大路跡	中京区西ノ京冷泉町15, 16, 17, 18, 19, 20, 21	5/30	GL-1.1～1.2mで平安時代後期から鎌倉時代の河川堆積土, -1.5mで地山である灰色粘質シルトを確認。	46㎡	15K689

平安京左京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
50	北辺二坊六町跡	上京区中立売通堀川西入役人町216-2外15筆	11/24	GL-0.9～1.0mで褐色～明黄褐色粘質土の地山にて, 室町時代の柱穴や溝, 江戸時代の井戸などを確認。 発掘調査を指導。	24㎡	16H358
51	一条四坊九町跡・公家町遺跡	上京区京都御苑438	12/15	GL-0.7mで遺構面を確認。 遺構は地中保存される。	7㎡	16H154
52	二条二坊十四町跡	中京区西洞院通竹屋町下る毘沙門町387, 389-1	5/20	現代盛土・幕末火災処理層直下のGL-1.0～1.5mで地山を確認。	19㎡	16H046
53	二条四坊十一町跡・烏丸丸太町遺跡	中京区俵屋町302他	9/15	敷地の南東部でGL-0.7m以下, 中世を主体とする遺構面を4面確認。 発掘調査を指導。	35㎡	16H320

54	三条二坊九町跡・堀川御池遺跡	中京区二条油小路町284ほか	5/11	GL-0.86mで江戸時代整地層、-1.3mでオーブ褐色～黄褐色砂礫の地山を確認。 取扱い協議中。	50㎡	15H426
55	三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡	中京区両替町通姉小路下る柿本町392, 394, 396	7/4～26	GL-0.5～2.5mの間で江戸時代、室町時代の多数の土坑や石室、石組み井戸などの遺構を確認。GL-2.5mで平安時代の整地土を確認。 本文5ページ。	48㎡	16H126
56	三条三坊十三町跡・烏丸御池遺跡	中京区烏丸通姉小路下ル場之町586-2他	5/23～25	GL-3.75～4.33mまで近代攪乱土が続き、地山などは確認できず。平成3年の調査時に確認され、現地保存されていた池部分のみ、 発掘調査を指導。	42㎡	15H092
57	三条四坊十五町跡	中京区御幸町通御池上る亀屋町395番1他	6/27	GL-1.5m以下で中・近世～平安時代までの遺構・遺物を確認。 発掘調査を指導。	21㎡	15H567
58	四条一坊十二町	中京区壬生坊城町14-2, 13-7, 13-14	4/1	四条大路北側溝を確認。また敷地の北東端で室町期の整地層を確認。	17㎡	15H591
59	四条二坊五町跡	下京区四条通堀川西入唐津屋町535	11/1	GL-0.82mまで現代盛土、-1.62mまで黄褐色砂礫を確認。	44㎡	16H228
60	四条二坊十六町跡・本能寺城跡	中京区三条通油小路下る三条油小路町156, 158, 160, 162, 164	5/16～17	GL-0.8～-1.37mで中世の包含層、土坑を確認。 発掘調査を指導。	55㎡	15H431
61	五条二坊十二町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区東堀川通五辻下る五軒町385	11/15	GL-1.64mで砂礫の地山を確認。	16㎡	16H346
62	五条二坊十四町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区西洞院通仏光寺下る本柳水町784ほか	9/14	GL-0.5mで古代から中世の遺構面を確認。東半は近世以降の攪乱が顕著。 本文22ページ。	32㎡	16H269
63	五条三坊五町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区松原通新町東入中之町173-1他5筆	10/11	GL-1.1mで地山の黄褐色シルトを確認。五条大路北側溝と考えられる溝や土器埋納土坑を確認。 本文25ページ。	59㎡	16H225
64	五条三坊七町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区室町通高辻上る山王町554, 558	9/5	GL-1.3mで中世遺物包含層、-1.7mで平安時代の整地層を確認。 発掘調査を指導。	42㎡	16H244
65	五条四坊四町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区高倉通高辻下る葛籠屋町517-2他	6/14	GL-1.75mでにぶい黄褐色粘質土～黄褐色シルトの平安時代の整地層。整地層上面で成立するピットなどを確認。 本文27ページ。	49㎡	15H737
66	五条四坊六町跡・烏丸綾小路遺跡・竜臥城跡	下京区新開町397	9/9	GL-1.3mで中世及び平安時代の遺構面を確認。 設計変更を指導。	15㎡	16H217
67	五条四坊十町跡	下京区麩屋町通綾小路下る俵屋町299	7/12	GL-1.7mで平安時代後期～中世の遺構面を確認。南北溝や土坑を確認。 設計変更を指導。本文31ページ。	33㎡	16H041
68	六条四坊十町跡	下京区本神明町430他	12/12	GL-1.7mで中世整地土を確認。 遺構は地中保存される。	21㎡	16H328
69	七条二坊五町跡・東市跡	下京区七条通猪熊東入西八百屋町135-1,	6/1～3	GL-1.0mで平安時代の遺物を含む整地層を確認。この上面で、ピット・土坑・柱穴を確認。 発掘調査を指導。	124㎡	15H638
70	七条四坊十一町跡	下京区万屋町332ほか	11/14	GL-0.7～1.1mで氾濫堆積を確認。	16㎡	16H391
71	八条四坊二町跡・塩小路若山城跡	下京区東洞院通七条下る東塩小路町848	10/4	GL-0.5m以下で地山上面から中世まで、3面の遺構面を確認。 発掘調査を指導。	35㎡	16H224
72	八条四坊七町跡・御土居跡	下京区郷之町他地内	9/13～14	北側敷地はGL-1.47mで河川堆積、南側はGL-1.83mで河川堆積を確認。	58㎡	16H195

73	九条三坊十五町跡・烏丸町遺跡	南区東九条西山王町1	6/20~21	調査地西側はGL-1.0mで近世耕作土, -1.3mで洪水堆積層。東側は近世盛土, 以下GL-1.05mで近世耕土, -1.6mで洪水堆積層。2Trは現代盛土以下, GL-0.75mで灰色泥砂(ラミナ[中世遺物包含層]), -1.1mで灰色砂礫の地山。	53㎡	16H092
74	九条三坊十五町跡・烏丸町遺跡	南区東九条西山王町11の一部	4/8	GL-0.5mで地山の灰色砂礫層を確認。地山直上で中世の大型土坑1基を確認。	21㎡	15H630
75	九条四坊一町跡・烏丸町遺跡	南区東九条東山王町13	6/17	GL-0.6m以下砂礫の河川堆積層を確認。	15㎡	16H030
76	九条四坊三町跡・烏丸町遺跡	南区東九条南山王町5-1	10/26~27	GL-1.25mで, 東西幅0.35m・深さ0.1mの平安時代後期の溝を確認。 発掘調査を指導。	122㎡	16H247
77	九条四坊八町跡・烏丸町遺跡	南区東九条西岩本町15	12/5~7	GL-0.9~-1.3mで黄色細砂の地山を確認。遺構・遺物なし。	65㎡	16H286
78	九条四坊九町跡	南区東九条東岩本町21他	8/8	GL-2.0m程度まで近代以降の攪乱を確認。	19㎡	16H219

平安京右京地区

番号	遺跡名	住所	調査日	調査概要	面積	受付番号
79	一条二坊四町跡	上京区御前通下立売下る下之町412-1	10/3	GL-0.6mで中世遺構面, -0.8mで平安時代遺構面を確認。工事範囲外である対象西側を 発掘調査を指導。	23㎡	16H357
80	一条四坊五町跡	右京区花園寺ノ前町80, 太秦安井小山町12	10/25	GL-0.5~0.6mで灰黄褐色泥土や黄褐色微砂の地山を確認。	25㎡	16H340
81	二条三坊九町跡・山ノ内遺跡	中京区西ノ京徳大寺町1	4/27	GL-1.15mで地山である浅黄色シルトを確認。	20㎡	16H018
82	三条三坊五町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京桑原町1	5/19	GL-1.8mで遺構面の残存を確認。 発掘調査を指導。	13㎡	16H029
83	四条三坊九町跡・西ノ京遺跡	右京区西院金槌町8	8/18	GL-2.0m以上現代盛土。	11㎡	16H292
84	四条四坊四町・山ノ内遺跡	右京区西院四条畑町10-2, 22-1, 55, 西院照町54-6, 58-1	4/12	GL-1.2~2.0mの基盤層上面で東西溝, 柱穴を確認。	54㎡	15H572
85	四条四坊十三町跡	右京区西院笠目町6	6/23	GL-1.29mで暗灰黄色泥砂, -1.79mで洪水堆積-2.39mで湿地堆積を確認。	45㎡	16H056
86	五条三坊二町跡	右京区西院北矢掛町23	7/11	GL-1.1mで褐灰色~暗オリーブ褐色泥砂の整地層。整地層上面で溝2条を確認。	21㎡	16H033
87	六条四坊六町跡	右京区西京極東大丸町26-1	10/7	GL-1.25~1.5mで灰色砂礫の地山を確認。	19㎡	16H248
88	六条四坊十六町跡	右京区西京極葛野町6-1, -2, -3, -4, -7	10/31	平安時代前期の南北溝を検出。ただし, 五条大路に関連する遺構は確認できず。	16㎡	16H351
89	七条一坊五町跡	下京区朱雀北ノ口町33	10/24	盛土以下, GL-1.1m以下で流路堆積を確認。	33㎡	16H325
90	八条三坊四町跡	南区吉祥院西ノ庄東屋敷町	7/7	GL-0.65~1.25mまで旧耕土。この下からGL-1.8mまでは氾濫堆積があり, その直下で河川堆積を確認。	26㎡	16H124
91	八条三坊五町跡	南区吉祥院西ノ庄西浦町81	12/16	GL-1.26mで時期不明の包含層, -1.4mで黄灰色砂礫。	28㎡	16H534
92	九条二坊六町跡・唐橋遺跡	南区唐橋平垣町24	9/26~28	敷地の東半部においてGL-1.55mで陸部を確認。それ以外の調査区では湿地・河川の堆積を確認。 発掘調査を指導。	52㎡	16H183
93	九条一坊十町跡・西寺跡・唐橋遺跡	南区唐橋門脇町17-5	8/25	GL-0.1mで弥生時代から古墳時代の遺物包含層を確認。 発掘調査を指導。	28㎡	16H190

94	史跡西寺跡・九条一坊十一町跡・唐橋遺跡	南区唐橋西寺町59	5/26	東小子房西縁の抜き取り溝又は雨落溝，基壇盛土，時期不明整地層を確認。遺構面は良好に残る。 遺構は地中保存される。本文39ページ。	11㎡	28N007
----	---------------------	-----------	------	---	-----	--------

太秦地区

地区	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
95	嵯峨遺跡・嵯峨北堀町遺跡	右京区嵯峨天龍寺今堀町15-36	12/13	盛土直下のGL-0.25mで遺構面を確認。土坑や溝を確認。取扱い協議中。	20㎡	16S375
96	和泉式部町遺跡	右京区太秦森ヶ東町50-2	5/9	敷地北西において，GL-0.5mで明黄褐色粗砂～シルトの地山を確認。地山直上で溝1条を確認。	32㎡	15S565
97	広隆寺旧境内	右京区太秦蜂岡町31他	4/14	GL-1.7m～2.2mで地山を確認。	34㎡	15S684

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
98	醍醐ノ森瓦窯跡	北区西賀茂中川上町70-1	8/5	敷地全体が大きく削平されていたため，遺構・遺物なし。	62㎡	16S241
99	本山古墳群	左京区岩倉幡枝町350の一部，351の一部，352-2の一部	7/22	調査地東側はGL-0.3mまで，現代盛土（解体攪乱），その直下において，室町時代の柱穴と井戸を有する遺構面（14世紀）を確認。また，これに切られる形で古墳時代に遡る可能性がある竪穴遺構を確認。 設計変更を指導。本文52ページ。	32㎡	16S226
100	史跡 賀茂別雷神社境内	北区上賀茂本山341-1	6/13	GL-0.6mで検出したにぶい黄橙色粘質土上面で江戸時代の生活面を確認。	18㎡	28N002
101	植物園北遺跡	左京区下鴨狗子田町3-2	8/22	調査区の南東部は，GL-0.4mに遺構面が残っており，弥生時代末から古墳時代の遺構を確認。 発掘調査を指導。	38㎡	16S276
102	大徳寺旧境内	北区大徳寺町22	9/5	GL-0.3mで地山を確認。	13㎡	16S315
103	北野廃寺・北野遺跡	北区北野下白梅町41	11/9	GL-0.9mで平安時代前期の遺物を含む整地層を確認。また，整地土を切り込んで成立する土坑も確認。 発掘調査を指導。	34㎡	16S064

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
104	小倉町別当町遺跡	左京区北白川下別当町34	4/4	GL-0.8mで中世遺物包含層を確認。その直下，-1.1mで黒色シルトとなる。黒色シルト上面で成立すると思われる土坑や溝を確認。 発掘調査を指導。	33㎡	15S487
105	公家町遺跡	上京区寺町通石薬師下る染殿町665-3，665-8	7/5	敷地の西半で，GL-1.4～2.2mで近世から平安時代にかけての遺構面を確認。	33㎡	15S740
106	白河街区跡・吉田上大路町遺跡	左京区吉田近衛町26-54	6/9	4Tr.でGL-0.8mで中・近世遺物包含層，-0.95mで古代～中世遺物包含層，-1.35で白河砂を確認。 発掘調査を指導。	75㎡	15S709
107	白河北殿跡	左京区蓮華蔵町46-5	4/25	近現代盛土の下，GL-1.55～1.9mで地山を確認。	6㎡	16R032
108	得長寿院跡・白河街区跡・岡崎遺跡	左京区岡崎徳成町15-2，15-9	11/8	GL-0.8mで平安時代の遺物を含む整地土を確認。	16㎡	16R404

洛東地区

地区	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
109	方広寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡	東山区妙法院前側町425	4/28	GL-0.9～1.0mで地山。地山上面で、調査区西側に方広寺に伴う火災処理遺構を確認。 発掘調査を指導。次年度、報告予定。	20㎡	15S597
110	法住寺殿跡	東山区三十三間堂廻り町642,657	7/4	GL-0.8mで近世整地層、-1.4mで創建期に遡る可能性のある地業、-2.4mで10世紀の遺物包含層（整地土の可能性あり）、-2.75mで地山のオリーブ黄色泥砂を確認。 本文65ページ。	15㎡	15S636
111	山科本願寺南殿跡	山科区音羽伊勢宿町33-52	11/25	GL-0.4～0.65mで山科本願寺南殿の遺構を確認。 設計変更にて、地中保存される。	5㎡	16S497
112	中臣遺跡	山科区東野森野町1-4, 10-1, 11-1, 11-3	7/19	GL-0.6mまで解体攪乱、-0.75mまで旧耕土、-0.85mで地山を確認。	15㎡	16N177
113	中臣遺跡	山科区西野山中臣町20-1	7/20	GL-0.2mまで解体攪乱、-0.75mまで河川の氾濫堆積、-1.75mまで暗オリーブ灰色粘土質シルト（無遺物層）を確認。	34㎡	15N396
114	中臣遺跡	山科区勧修寺西栗栖野町271	11/29	GL-0.25～0.3mまで現代耕土、-0.55mで地山を確認。	47㎡	16N336
115	史跡随心院境内	山科区小野御霊町4-1の一部ほか	7/25	GL-0.4～0.7mでにぶい黄褐色砂礫混じり砂泥等の地山を確認。	33㎡	28N014

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	住所	調査日	調査概要	面積	受付番号
116	伏見城跡	伏見区深草大亀谷万帖敷町370	6/28	GL-0.85mで造成土を確認。	24㎡	15F715
117	伏見城跡・桃陵遺跡・奉行前町古墳	伏見区奉行前町3	6/30	GL-0.85mで整地層、-1.55mで灰色砂礫の地山を確認。 発掘調査を指導。	80㎡	15F692
118	伏見城跡	伏見区常盤町40-3	7/13～14	GL-0.6mで整地層、-0.8mで造成地を確認。 発掘調査を指導。	88㎡	16F038
119	伏見城跡	伏見区桃山町泰長老176-5	7/15	GL-1.3mで造成地、-2.65mで濠埋土を確認。 発掘調査を指導。	77㎡	16F039
120	伏見城跡	伏見区片桐町1	10/17～20	近現代盛土下に、伏見城築城時の造成土及び地山を確認。特に1Trで奉行所に伴うと考えられる東西方向の石列を確認。取扱い協議中。 取扱い協議中。	57㎡	16F275

鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
121	吉祥院天満宮境内	南区吉祥院政所町1-1の一部、2-1, 3-2の一部、3-3, 3-4の一部	5/27	GL-0.4mで整地土の可能性のある土層を確認。室町時代の土坑を1基確認。	29㎡	15S472
122	鳥羽離宮跡	伏見区竹田中内畑町115	4/6	GL-1.25mまで近世から中世にかけての耕作土。その直下で、苑池遺構の可能性のある人頭大の礫と瓦を確認。 本文69ページ。	30㎡	15T738
123	鳥羽離宮跡	伏見区竹田浄菩提院町203	12/1	GL-1.3mまで盛土及び旧表土、-2.1mまで室町遺代遺構の造成土を確認。	21㎡	16T249

長岡京地区

番号	遺跡名	住所	調査日	調査概要	面積	受付番号
124	左京北辺二坊十四町・十五町跡	南区久世殿城町289-1, 289-3, 289-5, 290-2	7/27	南半で湿地堆積、北半で北西から南東方向の推定幅8m、深さ約1.2mの溝を確認。	104㎡	16NG072

125	左京一条三坊五・六町跡	南区久世東土川町78, 79, 79-1・2, 3, 80-2, 81	10/13~14	GL-1.6mで地山。にぶい橙色シルトを確認。顕著な遺構・遺物は確認できず。	81㎡	16NG230
126	左京二条四坊一町跡・東土川遺跡	南区久世東土川町36-1	11/10	GL-0.3mで、東三坊大路の東側溝を確認。 発掘調査を指導。	39㎡	16NG285
127	左京三条四坊十一町跡	伏見区久我西出町13-3・4	9/12	GL-1.86mで湿地堆積を確認。	27㎡	15NG637
128	左京六条四坊三・四町跡	伏見区淀樋爪町29, 30	7/8	GL-1.0mで耕作土を確認。その下に厚さ0.6mほどの氾濫堆積があり、-2.0mで湿地状堆積を確認。	14㎡	16NG078

南桂川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
129	史跡及び名勝 嵐山	西京区嵐山中尾下町2	10/24	GL-1.5mで灰色粘質土層を確認。	3㎡	28N030
130	史跡及び名勝 嵐山・嵐山谷ヶ辻子町遺跡	西京区嵐山風呂ノ橋町2-4, 32-1の一部, 32-2の一部,	10/27	GL-1.1mでにぶい黄褐色シルトの地山を確認。	14㎡	28N041
131	下津林遺跡	南区久世高田町336 陸上自衛隊桂駐屯地	4/19~22	GL-0.85mで明黄褐色シルトの地山を確認。	43㎡	15S623
132	上久世遺跡	南区久世上久世町11 8他9筆	8/2~3	敷地東半の耕土直下で弥生時代~古墳時代の集落跡が遺存を確認。 発掘調査指導。	141㎡	16S091
133	上久世遺跡・上久世城跡	南区久世上久世町40 5他	11/11	GL-0.35~0.6mで、明黄褐色粘質シルトの地山に至る。地山上面で南北方向と想定できる溝状の遺構を確認。 発掘調査を指導。	19㎡	16S076
134	中久世遺跡	南区久世殿城町96	5/18	GL-0.15~0.2mの地山直上で耕作に伴う可能性のある溝を確認。	34㎡	16S045
135	大藪遺跡・大藪城跡	南区久世大藪町331-1, 331-3, 332-1, 333-1, 602	8/10	GL-0.15~0.2mまで表土, -0.4mまで近世後期包含層, -0.5mまで中世後期包含層があり, その直下に地山を確認。地山上面では, 大藪城期に成立したと考えられる遺構群を確認。 設計変更を指導。本文73ページ。	77㎡	16S211
136	大藪遺跡	南区久世築山町102-1	5/10	GL-0.4mで浅黄色シルトの地山を確認。	17㎡	15S728

京北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
137	周山廃寺・周山古墳群・高梨経塚・高梨遺跡	右京区京北周山町中山39番地の4 (周山中学校敷地)	11/16~21	1・2・7・8Tr.で、表土直下で整地層、ピットなどの遺構を確認。 発掘調査を指導。	88㎡	16S433

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとしなしいせきしくつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成28年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・家原圭太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394番地 Y・J・Kビル2F							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行年月日	西暦2017年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 北辺二坊八町跡	きょうとしなかがきょう 京都上京区 おがわどおりなかつちうりきが 小川通中立売下る 小川町327	26100	1	35度 01分 27秒	135度 45分 14秒	2016/1/26 27	56㎡	共同住宅
へいあんきょうさきょうさんじょう 平安京左京三条 三坊十二町跡・ 烏丸御池遺跡	きょうとしなかがきょう 京都市中京区 りやうがふまちどおりあねこうじさが 両替町通姉小路下る かきもちょう 柿本町392, 394, 396	26100	1 464	35度 00分 36秒	135度 45分 30秒	2016/7/4 ~7/26	48㎡	ホテル
へいあんきょうさきょうごじょう 平安京左京五条 二坊十四町跡・ 烏丸綾小路遺跡	きょうとしなかがきょう 京都市下京区 にしのかたいんとおりあつこうじさが 西洞院通仏光寺下る ほんりゅうすいちょう 本柳水町784他	26100	1 712	35度 00分 01秒	135度 45分 17秒	2016/9/14	32㎡	ホテル
へいあんきょうさきょうごじょう 平安京左京五条 三坊五町跡・ 烏丸綾小路遺跡	きょうとしなかがきょう 京都市下京区 まつぼらとおりしんまちひがしいるなかのまち 松原通新町東入中之町 173-1他5筆	26100	1 712	34度 59分 55秒	135度 45分 27秒	2016/10/11	59㎡	高齢者施設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 北辺二坊八町跡	都城跡	室町時代 江戸時代	濠 溝	土師器・緑釉陶器・瓦		南北隣接地で検出され ている、濠の中間地点を 検出。		
平安京左京三条 三坊十二町跡・ 烏丸御池遺跡	都城跡 集落跡	鎌倉時代 室町時代 江戸時代	土坑 石組遺構、井戸、土坑、 整地層 柱穴、土坑、整地層	土師器、瓦 土師器、瓦器、瓦質土器、 陶器 土師器、瓦質土器、陶磁器		—		
平安京左京五条 二坊十四町跡・ 烏丸綾小路遺跡	都城跡 集落跡	平安時代 鎌倉時代	土坑	土師器、須恵器 白磁、灰釉陶器		土師器、集積土坑などを 確認した。		
平安京左京五条 三坊五町跡・ 烏丸綾小路遺跡	都城跡 集落跡	平安時代 鎌倉～室町時代	土坑・地山の段差(溝か) 柱穴	土師器、灰釉陶器、銭貨		地山の段差は、五条大路 北側溝の可能性がある。		

報告書抄録

ふりがな	きょうとしないいせきしくつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成28年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・家原圭太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394番地 Y・J・Kビル2F							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行年月日	西暦2017年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょうごじょう 平安京左京五条 四坊四町跡・ 烏丸綾小路遺跡	きょうとしもぎょうく 京都市下京区 高倉通高辻下る葛籠屋 町517-2他	26100	1 712	35度 00分 00秒	135度 45分 45秒	2016/6/14	49㎡	高齢者施設
へいあんきょうさきょうごじょう 平安京左京五条 四坊十町跡	きょうとしもぎょうく 京都市下京区 麩屋町通綾小路下る 俵屋町299	26100	1	35度 00分 06秒	135度 45分 55秒	2016/7/12	33㎡	店舗
へいあんきょうさきょうくじょう 平安京右京六条 三坊十五町跡	きょうとしもぎょうく 京都市右京区 西院久保田町13, 14	26100	1	34度 59分 48秒	135度 43分 27秒	2016/3/2	90㎡	共同住宅
しせきせいじあつ 史跡西寺跡・ へいあんきょうさきょうくじょう 平安京右京九条 一坊十一町跡・ 唐橋遺跡	きょうとしみなみく 京都市南区 からほしせいじちやう 唐橋西寺町59	26100	A751 1 756	34度 58分 49秒	135度 44分 15秒	2016/5/26	11㎡	個人住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平安京左京五条 四坊四町跡・ 烏丸綾小路遺跡	都城跡 集落跡	平安時代 鎌倉～室町時代 江戸時代	溝, 土坑 柱穴		土師器, 須恵器 陶磁器 瓦質土器		炭化物を多量に含む 柱穴, 土坑を確認。	
平安京左京五条 四坊十町跡	都城跡	平安時代	溝, 土坑		土師器, 須恵器		富小路西側溝を確認。	
平安京右京六条 三坊十五町跡	都城跡	室町時代～近代	溝		陶磁器		旧天神川の流路を確認。	
史跡西寺跡・ 平安京右京九条 一坊十一町跡・ 唐橋遺跡	史跡 都城跡 集落跡	平安時代	基壇盛土 溝, 整地層		緑釉陶器等		東小子房基壇及び西縁 の雨落ち溝を確認。	

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなしいせきしくつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成28年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・家原圭太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394番地 Y・J・Kビル2F							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行年月日	西暦2017年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くさきちよういせき 草木町遺跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 太秦京ノ道町27-1	26100	901	35度 01分 13秒	135度 42分 080秒	2015/8/10	48㎡	宅地造成
しせきめいしやう 史跡・名勝 嵐山・ さがいせき 嵯峨遺跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 嵯峨柳田町35-1	26100	A809	35度 00分 48秒	135度 41分 11秒	2016/1/19 ~21	82㎡	グラウンド 再整備
もとやまこふんぐん 本山古墳群	きょうとしさきやうく 京都市左京区 石倉幡枝町350-1, 350 , 352-2の各一部	26100	143	35度 03分 58秒	135度 46分 17秒	2016/3/2	90㎡	共同住宅
かみぎやういせき 上京遺跡	きょうとしかみぎやうく 京都市上京区 おおみやびおりのまでがわさが やくし 大宮通今出川下る薬師 ちよう 町226-2	26100	224	35度 01分 46秒	135度 44分 56秒	2016/2/12	48㎡	店舗
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
草木町遺跡	集落跡	鎌倉時代	土坑	土師器, 陶磁器, 瓦		土師器を多く含む 土坑を確認。		
史跡・名勝 嵐山・ 嵯峨遺跡	史跡・名勝	室町時代	溝, 石組遺構	須恵器, 瓦, 埴		地中保存		
本山古墳群	古墳	古墳時代 室町時代	竪穴建物 井戸	土師器		新たに室町時代の 集落跡を発見した。		
上京遺跡	都城跡	室町時代~ 江戸時代	土坑, 溝	土師器, 焼塩壺		—		

報告書抄録

ふりがな きょうとしなしいせきしくつちょうさほうこく

書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成28年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	馬瀬智光・家原圭太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課
所在地	〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394番地 Y・J・Kビル2F
発行機関	京都市文化市民局
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地
発行年月日	西暦2017年3月31日

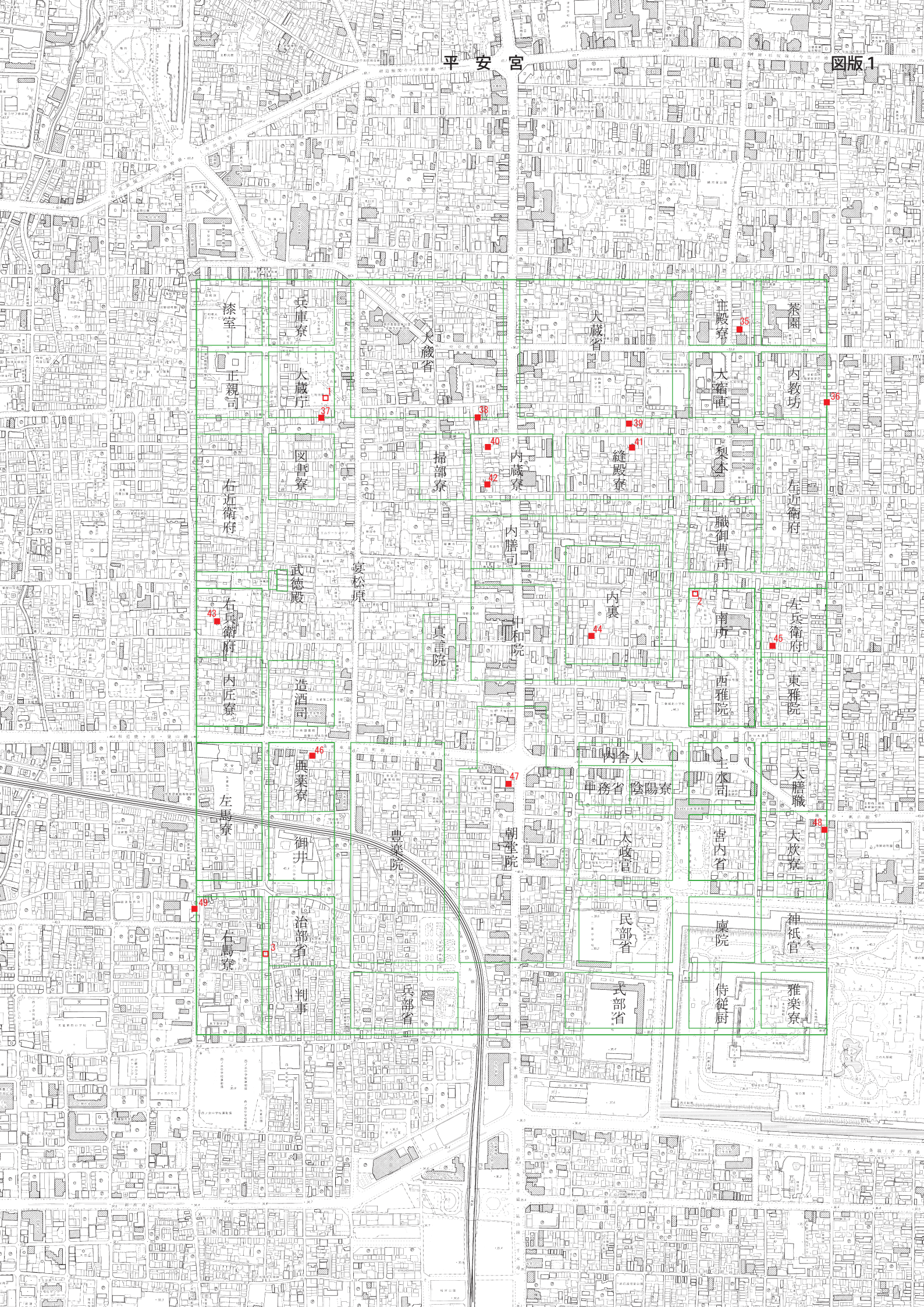
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみやういせき 上京遺跡	きょうとしかみやうく 京都市上京区 いまでがわどおりむらまちにしいるほりだ 今出川通室町西入掘出 シ町302他	26100	224	35度 01分 44秒	135度 45分 26秒	2016/1/12, 3/14~19	81㎡	共同住宅
ほうじゆうじどのあと 法住寺殿跡	きょうとしひがしやまく 京都市東山区 さんじゅうさんけんどうまわ ひがしまち 三十三間堂廻り東町 642, 657	26100	546	34度 59分 16秒	135度 46分 18秒	2016/3/11	46㎡	寺院
とりきゆうあと 鳥羽離宮跡	きょうとしらしみく 京都市伏見区 たけだなかうちほちちゆう 竹田中内畑町115	26100	1166	34度 57分 13秒	135度 45分 18秒	2016/4/6	30㎡	事務所
しせきめいしやう 史跡・名勝 嵐山	きょうとしにしきやうく 京都市西京区 あらしやまかみかいどうちゆう 嵐山上海道町74-15, 74-16	26100	A953	35度 00分 32秒	135度 40分 18秒	2016/1/25	5㎡	簡易宿舎
おおやふいせき 大藪遺跡・ おおやふいしやうあと 大藪城跡	きょうとしみなみく 京都市南区 くほおやふちゆう 久世大藪町331-1 他4筆	26100	773 778	34度 56分 58秒	135度 43分 08秒	2016/8/10	77㎡	共同住宅

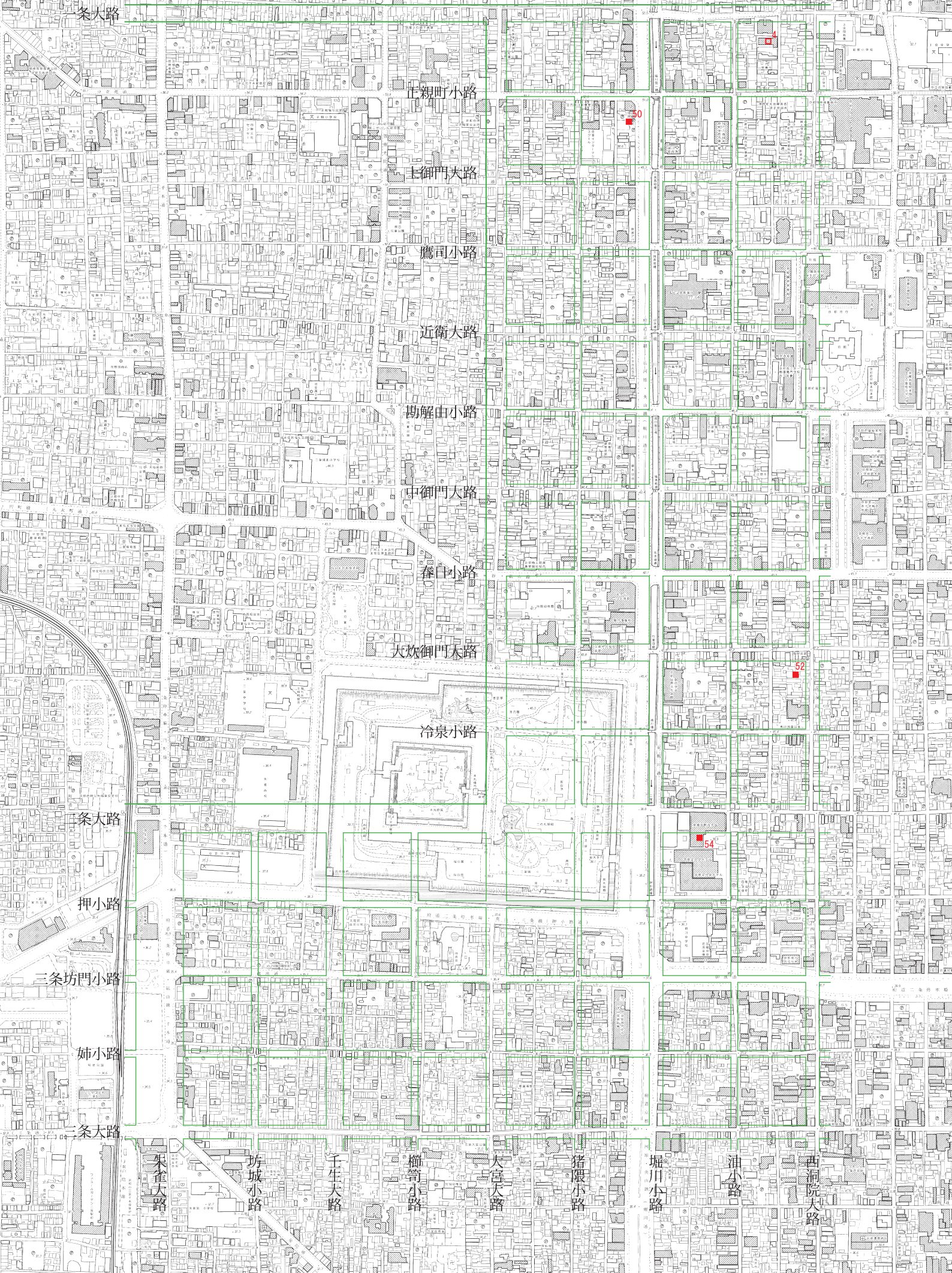
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上京遺跡	都城跡	鎌倉時代 室町時代 江戸時代	柱穴、溝、土坑 柱穴 柱穴、焼土層	土師器、瓦器、瓦質土器、白磁 土師器 土師器、陶磁器	—
法住寺殿跡	寺院跡 離宮跡	平安時代	地業・造成土	土師器・緑釉陶器	—
鳥羽離宮跡	離宮跡	平安時代	園池(陸部)	土師器・瓦	—
史跡・名勝 嵐山	史跡・名勝	平安時代	—	石帯(巡方)	—
大藪遺跡・ 大藪城跡	集落跡 城跡	弥生時代 古墳時代 室町時代	溝、ピット 土坑	土師器	大藪城跡関連遺構が さらに南へ広がることを 確認した。

版 圖

凡 例

- 平成 28 年 1 ～ 3 月 試掘調査地点
- 平成 28 年 4 ～ 12 月 試掘調査地点





一条大路

正親町小路

上御門大路

鷹司小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

春白小路

大炊御門大路

冷泉小路

二条大路

押小路

三条坊門小路

姉小路

二条大路

朱雀大路

坊城小路

壬生大路

櫛笥小路

大宮大路

猪隈小路

堀川小路

油小路

西洞院大路

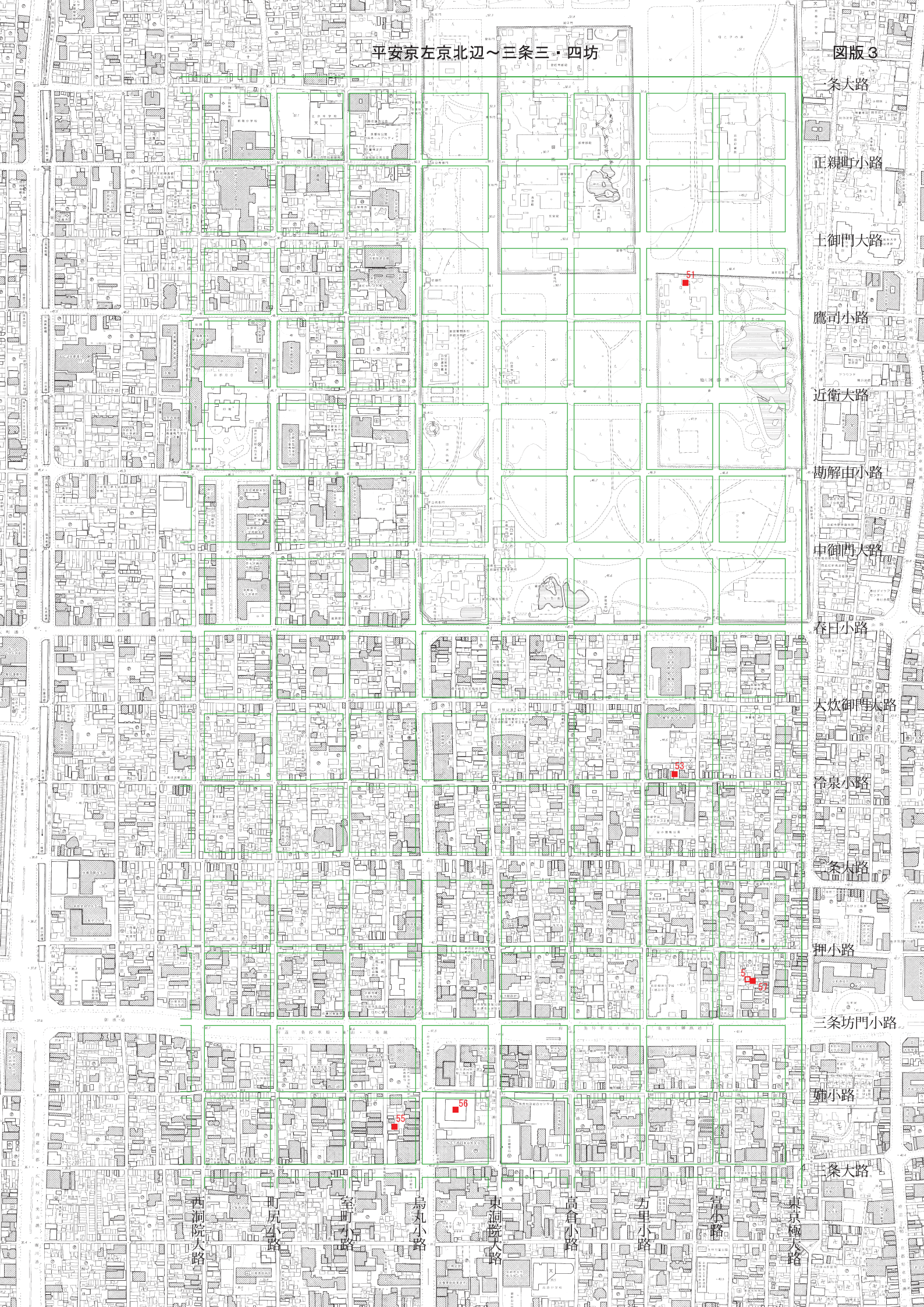
50

52

54

平安京左京北辺～三条三・四坊

図版3



条大路

正親町小路

土御門大路

鷹司小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

三条大路

押小路

三条坊門小路

堀小路

三条大路

東京極大路

富小路

五里小路

高倉小路

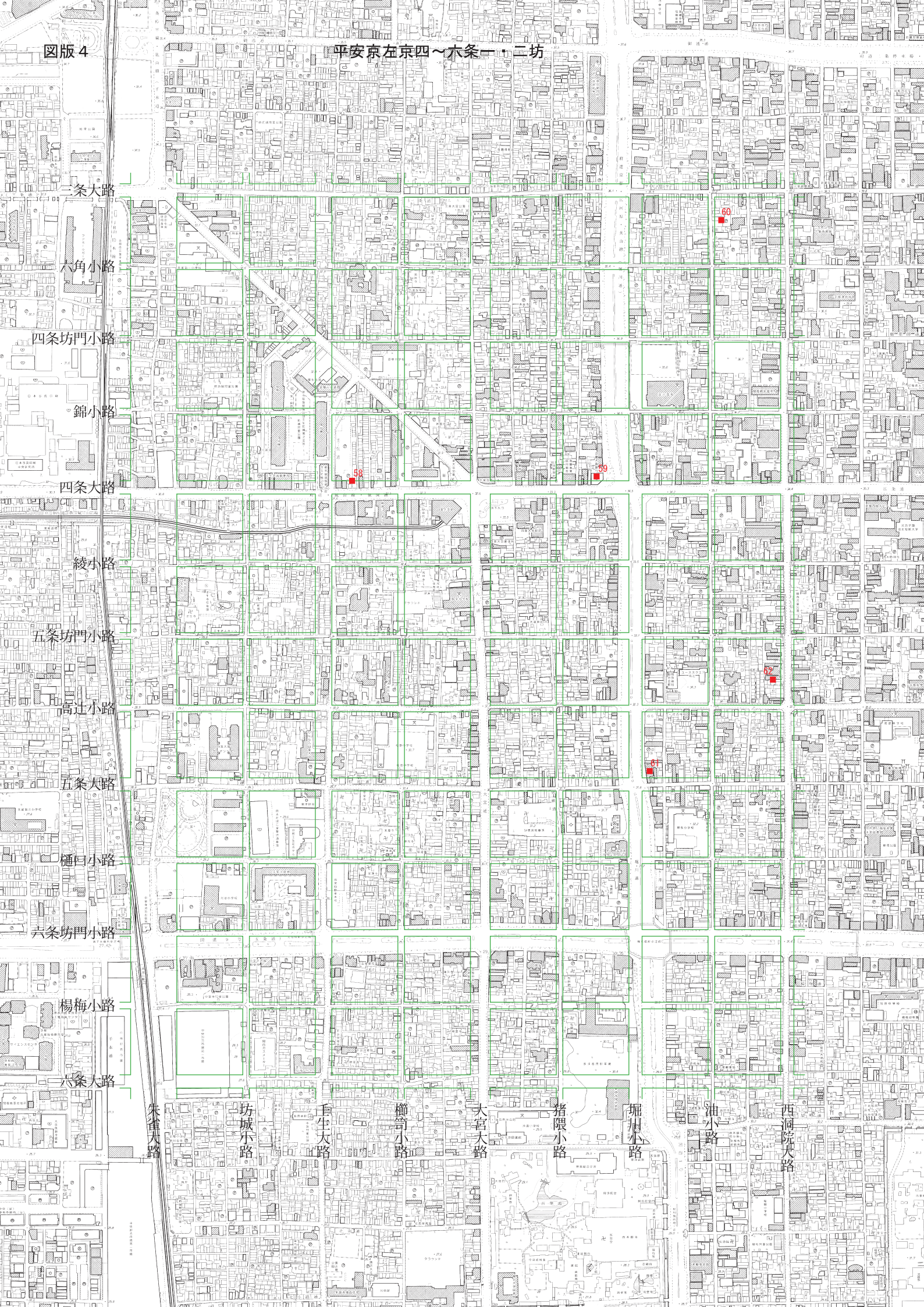
東洞院大路

烏丸小路

室町小路

町尻小路

西洞院大路

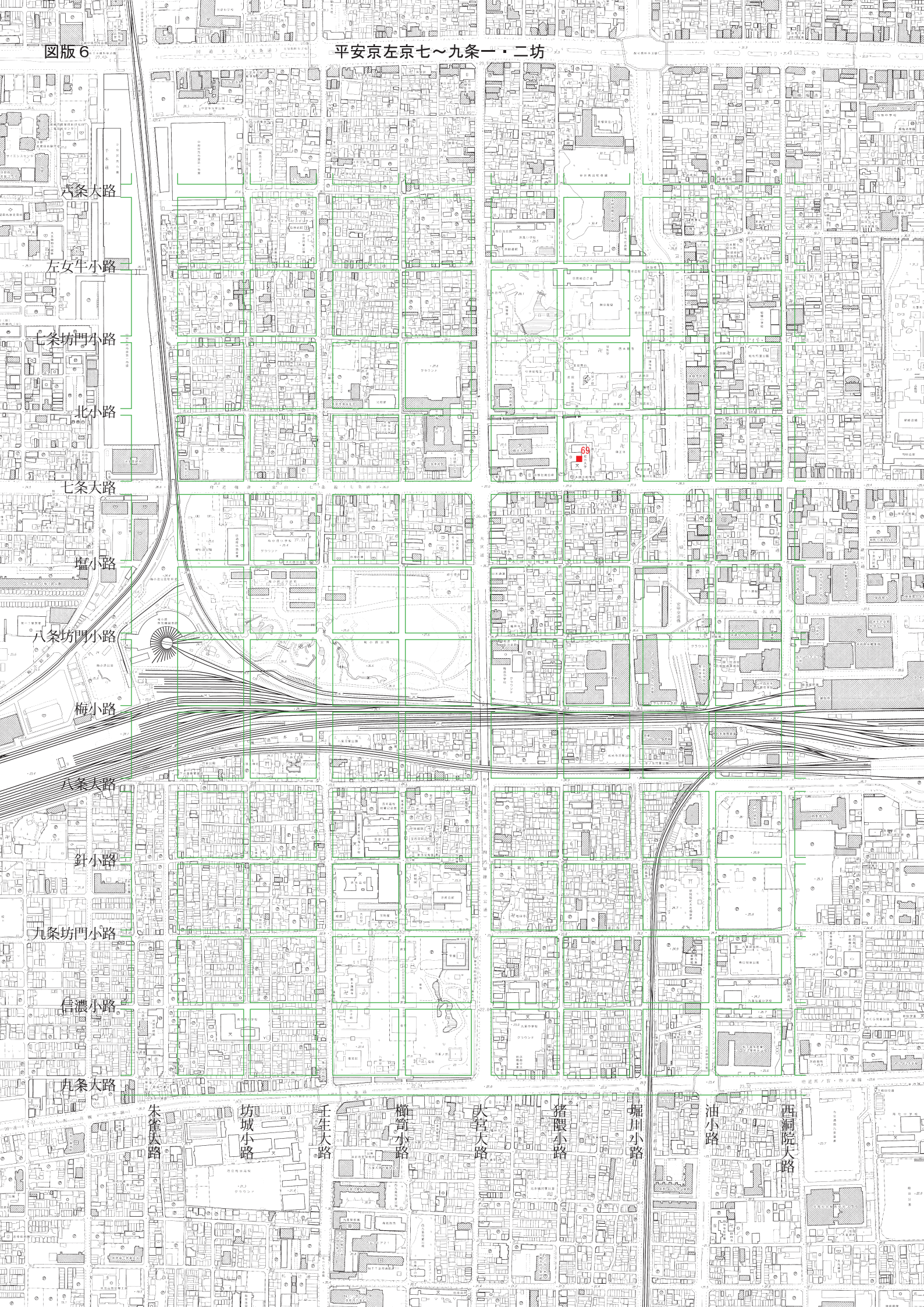


三条大路
六角小路
四坊門小路
錦小路
四坊大路
綾小路
五坊門小路
高辻小路
五坊大路
樋口小路
六坊門小路
楊梅小路
六坊大路

朱雀大路
坊城小路
壬生大路
櫛笥小路
大宮大路
猪隈小路
堀州小路
油小路
西河院大路

58
59
60
61





七条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

塩小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

朱雀大路

坊城小路

壬生大路

櫛笥小路

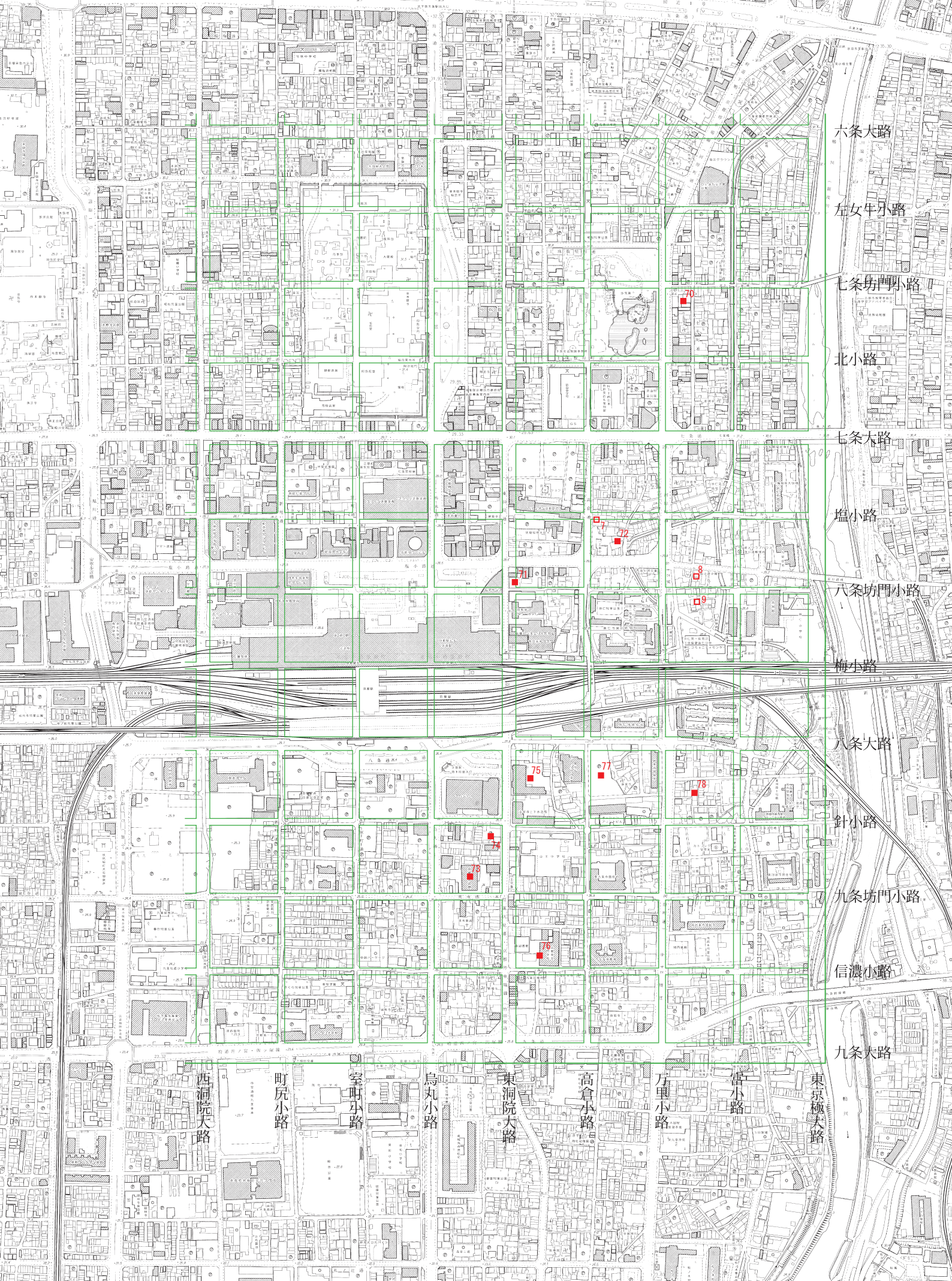
大宮大路

猪鬃小路

堀川小路

油小路

西洞院大路



六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

塩小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

西洞院大路

町尻小路

室町小路

烏丸小路

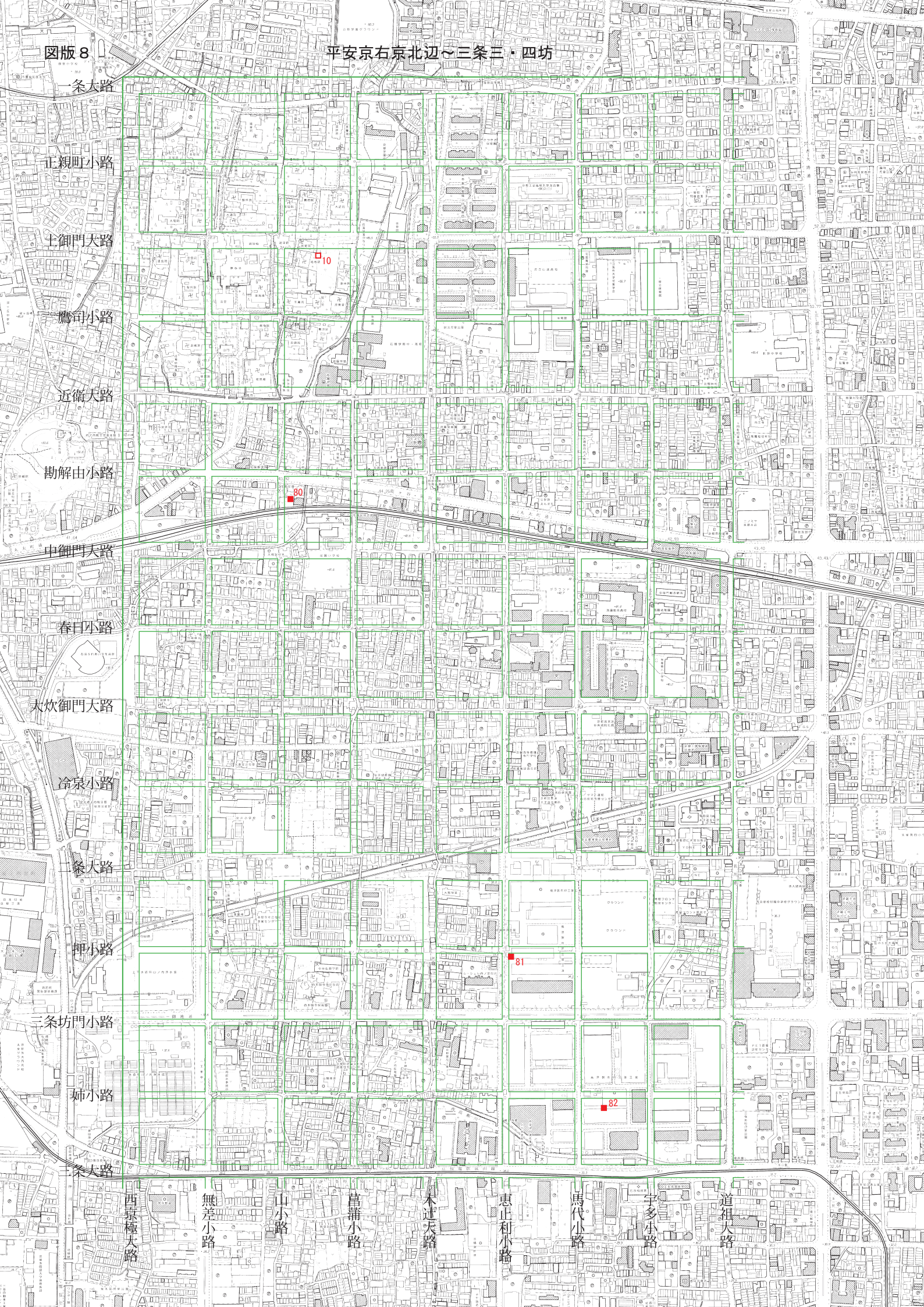
東洞院大路

高倉小路

万里小路

雷小路

東京極大路



条大路

正親町小路

土御門大路

鷹司小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

春日小路

太炊御門大路

冷泉小路

条大路

押小路

三条坊門小路

姉小路

条大路

西京極大路

無差小路

山小路

菖蒲小路

木辻大路

惠止利小路

馬代小路

宇多小路

道祖大路

10

80

81

82

一条大路

正親町小路

上御門大路

鷹司小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

春日小路

太炊御門大路

冷泉小路

二条大路

押小路

三条坊門小路

姉小路

三条大路

道相小路

野寺小路

西堀小路

西朝負小路

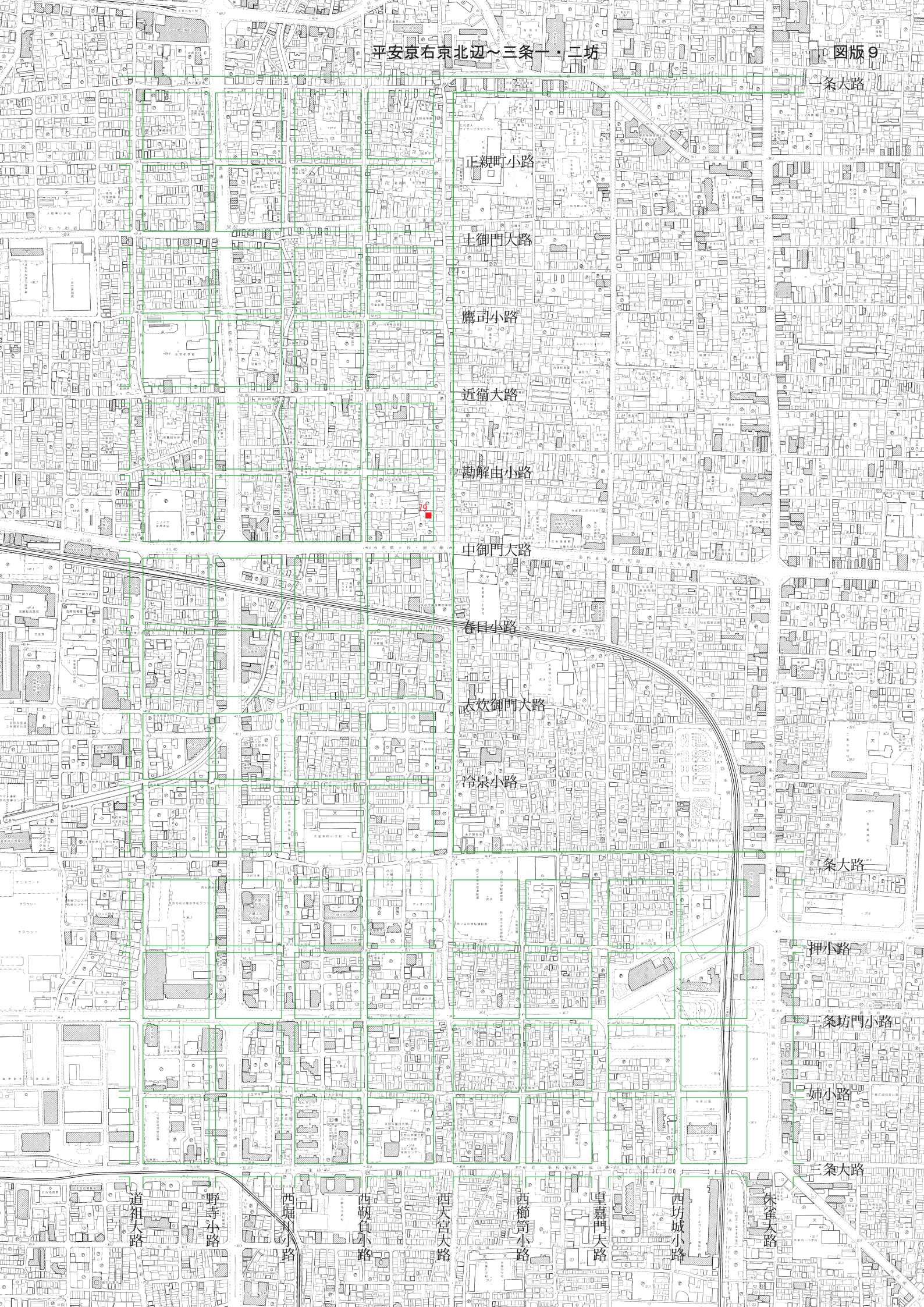
西大宮大路

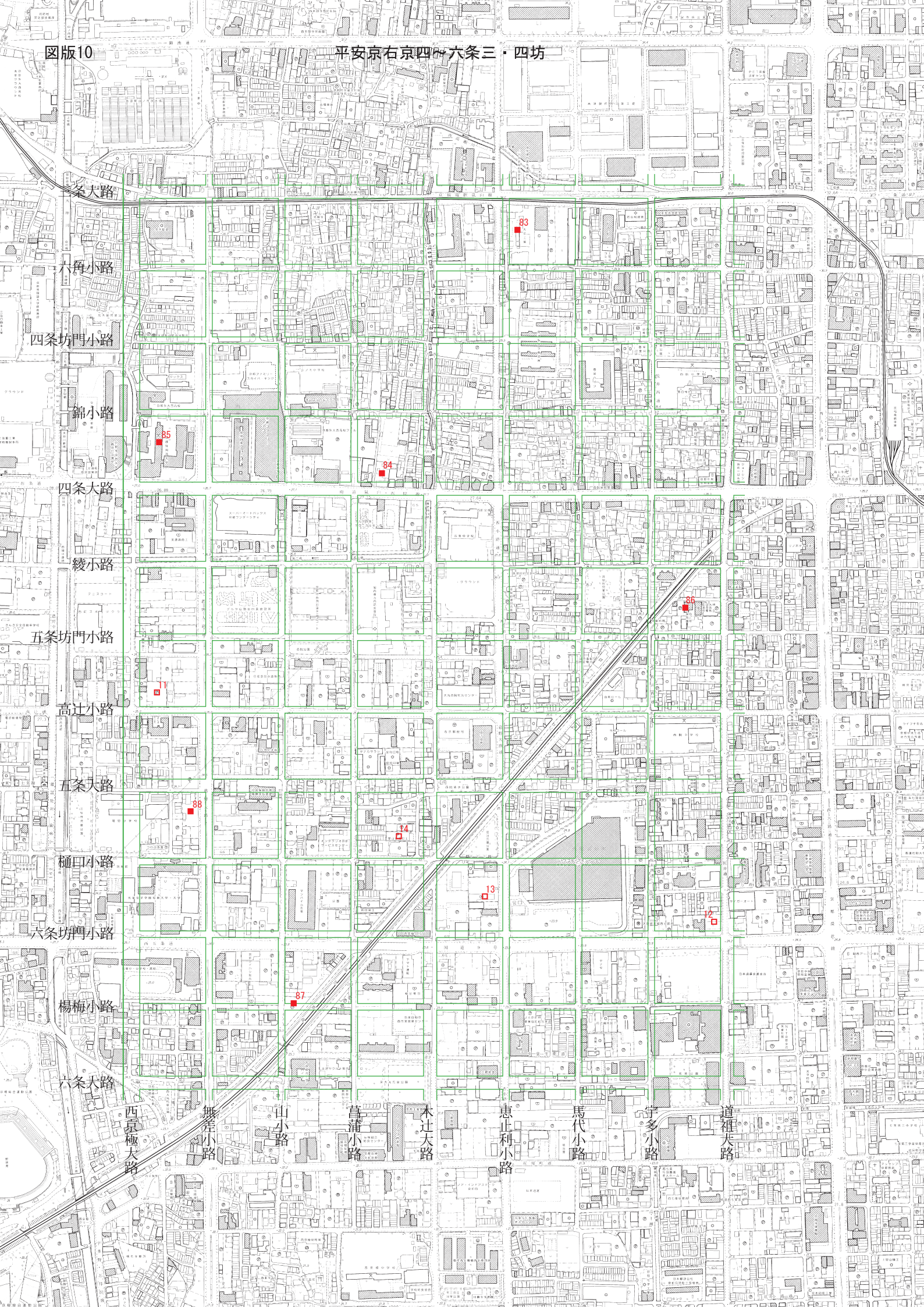
西櫛笥小路

卓嘉門大路

西坊城小路

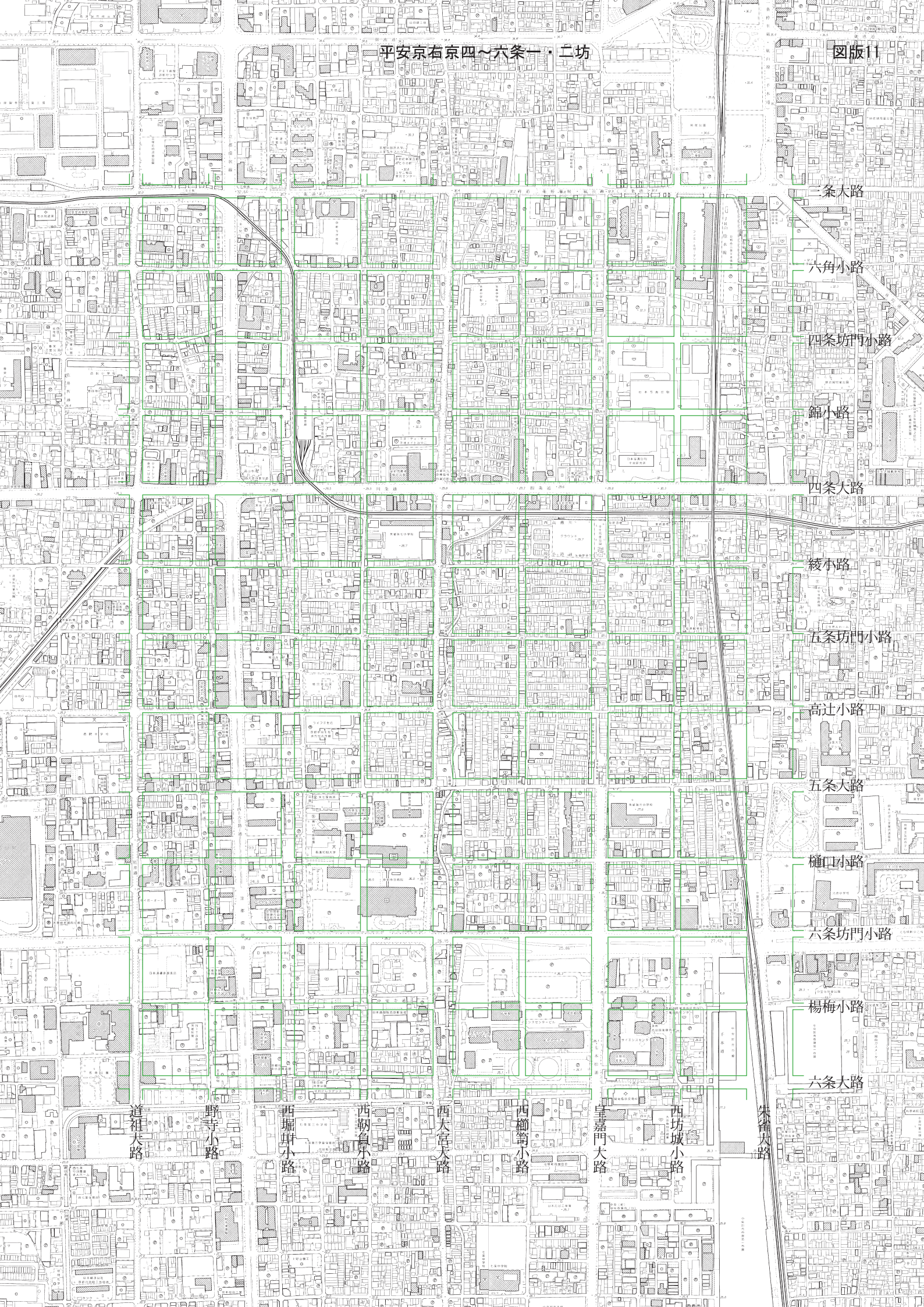
朱雀大路





平安京右京四～六条一・二坊

圖版11



三條大路

六角小路

四條坊門小路

錦小路

四條大路

綾小路

五條坊門小路

高辻小路

五條大路

樋口小路

六條坊門小路

楊梅小路

六條大路

道祖大路

野寺小路

西堀附小路

西朝倉小路

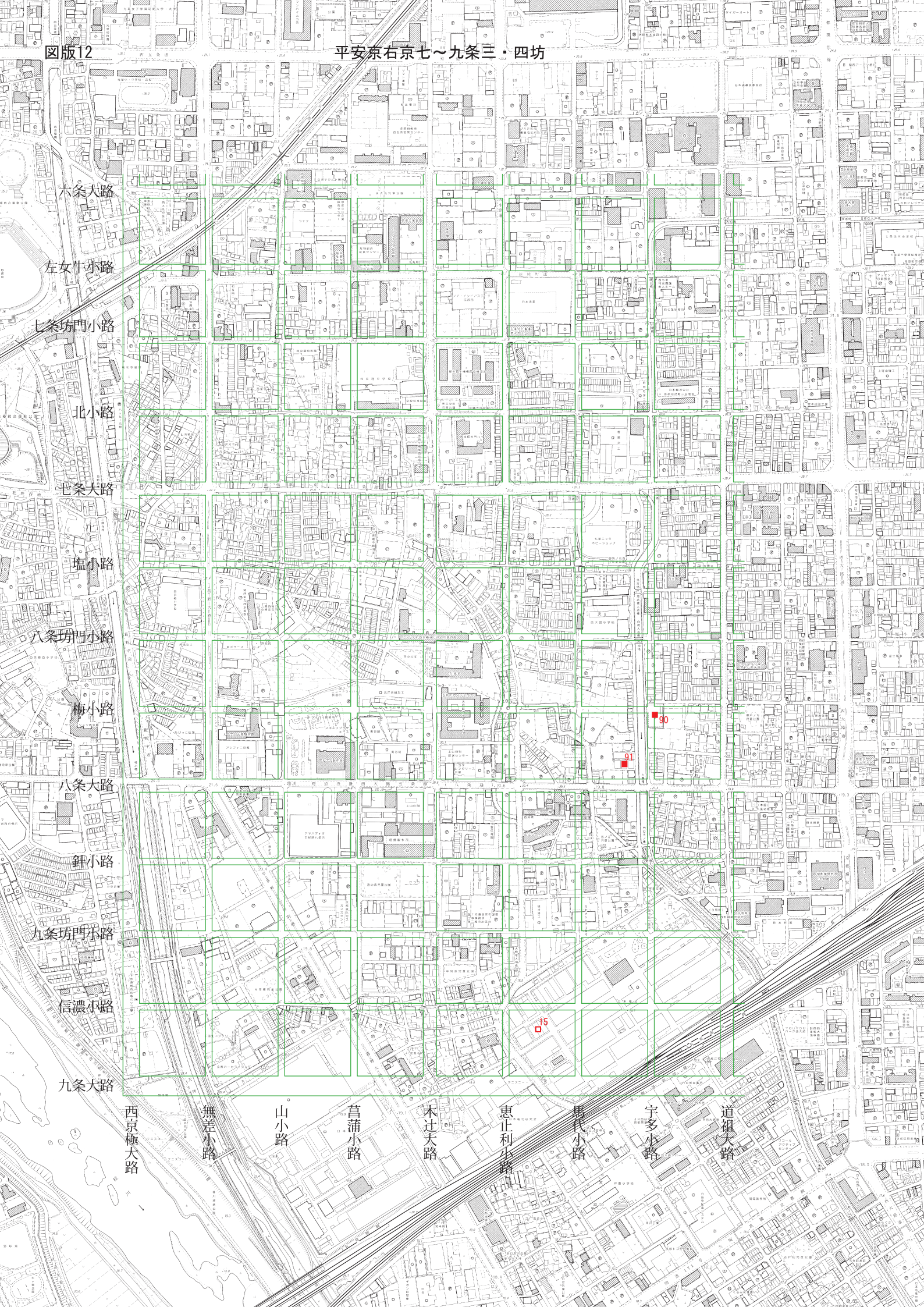
西大宮大路

西櫛筒小路

皇嘉門大路

西坊城小路

朱雀大路



木条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

塩小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

西京極大路

無差小路

山小路

菖浦小路

木辻大路

惠止利小路

藤代小路

宇多小路

道祖大路

90

91

15



六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

塩小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

道祖大路

野寺小路

西堀川小路

西朝倉小路

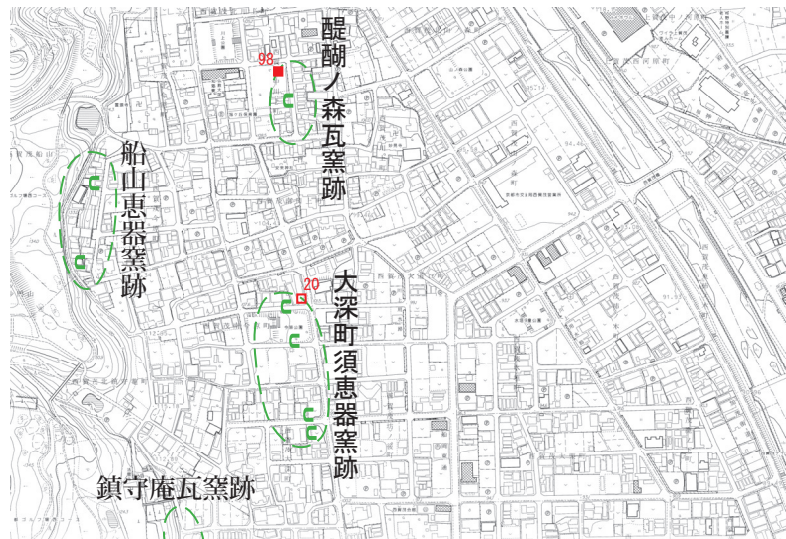
西大宮大路

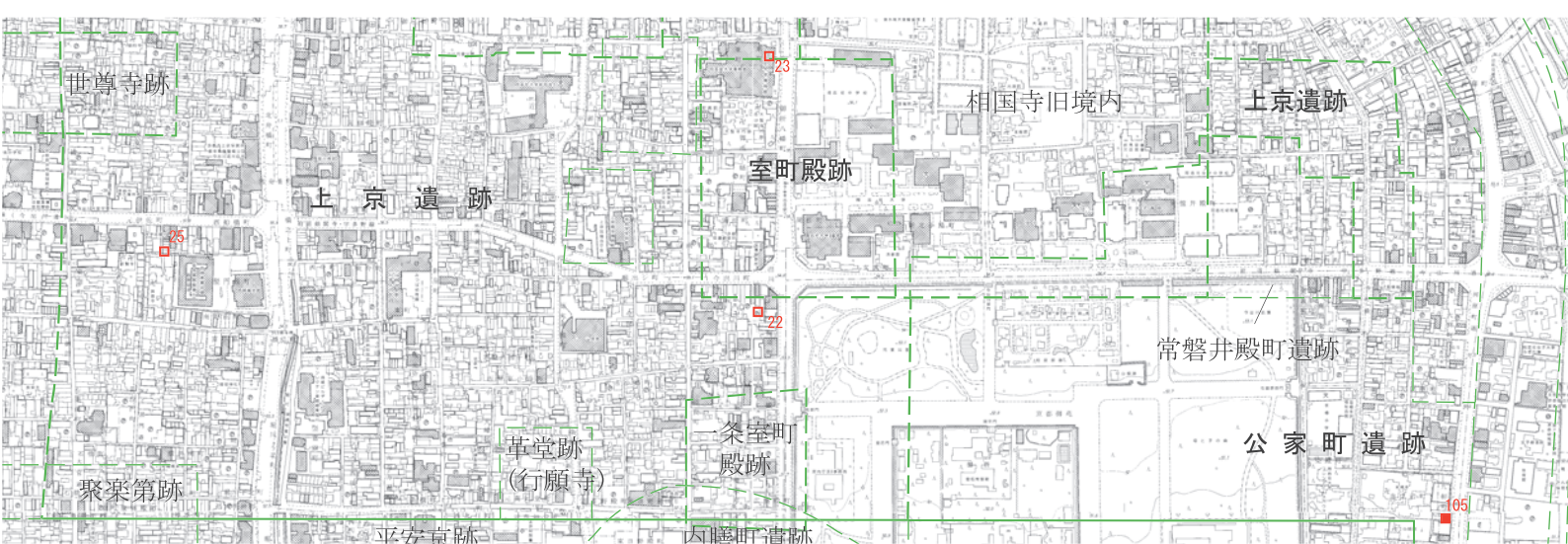
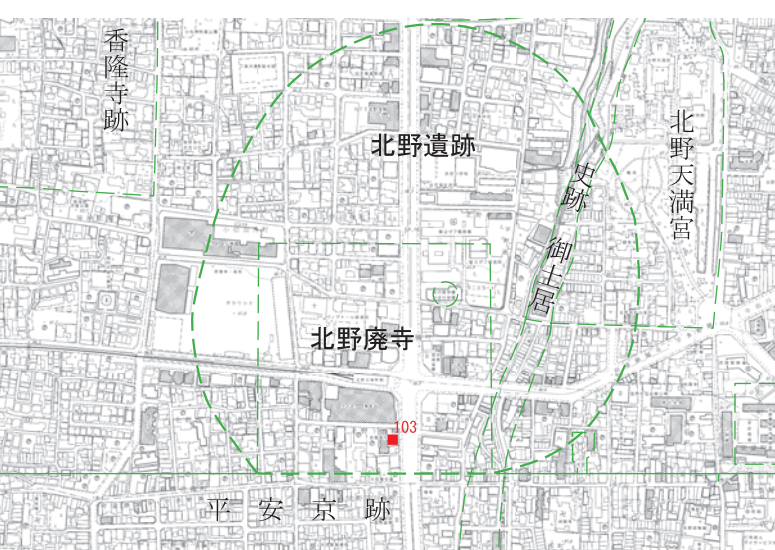
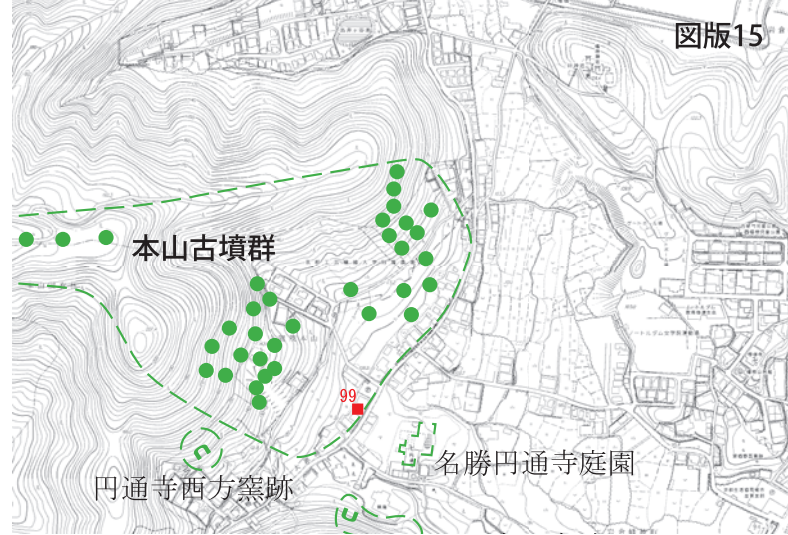
西櫛崎小路

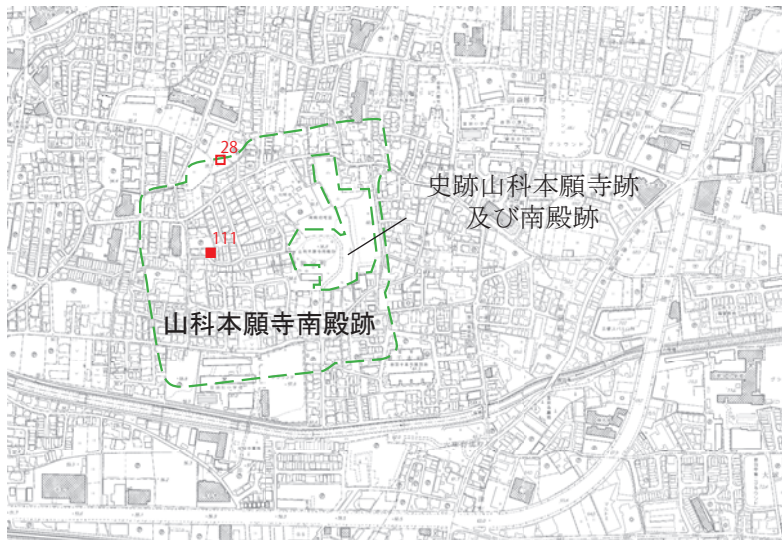
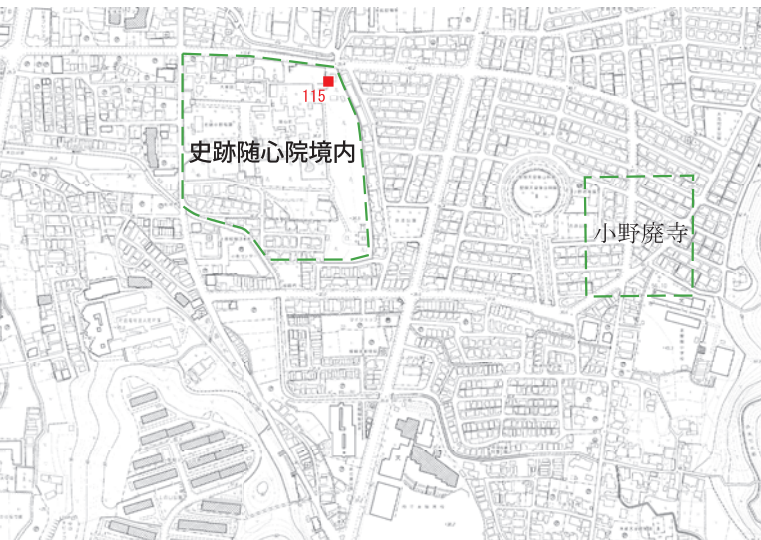
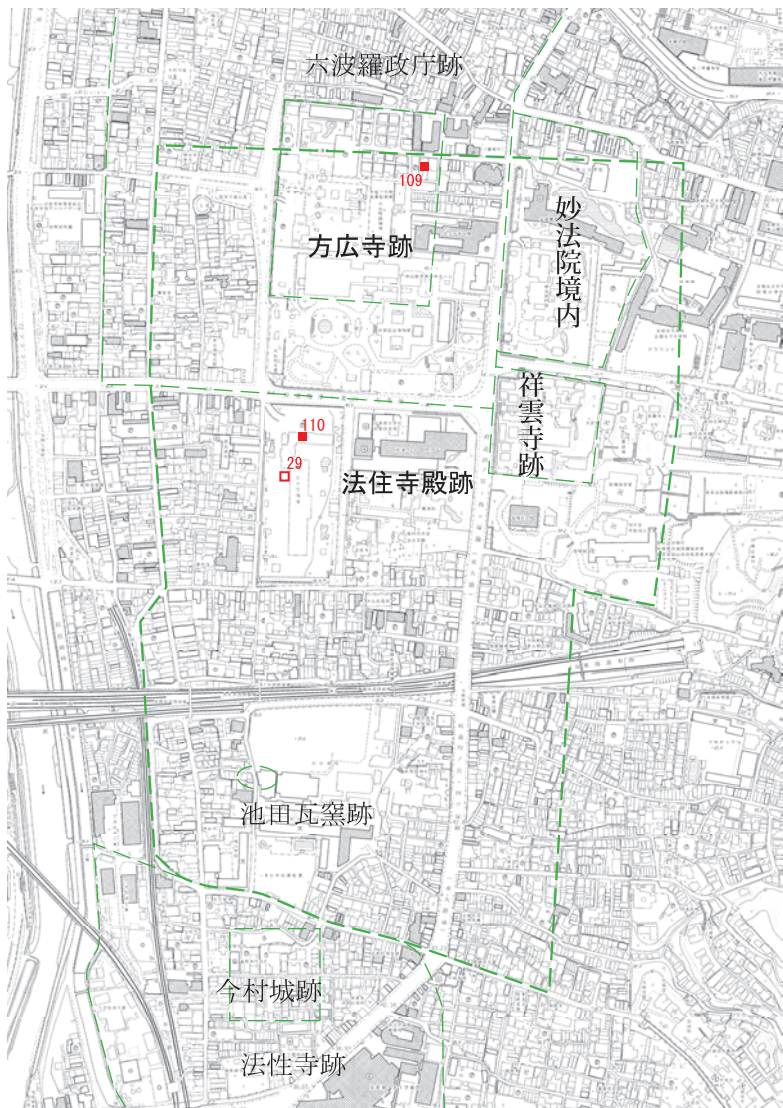
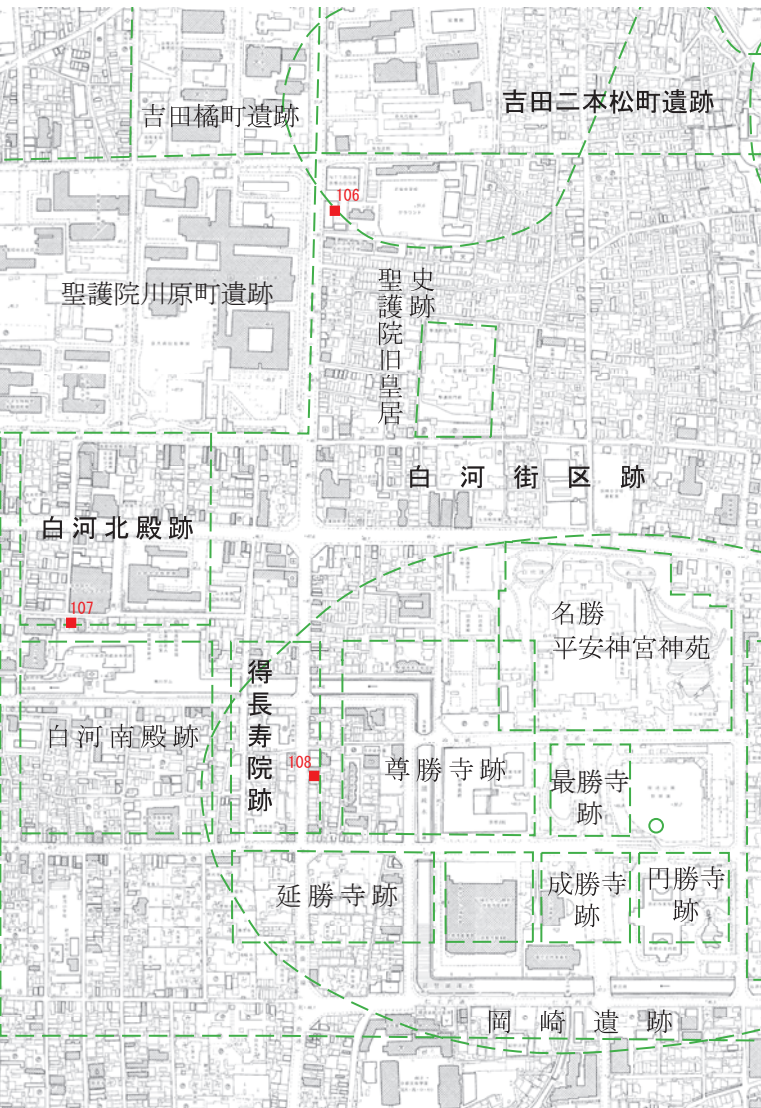
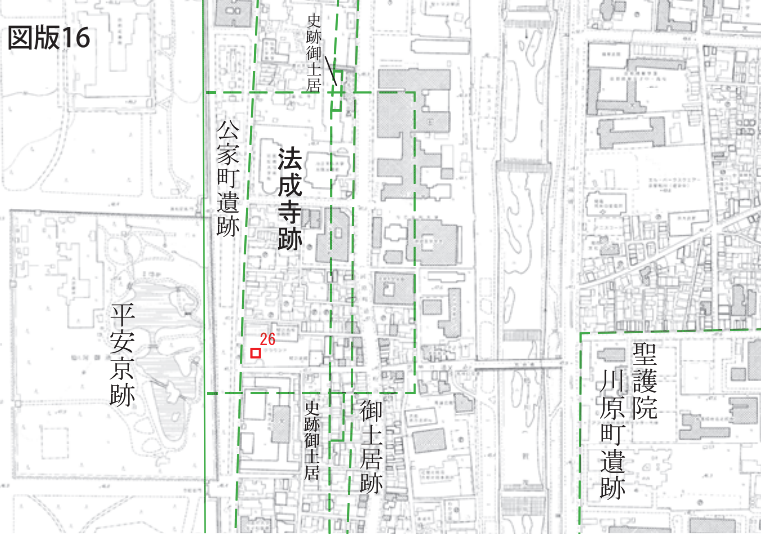
白鳥門大路

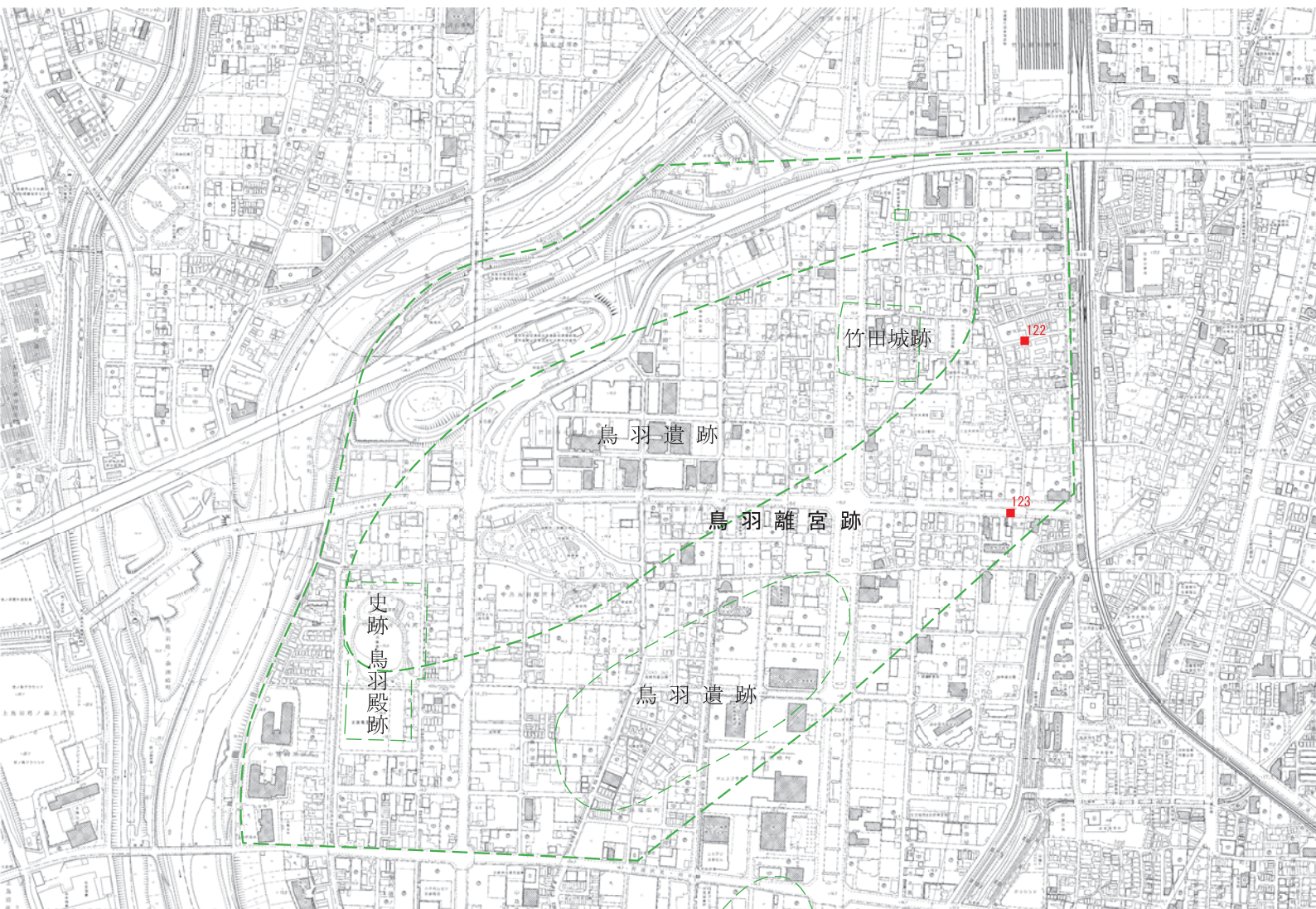
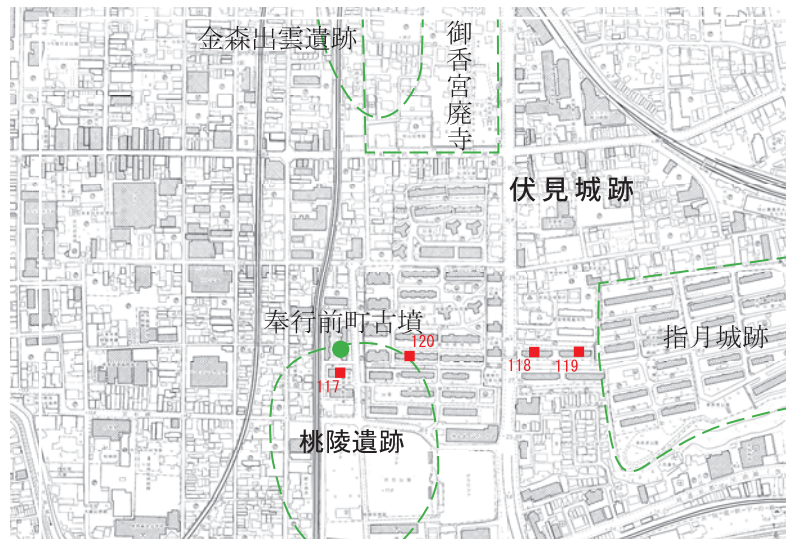
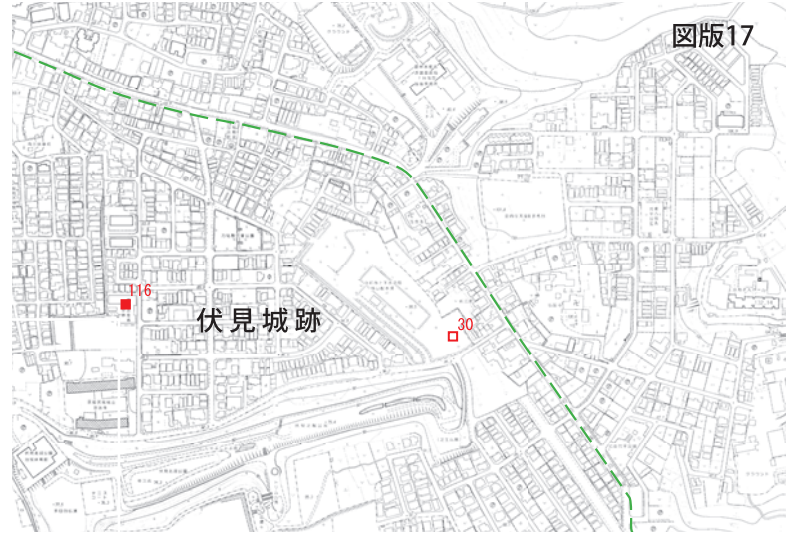
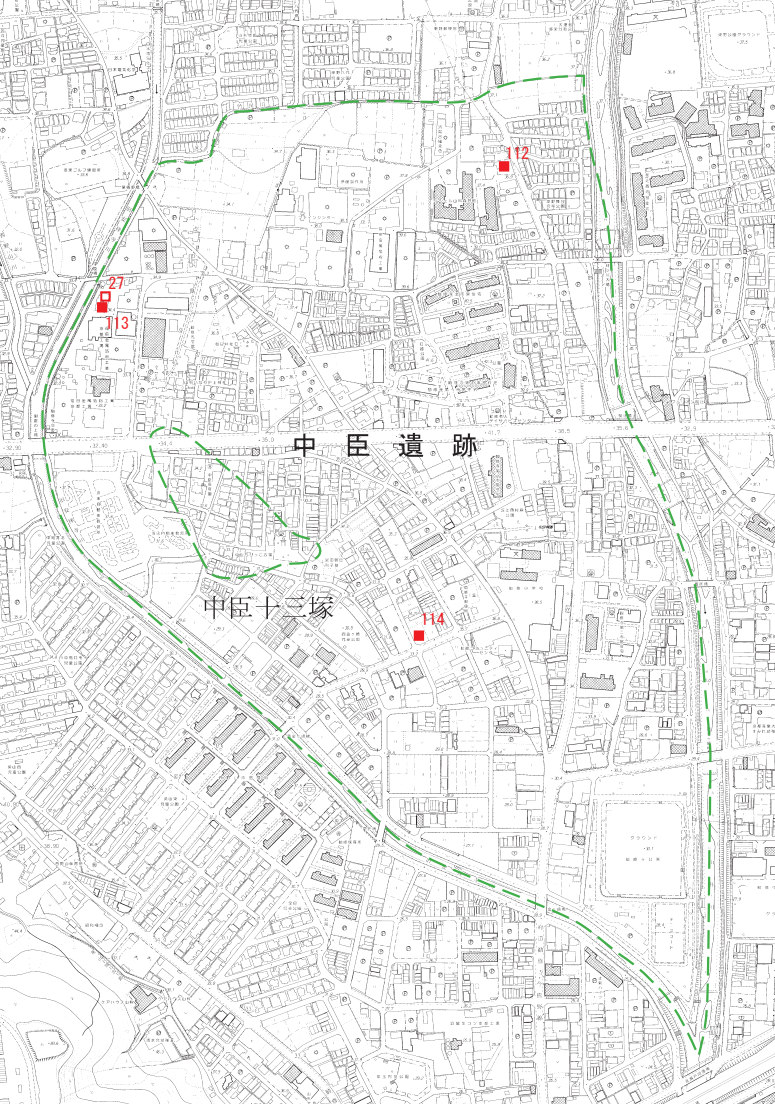
西坊城小路

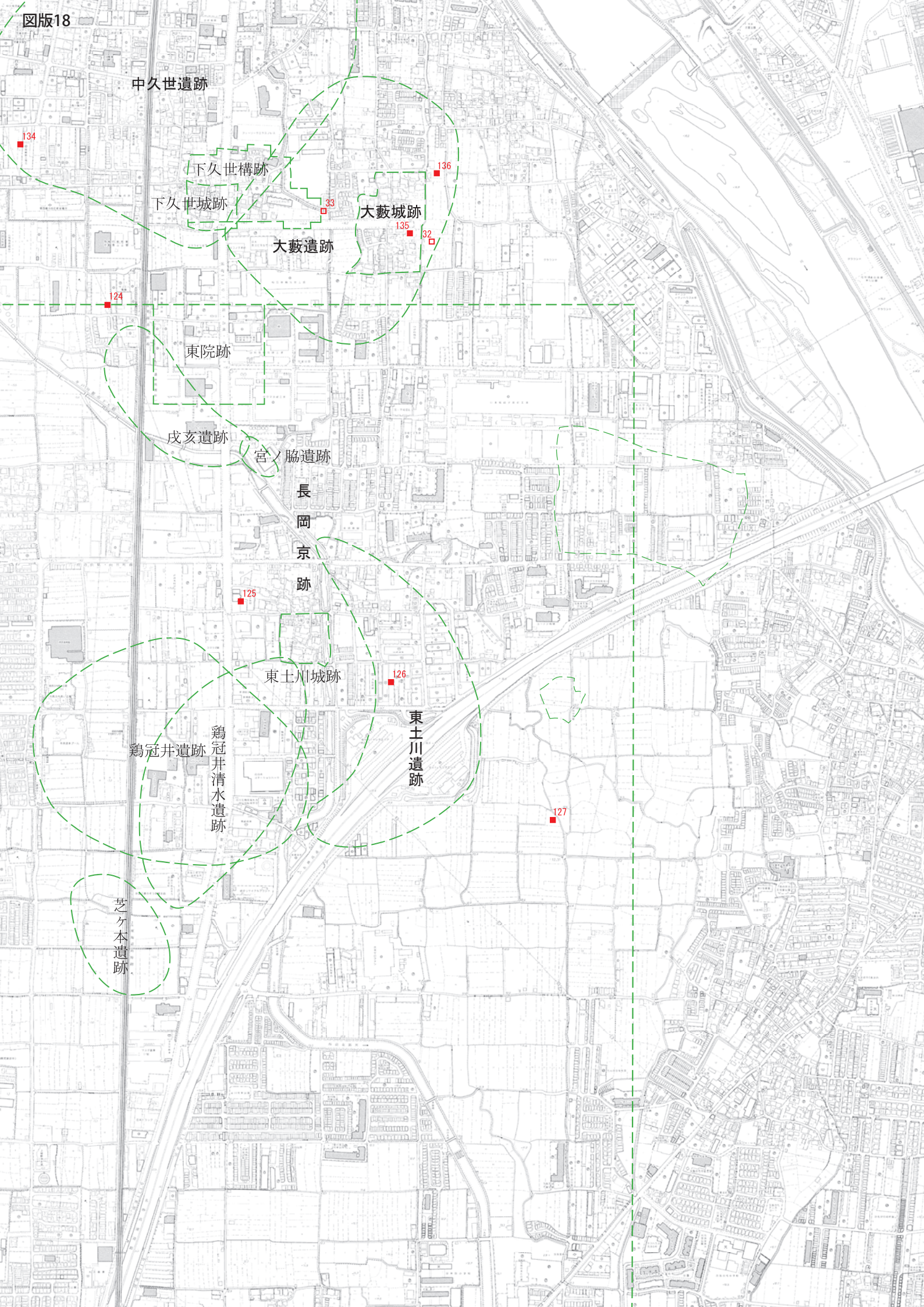
朱雀大路











中久世遺跡

134

下久世構跡

下久世城跡

33

大藪城跡

136

135

32

大藪遺跡

124

東院跡

戊亥遺跡

宮ノ脇遺跡

長岡京跡

125

東土川城跡

126

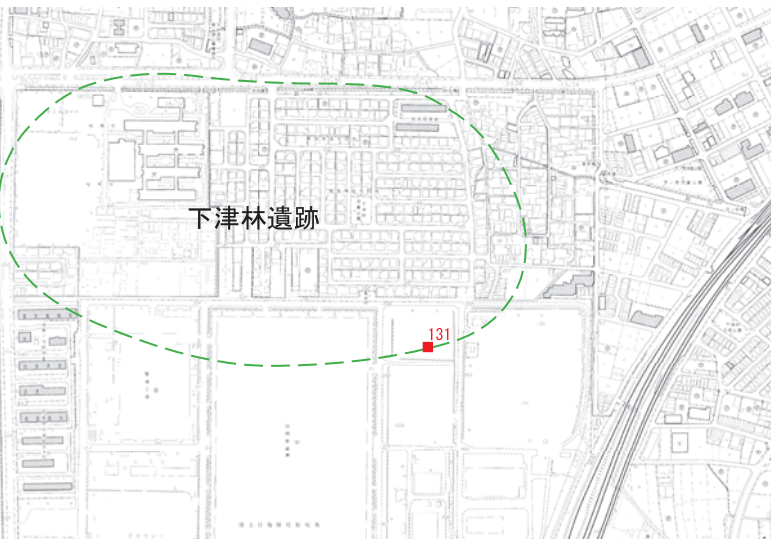
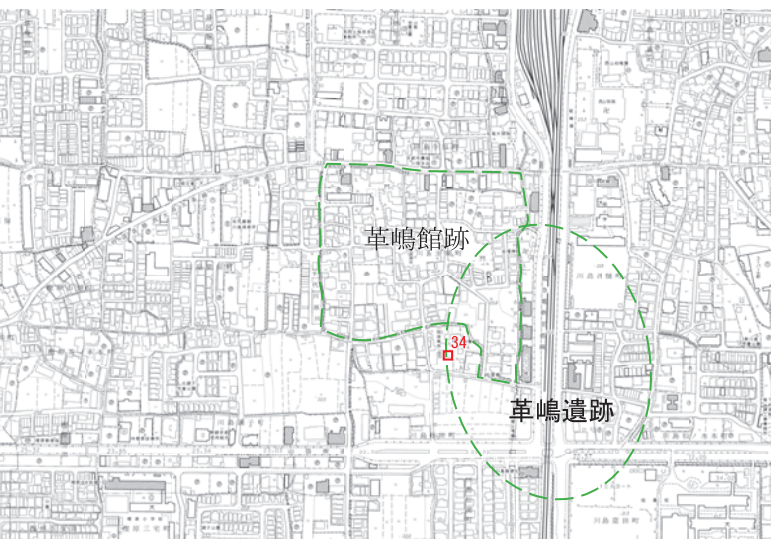
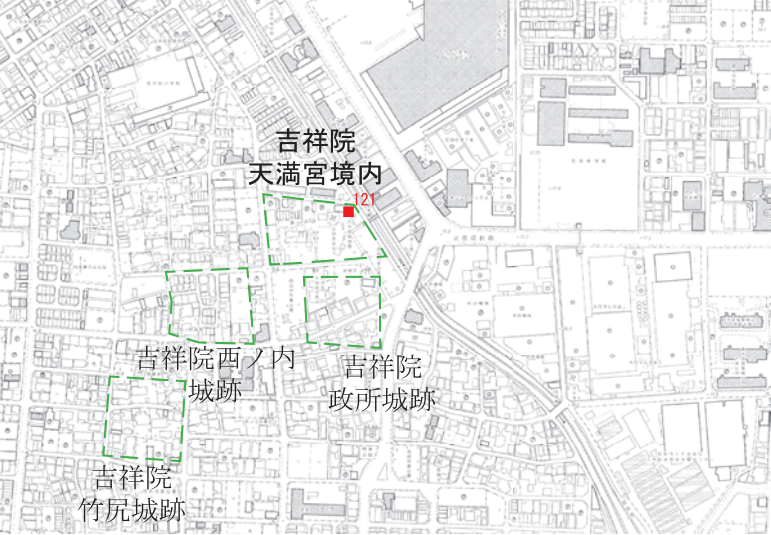
東土川遺跡

127

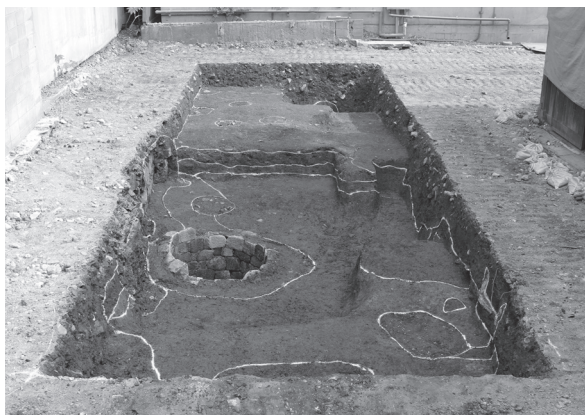
鶏冠井遺跡

鶏冠井清水遺跡

芝ヶ本遺跡



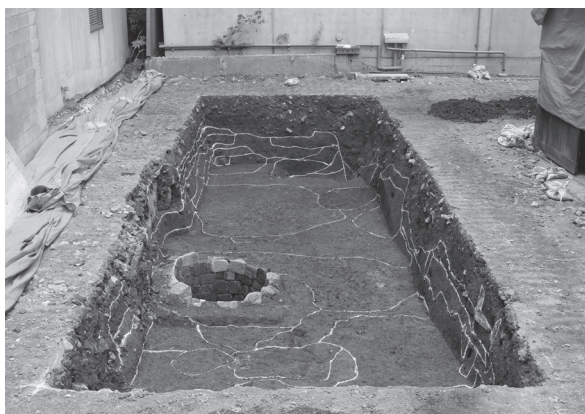
図版20 平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡 遺構



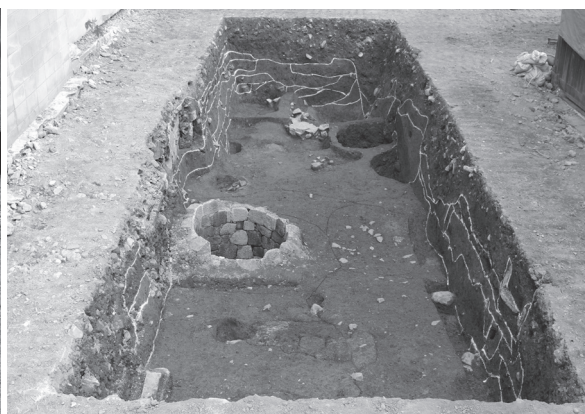
1 第1遺構面 検出（北から）



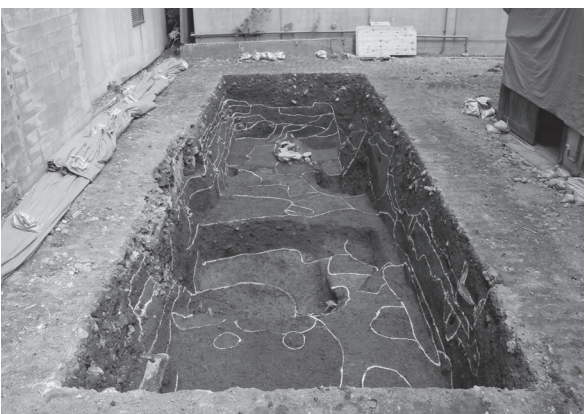
2 第2遺構面 検出（北から）



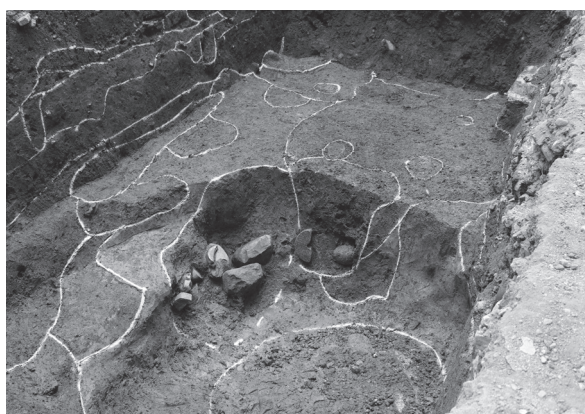
3 第3遺構面 検出（北から）



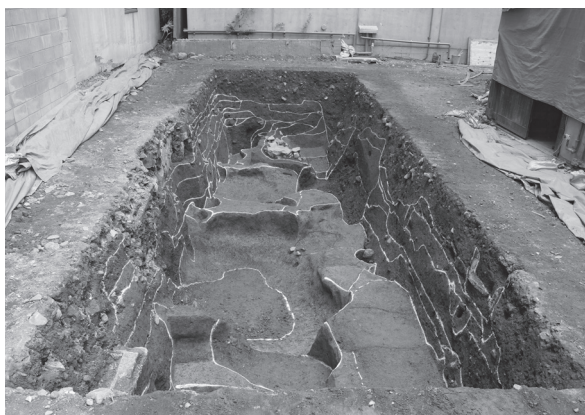
4 第4遺構面 検出（北から）



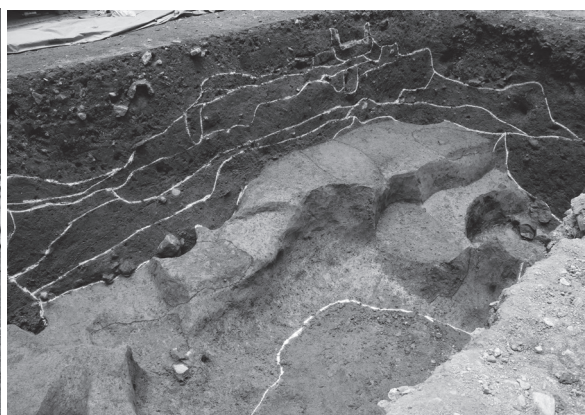
5 第5遺構面 検出（北から）



6 第5遺構面 調査区北側検出（南東から）



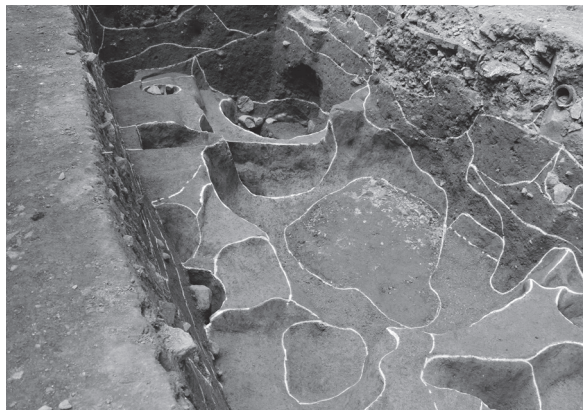
7 第7遺構面 検出（北から）



8 第7遺構面 調査区北側検出（南東から）



9 第7遺構面 完掘（北から）



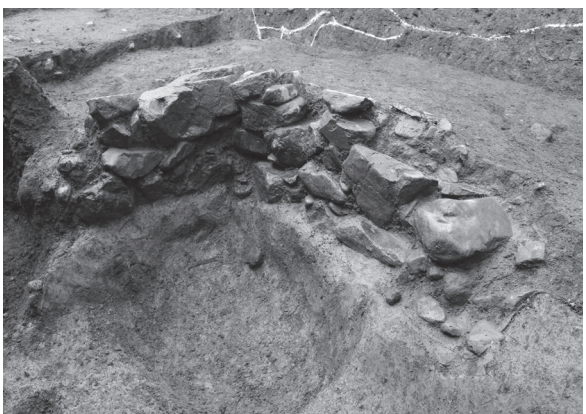
10 第6遺構面 調査区北側完掘（南西から）



11 第5遺構面 SK27（南から）



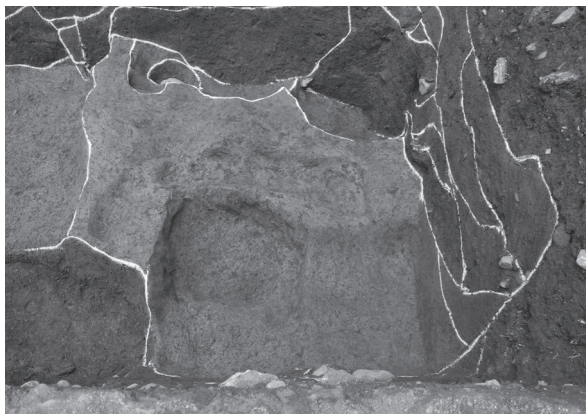
12 第5遺構面 SK27（西から）



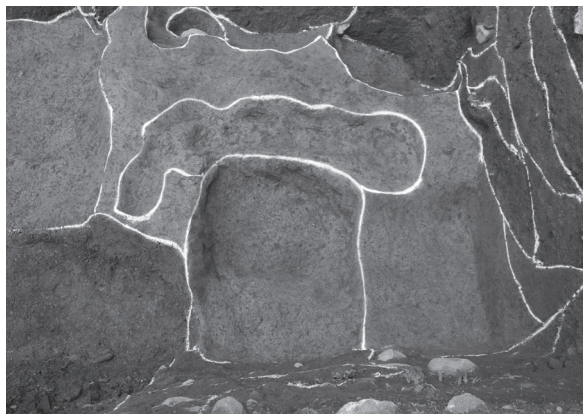
13 第5遺構面 SK27石組み状況（南西から）



14 第5遺構面 SK27石組み北面（南から）

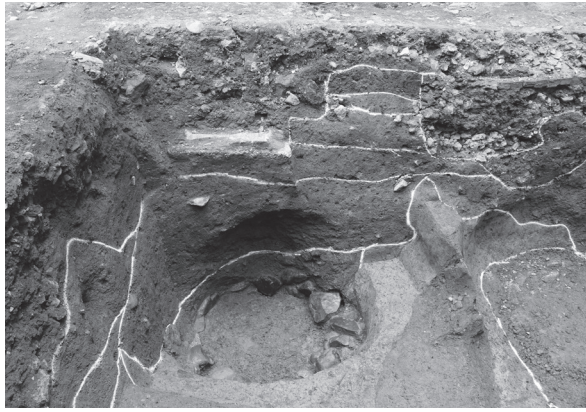


15 第5遺構面 SK27石組み除去後（西から）

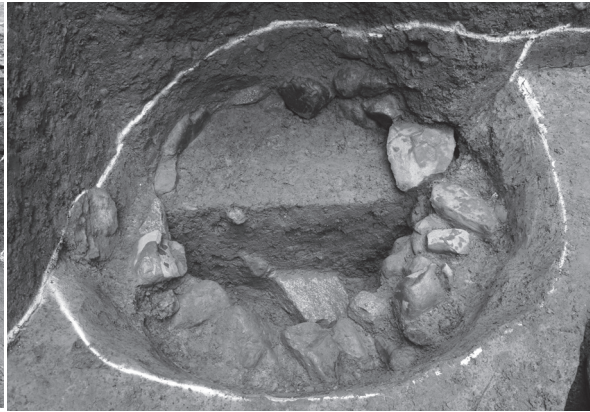


16 第5遺構面 SK27石組み除去後（西から）

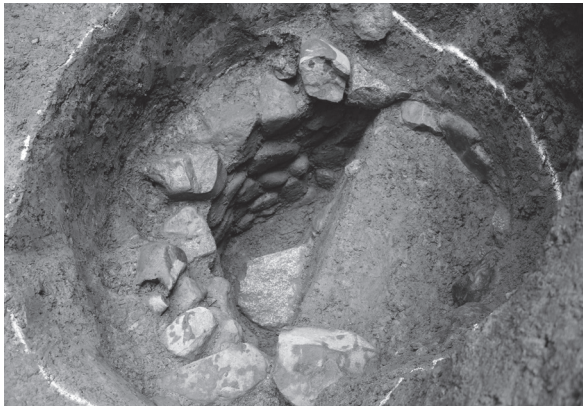
図版22 平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡 遺構



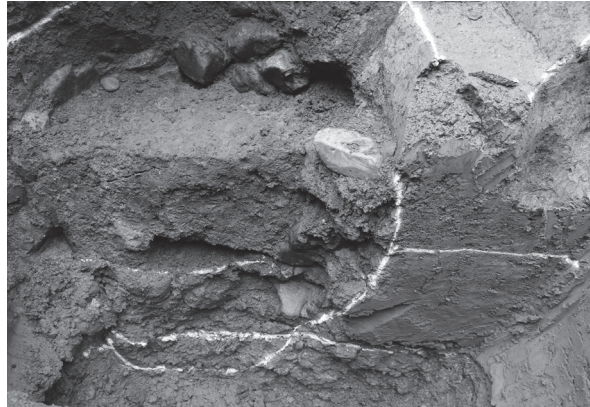
17 第6遺構面 SE50検出状況（西から）



18 第6遺構面 SE50柱内断面（西から）



19 第6遺構面 SE50石組み状況（南東から）



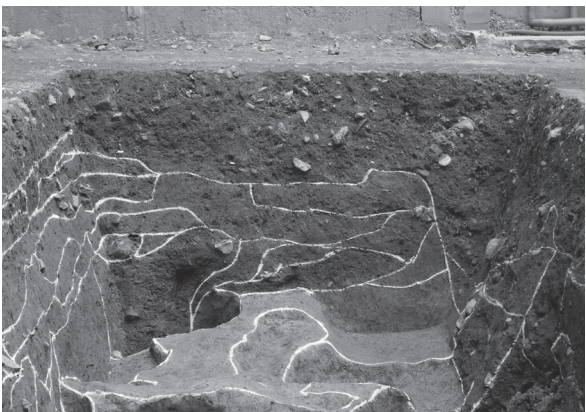
20 第6遺構面 SE50断面（西から）



21 北壁土層断面（南から）



22 東壁土層断面（北西から）



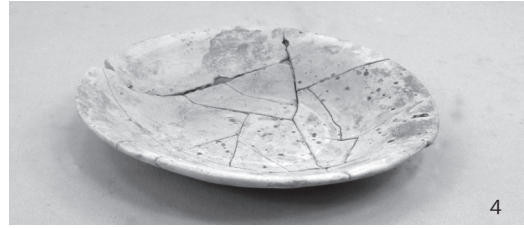
23 南壁土層断面（北から）



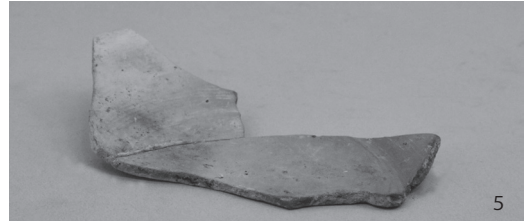
24 西壁土層断面（南東から）



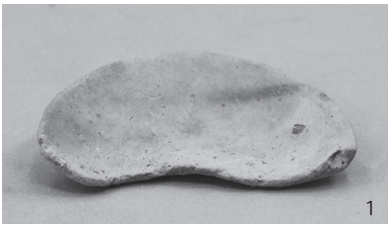
SE50 枠内出土石材



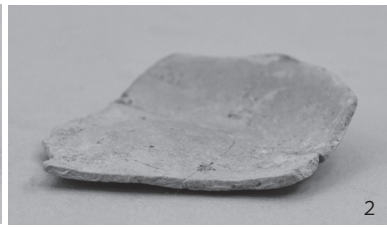
4



5



1



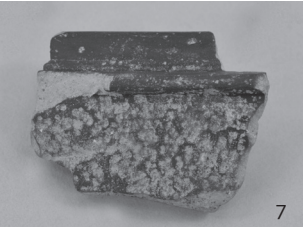
2



3



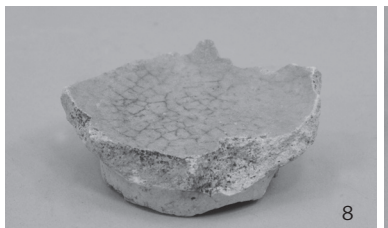
6



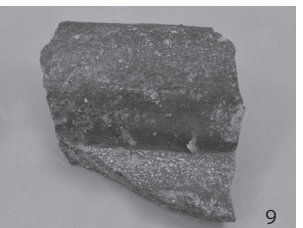
7



10



8



9

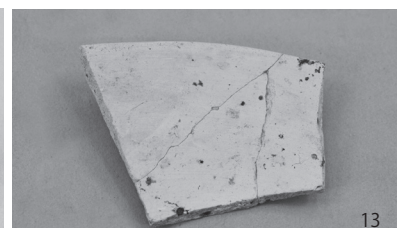
1～10：SK27出土遺物，
11～14：SK27掘方出土遺物，
25～29：SK41出土遺物（1）



11



12



13



14



25



26



27



28



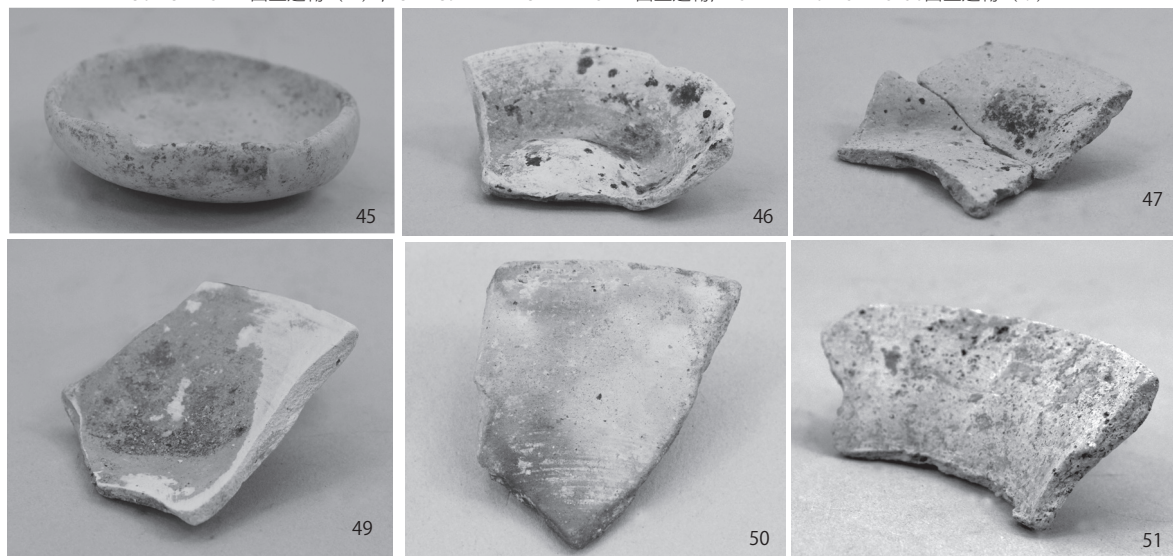
29

SE50 枠内出土石材及び出土遺物 1 (SK27・41)

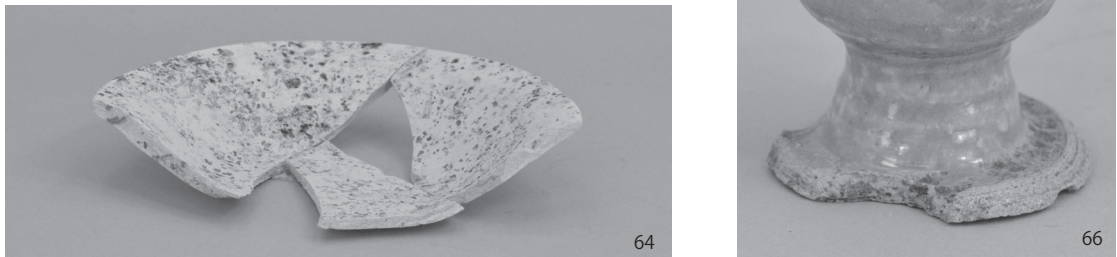
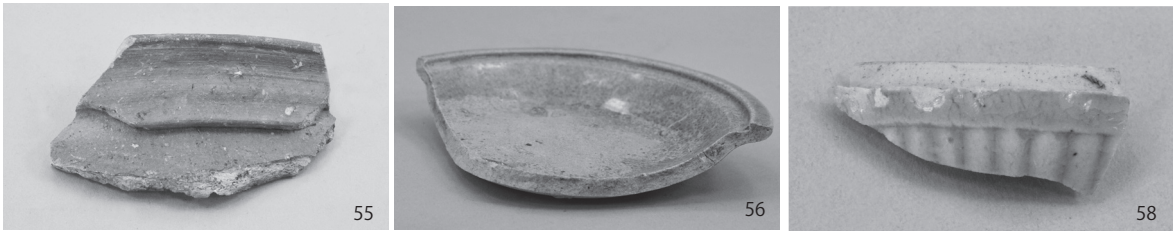
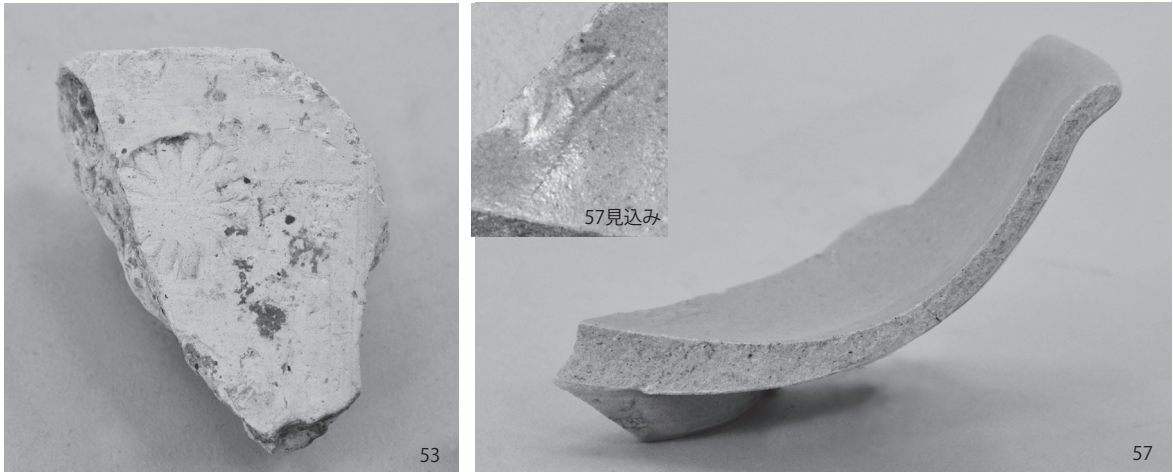
図版24 平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡 遺物



30~34 : SK41出土遺物 (2) , 37~39・41・43・44 : SK42出土遺物, 45~47・49~51 : SE50出土遺物 (1)



出土遺物 2 (SK41・42, SE50)



53・55～58：SE50出土遺物（2），60・61・64・66：SK55出土遺物，69～73・76・81・82：SK52出土遺物



出土遺物3（SE50，SK55・52）

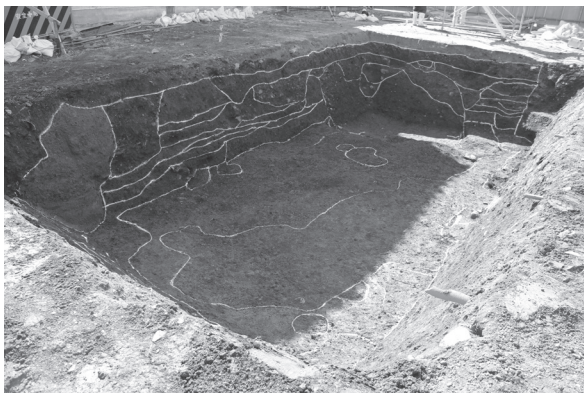
図版26 上京遺跡 遺構



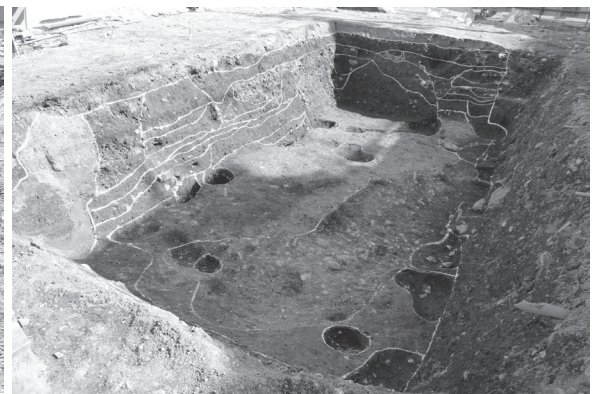
1 第1面検出状況（北から）



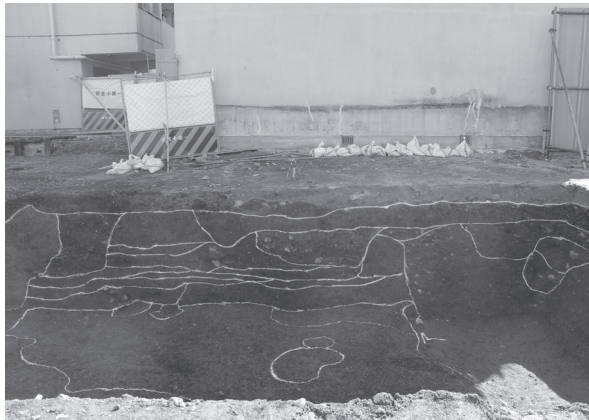
2 第2面検出状況（北西から）



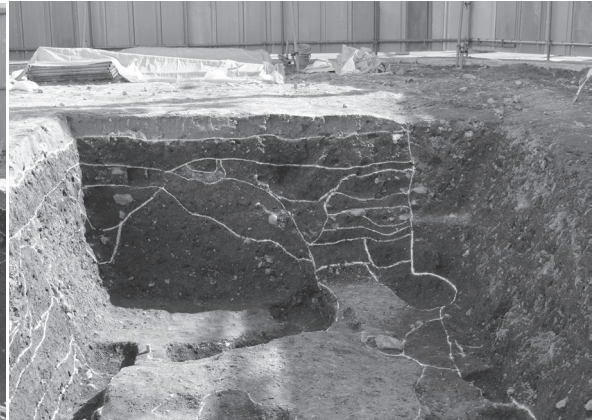
3 第3面検出状況（北西から）



4 第3面完掘状況（北西から）



5 東壁土層断面（西から）



6 南壁土層断面（北から）



7 東壁北端深掘り状況（南西から）



8 第3面 14土層断面（北西から）

京都市内遺跡試掘調査報告

平成28年度

発行日 2017年3月31日

発行 京都市文化市民局

編集 京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課

住所 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394番地

Y・J・Kビル2階

TEL.(075)366-1498

印刷 株式会社 昭英社

TEL.(075)351-1811